
心壊れた神

ヘタレ+ドヘタレ=超ヘタレ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

心壊れた神

【Nコード】

N3467Q

【作者名】

ヘタレ+ドヘタレ=超ヘタレ

【あらすじ】

『心無い神様』の続編

本作を見る前に前作を見た方がたぶん、楽しめます。

神と悪魔の力を持った者の物語

あまりいい内容でも無く、ましてや良い影響を与えるような小説でもないです

それでも見たいって方はどうぞ^^

時間の無駄だったとかで一切の責任を追うつもりはございません^^

^ ;

「見てる人いないでしょうが（笑）」

プロ？プロ…プロローグなのか？ 『仁と煉〜二人の始まり〜』

彼自身、何も罪は無かった

ただ純粹に生きたかった

ただ平凡に生きたかった

それだけなのに、人生を恋愛やバイトとかで忙しそうに生きている
周りが彼を巻き込もうとしただけ

ただ平凡にいきたい

1人で静かに……

それを彼らは許してくれなかった

今自分は普通の人間じゃない

自分が化け物であることを忘れて静かにいきたくったのに……

何も知らない彼らがそれを拒否してきた

見慣れた人物達が横たわっていた

ただ横たわっているだけなら心痛まないだろう

胴体を裂かれ、内臓を引き出された死体が多かった

それもこれも全て彼がやったこと

血塗られた教室にいるのは漆黒の巨体にその体に合った巨大な鎧を
纏った怪物だった

右手に握っている黒い斧から鮮血が滴り落ちる

怪物は自分がした行いを呪う

今まで苦しめていた友人達の死は彼を今まで以上に苦しめた
そしてこれからも苦しめられるのが目に見えていた

黒髪を後ろへ回した少年が横になって寝ている

返り血を浴びた穏やかな寝顔だった

彼の仲間と思われる者が静かに眠る彼の顔を覗き込んでいた

長い金髪の外国人女性

2メートルの巨体を持つ大男
青い髪の青年

そのほかに7人の男女

皆が皆、彼の顔を楽しそうに覗き込んでいた

「煉君はいつ見てもかわいらしいわね」

「これが『デイグニティ』だつてさ。いまだ信じられないぜ、俺には……」

「にゃ〜、かわいいにゃ〜」

「ここにいる変態共の魂が彼によって揺さぶられているとはね。おもしろい、おもしろい」

「『変態、言うな』」

元々怒り、憎しみを抱き集めた彼らにとって煉と呼ばれた少年の存在は暖かいものだった

彼は何もしゃべらない

仲間を信じようとしめない

でも、優しさがあつた

他には無いやさしさが彼にはあつた

『仁と煉』

黒騎士と聖經会の争いが始まる前、1度大事件が隣町に起きたことがあつた

それが黒騎士の手で行われたものか審議がされてきたが、結果的には違うことになり、犯人もつかめぬまま闇の中へと……

32名の死者と5名の重傷者

そして1名の行方不明

その1名が今どうしているのかわからなかった

影次郎は当初、それが黒騎士の始まりだと読んでいたが、同じような力を持ち、そういつた組織に所属している娘『天寧』から話を聞いて、違つとやつとわかつた

なら、誰がやったのか……

事件の調査は黒騎士と関わりの深い人物達

文化と歴史の研究のためと称し、黒騎士の実際を追い続ける『御影

陽』

黒騎士へと手助けすることになった『桐生 綾牙』と『シエリー・

アヴァロン』

その他、皇室の人々も交えての調査が始まった

ここまで大きくなることは影次郎も予想外であったが……

それもまた楽しく、退屈しないものだった

イタリアの首都 ローマ

そこまで行くのに日付変更線を通っていかなければならなかった

大体12時間ぐらいだろうか

歴史の勉強はたのしかったものの、地理だけはどうにもならなかったためか覚えていない

一番知識として役に立つのは地理なのに……と思っていたが

今、隣にはその国の人がいる

それだけでも十分救いだっただ

「……寝てるか」

そろそろ日付変更線を通り過ぎようとするところか

あと何時間でイタリアに着くのか仁は待ち遠しかった

黒騎士になつてから……人生がかなり変わった

人の死が単純なものになり、軽くなった

これからも見ていくであろう関係ない人間達の死

それに慣れないといけないのかと思うと辛くなった

神になるうとして心全てを捨てた男はそれも覚悟してきたのだろう

だから、闇武者を作ることができ、神へと進化しかけた

最終的には闇武者の元になった黒騎士の手で終わったが

(黒騎士は進化する)

その言葉が気になっていた
死んだ者達を束縛して作り上げ、出来上がったのが『心無い神』
そしてこれから出来るのは何だろうか
仁にはわからなかった

7人の少女達は仲間達を見送ろうとしていた
中国からイタリアへ渡ろうとする煉達を笑顔で……

「がんばってねえ」

「君らも……あまり、無理をせんでください」

煉のさりげない優しさ

それが彼女達の心に染み渡った

いつもは心配してくれない彼だ

口数も少なく多くを語らない

いつも音楽プレイヤーで自分の世界に引きこもっている男だ

そんな彼が時たま声をかけてくるとどうしてか嬉しくなる

自分達には無いものが彼にはあるからだ

「煉も……貴方の力は強い。キリストの連中どもをぶっ殺してきなさい」

気の強そうな銀髪の少女が煉の肩を強く握ってはそう言う

言われた本人は光の無い瞳を閉じ、ただ頷くだけであった

「必ず……戻ってくる」

静かであり、どこか強い言葉だった

「サタンさんも気をつけて……」

「私は問題無いわよ。がんばってきなさい」

銀髪の少女 サタンはかすかだが感じていた

自分達デュアルイーグルの勝利

そして、煉が生きて戻ってくることに

血塗られた墓場が彼との出会いだった

彼も同じく迷える神

自分達と同じだった

俯く自分達に彼は話しかけてきた

「行く場所が無い。一緒に行こうよ」

「どこへ……」

金髪の長女がそう聞く

「どこでも良い。俺も居場所を探している」

彼の後ろには仲間と思われる巨体の男がいた

肩にある黒猫を優しくなで、優しい笑顔で自分達を見下ろしていた

「俺様もとくにやる事が無いんだよ」

「男を相手にするつてのは疲れるわ……気持ち悪い」

「……酷い言われようだな」

巨体の肩が笑いで揺れている

「俺は死んだ女房一筋だ。年下過ぎるとさすがに興味ないぜ」

巨体の男はそうだろう

だが、彼はどうだろうか

長女達の疑いが消えなかった

「……俺は静かに過ごすことが出来ればいい。たったそれだけでい

い」

少年は静かに答えるだけ

「仲間はいらさないけど、救いが必要なら共に行動しましょうよ。そ

んな姿見たくない」

昔の俺と同じで嫌だ……そう呟く少年の目からは黒い涙が流れている

救いたい……その言葉が伝わるようだった

「名前は？」

血塗られた墓に手を……桃色の髪の七女が泣きながら男に聞いた

サタンの目にうつるその墓は親の墓だった

血のつながらない親だ

かつていた孤児院の父と母達

その墓だった

「黒椿くろしほ煉れん」

彼は悲しい目で名乗った

炭のように穢れた瞳とそこから流れ落ちる涙が土へと落ちていく
それが煉と7兄弟の出会いだった

煉は歩いていく

イタリアへ向かう飛行機へと赴くために……

サタンら兄妹が願いはたった一つだけだった

煉が無事に戻ってくることに

彼が任務を成功するのを心から祈った

「それで、この地方は……おいしいものあるのか」

「あそこの店とかどうですか？パスタがおいしいんですよ」

「聖女なのにそんなの食っていいのか」

「内緒ですよ？秘密裏で抜けてるんですよ」

仁もまたイタリアに来ていた

牙の元へ向かうため

その歩みを止めなかった

傍らについてくるマリアと楽しく話しながら、その足取りはバチカ
ンへと……

不穏な空気が漂うようイタリア

勘の鋭い者は既に気づいていたのかもしれない

これから、この国に何が起きるのか

仁と煉の二人がここにたどり着いた時から彼らの物語が始まること
していた

プロ？プロ…プロローグなのか？』 仁と煉〜二人の始まり〜』 (後書き)

訂正後

1 組織と言つ名の精神病院

忘れることが出来ないあの声

忘れることが出来ないあのぬくもり

彼は、死ぬ瞬間まで微笑んでいた

「殺せよ。じゃないと君の命を奪いかねない。命だけじゃない、大切なものまでも……」

彼はいつものように穏やかだった

死ぬとわかっているはずなのに、『死』そのものを受け入れようとしていた

助けたいのに……自分はただ泣いているだけだった

「泣いてばかりの表情を見せないでくれ」

「牙お兄ちゃん……」

「心が痛む。笑っていてほしい」

「でも……」

「百年以上生きていた。何も無のまま……血塗られた時もあったし、涙を流したときもあったよ」

牙が語りだした

今まで流したことが無い色の涙だ

赤く、痛々しい血の涙が流れ落ちる

彼の命が消えていく

その瞬間まで彼は語ろうとしていた

「くそみたいな人生を100年以上、それでも輝かやっていたものがあつたんだよ」

「お兄ちゃん……牙、牙兄ちゃん……」

「マリア、君の笑顔だ」

「もう何も言わないで……」

脳裏によぎったのは昔の思い出だった

100年以上生きた悪魔と11年しか生きていない少女の間にある

世代間ギャップ

古臭い考えと幼い感覚がぶつかりあってこそ見えるものもあった
これからもそんな和やかな日々が続くと思っていた
なのに……

「牙おにいちゃん……」

「おきろよ、マリアちゃん」

仁の言葉でやっと目を覚ましたマリア

「仁さん……？」

暖かい日差しにあたりながらカフェで一休みしたせいもか睡魔に襲われ、いつのまにか眠っていたのだろう

仁が最後に「おやすみ」と言ったのを覚えている

「ごめんなさい」

「ヨダレ、出てるよ」

笑いながら言う仁の言葉にマリアは慌てて口元を拭った

仁は照れている彼女を見てただ笑うばかり

「良い夢見たみたいだな……」

「……仁さん」

目の前で笑っている仁は『彼』に似てい

牙……牙おにいちゃん

不意にそんな言葉がマリアの口から出ようとしていた

だが、言わないようにと自身で気持ちを押し殺す

天寧から聞いたことがあった

ローマ法王直属の部隊『白銀の騎士団修道会』は宗教の1部と言うより神の力を受け、病んでいる者達の集いの場となっていると言っ
それを聞いてまるでアル中の憩いの場だと思ったが……

今からその場所に行くのだ

自分がその患者となる……全然笑えなかった

精神病院と呼ばれる騎士団の本拠地に辿り着いた

見た目は教会だ

純白の建物で見惚れる

いかにも映画に出てきそうな場所だった

キリスト教の人間であれば喜んで入っていきそうだ

「ここ？」

「はい」

笑顔でマリアが答える太陽の如くまぶしい笑顔

そんな笑顔を前にして仁はそれ以上何も言わなかった

「……」

「ただいま」

呑気に教会の中に入っていくマリア

入れとも言われていない

入り口の前で彼が座り込んだ

海外に来たためか少し感覚が狂っている

今、日本時間では深夜あたりだろう

眠たいのかそうで無いのか全くわからなかった

教会の上から覗いていたら久しく見る顔が来ていた

そして初めて見るものもいる

「おいおい、マリア様が彼氏でも連れてきたのかよ」

窓から下を覗き込む髪の毛の尖った青年が驚きを隠せず、そう言った

マリアはこの組織の中でもトップに立つもの

そして法王からも認められる聖女

その聖女が男を作るなどあつてはならないことだった

部下としてそれが許せるものか

男は苛立ちを隠せなかった

「ぶっ殺しに行くぞ」

「馬鹿言つな、鬼神。逆に死ぬぞ」

同じ部屋の隅で座っているのはスキンヘッドの黒人

頭には変わった刺青を入れている

見た目は柄の悪い人間だが、言っていることは髪の毛の尖った青年 鬼神よりも冷静だった

サングラスの向こうにある瞳は冷静に全てを見通していた

「あいつは黒騎士だ。牙さんと同じ……『心無い神』『悪霊の涙』

『エデンを殺す者』とか呼ばれているようなやつだよ。久しいなあ」

「あいつが……」

おもしろそうだと鬼神の口元には笑みが浮かんだ

「ステイブン。ちよつと遊びに行つて来る」

窓から身を乗りだし、玄関にいる黒騎士の頭の上へと飛び降りようとした鬼神

このまま飛び降りれば彼の頭の上に直撃……そのあとどうなるか楽しみだった

ステイブンが指を鳴らすと同時に……鬼神の動きが止まった

足元に絡みついたものに彼がふと目をやる

「……おいおい、その草を直せ」

「嫌だな。俺は敵でなければ歓迎するつもりでいる」

「お前は……」

「マリア様がお連れになったのなら、そいつは味方だ。黒騎士の力が関わっているのならば、俺たち組織にとつても……希望だ」

胸元にぶら下がっている十字架をステイブンは強く握った

かつての仲間がそこにいる

ステイブンだけじゃない、他の者にとって黒騎士の存在はなによりも美しいものだった

かつては死んだ力……

それが今ここに来た

「俺は受け入れる……黒騎士の存在をな……」

「行くぞ！馬鹿どもが」

ドア越しから叫んできたのは一人の少女だった

白いロングコートと鋭く恐ろしい緑色の瞳がそこにあった
最初に気づいたのはステーキブンだった

「よ、ハンナちゃん」

その後に鬼神が笑みを向ける

「来たか、Cカップ」

「殺すぞ。鬼神」

つまらない冗談に対してハンナの冷酷な言葉

冗談が通じないところが憎たらしいところだった

「おいおい」

「マリア様がお呼びだ。行くぞ」

鬼神を本格的に無視するハンナ

表情にはもうこれ以上付き合ってられるかと出ているようだった

黒騎士が消えてからハンナの表情から笑顔が消えた

共にいた天寧はシヨックのあまりに日本に戻ることになりつつたためか
それ以降、ハンナが笑うことが無くなった

どんなに励ましても、言葉をかけても……

彼女は冷たい反応を返してくるようになった

天寧と牙と共に過ごしてきた今までの思い出が彼女にとって大切な
ものだった

今はその思い出も消えつつある状態だった

マリアが連れてきた相手は確かに黒騎士だ

牙に似ているところは全く無い

彼の目を見てどこか病んでいるその目は確かに黒騎士の持ち主である証だった

だが、どこか弱々しく……だが、どこか恐ろしい目をしていた
牙以上に……

「黒騎士だけど怖いな」

「あ……そうだな」

「仁お兄ちゃんはくそヤンキーみたいな貴方達ほどじゃないと心の中
中で言っております」

「マリアちゃん、嘘はやめようよ。最後のあたりはあってるけどね」
仁もスキンヘッドのステイブンと金髪のとんがり頭の鬼神を前に
少し震えていた

彼らが今まで天寧と共にいた人物だとは思えなかった

「……」

「なあ、黒騎士なんだよな」

「え？あ、はい」

「へえ、貴方が……」

新しい黒騎士を前にして3人は緊張していた
目の前にいるのは黒騎士

日本ではある宗教団体の連中を潰したやつだ

それも天寧の話によれば黒騎士のコピーとそのコピーが進化した怪
物まで倒し、まだ見ぬアルテミス、ヘリオス、狗神を仲間にしたや
つでもある

彼自身になんらかの素質があるのがよくわかった

それでも……彼女だけは警戒を解こうとしなかった

「黒騎士であるなら、自覚していただきたい。あんたの力は核兵器
よりも上のものだからな」

「は……はあ……」

名乗りもせずに厳しい口調で言い放つハンナ相手に仁はあまり良い
印象を受け取らなかった

だが、横から耳打ちするマリアの一言で彼の表情に笑顔が浮かぶ

「天寧さんのお知り合いだったのか」

「天寧……」

ハンナも久しく聞く名だった

5年前のあの事件……彼女とはそれ以降に会っていなかった

彼が友人の知り合いと聞いて、どこか安心はしていた

敵では無い……心の中ではどこかそう思っていた

だが……

「彼女のことは関係ない」

「え？あ、そうですか……」

「ここに来たからには我ら組織の規定には守ってもらおうが……」

勘違いしている……仁がハンナの言葉をさえぎろうとした

「おれはただの観光で来たんです。組織に入るつもりは一切無いです」

「え？」

「マリアさま、説明お願いしますよ。俺は牙さんの墓参ってきます」

仁の言葉にマリアも笑顔で頷き、手を振った

そのまま彼は教会近くにある墓地へと向かっていった
墓参り？ たったそれだけ？

ハンナも周りの者達も仁の言葉が信じられなかった

「マリア様……」

「説明をお願いしますよ」

煉は教会にいた

誰もいない教会

騎士団のトップとも言えるマリアの気配もそこには無かった

だが、それで良かった

宣戦布告をするには十分な範囲だった

「どうするのよ？煉？」

引き連れた3人の中にいる翡翠色の髪の女性が後ろからそう聞く

その問いに彼が答えることは無かった

ただ、彼が巨大な悪魔となり黒い大斧を手にした時、その悪魔が何をしようとしているのかなんとなく理解出来た

「……様子見だな」

青い髪の青年がそう一言言い、巨体の男が無言で引き下がった

それに続いて女性も煉から1歩、2歩と下がる

黒い斧を持つ怪物が蛇のように動き回る

彼が進んだ先にあるのは教会

その教会以外彼の目には何も映っていなかった

「潰す……潰す……」

2 その目に映るもの

煉から昔の話を聞こうにも聞くことが出来なかった
だが、仲間達が煉を『デイグニティ』と呼んだのは彼のある動きか
らだった

治安がおかしくなった中国にいた頃だった

敵は革命軍『無双』

その中にいる凶虎と呼ばれた獣と1度戦った時、戦いに巻き込まれ
そうになった老人と少年達がいた

ビルの下敷きになりかけた二人を……彼は守ろうとした

結果、老人と少年は生き残ったものの煉はそこで1度死に掛けた
穏やかな死に顔を作ろうとしていた

死ぬつもりでいたのだから

もちろん、今現在も彼は人を殺していない

ローマへの宣戦布告

そのために一つの教会を潰してそれを血に染める

元々はそうだった計画だった

だが、彼が使ったのは教会にいる者達の血では無かった

そこで飼われていた平和の象徴である鳩の血を彼は使う

人は殺さない

だが、人以外の存在は彼にとって邪魔なものであった

動物も全て彼にとっては道具同然

そして今、周りにいる仲間ですら『人間外』として忌み嫌っていた
嫌っていると思っていた……

『その目に映るもの』

シスター達が互いをかばう

目の前にある黒い脅威から仲間を救おうとするため

武器も何も持たず煉に立ち向かう姿もあった

その勇気も虚しく、黒い斧の一撃が彼女らを吹き飛ばす
死なない程度に殴り、遠ざけていく

「鳩如きでなげムキになるんだよ」

鳩の首を切り落としていく

その紅い血が地を染める

煉が望む形に光景とそれは変わっていった

「たかが道具だ。玩具か食い物にしかならないこんなやつらを救いたいのか」

足元で震えている鳩がいた

煉がそれを確認したと同時に容赦なく踏みつける

またこの世界で一つの命が散った

彼にとつてそれは命でも何でも無い

ただの『道具』

だからこそ、今残虐な行動が出来た

「さようなら。クソな鳥ちゃん」

「人間の命を奪うことなく、小さな命を簡単になぶり殺すその様……『デイグニティ』と呼ばれている理由がいまだわからない」

別の人物の声が煉に言葉をかけてきた

崩れた教会から男が1人

瓦礫をどかしながら姿を現した

白衣のしたに見える黒いワイシャツ

その首元には銀色のロザリオが太陽の光で輝いていた

中国人……それだけで煉の目が鋭くなった

過去戦った相手もふと思い出す

「黄龍だったな。怪物どもの血を使って馬鹿みたいな研究をしたやつがかつていたとか」

「いかにも」

黒騎士の血を媒介にしてそこから中国の革命軍『無双』に力を与え

た者がそこに……

煉が震えた

人間に『人間』をやめさせた男がそこにいる

なぜここを襲ったのか

なぜ神と黒騎士の研究を忌み嫌っているのか

デイグニティ達の目的がわからなかった

何かに執着心を持っている煉がどこか恐ろしいものに見えた

男は相手の目的を探る

「そんな暇……今のお前には無いはずだ」

煉が既に考えを見通していた

デイグニティと化した彼の攻撃が始まる

どこからか現れる黒色の瘴気を纏った刃

その刃が黄龍の体に傷を入れる

体から流れる夥しい量の血

だが、黄龍は動じなかった

「デイグニティ……見た事の無い力だな」

油断は出来ない……黄龍が自身に宿る力を解放とうとする

白い光が彼の体を包み込んだ

その光が消えていく

姿を現したのは人間の姿をしていない黄龍だった

白い羽

金色に輝く鱗

二つの足で仁王立ちする金色の龍がそこにたっていた

龍の雄たけびと共に黄龍の静かな攻撃が始まる

デイグニティの体を何かが包み込む

目に見えない気体ではあるが、デイグニティ自身周りの空気が変わっていることに気づいた

「息が……」

息苦しさが感じられた

酸素が少し消えているのがわかる

だが、息切れを目的としているわけでは無い

黄龍が放った炎の玉がそれを示していた

デイグニティの巨体にその玉がぶつかる寸前

何もぶつかっていないはずのその玉が大爆発を起こした

爆風の中で巨体に纏われた鎧が砕ける

強大な爆発の中、彼はただ立っているだけだった

鎧が砕け、顔の半分が消し飛ばされてもデイグニティは動じない

痛みを感じる様子さえ無かった

水素……

たった一つの火の玉で大爆発をするところからして彼はそう読んだ

黄龍の周りにある物質がデイグニティの目に写っていた

酸素、水素、アンモニアその他様々な原子や分子がある

気体を操ると言うところを見ると別段、強い相手では無いと見る

「気体を操れるだけでいい気になるな」

「互いに同じだ。君も死ななかつたからと調子にのらない方が良い」

飛び立つ黄龍が爪を光らせ襲い掛かってくる

なんらかの気体を纏っているのがわかった

動きが早いわけでは無い

黄金の両爪の切先でいくら鎧を傷つけても彼の肉体までには辿り着

かない

デイグニティの黒い斧と黄龍の爪が火花を散らす

巨体に合わない俊敏な動きで爪を交わし、黒い斧の重たい一撃を受

けながらも耐える黄龍

崩れた教会の場で怪物が二人ぶつかり合う

戦っている煉の姿を見ていたシスターが後に語った

鳩を殺す煉の姿は人間ではなかった

それこそ、最初から襲い掛かってきた彼の姿を見た時は恐怖そのも

のだった

黒い影が襲い掛かってくる

ただ、黒いだけでは無い

悲しい目をして、紅い涙を流していたと言う

彼が人間かどうかなのか

そして、生きているのかどうかすら見えなかったと言う

牙の墓の前で仁はただ佇んでいた

黒騎士の仙台がそこにいる

神を1人殺し、その影響で暴走しかけた牙

マリアの手によって永遠にあつたであろうその命を閉ざした者がそこに
いる

ただの墓であるはずがどこか禍々しいものがあつた

「悪霊まみれだな。牙さんは何人殺してきたんだろうか」

……ちよつと不謹慎な質問か

しばらくして仁がマリアの顔色を伺った

「ごめん……」

仁の言葉にマリアは叱責すること無く、笑顔で答える

「たぶん、過去最高の虐殺者かもしれませんね」

「……まじか」

「過去いた独裁政治家が他の民族を実験等で虐殺した時の記録は…

…600万人ぐらい」

「ほっ」

「牙さんはそれ以上殺してきたと言っていました」

600万人を越える……想像がつかなかった

赤ん坊から老人を関係なしに殺してきたと考えると今、目の前にいる彼は死んで同然の人間だったのかもしれない

牙が殺してきた相手が悪人であってもその虐殺が許されるのかどうか
わからないものだった

ふと、仁が素朴な疑問を抱いた

「俺もこれからはそのぐらい殺していくのかな」

「私にそう聞かれても答えられませんよ。それこそ貴方の心次第ですよ」

牙のように虐殺者になるか

それとも今のままでいられるか

自分がどうなるかと仁は不安を抱いた

どこからか聞こえてくる爆音

その爆音の方向へと仁とマリアが向いた

どこからか感じる不穏な感覚

それが爆発したところから感じられた

「ちよつと行つてくるよ」

「……え？」

それだけを言うのと仁はマリアを置いて歩き出した

その先に何かがあるかも知らずに……

しばらく続く戦い

その戦いの最中、見ていた煉の仲間の中の1人がシスター達の元へ向かった

翡翠色の髪が歩くたびに揺れる

女が冷たい目をシスターに向けながらも近づいてくる

「煉が女を生かすところとかなんか気に食わないわね。ぶっ殺したくなるわ」

「女を生かしているんじゃないんだよ」

青髪の青年が手元で抱いている鳩を撫でながら来た

「嫉妬してるところが醜いぞ、ヴェノム。煉が殺すのは道具のみだ。俺らみたいな人間外もそうだ」

青髪の青年が諭すことで翡翠色の髪を持つ女性 ヴェノムが深くため息をついた

落ち着いたところでヴェノムの髪の色が戻っていった

黄金色の髪が綺麗だった

今まで黒い影の煉を見ていたためか

シスター達の目に映ったのはまばゆいほど美しい女性だった

「……………」

シスター達が見ほれているのがわかるが、ヴェノムにとってはあまり良いものでは無かった

正直なところ煉以外に興味が無かった

今、目の前にいるメスブタどもは今ここで殺してもとくに問題は無い
自分達の障害になるかもしれないやつらだ、あらかじめ……………と考え
ていたがヴェノムは内に宿る衝動を抑える

シスター達を置いてはどこか遠くへ行こうとするところが見られた
その瞬間……………奇妙な風が吹いてくる

耳に劈く叫び声

死肉が腐ったかのような匂い

今、そこには無いはずのものが感を通じて感じられた

「何よ、これ……………」

「あれからだ。あの小僧から感じられるぞ」

大男の言葉にヴェノムと青年が同じ方向を見る

黒く禍々しい者のいる方へと……………

若い少年だった

毒々しい黒い瞳と手に持っているフランベルジェが人で無いことを
示していた

「……………」

彼は沈黙で今の光景を見回している

その目には何が映っているか

「いや、すごい光景だなあ。おい……………」

突然目の前に現れた光景だった

崩れた教会に丸焦げの世界

そして奇妙な怪物と黄金の龍が戦っている

奇妙な感じはここから出ているとわかった
隅で震えているシスター達を見て感じられたのは……
そこに敵がいるということ
この両方のどっちが敵かわからないが
遠ざけるべきだ……
仁は……そして、黒騎士へとなった

そこにいる黒騎士を前にして皆が引き下がった
戦っていたデイグニティと黄龍ですら……

突然、現れた者があの黒騎士だ
黒い威圧感があった

「黒騎士なのか」
「……」

煉は沈黙していた

その目に写っているのは本来、人間では無い
人間じゃなく、怪物のはずだ

だが、彼は純粋な姿をしていた

黒騎士となった後のはずが

煉の目に映っているのは純粋な少年の姿だ

「……」

人間が相手では……煉はデイグニティの変身を解いた
仲間から見て彼の行動は不可思議なものだった

逃げ出すような姿……今まで無かったものだった

「おい、煉！」

「どこいくのよ!?!」

変身を解いた煉が穏やかに歩き去る

仲間達が追いかけていく姿を見て、黄龍もやっと変身を解いた
これ以上戦って周りを巻き込むわけにはいかない
崩れた教会の元へと彼が向かった

「大丈夫か？怪我は？」

「先生！皆さん！」

シスター達を心配し、怪我の様子を伺い後から来たマリア達も黄龍に続いた

黒騎士の変身を解いた仁が崩れた教会の傍へと歩いていく
鳩の死体に血塗られた場

今いた煉と言う少年がやったことだろうか

不思議に感じたのは犠牲者が出ていないところ

なぜ、彼がシスター達を殺さなかったのか

仁は首と胴体が分かれた鳩の死体を眺めて考え込んだ

2 その目に映るもの（後書き）

2週間の実習から帰ってきた
まじでおつ

小説？手抜きまくりだぜ

3 その後

「何で後を追わなかったんだよ！クソ鬼やろう！」

「うるせえ！俺のシスターちゃん達が傷つけられそうだったんだよ！許されるか！くそお！」

「大丈夫です。怪我は無いです。あと、さりげなくセクハラしないでください。鬼神さん」

「仕事に集中しろお！猿が！」

「うるせえ！ハゲ！」

聞こえてくる罵声が耳を劈く

耐えられなかったマリアが笑顔で二人に瓦礫を投げつけた

「うるさい」

「……ごめん」

煉達を追いかけていったハンナが戻ってきた

崩壊した教会の中を探る黄龍へと報告がされる

見失ったのだろうか

あの後すぐに追いかけていったハンナが言うには曲がり道のところで彼らは消えたという

一気に4人……

自分らと同じ人間外であることがわかる

あの黒い鎧の怪物の姿が目には焼きついたままだった

怪物にしては純粹だった

血塗られていない

彼に取り付いている悪霊もいない

だが、歪んでいるものがあつた

心そのもの……と悲しいオーラ

それは悪霊達が逃げていくぐらい歪んでいるものだった

『その後……』

天寧の言葉が気になった

流出した黒騎士の力を使って中国の連中が作ったものが何なのか
陽が皇室の力を借りて手に入れた資料に目を通していた

中国でおきているクーデター

その中心となっている人物に興味があった

「凶虎……ねえ」

黒い虎の毛皮に血塗られた長い両手の三爪

その姿はどこか黒騎士の雰囲気を漂わせていた

「軍を相手にしながらも単独で全てを潰す力……すごいわね。科学
だけでここまで出来るなんて」

「俺も驚いた」

横で缶コーヒーを飲む綾牙が凶虎の別の写真を見ては言う

「凶虎に関しては噂になっていた。他にも青龍に麒麟そして、魔人
とかいう他の連中もいるみたいだからな」

「中国では何人、『人間外』がいるのよ」

後ろのソファで寝そべっているシエリーもだるそうに呟いた
わかっているだけで中国にいる『人間外』は10人以上

それ以上いる可能性もあった

「それもすごいわね。人間の力で作られた連中よ。笑いが止まらな
いわね。弱体化はするだろうけど……」

「弱体化ね……」

「弱体化しても黒騎士から作られたんだ。後々、敵に回したら厄介
だろ」

「処分したいわね」

シエリーと綾牙が互いに顔を見合わせ頷いた

「中国に旅行がてら、暗殺でも……」

「いえいえ、ここは彼に任せたらいかかしら？」

彼……シエリーと綾牙が真っ先に思い浮かんだのが仁の顔だった

今彼がいるのはローマ辺りだろうか

「用事が終わり次第、彼に任せてみてはどうかしら？」

陽の提案を聞いた時……だんだんと綾牙とシェリーが脱力していった
黒騎士が向かえば簡単に終わる

もう先が見えていた

今のところあの黒騎士を越えるやつはいないだろう

マリア以外に殺せるやつはいない

そのマリアでさえ仁と行動しているのだ

「しばらくはチート扱いになるかしら、黒騎士も……」

資料から携帯ゲーム機へと持ち替えては陽はそう笑ってつぶやいた

そのチート扱いされるであろう黒騎士 仁は縮こまっていた

今日の前にいる4人がずっと見下ろしているためか

仁は黙り込み、上目使いで彼らを見ていた

「……怖いんですが」

「すまない。黒騎士……」

黄龍が仁の気持ちを察し、穏やかな表情をする

「まだ慣れていなわけだな。黒騎士になってからまだ日が浅いところか」

「2ヶ月前ですね。5月頃から……」

2ヶ月前……騎士団皆が驚きを隠せなかった

あのオーラを2ヶ月で出せるところにどこか凄みがある

仁の体に黒騎士の力が馴染んでいる証拠でもあった

「ここに来た目的は天寧から聞いている」

黄龍が話を切り出した

「牙さんに用があるんだったな」

「あ、はい」

仁の目に映っている彼はどこか知的なところが見られた

白衣を着たところからして天寧から聞いた黒騎士の研究と関係があるように思えた

「申し送れた、明神君。黄龍です。白銀の騎士団修道会の新人教育係だ」

「よろしくです……」

「自己紹介タイムか。ならば、教えてやるよ」

二人の間に割って入ってきたのは鬼神だった

鋭い獣のような目だった

威嚇するかのようなその目つきはいつかの人物を思わせる

高校の頃の彼らはそれに近いものだった

生理的に受け付けることが出来なかった

「……あ、はい？」

「俺は鬼神……名前は無いけどさ。フハハ、俺は……」

「そちらのお方は天寧さんのご友人でしたよね。再度お伺いします
が」

「え？無視？」

仁がむいた先にハンナがいた

どこか敵しそうな目だが、天寧と同じどこか優しいものがあつた

「ハンナ・フローレス」

自分の名前を言うだけでそれ以上は何も言わなかった

「よろしく……」

仁が先に挨拶してもよろしくと言う言葉でさえ、彼女は言わない

どうやら寡黙のようだ

「すまない。ハンナはあまりしゃべらなくてな。牙が死んで天寧が

ここからいなくなつてから……」

「ステイブーン！必要なことは言うな！」

隣から口出ししてきたステイブーンへとハンナが叱責する

「不愉快だ！」

「……悪い」

ステイブーンが平謝りをしてからハンナは苛立ちが抑えられないの
か、すぐに奥にあつた階段へ向かつていった

突然、重たい空気を前に仁自身もあまり良い気持ちにはなれなかった

「……海外来てからなんだこの空気」

「悪いな。黒騎士……。天寧がいる時以外はいつもあんな感じだからな」

「日本で言うツンデレってやつですよ」

「いや、違うな」

満面な笑みでそう言い放つマリアへと突っ込むのはさっきまでハンをフォローしていたステイブン

仁は苦笑いでやり過ぎすことに決めた

騎士団の者達もある程度のことは聞いているらしい

黒騎士の誕生

聖經会に関する事件

ヘリオス、アルテミス、狗神たちの活躍

今回の事件に対する黒騎士達の対応を騎士団は高く評価していた

「聖經会が黒騎士について研究していたのもやはりご存知でしたか」
仁の問いにステイブンはただ頷く

「正直、驚いたぜ。黒騎士に関する研究って言うてもただの細胞とかそれから宿る物質について研究していただけだったからな。黒騎士の力を使って別に神に近いものを作ったやつなんて全然ないんだからな」

「闇武者ですか」

黒騎士から作られた神の名を仁が口にする

ステイブンも黄龍も黙り込んだ

自分達以上に研究を進めている組織がいたという事実があまりにも衝撃的か

それを危険と察知しながらも何も対応できなかった自分達を恨んでいたのだろうか

「大丈夫ですよ。聖經会は『個人的な恨み』で潰したんで。後は中国にいるやつらぐらいしか黒騎士と関わってるのいないと思うので」

「ああ……そう信じているさ」

「……」

仁の目に映る黄龍にはどこか暗いものがあつた
よく見れば彼は中国人だ

「……黄龍さん、もしかして関係者ですか？」

「ああ……」

黄龍はそれ以上何も言わなかった

勘の良い人間なら早く気づいていたのかもしれない

「薄々、気づいていましたか」

仁も真剣な顔でそう呟いた

「中国の組織の人でしたか。名前は知りませんけど……」

「名前の無い組織だ。彼らが今何をしているのかはわからない」

「肅清できなかつたみたいですね。天寧さんからいろいろ聞きま
した」

「大分、前のことだ。天寧が抹殺しにしようにも他のことで忙しか
つたものでな」

「他のことっすか？」

黒騎士の力が流出してしまってもそれ以前にやるべきことがある
そのやるべきこととは何だろうか

そんな疑問を抱いた

「他に問題があるんすか？」

「黒騎士……デュアル・イーグルってのは聞いたことあるか？」

ステイブンの質問に仁は何もしらないと首を横に振る

皇室達が言っていたのを覚えているがそれ以上のことは知らなかった

「天寧さんの口にも出ていませんが」

「まあ、聖經会とかでゴタゴタあつたからな」

「ちよつと資料を持ってくる。ステイブン、後は頼む」

そう言つて黄龍は席から離れる

部屋の奥へ行くのを確認したステイブン

彼が話を続けた

「ロシア内で作られた反政府革命テロリスト集団だ。ロマノフ王朝の再興を願って作られたって話だがな」

「ロマノフ？」

「簡単に説明すればかなり昔にあった王朝だ。その王朝が潰されてソビエトができて、その次にロシアだ」

「ほう、それで……」

「その王朝を再び、よみがえらそうとしているわけだ。この組織は……」

過去の王朝を蘇らせる……仁には想像できなかった

何の意味があるのか

何のメリットがあるのか

頭の悪い自分では答えが見つけれないと彼は痛む頭を抑えた

「ただのオカルトどもか？」

「聖經会とは違う。思想のために動くあいつらはまた別だ。デュアルイーグルは……それこそ世界に影響を及ぼすようなやつらだ」

「世界に……？黒騎士の研究を作ろうとした聖經会よりもすごいとか？」

「デュアル・イーグルには私達のような化け物が多い。組織皆がそうかもしれない」

組織皆が……無意識に顔が真っ青になっていくのがわかった

仁が驚きを隠せずにいた

「わんさかいるんすか？俺らみたいな」

「日本で言う仮面ラダーの世界に近いかもな」

「シヨカーですね。皆、科学か何かで？人間の力で出来るんですか？そんなこと」

「いや……科学じゃない。中国で作られたようなものじゃない」

「……うん」

いまいち頭の整理が出来ない

仁は……とりあえず、繰り返し、確認をした

「つまり、ロマノフ王朝の再興を願う組織があって、その組織皆が

ヘリオスやゼウスみたいな人間じゃない……所謂『神の力』を持っているってことですか？」

「大体あつてる」

もつと青ざめていく

ヘリオスみたいに太陽の如く強大な力を持つている者

ゼウスのように天候にまで影響を及ぼすような者もいることになる

……世界が危ない

そう仁は悟った

「それって黒騎士の力が流出したよりひどくないですか？」

「まあ……そうだ。そいつらといざこざがあつてな。米国に行った

り、ここで防衛したり……」

「そりゃ、中国に肅清するとかそれ所じゃないかもしんないっすね」

簡単に動けないわけがわかった

昼間いた連中をふと思いつ出した仁

黒く大きい巨体に蛇の下半身を持ち、小さな命を断つ黒い大斧を持

ったあの怪物

脳裏によぎったのはそいつだった

「あれもそうかな」

黒い大斧が血にぬれていた

その肉片の持ち主と思われる男の死体が1人と隅っこでおびえる男が二人いた

怪物の足元には破かれた服ではだけた体を隠している少女が1人

彼女はおびえていた

黒い大斧を持つ化け物『デイグニティ』の怒りの目は隅にいる男達へと……

「人間の命は奪わないつもりでいる。だが、害ある者を俺は許さない」

そして、振り下ろされる黒い大斧あたり一面が血に染まっていった

怒りが止まらなかった

「お前らみたいなクズ……俺は人間とは見ない」

また一振り

こうして男達の命が皆、断たれた

3 その後（後書き）

ひさしく更新

ごめん、適当です

4 煉の仲間達へ心優しい悪魔へ

ヒーローになるつもりは無かった

元々、虐殺者としての汚名を背負うつもりでいた

それを止めたのが自分の能力を理解している友人だった

殺しかけてしまった友人だった

同じ年の女の子で彼氏もいた

その彼氏とも会ったことはあるが良い男だった

今回の事件のことも彼は知っていた

原因も……既に聞いたと言う

ベットの上で横になっている友人を見ながらその彼氏は言った

「煉が暴走したのもわかる。あの馬鹿どもがそそのかしたってのもな」

煉が『デイグニティ』となり暴走したのは暴走する少し前

ただ穏やかに、静かに暮らしたい

何事も無く生きたかった

その生き方を否定する馬鹿がいた

「つまんねえ！つまんねえなあ！煉！」

陰険で陰湿な生き方だと言い放つ男

その男の言葉にいい加減いらだってくる

そいつだけじゃない

そのほかにも煉が気に入らないと言い張るやつらもいた

弱そうなやつから金をせびろうとする連中たちだった

そんなやつらが怒りを露にした

「てめえを見てるとぶっころしたくなる」

そして男の拳が煉に飛ばされようとしていた

殴られる寸前の彼の表情を彼女は見ていた

悲しく……だが、どこか怒りに満ちていた目をしていた

そして煉は友人を巻き込んでしまった
殺した数は覚えていない

だが、最高の友達と思っていた彼女と彼氏を含めて6人を傷つけて
しまった

彼氏は……笑顔でそれを許した

彼の能力を考慮してだった

「やめてくれ。あんたがそんなこと言うなんて……」

「馬鹿言うな。親友に罪をかぶせるつもりは無い。本当に悪いのは
あいつらだろ？」

殺されたやつらが罪……

そんなこと、あつてはならなかった

「違う。俺自身が……罪だ」

そして煉は姿を消した

罪悪感に涙し、絶望感に居場所を見失い……

彼はどこかへ消えてしまった

人間を守りたかったのかもしれない

この醜い力で償いが出来ると信じて……

彼は探し続けた

死んだ学校の連中達へと償いをするため

『煉の仲間達へ心優しい悪魔へ』

『談・青髪の青年へ』

あいつが許さないのは罪も無い人間を傷つけるやつらだ

人間は基本殺さない方針で彼は生きている

なんでか？知らないね

ただ、あいつは『大罪抱きし7人』を助けた時も言っていたんだ

『俺はもう人を殺したくない。もう重荷を背負うことが出来ない』

そう言っていた

俺達は悪魔か神の力を持った『怪物』だ
もちろん、煉はそれをわかっていた

だから、時々俺らが人に危害を加えようとするれば殴ってくる
大罪抱きし7人の中でマモンってのがいたんだけど……強欲を司る
とか言われているアレな

あいつが1度、煉に似合うとか言う宝石を気に入って他人から強奪
したことがあるんだよ

まだ精神年齢の低いガキだった

奪われた女性が泣き喚くのを見てもマモンは何も思わなかっただろ
うよ

マモンは煉に対するお礼ってことで盗んだけどさ

煉はぶち切れたさ

人から大切な物を奪うなど外道のやることってな……

そしてマモンは泣きながら返しにいったさ

持ち主がおこるかなと思っていた

殺してかかるようであれば、俺もヴェノムも姉のルシフェルやサタ

ン達も一緒に謝るつもりでいたんだよ

でも……宝石の持ち主は笑顔で許したよ

正直で良い子だねってな……

煉も近くで見ていた

今までに無い優しい笑顔で見ていたんだよ

〈談・ヴェノム〉

アタシは元々、娼婦だった

中国のギャングどもに腰を振るようなメスブタだったよ

社会からはクズ扱い

ギャングどもは私をただの肉便器のような扱い

信じられないだろうけど、アタシは元々金持ちの娘だったよ

だけど、韓国か北朝鮮か

そこらに旅行行ったときに拉致されて……それで10年間は娼婦性病ももらったし、子宮も11歳の時に壊されて子供も埋めなくなった

ただ、残酷な生き方を全うしていたいつも変わらない日々

その日々が変わったのは『デイグニティ』が大斧を持って娼婦館に乗り込んだ時だった

彼が救おうとしたのはその日『入荷』された1人の少女だったわよもちろん、誘拐された子なんだろうけど

泣き叫ぶ親の目の前で捕らわれたのでしょよね

少女の後を追ってきたのよね、彼は……

そこで煉は切り裂いていったわよ、男どもをね

そうね……確か、その娼婦館だけではないわよ

それ以前に偶然見つけた本部を潰したし支部も潰した

聖經会を潰す黒騎士みたいだね

彼は許せなかったのよ……ギャングとかそう言ったのをね

話がずれたわね

娼婦館の男どもを潰した後、私達娼婦を解放したわよ

それで生きてきたやつもいたからそういうやつらはぶち切れた

……なんてのは無かったわね

今回ばかりは漫画のハッピーエンドみたいに皆が喜んだわね

私自身がその時に化け物となったわよ

毒を撒き散らす『ヴェノム』

彼と関わったばかりか成ってしまったのよ

これからどうするか……そう考えた時、彼が来たのよ

『1人ですか？』って……

優しい笑顔だった

抱きしめたくなる……か弱い表情だった

『行きましようよ。居場所を探し求めて……』

彼が望んでいるのは罪を償うことだった

その罪が終わった時のことを考えていたのかしらね
今度は自分が本来いるべき場所を捜し求めていたのかもね
盲目になっていたのよ
本当に煉が居るべき場所つてのは……
ここにあるのにね
ん？1発やらせてくれ？
醜いわよ
残念だけど私の心と体は煉のものよ
怪物にはなつたけど、性病も消えた
私は煉以外にこの体をやらないわよ

〈談・大男〉

あの少年は優しい人だったさ

まだ18だよ

だけど、子つて言うとなんか失礼な気がしてな
彼は優しかったんだよ

俺には11になる娘と9になる息子ががいてな
娘の方が事故にあいそうになった時な

自分の身を犠牲にしても助けてくれたんだよ
いや、生きてるよ……正確には死にかけたんだけど
すぐに医者に頼んだよ
生きていたさ

俺は……嬉しかった

だけど、本人は泣いていた

『なんで殺してくれなかった』

話を聞いたところでは彼は大切な人達を傷つけたってな
だから死のうと考えてたみたいだ
死ぬことで償えると……そう思っていたみたいだ
別の道を考えてみると言ったら……

『償いたい』と言ったよ

そのための方法を今探している最中だ

〈談・デュアル・イーグルのトップ〉

煉を含めて11人

デュアル・イーグルに入った数だ

わけてはいるんだけど、一応彼らは暗殺部隊に属してもらったんだよ
暗殺にしては殺し方が派手であるが、人間に危害を加えない

怪物にしては優しい男だ

組織にとっても新鮮でな……

私達の目的が果たせば彼の望むものを与えたい

死んだ友への償い？

彼自身が望む居場所？

まあ、何でもいいさ

それで煉にとって救いとなるならいくらでも救いの手を差し伸べよう

4 煉の仲間達〜心優しい悪魔〜（後書き）

煉側……デュアル・イーグルの仲間達が語る煉について

いや、こんなの書くつもり無かったよ

でも、ネタが思いつかないから……

ごめんちゃい

5 結晶に写るその姿

ヒーローになるつもりは無い

とは言ったものの、この少女を助けてしまったからには成し遂げなきゃならないことが他にもあった

正直、イタリアの言語はわからない

仲間のフォローがあつてやっと話せるぐらいだ

家に連れていこうと他の仲間が言ったことで少女もついてくることに……

……まあ、いいか

イタリア語で礼を言う両親に謙遜する仲間達

和訳をすればこうなるであろう会話だ

「私達の大事な娘を救っていただき、ありがとうございます。なんとお礼を申せばいいのか」

「いえいえ、私達は何も……彼ががんばったおかげです。そうだよね？お嬢ちゃん」

「あの人のおかげなの！ありがとうございます！」

どこか和める雰囲気だった

特に少女の方が……

両親が視線をに向けるとどう言えばいいのかわからない

「どうも……」

こうやって人助けをするのはデュアル・イーグルの布教のためでも何でも無い

ただ、自分の中の何かが揺り動かしている

人を助ける場合も悪を滅する場合も……

……周囲が『ディグニティ』と呼んでいるが俺には一向に意味がわからない

俺には永遠にわからないかもしれないね

『結晶に写るその姿』

三日がたった

少女を助けたことと、教会を潰したこと

そして、黒騎士がいたことしか覚えていない

ベットの上から降りた煉はすぐに私服に着替えた

その後の足どりは朝食が用意されているレストランへと向かっている
不意に時計を見た

この時間帯であれば『彼ら』も来ているはずだ
急がなければ……

レストランには予想通り彼らがいた

ヴェノム達の他に2人の男と少女の姿がそこに……

サングラスをつけた長い黒髪の青年

銀髪の眼帯をつけた少女

彼らも仲間

数少ない暗殺部隊のメンバーだ

組織は1000人以上もいる

1000人以上もいるデュアル・イーグルには3つの部隊がある

戦闘部隊、策略部隊

そして、煉を中心とした暗殺部隊

暗殺のためにいるとは言え、やっていることは戦闘部隊となんら変わりが無い

土地、資源の奪取

後はその名の通り各国重要人物の暗殺だ

ただ暗殺部隊と戦闘部隊の違いと言えば、前者の方が組織の中で最強だと言われている

煉を率いる13人
13人全てが神、悪魔の力の持ち主だ
今その中の6人が揃った

「リーナもヘルファイアさんもお元気そうで」

笑顔で言う煉にサングラスの男 ヘルフレアも同じよう笑顔を返した

「お前さんも……」

「元気でよかったわね」

銀髪の少女 リーナの微笑は宝石以上に輝いていた

いつものことだが……いつ見ても見飽きないものだった

「朝からまぶしいな。リーナ」

「褒めてくれてるのかしら？」

「聞き飽きただろうよ。他に言葉が見つからなくてな」

「いえ、素直に嬉しいわ」

「そうか。良かった」

暗殺者同士の集まりであるはずだ

煉自身が不思議だと感じるぐらい平和だった

この後自分達が何をするのか

それを考えると今ここにある平和は小さすぎた

『それで、黒騎士の力や進化ってのはわかったの？』

画面向こうにいる陽が聞いてくる

あっちのテレビに写っている光景は何だろうか

初めて使う仁は目を輝かせていた

「すげえな」

『仁君……』

「ごめんなさい。それに関してはマリア様から説明があるみたいで
す」

そう言って、マリアにカメラの前に座るよう目配せした

黒騎士の力をどこまで知っているだろうか

マリアだけではと思い、黄龍にも隣で着くよう仁は促した
黄龍も頷き、位置に立った

「お初にお目にかかる。白銀の騎士団 組織教育係と黒騎士科学チームの黄龍だ」

『よろしくお願ひします』

「よろしく」

「マリアです。お久しぶりです」

黄龍と陽の間にあるまじめな雰囲気のマリアの言葉が壊した

仁は苦笑いをして、画面の向こうにいる天寧は困ったような顔をしていた

『マリア様、自重願ひます』

「……ごめん」

「話をしようか。黒騎士と君達の力について……」

やっと黄龍の口から話が始まった

「まずは我ら神の力についてだ。ヘリオス、アルテミス、ゼウス。君達の力が何を元に作られたか、現実的に考えたらまずありえない力だ。使ってる君達も奇妙に感じるだろ」

黄龍の言うとおりだった

聖經会との戦いに時に自分の身を守るため

そして、聖經会を潰すために使っていた

その力がなぜ作られたのだろうか

時々考えさせれる

『解明できるものですか？私達の力って……』

陽の問いに黄龍はただ首を横に振る

「何から作られたか、誰が作ったか。何も解明出来なかったよ。だけど、この世界にある物質と組み合わせで発揮する力であることがわかった。アルテミス、ゼウス、ヘリオス。君達がその分類だ」

『ふむ……現実にある物質を多用している力ってことですか』

「そうだな。むしろ、その力がほとんど言ったところだろうな」

炎、雷、鉄……

現実的な能力

画面向ここのシェリーが何か考え込んでいた

『んじゃ、黒騎士やこのゲイはどうなのよ』

『ゲイ言うな。……だけど、俺も考えてましたよ』

綾牙自身に宿る力

現実にはいない妖怪を操る力はどうなのか

「説明が難しいところだな。また違う部類になるだろう」

黄龍は手元にあった資料を開いては説明をした

「狗神つてのは私も始めて聞くがな。一応、我らの中にも『鬼神』

つてのがいてな。ただ純粹な神々の力なのかもしれないな」

『ふむ……』

「ただ、黒騎士は別だ」

……まあ、予想通りだと陽達が頷いた

『まあ、黒騎士だもんね』

『黒騎士だからね』

『黒騎士だしな』

『黒騎士……ですからね』

「あの……他に言葉内のでしょうか？」

『『『』』』言い様が無いんだよ。大体予想通りだよ』』』

……まあ、彼らの言うとおりだ

仁がそれ以上言葉を望むことは無かった

「仕方ないな。そうそう、陽さん。闇武者のことについては何も話

ていないんだよ。悪いけど……」

『資料は送ってないわ。送るつもりも無いからね』

今だ黒騎士のコピーが作られていない今……これ以上外部へと漏ら

すことが無いように……

そんな陽の行動を黄龍は賞賛した

「助かるよ。黒騎士のご友人方には迷惑をかける」

『問題は無いですよ。関わった以上はこちらもご協力します』

「こんなことに巻き込まれても、動じない。後悔もしない。その精

神力、羨ましいな」

日本にいる逸材の人材を前に感心をする
今までにいない人物だった

ふと、黄龍が周りにいた鬼神やスティーブンを見た
彼らも陽と同じ年齢の者達だ

だが、彼女の方が知能も力も一回り上だろう

彼女のような人材が欲しいものだった

「さて……。黒騎士は違う。それこそ君達が知っているであろう『
怨念の塊』。それで正解ではある。神とはまた違った存在だ」

『ふむ』

「黒騎士が進化すると聞いたらしいが、それもありえる。仮にも先
代の黒騎士 牙は進化の手前で死んだのだからな」

『黒騎士が進化の手前まで……。そのまま進化をしていたらどうなっ
ていたのですか？』

「今頃私達は生きていないだろうな。そして世界へと影響が及ぶ『
具体的には……』

陽が聞いても黄龍は「ただの推測だが、危険なことには変わりがない」と、それからは何も言わなかった

互いが考え込む

そんな沈黙が続く中、画面に写っているシェリーが話に入ってきた
『……それで、黒騎士自体をどうするとか対策は？』

「ただ単純に黒騎士を殺したところで何の意味も無い。牙が死んだ
後に仁君の手に渡ったんだ。仁君が死んだところでまた別の人間に
写るだろう」

……黒騎士は不滅であること

唯一、黒騎士を殺せるマリアの力を使ったとしても黒騎士は再び蘇る
傍で聞いている仁にとってあまり気持ちの良いものでは無かった

今手元にあるこの力は呪われている
そんな言葉しか聞こえてこなかった

「俺、少し離れます」

あとは陽と黄龍に任せよう
そして仁はその場から去った

教会前で彼らは止まっていた
誰が望んだものか、こんな残酷な戦い
少なくとも彼は望んでいなかった

「犠牲者はかなり出るだろうよ、煉。今回ばかりは我慢してくれ」
大男の言葉に首を横に振る煉

「ゴーレム、貴方もそこまでの覚悟が無いでしょうが」
厳しい一言だった

煉の言葉にゴーレムは何も返答出来ず、口を閉ざす

「ゴーレム、ヘルファイアさん。ここは俺に任せてくれないか」
横から入ってきたのは青髪の青年

青い瞳はサファイアのように美しく、煉とは正反対のイメージが見
られる

「煉の力と俺の力があれば被害は少ないぜ。結局のところ、この国
から神の力を持つやつらをぶっ殺せばいいんだ。人間を無理に巻き
込む必要は無いさ」

「そのための方法があるのか？サファイア」

「無関係の人間には眠っていてもらうことにするよ。煉……俺が結
晶を張り巡らせる。君の能力でシスター達を眠らせてやってくれよ」

「ああ……」

次第に煉の顔に笑みが浮かんでくる
人間を傷つけることなく、人間外の連中を潰すという目的を叶えた
いがため……

日は沈み、静かな夜が訪れた

マリア達がいる教会へと歩いていくのは6人の男女の姿だった

その姿が次第に異形なものへと変わっていく

ゴーレムが岩石を纏った怪物へと変わる

サファイアには青い宝石の鎧が纏われ、紺色の翼が生える

ヴェノムの綺麗だった金髪の髪が毒々しい緑と紫の髪へと変わった
そして、黒い鎧を纏い、黒い大斧を手にした怪物へと煉は姿を変えた
「リーナとヘルファイアさんはそこで見ててください。監視役はただ
だ見ているだけで問題無いです」

煉の言葉に二人は無言で頷いた
それを確認した煉は歩き始めた

ともに歩くサファイアの足元から広がる青い結晶が広がる
鏡のように今ある光景そして、人々を映し出していた

「現実とは違つて鏡が移す世界は相変わらず美しいですな。サファイア」

「八八八、煉の馬鹿。現実を見るよ」

「現実が汚すぎる。なぜ、人間つてのは馬鹿なことしか出来ない。
中国も、聖經会もそうだ。人でなし共が……」

人であることをやめた
そんなやつがなぜ大きな面して立っているのか
煉には理解できなかった

「特にここの組織の連中は調子に乗りすぎた。黒騎士の源もここから……」

今、その源を断とう

その近いを胸に歩くディグニティの姿がサファイアの瞳に写っている
今の彼は人の姿では無い

呪われた姿を彼は後悔と絶望として象っていた

「かなり広い敷地内だ。ゴーレムとヴェノムは西の方向へ、サファイアは東に俺は北の方面を制圧する」

仁の一声で4人が散らばった

サファイアが放った青い宝石が教会全体を包み込んだ

シスター達の眠る部屋まで細かく……

今彼女らが起きたらどうなるか大体予想が出来た

外に出ないように鍵まで硬め、閉じ込める程度で彼女らがそれを知らないまま朝を迎えればいい部外者に何も被害が無いよう煉は心から祈った相手にするのは人間を捨てた馬鹿な連中だけだ

偶然外に出ただけだ

それが幸運になるとは思いもしなかった

敷地外にある小屋にいたことも含めて仁達は助かったのかもしれない青い宝石に包まれた光景を前にして仁はただ苦笑いをするだけだった

「……何円分？」

「金に分散すると億は超えるんじゃないか？」

偶然後ろにいた女の声に仁が驚いて振り返った

仁よりも前にあの空間から出たハンナがそこにいた

いつも以上に厳しい目つきが仁と周りを見ている

「ハンナさん、なんすかこれ？」

「敵襲だろうな。サファイア石を武器にすると面白い能力の持ち主だこと」

「敵襲ですかい？俺は他の人ら避難させてきますよ」

慌てて教会へと走っていく仁を見送り、ハンナはそこから動くことしなかった

自分が今すべきことは……ここに来る敵を始末するだけ

その敵の姿が見えてきた

仁とは違う方向から現れた男が目に入った

青髪の顔立ちが整った青年

彼の青い瞳にはハンナが写っている

「騎士団の1人か」

容赦はしないとサファイアが変身をする

青い宝石を纏った元の面影が消えていた

「理由あって襲撃しにきた。人間以外皆、叩き潰す」
自身の肉体から現れた角を手を持つ

引つ張り出したそれは巨大な剣となった

「来いよ。お嬢ちゃんは神なんだろ？その目……人間のものじゃない」

相手もわかっているようだ

正体を隠す必要は無いかとハンナ自身も隠していた姿へと変異した

『雷神の剣』

そう呼ばれた彼女の姿はその名の通りの姿だった

威嚇するたびに緑から赤へと変色する翼

1本角が生えた鳥類の頭部は口を開ける旅に電気が漏れる

2本足で立つ巨大な雷鳥が敵の前に立ちはだかった

やはり、人では無いか

サファイアが悲しい目でハンナ 『ケツアルコアトル』を見ていた

煉が人間以外を簡単に殺す姿を思い出すたびに思う

今、目の前にいる『化け物』も元は『人間』のはず

その元『人間』を殺そうとしているわけだと悲壮感ただよう表情が見えた

それでも……サファイアはためらうことなく大剣を構える

教会が襲撃されてそんなに時間はたっていない

ケツアルコアトルとサファイアの戦いから全てが始まった

5 結晶に写るその姿（後書き）

エロス！

ヘルフレア ヘルファイア 解明

6 月夜の戦い

教会皆が結晶化するなど予測できなかった

いくら敵襲と言えども突っ込みどころ満載な襲撃の仕方だ

大規模で大胆で……

こんな襲撃、自分ならしないものだ

だが、夢のある襲撃方法だ

周りから見たらこの光景は綺麗だった

今、それよりも美しい子がそこにいた

仁の目に映ったその子は輝いていた

暗夜に浮かぶ銀色の月と表現したくなる

そのぐらい彼女は美しかった

「……こんなところで大丈夫かい？」

仁が恐縮して、教会前に立つ少女へと話しかけた

教会を見ていたその子が振り返る

その様も美しかった

年は精々10歳ぐらいの子だろうか

だが、その顔つきは少女と言うには美しすぎた

「……」

「アナタハダレ？」

片言で話す少女のその問いに仁は優しい笑みで答えた

「…… jin ake gami」

慣れない英語でそれぼつく話す仁

そんな彼に少女は微笑んだ

その少女が気づけばすぐ近くに……

和んでいた彼の笑顔が消えた

人じゃない……仁がそう気づいた時は既に遅かった

『月夜の戦い』

仁と背中合わせになっていているリーナの周りに異様なものが散らばっていった

本来外に出るはずのないものだ

まだ生暖かさが残っているが匂いが酷いそれが周りにあってもリーナは顔色一つ変えなかった

臓物全てが散らばっているにも関わらず、リーナの白い服には血が1滴もついていなかった

「ごめんなさい。人間かと思った。でも、それはそれでよかったのかもれない」

煉に嫌われ無いようにしたかった

相手が黒騎士であることに助けられた気がした

「今の貴方の体内には何も無いはずよ。それでも立っていられるなんて……さすがは黒騎士」

リーナの言うとおりで

体内が空っぽになっている感覚だ

このまま歩こうとすれば体がどうなるかわからなかった

だが、それもすぐに治る

周りに散らばった臓物全てが黒い砂となり仁の体内へと入っていく間違いない黒騎士の力を持っている

初めて相手するのが黒騎士とわかった時、リーナの中にある何かが揺り動く

恐怖が戦いへの衝動か

彼女の口元には奇怪な笑みで歪んでいた

「黒騎士……」

「怖がらせたか、ごめんね」

リーナは一瞬だけ自分の耳を疑った

それは敵にかけるような言葉では無かった

優しく労わるような口調

本当に幼い子を相手に言うような口調だった

「……………はい？」

「いや、少女相手にこんな姿……………見せるつもりなんて」

「黒騎士？貴方を……………」

彼の顔が

彼の瞳が

彼の心が

どこで気を間違えたのか

黒騎士が向けているその目は何かに見惚れている目だった

その目でリーナはやっと納得する

「……………冗談でしょ」

こんな悪魔が好意を向けるなんて……………

屈辱を感じたリーナが絶えられず牙を向ける

蝙蝠の翼が羽ばたいていた

銀髪の少女に悪魔の翼

その姿は仁にとって美しく、まばゆい者に見えた

「美しい」

名も教えてくれない少女が攻撃を仕掛けた

銀色の鎧を纏った少女が黒い翼を武器のように振るった

地に傷が刻まれる

鋭いものに斬られていくかのように、その衝撃波は仁にまっすぐ向かってきた

このままその場においても死なないことはわかっていた

だが、彼は無意識に彼女の傍にいた

「……………おいたはいけないよ

恐ろしくもどこか優しい笑みだった

その手は自然に少女の髪へと伸ばされる

黒騎士となつてから彼は性的興奮も感じなくなった

永遠に生きる故に子孫を残すことも出来ない……とそんな説明を受けたわけだが

「勝てばよかるうなのダー」と自然に言いそうになったのは内緒にしておきたい

ただ、こんな感覚を感じるのだろうか

傍にいたい、心をモノにしたい

そんな感情が沸くのだろうか

素朴ではあるがそんな疑問があったが彼女との出会いで消えた

銀髪の少女の髪からは花のような匂いが感じられた

何の花だろうか

しばらく考えていたが、それも考えられなくなった

ただ、触れたい

目の前にいる少女の心を知りたい

そして、掴みたい

そんな衝動が彼を駆り立てた

性的衝動では無い

また違った感情だった

銀色の細身のある鎧を全身を包んだ少女の姿は綺麗じゃない

そうおもった時、仁のフランベルジェが振られた

黒い一閃と同時に崩れ落ちるリーナの鎧

元の白い衣服が晒された

そして、彼女の驚く表情……

それを確認すると仁はフランベルジェを落とした

いつ動いたのか

いつ後ろに回ったのかわからなかった

後ろに回られ髪をいじられ……

今までに無い屈辱だった

「貴様……」

他人の能力を解除する力

そんな力を持つていることにリーナは驚く

仁の顔を見ると彼自身も驚いているのがわかった

自分の能力を理解していないのがよくわかる

今まで数々の戦場で戦ってきた

無双にいる連中もそうだ

他国の軍を一つ潰したことも……

そんな自分が能力で負けている

自分の能力すら支配していないような男にだ

これ以上の屈辱今までにあったのだろうか

静かな怒りがリーナを駆り立たせた

コンマ2秒の速さ

目に止まらない速さで彼女は変身をしていた

いつになれば名を教えてくれるだろうか

聞こうとするが、その言葉に彼女は耳を傾けてくれなかった

力づくで向かおうとは思わない

仁はただ待つことにした

少女からの黒い一閃

両腕が切れ、黒い血を噴出しても仁は立っていた

二度目の攻撃

人間なら普通に死ぬであろう首まで切られた

それでも彼は生きていた

「首つたけ」

少女の黒い一閃と攻撃はまだ続いた

それは仁が微塵切りにされるまで続く

挽肉にされても黒い砂へと変わりそれが人の形へと成していく

仁が姿を戻すたびに少女は小さいため息をついた

これはいくらやっても霧が無い

彼の目の前から姿を消そうと背を向ける

このまま逃げ切ることが出来れば……
振り返った時だった

ふと思いついたのがさっきまでの黒騎士の行動だった
黒騎士にならずとも彼の動きは早かった

そのことを覚えていたらこんなことにはならなかったはずだ

黒い無数の手と共に彼はいた

黒い鎧を身に纏った者がそこに……

2度目の不覚だった

「嘘よ。あんたは何者なのよ」

床にあるドアを開けて黄龍達がやっと地上に戻った

長く暗い地下通路を通ってやっと青い結晶にまみれた教会を見た時は目の保養に良いと思っていた4人だが、状況が状況なため異常事態だとすぐに判断した

「マリア様……」

「黄龍先生と鬼神さんは敵の殲滅をガイアはシスター達の救助をお願いします」

「……お任せを」

マリアの命を受けた3人がそれぞれ違う方向へと散っていった
目的はただ一つ

静かに襲撃を開始した敵達を倒すため

それぞれが人の姿から彼らの闘争のための姿へと変わる

そしてマリア自身も近くの教会へと戻っていった

この先に見えるのは何だろうか

この先にある世界は自分達が望んでいるのだろうか
中国にいた時も考えていた

そんなゴーレムは水晶の上を歩き、敵の姿を探す

歩いている中、ふとポケットから落ちた1枚の写真

その写真をゴーレムが拾う

彼が人間の時の写真だ

写っているのは彼と女性と幼い少女と少年

写真を見ると彼はため息をついた

その柄に合わない悲しい表情を浮かべ……

「ミリア……」

血塗られた妻の死体がそこにあつた

抱きしめてもその体は動くことが無い

不意に目にはいった奇妙に笑う黒いローブの男

その男へとゴーレムはいつのまにか変身をしていた

ゴーレムとなり犯人の男を殺した

子供達の目の前で……

母を殺されたその次には父が真の怪物

だが、そうわかっていても二人は怪物となった父の元へと駆け寄ってきた

優しく子供達を抱きしめる

人の温もりが伝わってきた

子供達の涙が自分の体を濡らしているのがわかった

人間ではない自分でも人の温もりが感じられた

煉が自分自身や仲間達そして他の神の力を持つ者を忌み嫌っているところに疑問を抱いたこともあつた
だが、それが彼にとって本当の気持ちでは無いことがよくわかる
動物を嫌う彼でも組織の仲間と裏で猫を飼っているところを見た事がある

その仲間の中にゴーレムの娘、息子がいたこともあつた

彼が恨んでいるのはなんだったのだろうか

なぜ、神の力を持つ人間を恨むのだろうか

その光景を思い出すたびにそんな疑問がわいてきた

「誰だよ。同じジジイ同士なら酒でもつまみながら語り合っかい？」
影で見ている人物へとゴーレムが笑いながら声をかけた
そこで見ているのが敵だとそれとすぐにわかった

「会っつのは初めてだな、黄龍。中国の『無双』の中樞。あんたとあんたの知り合いが凶虎を作ったんだっただか？いや？あんたが研究を中国に任せちゃったからあの女の子が怪物になったのか」

「どちらにせよ私の責任であることには変わりがない」
黄龍が鋭い目を向けた

金色の龍の姿をかたどった彼が今にも襲い掛かってくる様子であったが、ゴーレムも同じ

岩石で作られた体に黒い巻き角が鋭く光る

大きさもその頑強な肉体も黄龍と比べれば遥かに強大だ

「まあ、いいさ。黄龍……俺はデイグニティよりも残酷じゃない。
もしここに立っているのが俺では無く彼だったらお前さんとはとくに死んでいるさ」

黄龍はゴーレムの言葉を当然だと頷いた

彼の反応からどう読み取るべきかわからなかったが

「それが罪滅ぼしとなるなら喜んで受け入れよう」

その言葉で黄龍の心境をやっと理解できた

「そうかい。まあ、ええさ。まずは俺を殺してからにしろよ」

今、目の前にいる敵がどう考えようか

煉に近づけさせるわけにはいかなかった

彼が目的を果たすまでは持ちこたえたかった

そして互いが互いに戦う意志を見せた

今日は運が良いのだろうか

こんな美女を前にして戦う気が失せるに決まっている

だが、敵であることは変わり無い

ステイブンプが髪の毛の無い頭を掻きながら（なんか嫌な言い方だ b

Y(ガイア)ため息をついた

「こんな夜に君みたいな美女か」

「ごめん、黒人は駄目だね。許して」

「まだ何も言っていないけどな、クソツタレ」

目の前で翡翠色の長髪を靡かせるヴェノムがスティーブンへと挑発する

周りにある水晶が科学反応か何かを起こして少しこげているがその現象が彼女の能力だとガイアは悟った

「ちよつと毒々しいな。俺はそんな女に興味は無い」

「さつき、クソツタレって言ったのは何なのよ？」

「さて、何のことか」

これ以上話していると夜が明ける

スティーブンが人間の姿を捨て、戦闘の体勢をとった

木々に包まれ、大木と木の葉のみで作られた姿はどこか威厳のあるものがあつた

大地の神 ガイア

ヴェノムはその存在に身震いした

「ガイアか。おもしろい」

黒い炎が青い水晶を焦がした

鬼神が敵の存在に気づいたのは黒い炎に囲まれた時だった

「……はい？」

「ヒハハハハ。誰かと思つたら名前がわからん」

名も知らない敵がそこにいる

鬼神が身構える

「俺も知らんから安心しろ」

「そうかい。同じ悪魔同士ならとりあえず、自己紹介ぐらいしようぜ？ 将来仲良くなるかもしれないねえからな」

黒い炎から姿を現したサングラスの男 ヘルファイアが手をさし伸ばした

「ヘルファイアだ。本名は無い。俺らのチームは皆、デイグニティから名づけられたからな」

「……そうかい。俺は鬼神だ」

野郎に名乗るつもりは無かったがなぜだが自然と名乗ってしまった今、目の前にいる敵からは不思議な感覚しか感じられなかったどこか親近感を感じるものがある

「鬼神か？楽しませてくれるのか？」

「俺、ゲイじゃないんだけどなあ……」

「血にぬれた戦いだよ。楽しませてくれ」

黒い炎がヘルファイアの体を包んだ

その炎が作り出すのは頑丈な黒い肉体と悪魔のような仮面

ヘルファイアが怪物と化した

「元々戦場から生まれたんだ。食よりも性よりも血だけが俺を揺り動かす」

「どこのアニメの敵役ですか？俺はそんな趣味に付き合っても無いがな」

「鬼神……来いよ。見せてみる。てめえの姿晒してみろ」

「って無視ですかーい」

ノリ気では無い鬼神も戦うための姿を見せ付けた

その名の通り『鬼』

紅い日本角に鋭い牙がむき出しにされ、炎のような赤い髪が揺れる傷だらけの肉体は過去、戦場での勝利と敗北の数々が刻まれているようにも見えた

ヘルファイアの読み通り

彼はやりがいのある敵だった

「さあ、いくぜ」

煉が辿り着いたのは一つの大きな教会だった

何人もの信者がここに来てはミサをしたりなんたりしているのだと思つと

どこか心が躍るようだった

人が神にすがりつくのは当たり前だ

また神を信じないのも当たり前だ

彼はそう認識していた

それで、この先にいる少女は神か

それとも人間をやめた者か

どちらにしろ殺すべき存在だとそう教えられた

上からの、あの方の命令であれば当然それは遂行するつもりでいる

この力で勝てるのなら

祭壇の上で立つ少女へと煉は近づくと

元の人間のような姿では無い

蛇のように動き回り、敵との距離を縮めていく

黒い斧に写るは少女の姿のみ

「マリアだな」

少女は笑顔で頷いた

唯一黒騎士を殺せる存在と言われ

なおかつ、その力は黒騎士と同等の力を持っていると聞く

人の身でありながら……

彼の目に映っているのは人の姿ではなかった

白い影に包まれた人の姿

「人間には見えない」

「え？」

「お前ら化け物どもが目映るたびにイラついてくる」

そんな姿になってまでなぜ神の力を得ようとするのか

あつてはならない力をなぜ望むのか

過去の自分と照らす度にその苛立ちが強くなる

自分らのような神の力を持つ者の姿が見えないのだろうか

マリアは煉の持つ『ディグニティ』の力が何をもちたらしめているのか

理解が出来なかった

ただわかることはその力が彼を苦しめているということだけ
解放できるか

それか勝てるのだろうか

戦いを前にしてマリアが不安に駆られた

6 月夜の戦い（後書き）

へたレな上に東京都ブチ切れな内容になりかねないよね
でも、幼女ぐへh……おっと、誰か来たようだ

7 地獄の玉座と自然の浄化

いまそこに有毒なものが流れているのがわかった
翡翠色の髪の毛の女の能力を悟ったガイアはその能力の弱点がすぐに見
つかる

自然の摂理の維持、崩壊

ガイアに出来ることはそのぐらいのことだった
彼はいつも思っていた

正直、メンバーの中で1番弱いのは自分だと……

戦いのために作られたわけでは無い

ただの危険物取り扱いのような能力だ

それが戦場で役に立つか

ステイブンは今の能力に自信が持てなかった

今、それが役に立つだろうか

「そんなくさいもの撒き散らしてて……体に毒じゃねえか？」

「ごめんなさいね。元々毒の塊のようなものだから」

「そうかい」

……浄化してやろう

毒に塗れた彼女を見てガイアは決意した

ただの力任せの戦いになるのだろうか

そういった力しか無いためかそれはそれで助かるが……

鬼神は拳をつくり、黒い炎に包まれた怪物へと殴りかかる

ヘルファイアの強靭な肉体はその拳を受けることなく、炎となり攻
撃を回避した

「すまない。物理的な攻撃は届かないんだよ。あ、いやー じゃ
ないよ。ースじゃないからな」

「何をごちゃごちゃ言ってるやがる！」

拳をぶつけるばかりの鬼神にヘルファイアはただ暇そうな様子で見

ている

座つてもいいだろうか

そのぐらい余裕を持つことが出来た

「俺のターンだ」

ヘルファイアの手の平から黒い炎が放たれる

絶望を思わせるような残酷な炎が鬼神の体を焼き焦がしていった

黒い炎がどのぐらいの熱量を持っているのかわからないが

周囲にある青い結晶を溶かしていくぐらいだ

そんな温度の中で鬼神はただ笑っていた

「わるいな。俺には炎とか氷とか雷とか基本きかないんだよ」

「……マジで？」

鬼が浮かべる笑みがどんなに醜いものか

それは今までに見た事が無いものだった

勝利を確信しているような表情

ヘルファイアは気に入らなかった

「調子にのらせねえぞ、でくの坊」

「役にたたねえ火なんかで倒せると思ってるのか？地獄に叩き落と

してやるよ」

『地獄の玉座と自然の浄化』

きりの無い戦いだ

鬼神が攻撃の方法が見つからないままただヘルファイアを殴り続けるのみだった

殴られている彼も同じように思っていた

殴られても体は炎となり、ダメージも通らない

ただ、何もしないというのもつまらなかった

「いつまで殴っているつもりだ」

「ううむ……」

鬼神がやっと思ひ下がつた

炎がきかない相手にどこまで通じるかわからないが、出来るところまで攻撃を試みよう

ヘルファイアが黒い炎を放つ

直接敵にぶつけることが無く、彼の周りを囲んだ
ちよつとした一芸を見せているつもりだったが

「……」

不意に感じた別の空気に彼が焦る

「デイグニティ……暴走しかねないな」

飛び出すヘルファイア

その標的は黒い炎の中で立っている鬼神だった

殴つても意味無いと悟った彼がとつたのはただ観察するだけ

鋭い目でずつとヘルファイアの動きを観察していた

黒い炎を手につかみヘルファイアが武器を作り出す

炎を纏つた斧

その刃はどこかの言語を思わせるような形をしていた

飛び掛る寸前でその斧を鬼神へと振り下ろした

黒い炎の中

その刃が一瞬見えた鬼神の顔

敗北が見えないまま死に絶えるかもしれないところで彼はただ笑っていた

物理的な攻撃が通ることが無い敵だとわかっていたはずだ

それなのに顔面を掴まれるような感じがした

「は？」

そして遠くへ投げ飛ばされるヘルファイア

今までで物理的な面で攻撃を受けたことなど1度も無かった

生まれて初めて感じた痛みだった

「うそだろ……」

地の上で仰向けになり、暗い夜を見上げていた

今までに無かったのだ

痛みよりも驚愕の方が強かった

「何をした……てめえ」

「いや、何も？」

とぼけたかのように余裕な表情を見せる敵は座っていた

どこからか取り出したかわからない骸で作られた玉座に座り、膝をついては口笛を吹いているばかり

今、そこに攻撃したものがあっても関わらず本人は知らない振りをしていた

「知らないよ」

「何なんだその攻撃は……」

「まあ、俺は元々戦いなんて好まないんだよ。ぶっちゃけると騎士団の中で一番弱いのは俺だ」

仲間と比べ一番弱いと言い張る敵はただ嘲笑する

「今回はたまたま相性が良かっただけだ。俺は炎が効かない、お前には物理が効かない。だけど、俺には物理耐性の無いやつに大して一つだけ……マリア様から授かった技があるんだよ」

それが今座っている玉座なのか

そう悟ったヘルファイアの考えが惜しくも外れる

鬼神の手にあるロザリオ

「これが武器だ。聖者から授かったもの。美しいだろ？」

そう言っただけで見せ付けたロザリオに彼はキスをする

それが何の武器か

ロザリオの中心にある黒い宝石を見てヘルファイアがやっと理解する

「黒騎士……」

黒騎士 牙の死後

彼の肉体には今だ怨霊達が取り付いていた

その肉体を使い黒騎士に宿っていた怨霊の一部をロザリオに収めた結果、それが武器となったわけだ

同時に忌み嫌われていた

呪われた道具として……

騎士団皆が言う

そう簡単に使うものではないと……

だが、鬼神はその意志に反しどんな状況下でも使う

彼はそんな人間だった

「遠慮なく使わせてもらったぜ」

黒騎士から得た力を自分の物であるかのように自慢げに見せる

黒騎士の力がどんなに強力で凶悪なものか

神の力を扱う組織皆がそれを知っていた

「さすがは偽善の軍団。神のためと言いながら神にそむいた力を扱うなど……」

「馬鹿言つなよ。神にそむいてんのは黒騎士だけじゃねえ」

骸の玉座から現れる黒い鬼の影

さつき頭部を掴んだと思われる物の姿がそこにあつた

「スタンド……じゃなくて俺の闇を具現化したものらしいな。唯一

俺の欠点を埋められる技だ」

「……ハッハッハ、そうかい」

死を覚悟したヘルファイアはただ笑い、立ち上がった

落ちていた自分の武器を手にした

「お前、自分自身の中で一番弱いとか言ってただろ。だけど、強いぜ」

「そりゃ、そうかい。嬉しいぜ、ヘルファイア。その気持ちに免じて、生かしておいてやる」

「馬鹿言え。死ぬまで戦つてやるぜ」

逆立つ黒い髪と彼の体を纏う黒い炎

ヘルファイアは武器を手に高く飛び上がった

振り下ろされた斧の刃先を鬼神の影が受け止めた

「死に急ぐなよ、馬鹿」

「うっせえ、喜んでぶっ殺し、ぶっ殺されてやるよ」

まだまだ続くだろうこの戦いの裏

その裏で見えていたのはリーナを抱えた仁だった

気絶している少女を背中にかるってはどこか休める場所においておこうと思っていたところで見かけたのが鬼神の戦い

何も無かったこの三日間

ただの女垂らして性犯罪者1歩手前の人間かと思っていた

女子更衣室にカメラをしかけることもシスターを自分の部屋の中へ強引に入れるところから見てたいした人間で無いことはわかっていた今の戦いを見て感じたのが……

「なんか親近感を感じる」

1人そう呟き、仁はその場からさっさと離れていった

まず、毒を浄化することは出来る

そしてその浄化を繰り返すことで相手の攻撃を防ぐことが可能

この戦いは間違いなく勝てる

そう思っていた

「ごめんね。私は勝てないと見たら人質とるからね。煉には内緒よ」
ヴェノムの手握られているのは二人の幼いシスター

運良く水晶の世界に閉じ込められること無かったところをヴェノムに見つかつたところだろうか

二人が涙目で助けを乞う

「ステイブンさん、ごめんなさい」

「怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い……」

「あなたの表情の方が怖いわよ」

ヴェノムも二人の存在をうっとおしく感じていたのか早く勝負を終わらせて煉の元に向かおうと思っていた

「さて、ガイア。私も人を殺すのは好きじゃないのよ。煉が怒るし、

『人間』の命がどれだけ重いものか。煉から学んだものもある。だけど……あんだ『人間外』を殺すためなら他の犠牲は厭わない」

ヴェノムが一撃を放つ

ゲル状の毒素がスライムのように動き回り、得物へと襲い掛かった

……奇妙で醜い

とっさに周囲にある木々や草を操り、それを盾の変わりとした

こんな攻撃を喰らっているほど今の自分は暇じゃない

願わくば今日の前にいるシスター達を救いたかった

だが、ヴェノムが爪をシスターの首に突きつけるところを見て、攻撃をためらった

「クソツタレが」

「残念でした。ハゲ」

盾も使わせない……危機感で動じたガイアへとヴェノムの攻撃が加わる

ゲル状の毒素の打撃

それが何度も続く

液体に近いにも関わらずその力は強かった

ガイアの顔から流れ出る緑色の血がどれだけダメージを受けているのか

ヴェノムにはすぐにわかった

「ざまあ無いわね」

「いや、ざまあ無いのはためえも同じだよ」

別の人間の声がした

自分ら以外に人がいたのかと初めて気づいた

「あなたは……」

すぐ後ろに回りこんできたのはあの黒騎士だった

今は人間の状態ではあるがそれでも黒騎士としての威厳があった

「その子達を放せよ、じゃないとその首筋に捻りこんで血に染めてやる」

彼はフランベルジエを首元に突きつけ、そう脅してくる

優しく耳元でささやかれているにしてはあまりにも残酷な言葉だった

「誰ともぶつかっていなかったか、運の良い化け物め」

「そんな姿をしている時点で俺もお前も怪物だよ。それよりも、その子達を放せよ」

「黙っているよ。この植物野郎殺した後でてめえも料理してやる」

「ああ、そうかい。じゃあな」

背負っているリーナと共に彼の両腕には幼いシスターが二人

いつのまに自分の元から助けたのか

彼の手際の良さにヴェノムが驚きを隠せなかった

「てめえ、リーナまで！」

「ガイアさん！OKですよ」

「あいよ、ありがとつよ！」

走ってくるガイアの存在にヴェノムが気づく

気をとられてしまったことに悔やむ時間も与えてくれなかった

ゲル状の毒素を使い、ガイアへと攻撃を仕掛けるが自然の力がそれを許さなかった

どんな毒素も分解し、無害のものに変えていくだけの力がヴェノムにとって脅威となった

「マジかい」

「二度と、動くことが無いようにしてやる」

月と重なったガイアの姿

どんな怪物も月と重なると凶悪なものに見えてしまうわけだが……

枝とツルのムチを使い、ヴェノムの体を縛り上げるところからさらに凶悪さが増しているようにも思えた

そこからへんにあつた樹の枝に吊るしてガイアと仁が見上げた

「てめえら、ぶっ殺す！絶対ぶっ殺してやる！」

「絶景だな。まあ、どうでもいいけど」

「鬼神さんなら喜んでいそうですね。まだ戦っている最中でしたが」

「そうかい」

罵倒を繰り返すヴェノムにこれ以上何もしまいとシスター二人を連れて消えていった

簡単に千切れるかもしれない枝やツルに後を任せて良かったのか縛られている本人も疑問を抱いたが、それはそれでチャンスでもあった

「毒でどかしてでも……あれ？」

能力を出そうとするものの、体からは何も出なかった

本当なら木々を解かせる程度の液体を体から出せるはずが、何か別の能力がかかり自分自身の能力を放つことが出来なかった

「馬鹿な、なんで！」

何も原因が分からず、暴れるだけだった

聞こえるのが枝が軋んでいる音と悔しそうな声を出すヴェノムの声折れる気配も無く、何も無いその地に軋む音が響くだけだった

デュアル・イーグル 暗殺チームメンバー紹介(前書き)

煉 デイグニティの能力更新

デュアル・イーグル 暗殺チームメンバー紹介

煉「……え、なにこれ」

ども、煉さん

煉「帰る」

いやいやいや！無いつすよ>><

即効退場とかマジでないつすよ>

煉「わかつているよ。どうせ、作者の才 二一作品をくだらんギャ

グで見せ付けようつていう魂胆だろ？賢くないぜ、作者さん」

きゆうん……

煉「可愛い声出したってだめだ。むしろ気持ち悪い」

煉「5行も空けて仕事サボるのはよくないよ？」

ごめんなさい。お願いしますから離して下さい

煉「前作のキャラ全員紹介もしてねえくせに、ここでかよ」

ゴーレム「俺は特に問題無いよ？」

煉「貴方に無くても俺にはあるんすよ。かませ狗の可能性が高いじゃないつすか」

ゴーレム「それは嫌だね。どっかの鉄の塊みたいにはなりたくないぜ？ハハハ」

鉄男「……」

なんて組み合わせなんたるな

正直、感動したわ

煉「春休みに入ったけど、毎日更新しないようにして欲しいね。バイト……」

アー、アー、聞こえなくいよ。俺の魂は今北朝鮮に出張中だよ
煉「そのまま拉致されてるよ」

ヴェノム「ごめん、時間無いのよ。ちゃっっちゃとしちゃいませよ」

黒椿 煉

年齢：18

身長：165センチ

体重：55キロ

デイグニティ

能力：鏡を駆使した能力

・鏡のように可視光を反射できるものならどれでも進入して移動手段とすることが出来る。また、鏡から出るときも可視光を反射する物体じゃなきゃならない

・敵の姿が映っている鏡に攻撃をすることで映った敵にもダメージを与えることが出来る

・鏡から光線を発することが出来たり、周囲にあるものすべてを武器とすることが出来る

煉「自分の過去をどう言えばいいか。そうだな、専門って設定だったろ？仁と同じ。入学して1ヶ月でクラスメイトとトラブル 惨殺

逃亡 今に至る」

サファイア「元々、デュアルイーグルに入ってたやつなら知ってるけど、彼は能力的にも優秀すぎたんだよね。出世が早すぎるよ」

ヴェノム「アタシとゴレム、7つの大罪を抱きし者は皆彼についていったわけよね。懐かしいわね」

能力更新後

煉「きたあ………すげえぜ」

マリア「本当にすごい能力ですよねえ」

ヒント：某ホラー映画から

強いかどうか知らんが、暗殺向きに作ったつもりである

サファイア

年齢：22

身長：175

体重：50

能力：広い範囲を結晶化、結晶を武器とする

かませ犬 以上

サファイア「え……」

ヴェノム

年齢：23

身長：167

体重：45

能力：有毒な液体、気体を発生させる。液体を鈍器物のように扱う

ヴェノム「ちゃっかり、体重さらしてんじゃないわよ！最低！」

仁「ババア」

過去のキャラ含めてもそうだが、声がアラフォーだな

ヴェノム&陽&零「……（ガタツ）」

ゴーレム

年齢：35

身長：205

体重：78

能力：物理的破壊に特化、主に近接と守備陣営

仁「渋いおっさん、まじパネエっす」
ゴーレム「あれ？黒騎士？……違和感あるけど、嬉しいね。ありがとうよ」

煉「ご家族は娘さんと息子さんですよ。両方ともお元気そうでしょうか」

幸せな家庭をぶっ壊してる設定だよな、前作と言いそろそろ俺も書いてて飽きたよ……zzz

ゴーレム「うそぉ……」

煉「俺も作者に付き合っの飽きたよ。撤収、撤収」

リーナ&ヘルファイア「……え？」

リーナ

年齢：11

身長：165

体重：35

能力：触れたものの神経を殺す。触れたものの中にあるものを全て取り出す

仁「心ごと抜かれたぜ。今度は骨抜きにしてくれよ」

リーナ「こっちくん」

ロリコンホイホイだな 454545454

リーナ「こっちくんなああああ……」

煉「東 都知事ブチギレだな」

ヘルファイア

年齢：20

身長：175

体重：65

能力：黒い炎による発火能力、また相手の精神を焼き尽くし、起動不能にする

陽「仲間と聞いて……」

ひっこめ

ヘルファイア「能力がかぶるかと思ったけど、それでも無いみたいだな。良かった」

あえてヘリオスと分けるなら物理攻撃が効くか効かないかなんですよその代わり、ヘリオスは太陽と同じ温度を出せるけどね

陽「強くない？私、強くない？すごい強くない？」

牙&煉「最強と聞いて……」

陽「嘘ついた、ごめん」

こんな感じ？俺の嫁（読者の皆様）はご理解いただけたでしょうか？

煉「アクセス数見てみる、クソ以下だ」

仁「クソミソ作品だな」

何を言ってるんだよ

俺のオナ ー作品って何回言えばいいんだよ

煉「作者涙目だぜ」

仁「もつといじってやれ」

Mをなめんなよ？読者の冷たい視線を元気の源にしてる俺がそう簡単には挫くと思つて……

煉&仁「……」

離れんなよ！10メートルも離れてんじゃないわよ！

ドSな批判が来るまで全裸待機しときます^^ノシ

デュアル・イーグル 暗殺チームメンバー紹介（後書き）

え？他の暗殺部隊のメンバー？

まだ考えてないっす

8 マリア

黒騎士を殺すだけの力

陽達にはそう説明していた

彼らには失礼に値するかもしれない

怖がらせたくない……そんな気持ちがあった

禍々しい存在が黒騎士であるなら神々しい存在は我にある

自負をしているというわけでは無い

ただ、その力が黒騎士を越えるか越えないか

ギリギリになるぐらい強力なものであることは確かだった

実質、黒騎士を越える力ではあるかもしれない

その力を簡単に表に出そうとは思っていなかった

『マリア』

煉の瞳に写る神々の姿は醜いものだった

今、目の前にいるマリアであるなら白い霧がかかっていた

人であるかどうかすらわからない

サファイアであるならただのサファイアの塊だ

初めて見た時はそのまま持ち帰って売ろうかと思っていたほどだ

ヴェノムであれば膿だらけの怪物

元々、梅雨といった性病を多くわずらっていたためだろうか

彼女が人間であったころは美しかったのを覚えている

マリアやサファイアのような連中ばかりじゃない

前に少女を襲った暴漢どもであれば……それこそ醜い化け物のよう

だった

普通の人間でも醜い人物であればそう見えるのだろう

残酷な能力をなぜ持たせたと煉は神を恨むようになった

それも生まれた時から……

「わからねえのか。自分の面を鏡で見てみる。化け物だ」

煉の言葉に横に祭壇にあった鏡で自分の顔を見た

何も変わらないとマリアは笑った

「何でそんなことが言えるんですか？」

「おまえ自身、その力を持っている時点で人では無いだろ。それでも自分は人間と言えるのか？」

酷い答えだった

それでもマリアは今の感情を崩すことなかった

「私は人です。人のまま……」

「黒騎士を殺す力。神と同等の存在と謳われ、傲慢にも神だと過信している。中国では何をやらかしたのかも知らずに……」

煉の目が鋭くなった

マリア達の組織が何をやらかしたのか、その瞳は全てを理解しているように

ただ、彼の心中を読みとることが出来なかった

「貴方の満足のいく答えがわからないんです。お怒りに触れたようなことを申したのならお許してください」

敵を相手にしても謙虚さを忘れず接するマリア

謝罪を含めて一言加えるが今の彼にその言葉が届くだろうか

デイグニティがどんな敵か

データも経歴もわからなかった

元々、相手にしたことが無い組織だ

情報が何も無いのが自分達の1番の痛手であった

「私は殺されるのでしょうか」

「上からはマリアのみを殺せと言っている。どう考えているかは知らんが容赦はしない」

「わかりました……この首を授けましょう」

「ずいぶんとぬるいな」

言われるがままに黒い斧を構え、振り上げた

猛スピードで蛇のように動き、だんだんと距離を縮めていった間近になり、飛び跳ねたデイグニティが宙で斧を振り下ろす。その姿が目に入ったと途端、マリアの目の色が変わった。

白い剣が宙で何本も現れた。

その剣の刃先はデイグニティへと……

斧を振り下ろす瞬間に目にしたデイグニティがマリアへの攻撃を中断した。

尻尾を振り回し、宙にある白い剣をはじき、両手で後ろへと飛び跳ねる怒りで鋭くなつた彼の瞳はマリアの姿を映していた。

「畏か……化け物が図に乗るなよ」

尻尾の先にある刃が光る。

ヒュツと言う風を切る音と同時に光の刃が回りながら放たれた。

顔面の寸前までに行つたものの、そう簡単に当たらないだろうと言つ煉の読み通り。

マリアの周囲に現れた光が作り主を守るかのように彼女の前に出た光にぶつかるると同時に消える光の刃。

今、目の前にいる敵がどんな技を使うのか。

デイグニティもマリアも互いに様子を伺つた。

黒騎士を殺すだけの存在かと思つていた煉も驚きを隠せなかった。

「テへ、ごめんなさい。嘘つくのが好きなの」

笑顔でそう言うマリアをその綺麗な面がゴナゴナになるまでぶん殴つてやるうかと思つた。

そこまでに至るためには……考えていた時にマリアの姿がすぐ目前に迫っていた。

その技は他の連中の手によって見切つていると、デイグニティが近くにあつた椅子を掴みとる。

打撃するためと間近に迫つたマリアへと殴りかかった。

椅子が砕け散り、その破片がマリアの体に刺さっているのが見えた。「殺つた……」

宙でひるむ様を見せたマリアへとさらに尻尾を鈍器物のように攻撃を加える

遠くへと吹き飛ばされ、祭壇にある供物や装飾が崩れ落ちた内臓破裂は免れないだろう

おなかを押さえているあたり、痛めているだろう

祭壇の上で意識を失っている敵へと近づいた

「終わりだ」

「終わりません」

聞こえてきたのは今、目の前で倒れているマリアの声だった

左から聞こえてきた

とっさにむいてもそこには誰もいない

「こちらですよ」

今度は反対の方向に……振り向いたらそこには何も無かった

マリアの姿が見られない代わりに飛んできたのは白い拳

デイグニティの体を吹き飛ばすくらい強い攻撃が加えられた

「クツソオオオオ……」

マリアの攻撃か

だが、まだ彼女は祭壇の上で眠ったままだった

能力……違う能力を使っているとデイグニティが読んだ

白い拳は消えていた

輝いていた拳は既に無くなり、宙にはその名残が残っている白い光

の粉が待っていた

敵の姿を探す……

周囲へと警戒していたデイグニティがふと空を見た

夜空が見える教会の天井に見えたのは光だった

月の光かと思っていたそれが強くなる

「ほう……マリアねえ」

煉の微動がおかしくなったと思ったたら次は教会の上空には巨大な光の柱が出ていた

その力が何なのか、今の目の前で玉座に座っている鬼神なら何か知
っているとヘルファイアが悟った
焦りが見えている

「お前達のトップの力か……」

「そうだよ。ヘルファイア、また今度な」

玉座から腰を上げて、ヘルファイアを残しその場から走り去る鬼神
をヘルファイアが追いかける

マリアと戦っている仲間の様子が気になっていたためだった

光が消えた

姿を現したのは巨大な天使だった

体全体が機械で作られ、その輝きは神々しいものだった

マリアの真の姿……

それを目にした煉が呆気にとられる

「マジかよ」

でかく、強大な存在

だが、負ける気がしなかった

「ひねり潰すさ……鉄くずにしてやる」

黒い鎧を砕き、背中から表れた漆黒の翼

風を巻き起こしながら巨体が浮かび上がった

舞い散る黒い羽だけがそこに残った

デイグニティの姿が一瞬で巨像の目前へと……

だが、神は彼の存在を許そうとしなかった

宙で何も無いところから放たれた無数の光の光線

その光線がデイグニティの体を打ち抜いた

硬い鎧を貫くほどの威力と膨大な数

羽も欠けてしまい、落ちるのを待つだけだった

無数に作られた光の剣が作られた

デイグニティへの攻撃が続く

突き刺さる光の剣に対応が出来ずに黒い鎧と羽を纏った彼は落ちて

いった

彼は落ちた

黒い鎧が砕け散り、黒い羽が舞いそれは墮落した天使の如く地の底へと落ちていった

それを確認したマリアが本来の姿へと戻る

祭壇の上にあつた肉体が光となり、またマリアの魂によってつくられた巨像も光となって二つが交わり、元の姿へと戻ることが出来た宙からゆっくりと落ちてくる

崩れた教会に戻つたと同時に、倒れた煉へと言葉を投げかけた

「哀れだとは思わない。貴方は調子にのって本気でかかつていないもの……」

どんな言葉をかけても彼の心に届くことが無く、また彼は気絶しているため聞こえることが無かつた

そう見たとき、マリアは煉を残しその場から去っていった

教会の外では鬼神がちょうど来たようだ

慌てた様子でこちらに向かつてきている

それをとめようとしているのが敵だろうか

サングラスをかけたかっこいいお兄さんが鬼神を羽交い絞めにして見えているのが見えた

マリアはすぐさま、見知らぬ男への捕縛へと取り掛かる

数秒もしない内にその作業が終わつた

元々戦う気がなかつたのだろう

仲間の元に行くつもりでここに来たらしく、今は光のロープで縛られている状態だ

「おい！仲間をどうした！」

自分の立場を理解していかないのか、そんな言葉を発するヘルファイアを鬼神は憎たらしく見る

マリアは優しい笑みで丁寧に答えるようにした

「生きています。組織についていろいろお聞きしたいので……」

「俺の仲間にどこまで傷を負わせたんだよ」

「大分、傷はあるでしょうけど心配ないですよ」

「生きているのか……ディグニティが……」

そう言葉を口にするヘルファイアの表情が雲がかかるかのように暗くなっていた

恐れていることがおきるかもしれないとそんな表情をしていた

「離れたほうがいい。ディグニティは暴走しやすいんだよ」

「……はい？」

言葉の意味が分からず沈黙となった

しばらくして……マリアはやっとその言葉の意味を理解することになる

教会はまだ全壊では無かった

中身がバラバラになったのと、天井のガラスが壊れたぐらいだったその教会が突然、ガラスが割れるかのような音をして爆発を起こした突然の出来事にヘルファイアの前にたっていた二人がとっさに自分の身を守るうとする

光の盾を形成したマリアはすぐさま自分とヘルファイアを守るように、鬼神は玉座を召還してはその裏へと隠れていった

爆発が収まった頃、マリアが盾の横から少しだけ顔を出し周囲をうかがう

飛び散ったのはガラスなのか

良く目を凝らしてみれば、元々コンクリートや木で作られた教会は透明な金属となり爆発したようだ

「ガラス？」

「いや、マリア様……見てみるよ」

大きな破片を手に鬼神はその破片で手が切れないようにマリアに手渡した

よく見てみればそれは鏡で作られたものだった

教会に鏡はおいていないはず……

祭壇の前以外になにもおいていない

だが、教会全てが鏡となり割れたところを見ればこれが誰かの力であることはわかった

「デイグニテイカ」

教会の方へもう1度見た

そこに今さっきまで戦っていた敵がいるのが見える

傷だらけとなった煉は鏡と化し壊れた教会の中で眠っていた

血まみれとなつていながらも安らかに穏やかな表情をしてただ死を待つかのよう……

8 マリア（後書き）

PR：貴方の作品、出版しませんか？

自分：No Thank you

なんでか？どうなるかは目に見えているんで^^；

9 本気で来ない時の恐怖

いくら戦ってもデイグニティには勝てなかった

彼の持つ力は偉大で優しく

そして、残酷であつた

その力を愛していたのかもしれない

水晶に写る彼の姿は美しく、偉大だ

今もそれは変わらなかった

そのデイグニティのオーラが消えた

「嘘だろ……デイグニティ！」

「でやああああ……！」

ケツアルコアトルの雷撃を纏った一撃をサファイアはギリギリのところで避ける

今、意識をなくしているデイグニティのことで動揺したために動きも遅くなった

彼が仲間を気遣うのも無理無い

マリアが真の姿を見せ、数々の攻撃を行ったのだ

戦った相手が無事で済むはずが無かつた

この戦いの中、ケツアルコアトルは勝利を確信する

『本気で来ない時の恐怖』

「冗談じゃねえぞ」

ゴレムのその言葉は誰に言っているのかわからなかった

追求する必要が無いだろうと黄龍は攻撃を続けた

ひたすら酸素を周囲に増やしていき、呼吸の範囲を狭めて鈍らしていく

様々な気体を作り出す黄龍だからこそ出来る技だ

「さあ、どうする？ゴーレム。私は容赦しないが」

「酸素が濃くて息がもたねえよ。頼むぜ、34の老体なんだから…

…」

「私も同じだがな」

「お互い歳か……ハハハハ」

ゴーレムも黄龍も同じ年齢の者同士、体力の衰えを感じていた
しようも無い冗談でも通じるところがあった

「それよりも……」

「あい？どうしたんだ？好敵手」

突然話を変えた黄龍にゴーレムも話を合わせるようにした
戦うよりは体力を使わずに済む……と考えも少し老化してしまった
と心の中で笑う

「そちらのデュアル・イーグルと我ら騎士団……元々接点が無いはずだ。敵対することも無いだろうに。なぜ、我々に宣戦布告をする」
「まあ、煉がぶっ倒れたし、ちよろつと暴露しちゃっても良いだろうな」

自分達の目的を簡単に話せるところからしたら今回の襲撃はおふざけか騎士団のデータを取るためだろうかと考えてしまう
もしくは油断をさせるためか

黄龍はゴーレムの腹を探ろうとするものも

その様子が彼に悟られたようだ

「そんな深く調べても意味は無いんだよ。俺が来たのは挨拶代わりにだ。人殺しはしないし、本来危害を加えるつもりは無い」

「ほう、それは『貴様』だけか？」

「あちゃー。そうそう、そう読まれたなら言わないとな。いかにも俺はただの見張りだ。煉の元に他の敵が来ないようにな」
飽くまでも煉のために行っていることと彼は加えた

「俺が何のためにここにいるか。俺が戦場に立つのは大体煉のためだよ。息子、娘から一緒に帰って来いとか言われててな……」

参ったよとゴーレムは笑った

子供二人との約束のために襲撃に参加したと見る黄龍

それがどんなに愚かなことか

黄龍は怒りが頂点へ

そして拳をつくり震えていた

「マリア様の能力を目覚めさせてまでやることだったのか……」

「そんな怖い顔するなよ。それは煉の目的だ」

ゴーレムの言葉から彼自身は戦いに無関心のように思えた

全てはさっきまで戦っていた煉のためだと

1人の少年に対する強い忠誠心が彼から見られた

サファイアも同様だった

煉がマリアを殺すまでここで止めようと大剣を振るう

ケツアルコアトルの電撃を結晶が通すことは無い

青い大剣を盾に雷を防ぐ

「まだまだ来るのかよ」

「お前らのトップは死んだかもしれない。それでも戦うのか？」

ケツアルコアトルもデイグニティの敗北を感じ取っていた

それで同様するサファイアを見て彼に動揺が見られ、戦いやすくな
った

だがそれ以前に彼らが本気で来ているのかどうかもわからなかった

「冗談じゃねえぞ」

「なぜ、本気で来ない……その力は何のためにある」

腕が鈍ったサファイアへとケツアルコアトルが厳しく問う

マリアのために武器を振るう彼女にとって彼の戦いは間抜けだった

ただ、守るだけ……攻めることなく守るだけ

その戦いに何の意味も見出せなかった

「なぜだ」

「煉がマリアを殺すまでの間はこういう役回りだ」

「冗談を……それだけじゃないはずだ」

深く問い詰めてくるケツアルコアトル

彼女の読み通りの言葉にサファイアは驚きを隠せなかった

戦場に乗じてきたのなら殺しに来い

ケツアルコアトルの鋭い目つきがそう言っているようだった

「仲間を守るためにここに立っているなら、仲間の障害をぶっ殺すまでかかってこい」

彼女の言葉にサファイアは気乗りでは無かった

上からも本気でかからないで欲しいとは言われた為に武器を振るうことは考えていなかった

「冗談じゃねえ」とサファイアはひたすら防御の姿勢を崩さなかった

「仲間を巻き込んでまでためえに勝ちたいとは思えない。なあに、ただの茶番だと思えばいい」

「……」

戦地で言える言葉なのか

ケツアルコアトルの怒りが雷と具現化していき、その激しさも増してきた

「後悔するなよ、どんな死にかたしても文句は言わせない」

敵を捕まえると言う結果に陥ったことに仁は驚いていた

相手はデュアル・イーグルであり、そして人間外で強大な力を手にする者達

その敵を簡単に捕まえることができたことに皆が怪しく感じる

真ん中にいる煉を囲んで3人がぢベタの上で縛られていた

仁が放った悪霊をロープとして使い……

「どうしますかい？マリア様」

鬼神がそう聞くもマリアも仁と同じ、どこかおかしいと疑問を抱き考え込んでいた

「畏かもしれません。違いますか？」

「……」

マリアが煉達にそう聞くも彼らは答えようとしなかった

煉に関してはずっと周りをにらんでいるばかりだった

「ふむ……」

放置のままにしようとマリアはガイアと鬼神にその場を任せ去っていった

何も一言も言われていない仁はただその目線を足元で気絶しているリーナを見下ろしている

心を虜にされている者の目だった

彼は神の力を持っていながら傲慢さも無く、神の力に対する嫌悪感が強すぎた

だが、それは表だけ……

最初はクソガキだと思っていた彼がいざ戦い方を見ると人として美しいところが見られた

自分を犠牲にしながら無力な人間を助ける様は感動を覚えた

だから指示できるのかもしれない

ついていけるのかもしれない

今、こうしてケツアルコアトルと戦っているのも彼のためだと胸を張って言えた

青い結晶にヒビが入らない

雷撃も通常の攻撃も通じない

自分の戦い方が悪いのだろうか

防御の姿勢を崩さないサファイアと自分の戦いを振り返る

元々スターサファイアにそこまでの耐久度があるのだろうかと疑問もあつた

ダイヤモンドに次ぐ……とは言っても怪物同士の戦いでは紙キレも同然だ

今回の戦いで砕けないところを見るとなんらかの力が加わっているようにも思えた

「……私に足りないものがあるのか」

「そこまで落ち込むことじゃないぜ。あんたは俺のことを知らないんだから」

盾にしていた紺色の翼を広げ、宝石の鎧を纏う姿が露にされる隙間の無い鎧なんてのもまた珍しいものだった

硬さと軽さが備えられ、その紺色の翼で羽ばたこうと思うならば楽なのだろう

そして仲間への忠誠心が彼を強くしているのだろうだが、本人から攻撃を仕掛けてくることは無かった何か秘密があるのだろうか

「何を考えているかは知らんが、これ以上俺の結晶を砕けないようならちよつと動きを止めてやる」

兜の奥にある瞳が光っているように見えた

サファイアが言い終えると地中から結晶が現れる

先端に光

そして無数にある結晶の先から光線が放たれ地を削った

レーザーのようにも思えたが、削られた地のあとから湧き出るものを見てハンナは驚きを隠せなかった

「青い結晶……」

月の光で輝く青い結晶

地を削つてできたそれが何を意味するのか

「貴様、戦場では防衛戦向けだっただろうな」

普通に戦おうともせず、ただ防御のみ

その戦い方と物質をサファイアに変えるところから彼の力は実戦向けのようには思えなかった

「……大体あっている」

サファイアも自分でそう言っている

「俺は元々、引きこもり役でな。どんな銃弾も小規模な爆発を防ぐ程度の役割だ」

「ならば、なぜ襲撃に……」

「聞きたいか？生きていたら教えてやる」

紺色の翼が羽ばたかれた

宙へと舞い飛び立った彼の体が淡く光る

全方向へと放たれる青い光線が建物、草木を青い結晶と化した

そして、ケツアルコアトルの翼そして片足にもその光線が放たれる

結晶と化し、翼も足も重くなつた

満足にうごけない状態となつた

「クソオ」

結晶の拡大はさらに続く

ケツアルコアトルの全体を包み込み、ハンナを包んでいた羽毛も攻

撃的な瞳も全て結晶となつた

中で目が動いているのがわかる

まだ何かしゃべりたがそうにも見えなかったが、サファイアは人間の姿へ

と戻り何も言わずその場から去ろうと背を向けた

煉の元へ向かうことができずと思つていた

どうすれば救えるかと考え込むもの

背中が何かを突き刺さつた

その感覚だけを感じた後、体の中に走る電撃

そしてサファイアの目の前が暗くなつた

サファイアの背中に刺さつていたのは一枚の黄色い羽だった

ケツアルコアトルから取れた一枚の羽

「馬鹿めが……」

その羽を放つたのは持ち主であるハンナだった

彼女を包んでいた結晶は持ち主であるサファイアの気絶と同時に消

えていった

「敵に背を向けるなど……防衛向きであるなら知らないだろうが、

常に面と向かえ」

今は意識を失っている彼にそう告げたハンナ

常に戦場で敵を屠っていた

彼のような戦い方は気に入らなかった

「本気でな……」

結晶が消えてきた

それが何を意味するのか

理解したゴーレムが早速あせりはじめ

「うっそだろ。冗談じゃないわい！」

ヤケクソとなったか拳を作り地を殴りつける

ヤケクソでは無くそれが技だと感じたのは地から音を立てて生まれ
た岩石を見てからだつた

その岩石をゴーレムが触れたと途端、それが崩れていく

何か別の形へとそれは成っていた

人の手の形へと……

「ほう、おもしろいな」

「やれ！」

ゴーレムの一声でその岩の手が動き出した

爪を駆使しての攻撃

黄龍は何度も繰り出されるその攻撃を避けていった

「もう1人！頼むぜ！」

さらにもう一つ作り出される岩の手

その手が容赦なく黄龍に襲い掛かった

彼が避けた先にあつた岩を殴つたと途端砕けた

いまいち、戦い方の分からない相手ではあつた

岩を砕けるほどの爆発を起こしてダメージを与えるのも良いと思っ

たがここ全てが吹き飛ばやもしれないと不安もあつた

まず、本気を出さない相手にそこまですべきかとの疑問も含めて黄
龍はただ様子を見ている

ゴーレムも黄龍が自分の戦い方を観察しているのがわかつた
見られている本人は特に問題が無かつた

ただ殴つたりするだけの戦い方しかしないわけだ
深く観察するほどのものでは無いと思っている

それでも黄龍がいかにして攻略しようとするのか

「これだから、科学者は……」

ゴーレムは笑った

「頭ばかり良いと見失うものもあるんだな」

「わかっていないようだな」

攻撃を避けながらも黄龍は話を続けた

「この能力だ。この前も見ての通り周りの環境を味方にしながら戦わないと私の力は発揮されない」

「馬鹿言え、酸素と二酸化炭素しかないだろうが。この世界……」

「ハハハ、無能の考えだ。大人だろ、子供に教える知識が無いとい
いパパになれないだろ」

「アハハ、仲良くなれたら教えてもらいたいぜ」

本気で殴り合ってみなければわからないだろうとゴーレムが構える
ここまで心躍る相手と戦うのは初めてだった

「楽しいぜ」

「その一時もすぐに終わるがな」

不審な黄龍のその一言……

その後突然、ゴーレムの意識がぼんやりとなった

「何……」

全身から力が抜け、立つことすらできなくなる

今周囲がどうなっているのかもわからなかった

黄龍が何かを放ったとわかった時には既に眠りに近い状態となっ
ていた

薄れ行く意識の中で彼がやつと話をする

崩れ行く岩の手を背にして彼も人の状態へと戻った

「全身麻酔だ。麻酔をガス状にしたものを作っただけだ。安心しろ。
殺しはしないがお前達を我らの領域に歓迎する」

悪意の無い優しい笑顔

その笑顔を最後にゴーレムの意識は消えた

今回、襲撃してきた連中を全て捕らえた

本気でかかってこないところに疑問を抱いていたがその疑問も放置されたまま

「あまり良い仕事してないな。なんかこいつら本気で来て無いしな。なんか、不完全燃焼」

「戦利品も何も無いしな。とりあえずハンナ、お疲れ」

「何か目的があつてやったことは確かだろ」

ハンナの言う通り

煉がマリアを殺すために来たと……仲間達が言っていたが本当にそれだけなのか

他の目的が無いだろうかと騎士団皆が考えていた

煉達の迷走したままの襲撃

彼らが本気で来ないところが仁にとって逆に恐怖となった

裏に何かがあるとかじゃなく、もし煉達が本気で襲い掛かったら自分達がどうなっていたのか

「来ていただいて早々、申し訳ない」

謝ってくる黄龍へと仁は首を横に振った

「モーマンターイデース」

「なぜ、片言……」

「いえ、つい……」

捕まっている煉達を仁は見ていた

デュアル・イーグルについても詳しくは知らない彼

リーナの存在に煉の存在

仁にとって全てが新鮮なもののように思えた

ただ一つだけ……

人間の時の穏やかな日々がまた訪れなくなると思うため息しかつ

かなかった

「観光気分も持てないか……ふうむ」

9 本気で来ない時の恐怖（後書き）

ヴォルテツカアアアアアアアアアア!!!

10 心が壊れた瞬間〜煉の良心〜

ディグニティの力が暴走したときがあった

暴走の後に残るのは不自然にも砕け散った鏡だけ

実際、どれほどの数が犠牲になったのかもはっきりしない

組織に属する前に出会ったというゴーレム、ヴェノム

組織に属してから関わるようになった残りの暗殺部隊

彼らに聞いても煉の能力について詳しくわからなかった

尋問等でも彼らは口をそろえて「正直わからん」「説明が難しい」

と言葉を濁す

仲間同士で口封じを黙認しているのかとそう読んだが

リーナの一言で騎士団と仁達が納得することになる

「彼は入ってからまだ2ヶ月しか立ってないからね。実力はかなりのものだけだ」

……そりゃわからないわけだ

「戦っていて彼は私を殺すこと以外何も考えていなかったわけですが……どうしてだろ」

ディグニティと戦ったマリアの話を仁は聞いていた

あの時見た怪物（仁視点ではロボットアニメに出場しそうなぐらい理想的でかっこいい怪物）がどのよな能力を持っているか

ただ大きい斧で「ファイナルゲツ アアアアアトマホオオオオオオク!!!」と叫び振るうだけと……

「マリア様、ちょっと捏造入れましたかな？」

「ごめんなさい、嘘つきました」

「……まあ、斧を振り回したり尻尾を駆使して戦ってたのはわかったけど、強いことに変わりが無い。そんな相手によく生きてこられたもんですな」

マリア自身も煉との戦いの後、今の仁と同じ気持ちを抱いた

普段、能力を放つことが無いが今回ディグニティを相手に神の力を解放をしてしまった

「あの力でもギリギリなんだろう？君自身の感覚で……」

仁の言葉にマリアは頷いた

「ディグニティが本気で来ないってわかった時は私も手を抜いてました。それが裏目に出たのか、内臓破裂に骨折しちゃいましたけど」

「俺がいないと死んでましたな」

「ありがとう、黒騎士さん」

「いえいえ、助けないと牙さんに呪われそうで怖いからな」

笑いながら彼はそう言う

ふと、その笑みが過去見た事ある牙の笑顔と重なる

だが、それについてマリアは何も話すことなく今の仁と同じように笑顔を浮かべた

『心が壊れた瞬間、煉の良心』

「久しぶりだな、仁くん」

影次郎の元にかかってきたのは2週間顔を合わせていない娘の友人だった

今回の聖經会の処理をしている途中だが、その仕事も後回しにしてしまった

「元気そうで良かったよ」

『以前はお世話になりました』

「いやいや、こちらこそな。聖經会の件も無事に済みそうだ」

『それは何よりで……』

仁は別の話題へと持っていきこうと考えていたのだろう

どこか言うのを拒んでいるようにも見えた

天寧曰く「仁君が電話をすることはめったにないよ。電話をすればすることは何か重大な案件があるかもしれない」と言っていた気がする

今回電話をしてきたのはその重大な案件だろう

「今回はどんな用件で？」

『……お願いがあるんです』

案の定彼は話を切り出した

黒椿 煉

デイグニティ

そしてデュアル・イーグル

いろんな言葉が出てくる中、自分が担当すべきじゃない言葉もあった

だが、『黒椿 煉』

聞き覚えのある名前に影次郎が唸る

「黒椿 煉って人については資料があるがな。そう簡単に送れるものじゃないんだよ。大人の都合でな」

『口頭だけでも問題無いです』

「それなら個人的に天寧を通して伝えようと思う。それでなんで彼について……」

『さつき、デュアル・イーグルに所属している煉と出会ったとお話しましたね』

「ああ……それだけでも十分驚くけどな」

『中々口を開かないので』

「そうか」

あまり良い話ではないが……と最後にそう付け加えた

それもまた天寧を通じる形で情報を提供すると言い残した

「んじゃ、また送るな」

『お願いします』

煉の過去に何があったのか

何も語らない彼を見るとやはり隠し事があるようにも見えた

「どうでした？」

電話を終えた仁へとマリアが駆け寄ってくる

「天寧ちゃんのお父さん、何か知ってました？」

「影次郎さん本人から送ることができないけど、天寧さんに伝えてから資料として送ると……ディグニティの過去に何かがあるようですね。やっぱ……」

「そうですね」

「ううむ……影次郎さんが知っていたんだ。もしかしたら俺の地域で起きたことかもしれない」

仁は少し唸り、悩みこんだ

過去にそんな大きな事件があったのだろうか

聖經会と戦っていた中でそういった出来事があったのかどうか、わからなかった

煉達の首につけられている首輪が気になっていた

鬼神が聞こうとした時、黄龍が先に彼の疑問に答える

「魔力に反応するケツアルコアトルの首輪。変身や能力を使おうとしたら体に電気が走るわけだ」

「うっほ、どs」

「このぐらいしないと彼らも黙らないんだよ」

「そうですね。それでもディグニティってやつは……鎖で縛るんだな」

黄龍は当然だと頷く

能力も何も解明されていない輩を簡単に野放しにすることが出来なためではあるが

マリアからはやりすぎだと言われたことが難点だが仁がなだめるところで落ち着く

「あの悪魔が何を目的で襲い掛かってきたのか、それがわかれば……」

…

「じつはマリア様を狙うつてのは嘘なのかもな」

鬼神の何気ない一言でピンと来る

本気で来ない点

そして、マリアを狙おうとした点を考えるともしかしたら第2の襲撃も可能性があるかもしれない

「鬼神、頭いいな」

「……え？先生、今なんて？」

「周囲への警戒を強めてくれ、昨日のようなミスは二度と起こすな」
「わかりやした」

黄龍の命に従い、鬼神は早速、神父達を呼んだ
警戒を強めることの指示のみ
確認した黄龍が満足そうに頷く

彼もまた、自分の役割が見つかりそれに向けるため準備を始めた

マリアはハンナを連れ添い、煉の前に姿を現した

今から彼への尋問を続けるためであるが

煉は既に理解していたか、その目は覚悟した者の目をしていて

「鎖をつないでまで……俺はただの囚人だけ」

「貴方の力を理解するまではそのままです」

「そうか。それよりも……」

煉が横目で鎖を見た

銀色で硬い

その輝きは煉が写っているぐらい綺麗なものだった

「綺麗だな」

「銀色の鎖は私達騎士団の武器の一つです。魔を封じるためのね」

「化け物が悪魔封じか。笑わせるな」

煉の罵声が飛んだ

その言葉でハンナがマリアの後ろから彼をにらみつける

「口を慎め。自分の立場を考えたらどうだ？」

「馬鹿言え、怪物同士だ。立場もクソも無いぜ」

「貴様……」

ぶん殴ってやるとハンナが怒りを抑えきれず噛み付いてきた

それを羽交い絞めで制止するマリアとそんな二人を見て煉は笑って

いた

「無様だ。そういうところだけは人間と変わらないものなんだな」

「貴様、ぶつ殺すぞ」

「鳥人間。焼き鳥にされる前に話してやるから黙ってるや」

鳥人間……それがハンナのことだと気づくまで時間がかからなかった
マリアがふと気づいたのが彼の力

（わからねえのか。自分の面を鏡で見ってみる。化け物だ）

そして最初であったときの言葉だった

ハンナに言った「雷鳥」と言う言葉は的確だった

雷撃の力を使いなおかつ、鳥人と言う容姿から鳥人間と言ったのが
今、煉の目に映っている自分達が人間の姿で無いことがわかった

「今貴方の目に映っている私は何に見えます？」

「白いモヤ」

「……力の代償なのかもしれませんな」

デイグニティという神の力を受け、その代償（本来背負うはずの無
いもの）を背負った結果が今の彼の状態

マリアにも黒騎士にも無い特殊な能力である可能性もみられた

「マリア様が脳内で何を考えているか知らんが……逆にこちらから
聞こうか？」

「……どうぞ」

マリアが促す

緊張が走る瞬間でもあった

煉の目に映るものが姿だけか

考えまでも読まれていたのではとの恐怖もあった

「何が知りたい。もうこの際だ、いろいろ教えてやるよ。昨晚ので
疲れただろ？話し終えたらもう休んどけよ」

「そうですね。貴方の過去ももう知り合いが調べてくれてるんです
が、能力が知りたいですね」

「知り合いからは何を聞いた？」

「いえ、何も聞いては無いですよ。多分夜聞けるかもしれませんね」

「夜か……」

ため息交じりで彼が呟く

「……他人に調べられるのは好きじゃない。なおさらここで話した方が気分が楽だ」

「お？」

「教えてやるよ。ボイスレコーダーでも何でも用意してくれ」

言われたとおりにボイスレコーダーと煉の話に興味があるとガイア、黄龍が揃って来た

「ポップコーンでも用意してやるうか？映画として作ってもいいぜ。

ヒヤハハ……」

「いいから話せ」

ハンナの言葉で煉が黙り込み、しばらくしてやっと話し始めた

どこまでもじらすかとあきれるガイアに沈黙を守る黄龍

煉の目に映っている彼らは醜い怪物そのものだった

「……そうだな。俺の視点であんたらが怪物のように見えるのも、デイグニティ……いや、つけられた名前だけだな。あの力を持つようになったのもまだ幼い頃だったな。死んだ親からは生まれた当初からって聞いたけどな。まあ、本筋はここからかな……」

トランプでカードを選ぶかの感覚で彼は何を話そうかと考えていたそれがようやく決まる

幼い頃、外に出ればすぐに泣いていた

唐突で親も周りの人も戸惑っていたというが、今になってわかった

彼が泣いた理由はある女性とすれ違ったときだった

近所でも優しく美人だという評判

幼い頃の煉とすれ違った後

その女性は夫を毒殺

理由は浮気相手との間に邪魔だったという理由でだ

今思えばなぜ泣いたのか

女性が人間じゃない別の恐ろしいものに見えたからかもしれない

幼稚園まで続いた

それが当たり前のようにと教えられながら……

別にそこまでは良かった

幼稚園を通っていた頃、恐ろしかったのは近所の人間達だった

いや、人間の姿をした化け物かもしれない

父はケースワーカー

母は看護師

どちらも人の関わりを誰よりも大切にしてきた

休日が空いて時間があれば家族皆でボランティアに行くようにもな
った

もちろん、そこまで良かった

ボランティア先で会ったあの馬鹿どももの面を見るまでは……

「偽善者しねえ！」

「気持ち悪いんだよ！」

罵声を放つ男達

それも柄の悪い男どもだった

何のためにこんなことをするのか

今の煉にはわからなかった

ボランティアに深い意味は無いはず

父も母も組織からの強制もなければ、ただの暇つぶしと娯楽のつも
りで行っているようなものだった

人の娯楽に口を出す連中

それもヤクザまがいの連中だ

彼らにとって何が気に入らないのか

全く理解出来なかった

「おかあさん、ボランティアって悪いこと？」

「いえ、ただの遊びよ。そして自己満足でもあるのよ」「
難しい言葉が多かった

そんな母との会話を今でも覚えていた

人の考えがそれぞれあるんだとそう学んだわけだった
別段迷惑をかけるようなことはしていない
売名好意でもなければ偽善好意でも無い
親もそういつた罵声を受け入れていた
娯楽までにもケチをつけようなどと……何を考えているのかと

気の狂った男達が家に来たのは土曜日

煉が友人と外に遊びに行っている時だった

何があつたのだろうか

友人とともに家に帰った時、家がまともな状態でないことに異常性を感じた

慌てて家に向かえばそこで起きていたのは悲惨なものだった

血に塗れた両親の死体

あの死体がどんなに悲惨だったのか今でも覚えていた

犯人が捕まり裁判が行われた

祖父母とともにその裁判を見守る中、裁判官が下した判決は無罪だった

証拠も揃っていたにも関わらずなぜ無罪か

精神病を持っていたという理由だった

統合失調症、幻覚、妄想

たったそれだけの理由であつた

無論……当時意味のわからなかった煉も祖父母の顔を見てそれが何を意味するかわかった

それ以前にも被告がまともな形を成していないところから既に理解していたが

「許せない……」

光の無い瞳が被告を映し出していた

そして彼の中にあつた力が真に目覚めた瞬間でもあつた
被告が制裁され、その日裁判所は血まみれになつた

それから祖父父母の元で暮らすことになつたが、特に不自由は無かつた

そのまま小学から中学、高校と成長していった
力を解放することも無く、人が怪物に見えることに関しても既に慣れていった

醜いやつは醜い

普通のやつは普通と割り切つて人付き合いもしてきた

醜いやつに近づくことは一切無かつた

特に障害も無く……

専門学校は母と同じ道を歩みたいと看護の学校に通うことにした
楽しい友人も出来た

オタクではあるもの、運動の出来る生真面目な正確の男

黒髪の短髪で幼児体系の少女

丸ボウズの寺の息子

個性豊かな連中が多かつた

中でもあるカップル二人は特別なものだった

唯一、煉の能力を理解して、自分そのものの存在を受け入れてくれた
何もやましい考えも持たない

ごく普通の友人のように接してくれた

彼らが考えているのは煉の力が人助けになるということ
真剣な話らしい

「煉君の能力は人を救えるよね」

「……どうだろうか」

「いや、俺も彼女の言うとおりだ」

何のための力か

無論、それは人のため……

カップル二人が推奨するのは弱者を救う行動だった

そんな行動を起こす以前に……あんな事件が起きたのが残念だった

耐えられなかった

自分はただ友人達と馴れ合うぐらいでも良かった

勉強しながら、遊び、自分なりの人生を楽しむのが良かった

別に人に迷惑をかけるようなことはしてないはずだ

あの少年らは親を殺した被告と同じだった

醜い姿でやっていることは残酷で自分が犯した犯罪を誇って語るよ

うな男

そんな男どもに……なぜ、存在を否定されなきゃならないのか

互いの考えの違いでおきた出来事だった

あの少年は「何も行動しないやつに生きる意味なんかあるか」

煉は「普通に生きてていいだろう。迷惑さえかけなきゃ……」

その違いだけでぶつかりあった

「きにいらねえよ」

そう言つて少年は殴つてきた

陰湿だと忌み嫌われ……気持ち悪いと蔑まされ

人間が屈辱と痛みに耐えられなければどうなるかどうなるか

煉であれば怒りで我を忘れ虐殺の道に進むことになった

「煉君！だめ！」

「落ち着くんのだ！」

必死に止めに入るカップルと友人達

それでも彼の暴走が止まることが無かった

怪物に見える、見えない関係なかった

黒い大斧が教室を切り裂き、無関係の人間をも切り裂いていく

その中に友人達も含まれていた

気づいた時には彼は涙を流すことになる
意識を失った友人の体を揺らし、涙を流していた
「……皆」

友人を殺しかけた過ち

それで彼が悔やんでいるのがわかった

元々、殺された少年と煉の間に起きた出来事であるに関わらず……

煉の目は悲しくどこか虚ろなものがあつた

「俺は友人を殺しかけた。あいつらは今病院だけど。もう2度と会
わないな」

「よくいるぜ。自分の考えが押し通せないから暴力でやろうとする
やつ。そんなやつに振り回されて友を傷つけるってのはな……悲し
いじゃねえか」

「悲しいだと。黒ゴマ……。俺は哀れんでもらうためにいるんじや
ない」

「そつかい」

煉の罵声にガイアは動じることは無かつた

彼の言うとおり哀れんでもらうことに嫌悪感を感じる者もいる

「悪かつたよ」

敵であつてもガイアは礼儀だけを重んじる

彼を他所に煉が話を続けた

「俺の過去については以上だ。もちろん、その前に日本にきたゴー
レムのことや中国に行った時にヴェノムを助けたことやら色々ある
けど……」

「また機会があればぜひ聞きたい」

黄龍がそう言うのに対し、煉はただ笑うだけだつた

「もう機会は無いさ。もう……」

そう言つて彼はもう語らなくなった

「終わりだ」と悲しく呟く

「俺がデュアル・イーグルに入ったのも……」

「お友達が言っていた『人を救うため』だというんじゃないんだろうな？」

「少なくとも中国にいるやつらを化け物と化するお前らと比べたらマシだろ」

煉の一言に黄龍は強く否定した

「あつちに任せたのは元々救済のためだ」

「ほう、化け物を増やすことが救済か？笑わせんな」

「もう良い！やめなさい！」

マリアの怒号でその場は納まった

黄龍の心の傷をえぐるようなことは仲間として見ていて辛かった

「煉、神の使いとして貴方の心の傷を治すことができれば……だけれど、デュアル・イーグルとして来た方にはこちらも容赦はしません」

「そこまでして俺らを恨んでいるのはなぜだ」

ただのテロリストとして恨んでいるのか

煉自身も疑問を抱いていた

「俺らがお前らと同じだからか」

「その言い方からしたらお前自身も怪物と自覚しているみたいだな」「察しいがいいな。黒ゴマが……」

「ガイアだ。それよりも矛盾している。俺らが怪物と忌み嫌われ……仲間にも同じやつがいるにも関わらず……なら、お前は彼らまでも怪物扱いか？」

無残な過去を持つヴェノム……

1度煉が助けたゴーレム……

心から信頼しているサファイア……

メンバーそれぞれが彼に対しどんな気持ちを抱いているのか
どんなに信頼しているか

「おまえ自身もわかっているはずだろ、彼らも人間だ。なんで……怪物扱いなんだよ」

ガイアの言葉を耳にしても何も答えようとはしなかった

だが、どこか辛そうな表情をしていた

それだけで彼が何を思っているのかガイアは理解する

「…………お前にもまだ人間としての良心があるはずだろ」

良心…………その言葉で煉の瞳に光が戻る

だが、悲しみだけは消えない

悲哀に満ちたその目はもう何も見えていなかった

10 心が壊れた瞬間〜煉の良心〜（後書き）

いろいろ訂正中

ウホッ

11 名づけられた瞬間

「ねえ、黒騎士」

「なんだい、リーナ」

「その笑顔気持ち悪い……」

接し方も話し方も

仁は愛を込めているつもりであろうが、リーナからしたら嫌悪感M
AX以外の何者でも無かった

「なに、私に惚れたの？」

「……ああ」

「死ね」

「……」

ここまで男にべた惚れされるようなことは無かった
今までに無いことだ

「懐かれてるな、リーナ」

そう笑っているのはヘルファイアだった

仁の周りには奇妙にもヘルファイア、リーナ、サファイア、ゴーレ
ム、ヴェノムと敵が囲んでいた

敵を回りに置いておきながら彼は余裕の表情を保っている

「黒騎士、怖くない？私らは敵だけだ」

「いえ、特に問題無いです」

「ふ〜ん……なんかな〜」

ヴェノムは不信感を抱いているがそれに対して仁は平然としていた
「信じていいのかしら？」

「いいのだろうな。俺らが襲い掛かってもやられるだけだから、こ
のまま平凡としてくれたら……」

サファイアも黒騎士の力を知っている様子で言う

完全に仁の能力を把握しているようだった

ケツアルコアトルの首輪をつけているために大きな動きが出来ない

のかもしれない

どちらにせよ警戒を怠ることが出来なかった

「マリア様からも馬鹿なことをするようであれば殺してOKだよ。殺しはしないけど」

「暴れても何もしないのかよ。俺らフリーダムだな」

「無論、言われたとおりに対処はするけどな」

とは言え、出来ないであろう

首輪がある限りはそっちに任せることにしていた

「煉のことがあまりわからないんだよ。あの人はなぜ皆を怪物呼ばわりするんだ」

仁の何気ない疑問だった

今こうやって接しているのは普通の人間

敵ではあっても会話も出来る

話していて楽しい

彼の疑問に誰が答えようかと仲間同士が顔を見合わせた

「そつだな……俺が話そう」

ゴーレムのその一言からそれは始まった

『名づけられた瞬間』

デュアル・イーグルに入る前

ゴーレムは日本へと滞在していた

「ゴーレムさん、俺……日本にいられないんだよ」

目の前には涙を流し、静かに語る煉がいた

事故から娘と息子を救った恩人がそこにいた

脅威の回復力だな……と思っていたが、彼が例の能力を持っているから納得は出来た

今の状況下……何があったのか、テレビに流れているニュースを見てやっと理解する

看護の専門学校で死傷者が出た事件

煉が泣いているところからして彼がその事件の犯人だと認識できた
「力が暴走したのか」

ゴーレムの言葉に仁は静かに頷いた

「怒りを抑えられず……」

「そこまでは良いさ。今日にでも帰ろうと思ったんだ。故郷のシベリアにな」

「……俺もついていっていいですか？」

「かまいやしねえよ。犯罪者と関わるのはいつものことだ。一応裏稼業をやっているからな」

そうして密輸船へ乗せてもらった

裏稼業と見るとどこか怪しいところではあったが……案の定、恐ろしいものだった

それでも、彼の能力を超える恐怖は無いらしい

男が1人、彼に近づいた

それも醜く、悪態をついてくるような人間だ

その男の両目から血が吹き出た

彼が鏡に写った男の顔に人差し指と中指を潰すかのように押し込んだ後のことだ

男も何があつたのかは知らなかっただろう

何も知らずに死んだのは良いことだ

ゴーレムはそう思った

偶然見かけたために駆け寄った

煉と再会した途端に心やすらぐものがどこかあった

ヴェノムは今までに感じたことの無い感情を抱きながら煉の腕に抱きついた

「煉……マタ、アエタ……」

「貴方は……」

笑顔で声をかけたヴェノムに対して煉は暗い表情だった

あの事件から日が立たないために笑顔を浮かべる状態では無かった
英語で対応できるゴーレムが彼女を煉の知り合いと認識し、英語で
対応した

3月の春中に煉は中国に来ていたらしい

そこでゴーレムはヴェノムが娼婦として捕らわれていたのを知り、
煉に助けられたと話を聞いた

「彼が助けたのか」

煉は純粹で優しい

だが、今は違う

悲しみと虚無の人形と化してしまった

ヴェノムも同行するようになった

日本から出て1週間

ようやく、シベリアに辿り着いた

ゴーレムが裏でやっていたのは運び屋

妻が殺された後は大分余ったお金で生活してきた

日本に来たのはそこで暮らそうと考えていたが

それ以前に組織からのオファーがあったために旅行として訪れた
煉にもその組織について話した

ロマノフ王朝の再興

彼はそんなことどうでも良かったらしい

虚ろなままの自分が憎く、何か生きる意味が欲しかったようだ

同時に彼が思い出したのは今は病院で眠っている友人のことだ

（人を救えるよね）

（その力活用してみろよ。人助けも気持ちいいぜ）

そして彼は人が変わったように犯罪者を狩るようになった

シベリアは元々治安が悪かった

外務省からも注意の予報が出るくらいだ

そのシベリアの中で煉は犯罪者達を『血を流さず』殺した

遺体も彼は消した

暗殺……

デュアル・イーグルが彼に目をつけたのは言うまでも無かった

煉に惹かれ数々の人間が彼の元を集った

家族を殺され居場所を失った特殊な能力を持つ7人の姉弟

煉とゴーレムと出会いデュアル・イーグルへと入ることにした

元々前線部隊でテロ活動をしていた『爆撃者』

冷酷な暗殺者『冥府の騎士』

そして数々の強大な力を持つ者が煉と同じ部隊へ入ることを望んだ

煉の小さな優しさ

そして大いなる罪へと惹かれ……

「君が人間を簡単に殺すような目をしていないな。純粹に見えるよ」

「そうですか」

デュアル・イーグルのトップも煉に一目置いていた

人間に手を掛けない

彼が手を掛けるのは人間の姿をした悪魔 殺人鬼とか犯罪者だ

煉の目に映るそういう連中は化け物同然だと言う

「煉。君の目につる私は異形なものか」

「はい」

「どのように見える？」

「双頭の鷲です。醜く、腐臭が漂っております」

「そうか。醜く、腐臭が漂う。だが、君が双頭の鷲に見えたのなら、たとえ腐っても王として相応しい姿だ」

大層気に入っていたのかもしれない

側近に置きたかったのだろうか

だが、煉は暗殺部隊にいたいと言う

もしここで側近としていたら、どうなっていたのか

「俺は間違いなくあの人を殺していた。なぜだかわからないけど、

なんでだろう……」

煉の過去を聞いていた

友人を殺してしまったこと

ヴェノムを救ったこと

ゴーレムとの出会い

デュアル・イーグルに入る前

煉が行っていることは人として考えるなら新撰組で言う「天誅」なのかもしれない

本人は気まぐれで行っているつもりだが……

「どう思う？ 仁」

「……彼の気持ち、なぜだかわかる気がする」

犯罪者を恨み、殺してきた

同じ境遇で同じように犯罪者を殺してきた

黒騎士となったあの日から人の命が軽いように感じられた

闇武者を倒し、振り回され……

最後は何も得たものが無いまま聖経会との戦いは終わった

愚かな戦いだっただ

今思えばそう感じられた

自分が聖経会に行った天誅は『迷走したもの』

だが、煉は『本物の正義』なのかもしれない

「デイグニティ……人の命を守るならそう名づけられるのもわかるわな」

「デイグニティという名をつけたのは組織のトップだ。俺ら怪物の尊厳を殺し、人間の尊厳を守っていると見たらしくてそう名づけたらしい」

「んじゃ、貴方の名前『ヘルファイア』も……」

「そうだよ？ 以外と気に入ってるけどな。あいつはいろんな意味でつながりを与えるかもしれない。国など関係無く、あいつ中心にな」

「ヘルファイア、もしそこで煉が消えたらその絆はどうなる？ 崩れ

るのか？」

「いや……」

仁の言葉をヘルファイアは静かに否定した

「煉は消えない。俺らにとってあいつは支えだ」

深く、どこか切ない言葉だった

その支えは彼らを『嫌悪感』を見せていた

「仲間のことをあいつは……」

「怪物とか呼んでるけど、慕ってくれる俺らに照れくさいんだろ。

ツンデレってやつだろ……」

奇妙のだが、どこか正しいようにも思えた

「ツンデレか」

煉は怪物を侮辱しても迫害するようなことはしなかい

仲間として受け入れ、共に行動してきた

まだ3ヶ月と時間は浅い

その中で分かるのは煉は純粹で優しく、そしてときに残酷ではある

だが、人間の心を大切にしてきた

彼はデイゲニティ

怪物の尊厳を殺し、人の尊厳を守る者

今では鎖で束縛されている

だが、いつかは……

11 名づけられた瞬間（後書き）

煉の枠を1話分ほど入れたわけですか、なんかスピノフ書いてもいいレベルになったな

ひまだったらな……

凶虎「……あの、私……」

アーアー、ナニモキコエナイ

12 悲しみの共有

また三日間が立つ

静かにただ平穩に……

煉達も何も行動を起こさず、時を待っているかのようだった

日本の影次郎から届いた資料を見ても既に煉本人やリーナらから全てを聞いたために必要が無かった

「燃やしていい？」

「いや、一応持っておこうか」

仁から受け取った数枚ある資料をファイルへ挟んでいった

黄龍が処理を行っている間、仁の目はずっと外の方を見ていた
虚ろな目で何を考えているか

その目は何かに囚われているような目をしていた

「あの銀髪の少女か」

「……かわいいっすね」

「宗教上あまり思わしくない感じはするが、私は黙っておこう」

「本人にもばれましたが」

「……そうか」

黒騎士が惚れた相手が11歳の少女

そして敵である

なぜか黄龍が冷めたような目で彼を見ていたが、本人は気づいてすらいなかった

「はあ……」

黄龍、ケツアルコアトル、ガイアらが普通の人間のように生活しても彼らは怪物だ

普通の生活をしていても動き一つ、言葉一つどれをとっても醜かった
以前、妻と子供を持った犯罪者を殺したことがある

その男を殺した後、子供に泣きつかれたことがあった

(なんで、お父さんを殺した……)

(お父さんを返して……)

そういう子供達に対してこう言っただけ

(君達のお父さんは人間じゃない。化け物だ。俺は化け物がいる限り殺し続ける)

立ち去る時のその子の言葉を今でも覚えている

泣きながら、そして復讐を誓ったその時の言葉

(化け物!!!お前の方が化け物だ!!!)

自分でもわかってた

周りからしたら普通の人間を何の躊躇も無く殺しているのだ

誰だって思うだろ

俺が今までに無い『醜い化け物』だって

それで良い

それで……

『悲しみの共有』

黒椿 牙 過去の黒騎士と同じ苗字だったことに驚いた

だが、よくよく考えれば偶然が重なっただけだとそれはすぐにわかる

血縁関係でも無い

牙に子供はいなかったし、兄弟もいない

まず、それだけで天寧は安心する

天寧の耳に入ったのは彼の特徴だった

幻覚を見る……そんな話を聞いてふと、思い出したのが仁が通って

いた『天霊学園』の生徒達だった

彼らは仁を醜いものと見ていた

それ故に彼を執拗に貶めるやつが出てきた

天霊学園の理事長が言うには……

（1度仁君を見た事があるが、普通の人間だ。なぜ、生徒が彼を執拗にいじめるかわからなかったよ。責任を負うのがいやで私は無視してきたのかもな）

薬物という線だろうかと考えた
聖経会の資料の中に特殊な匂いのみ反応する薬物を作ったというものがあつた

天霊学園はその薬の実験の舞台とされていた
生徒にもばれず、そして保護者にもばれずに……
そこまで出来る彼らの根性がすごいなと感じられるものだった

夕食をとっている親子の姿があつた

二人が同じように資料に目を通しながら……

「ありえないよな」

「うん」

影次郎も天寧もお互い頷く

聖経会の今までに無い必死さに正直、笑いが込みあがってきた
手間隙を掛けて薬物の実験

それに何の意味があるかわからなかった

「……フツ」

天寧が別の資料へと手を伸ばした

影次郎が過去調査した黒椿 煉の資料

精神科医のカルテから住民票まで

内容からしてどんな悲惨な過去を送ってきたのか想像できた

同じ親を失った者として……

「だけど、煉って……」

「俺も信じられない。煉って子は行方不明になっているものかと。

まさか、デュアル・イーグルにいるなんてな」

それも、彼自身が悪魔となっていたと言つ

能力、特徴も闇に包まれたまま

仁にどうアドバイスすべきかわからなかった

「マリア様もお困りかもしれないわね」

「お仲間さんも一緒なんだな。それは恐ろしいな」

「他人事のように言うけど、父さん。私達の力は使い方一つで世界に脅威になるかもしれないわよ」

「わかってるよ。醤油」

「甘口？辛口？」

「両方ぶっかける」

影次郎に言われ色の違う両方の醤油を天寧は手渡した

血糖値が危ないよと警告しても父は頑固な人間だ

やめないことは誰よりもわかっていた

味の違う両方の醤油を平等に掛けている父を見て天寧は微笑んだ
母がいればこの微笑もなおさら笑顔になっていただろうに……
内心、悲しいと感じながら食事に手を付ける

煉の元に食べ物を持っていったのは仁だった

二人分の料理を器用に片手で持ち運んだ

煉もドアを開けて入ってくる仁の姿が見え、目の色が変わる

「へえ、黒騎士本人が直々にねえ……」

「たまにはいいだろ。俺もデイグニティって存在が気になって仕方が無いんだよ」

「そりゃ、どうも。だが、男に興味ない」

「俺もだ。リーナ以外興味ないっす」

「……え？」

何言ってるんだ、こいつ

煉がそんな顔をしているのがすぐにわかった

「リーナが……はあ？」

「はい、飯だ」

「悪いな。いや待て、リーナに何を？」

「毎晩、妄想と欲情に駆られてな……」

「それ以上言うな。仲間に手を出したらぶっ殺す」

煉の怒りに満ちた表情が間近に迫っていた

夜中に見たら夢に出てくるかもしれない面だ

「冗談だよ。忘れ物だ」

まだ煉がとっていないスプーンを手渡し、近づいていた彼を遠ざけた

「リーナに手は出すな。ヴェノムにしる」

「ババアに興味は無いよお」

「……………そうか」

煉が食事に手をつける

それを確認した仁も続いて食事にとりかかった

シスター達が作った食事だ

どんな粗末なものが出るのかと思っていたが、以外と普通の食事であつた

「黒騎士、なんだよこれ」

「かぼちゃミートパイ。俺のリクエストでたまねぎ抜きにしていた
だきました」

「奇遇だな。俺もたまねぎだめなんだよ」

「良かった」

「……………俺のはあるじゃねえか、こら」

不満を漏らす煉の言葉を無視して食事を続けた

何を言おうが関係まいとたまねぎ抜きのかぼちゃパイをほおぼる

「好き嫌いは良くないぜ」

「たまねぎ抜きのお前が言うなよ」

「いいさ。食いながらいろいろ聞きたいんだが」

何でもいと暗黙の許可が出た

煉の心は既にかぼちゃパイへと写り、食べたあとなのか目を輝かせて「おいしい」と呟いていた

食べている途中でも仁は話を続けた

「デュアル・イーグル暗殺部隊で随分と評判がいいらしいな」

「そういう黒騎士のあんたは日本でもかなり活躍したみてえだな」

「まあ……………そこまで有名なのかよ」

「黒騎士が行動を起こした時つてのは皆わかるもんだぜ。人が一氣に死ぬ事件なんて黒騎士かテロぐらいしかありえねえよ」

だから、デュアル・イーグルでも要注意人物になっていた
最初聞いた時は怪物以上に残酷なものだと煉は感じていたが
今こうして一緒にいると友人のように思えた

彼の接し方が上手いからかもしれない

「黒騎士がフレンドリーなんて考えてもいなかったぜ」

「同じだ。同年代で同じ怪物同士」

「ああ、そうだな。怪物同士だ」

「そして同じだな。阻害されたもの同士」

同じ境遇なのか

仁の言葉にどこか共感が得られるようだった

「お前が何を……」

「高校の頃は学校ぐるみでいじめを受けていた。黒騎士になってからは通っていた専門の友達が皆殺された」

仁が語る中で煉はいつのまにか手が止まった

専門と聞いて同じ環境下だ

彼の言い方から友人達をどんなに大切にしていたのか、感じ取るこ
とが出来た

こんなくそみたいな力を得て、残酷な人生を歩むのは同じ

あの時、黒騎士だけがなぜ人間に見えた理由がわかった気がした

「黒騎士……」

「仁でいいさ。どうせ敵同士だ。ぶつかり合う時は某アニメみたい
に下の名前を叫んでぶつかり合おうぜ」

「人間は……殺せないんだよ」

煉が言う

人間を殺すことが出来ないその理由

そして、仲間までをも怪物と呼び人間として認めない理由

仁は知りたかった

「敵であっても殺さないのか？人間でも……」

「……………」

煉は何も答えようとはしない

辛い過去が答えを拒むのか

それ以上深く追求すべきではないと感じ、仁は引き下がった

煉達を捕らえて三日以上はたつ

彼らが何も動きを起さないのが不安でならなかった

不安を煽られているようだ

「マリア様が頭を悩ませていらっしやいますか」

窓から鬼神が笑顔で顔を出した

陽気な笑顔が逆に苛立ってくる

「何のようですか？」

「煉と仁が仲良くしているんだよ。仁はリーナと仲良くなる口実だつてな」

「彼がロリコンだなんて。亜樹さんの件でなんらかの影響があるのかと……………」

「……………よくわからんが、仁にも何か考えがあるとおもうんだ。黒騎士になつてからは間も無いけど、あいつは多分頭いいぜ」

「あの人は頭良いというより……………優しいんですよ」

頭の良さがあるように感じられなかった

ただ純粹に煉と話したかつたのだろう

同じ境遇の者として仁は感じていると読んでいた

……………仁のことは良い

マリアの頭の中はデイグニティの動きについていっぱいだった

「わからないよ。デイグニティの考えが何もかも……………」

「黄龍先生が言うには新手の可能性があるとよ。そのため警戒強化中だ」

「……………」

マリアも黄龍から聞いていた

彼らが行った宣戦布告がなんらかのサインと考えていたがあれから

時間がかかりすぎだ

新手的可能性も消えた

が、警戒をはずすわけにはいかなかった

「デイグニティ達の力つてすごいのかも」

「彼らが？ヘルファイアは強いけど、暗殺向けとは思えないんだよな」

「デイグニティが1番気になるんです。彼の力がどんなものか」

（本気じゃないぜ）

（悪いな、俺は部隊の中で弱いんだよ）

謙遜する者達の声

その声に不安を煽られるようだった

殺せるのなら殺したい

情報不足と上からの命令がそれを拒む

「……クッ」

悔しそうに下唇を噛むマリアの表情は鬼神でも驚くほど珍しい場面だった

かぼちゃミートパイを食べ終えた煉の皿を下げて入り口の近くまで向かった

次に何しようか、平凡と歩き去ろうとする仁を

「なあ、仁」と途中、煉が引き止める

「お？」

「あんたが人間に見えるのはなんでか、わかるか？」

「……」

煉の唐突な質問に答えようにも答えられなかった

言葉が見つからないためか、彼が何を言えば納得するのか難しいものだった

「わからないな」

「そうか」

「わからないけど、正直嬉しいといえば嬉しいな」

「え？」

思い出した高校の頃

陽からの報告で薬物による幻覚と発覚したときは天霊学園の生徒らが哀れでならなかった

自分が特別、怪物に見えたと聞いた時、忌み嫌われる理由がわからなかった

仲間を含めて人間じゃないやつを嫌う今の煉もそうだ

人間以外を嫌う理由が何となしにわかった気がした

「高校の頃は醜いとかで忌み嫌われていたよ。人間っておもってくれるだけでも嬉しいかな。じゃあな」

仁の返答に驚いた煉が引き止めようとしなかった

彼自身が人間から阻害されていると言う事実も聞いた時は啞然とした人生の中で同じ共感できる相手がいたことに初めて喜びを感じることができた

そんな瞬間だった

「……仁」

かなりの時間が立った

そろそろこんな茶番も終わらしたい

デュアル・イーグル暗殺部隊の誰もがそう思っていた

だが、首輪にある機能が停止するまでは動かない

だからこそ、煉の動きに期待するしか無かった

彼らはただ待ち続ける

この状況下を打開する瞬間を……

13 恐怖の具現

死刑執行

煉達への抹殺の命令が上から下された

必要な情報を得ることが出来ないが、これ以上生かしては組織の仲間達の不安を煽られるばかりだ

安堵をしているマリアの様子を察するに煉の存在が1番の負担になっていたのか

「昨日、話していた鬼神が納得した

「はあ……生理じゃないのか」

「鬼神さん、何言ってるんすか」

鬼神の言葉に仁は引き気味の様子で尋ねた

「仁くんよ。女の子のアノ日に萌えるか？」

「変態じゃないんで、無理っす」

「ロリコンが言うなよ」

「紳士なんで問題無いです」

死刑執行の前にしては雰囲気をつぶ壊すかのような会話の内容だ
二人しかいないのが唯一の助かりだ

こんな場面をハンナや黄龍の耳に入ったらどうなるか
5回死ぬだけじゃ済まないようにに思えた

処刑はそれぞれ6人ずつにメンバーが着くだけ

後はどのように殺すかはそれぞれが決める

同じ時間に同時に殺すことが条件となる

夜9時の鐘が鳴ると同時にそれぞれの方法で処刑開始

仁はリーナへと

マリアは煉へと

ハンナはサファイアへと

黄龍はゴーレムへと

鬼神はヘルファイアへと
そして、ステイブンはヴェノムへと付くことになった

マリアの瞳に写る彼は動かなかった

鎖からはずすのは飯とトイレのみだが、処刑の時にはずそうなどは思っていないかった

煉を巻きつける鎖は銀の鎖

本来なら神の力や悪魔の力を抑えるための施しも行っているものだ
そう簡単に能力を発することが出来ないはずだ

「覚悟は？」

「ああ、出来ている」

煉の目を見た時、何を考えているのか
何が宿っているのか

ふと見たマリアの目と煉の目が合った

死を覚悟した者の目では無かった

それは勝利を間近にした者の目だ

気づけば彼はきえていた

銀色の鎖は地の上でバラバラとなり、人の姿形も消えた

動きがあった

マリアが神の力を呼び出そうとした瞬間

既にデイグニティの奇襲が始まっていた

「銀色の鎖を使った時点で君の負けだ」

背中から貫通した尻尾

その攻撃がデイグニティのもの気づくには時間がかからなかった

薄暗い牢の中、銀の鎖には血の止まらない腹部を抑えるマリアの姿

そして、血にぬれたデイグニティの巨体が写っていた

『恐怖を具現』

同じ年代の者同士、黄龍は殺すのをためらっていた
鬼神はヘルファイアと談義

そろそろ殺そうと地獄の玉座を出していた
ハンナは容赦なく、雷撃を手に……

ガイアも同様に武器を手にしようとした

それぞれが自分の役割を理解して、それを行おうとしていた
自分達の身を守るため

今自分達は何をしようとしているのか事の重大さをよく理解している
だが、彼は違っていた

「殺さないの？」

リーナが聞いても仁は何も答えなかった

ただ、フランベルジエを手に座り込んではおため息をつくばかり

「まだ鐘が鳴ってないよ」

「嘘ね。処刑するならすぐ近くににいるか、男なら陵辱した後殺して
る」

仁がフランベルジエを手に近づいてきた

顔色を変えた彼は少し怒っているような表情で迫っていた

そして、リーナの頭に軽い拳骨

「いたっ！」

「11歳の子がりょーじよくなんて言葉を使っちゃいけません！」

「え……そこ？」

「駄目だぜ。君みたいな美しい子がそんなふしだらな」

「……」

まるで家族のような叱り方だ

殺しにかかるかと覚悟していた

だが、彼のかかわり方は人間のようだった

仁が処刑を躊躇う気持ちがなくわかった

「フフフ……」

ふとリーナが笑みを零した

「純粹ね。人間を何人も殺した黒騎士とは思えないわね」

「君の仲間がよく言ってたな。煉とは違う純粹さがあるって……」

……純粹

他人からそう言われるのは初めてだった

言われた本人は少し照れくさそうに頭を撫でる

「そうか」

鐘がなる

処刑開始の鐘の音だった

もう既に始まっているのかもしれない仲間達の処刑

リーナは顔色一つ変え無かった

「仲間が殺されたかもな」

「殺さないの？」

「……」

仁が無言でフランベルジェを振り上げた

殺すのかと思った時は死を覚悟して頭を下げた

首を落しやすいうように配慮したつもりが……

彼が切り落としたのは首では無かった

傷ついた首輪に触れ、機能しなくなったことに気づいたリーナが驚いていた

「殺さないんだ」

「殺すぐらいなら、マリアちゃんに土下座してでも義理の妹にした
てて許しを請う」

「……やっぱ、殺してもらっていいかしら？」

「……」

仁の持つフランベルジェが軽く床を叩いた

床から出た黒い影が実態化、そして鋭い爪を持つ手をかたどった

その爪が切り落としたのは今までリーナが動けないようにしていた
銀色の鎖だった

足にある枷を切り落とし、自分を解放した仁へとリーナは驚きを隠せなかった

「なんで、ここまでするの？」

「マリアちゃんから言われたんだよ。殺す、殺さないは勝手だって。マリア様も俺のことをよくわかっていたみたいだな」

「敵を前にして甘すぎる」

「無理に戦う必要は無いよ。たぶん、あの子はディグニティのことが気になるんだろうね」

笑顔でそう答える仁がどこか憎たらしかった

黒騎士の力を手にしてつけあがっている

「黒騎士……」

「逃げてもいいよ。ただし、振り向かず人に危害を加えることなく……ただ逃げる」

「優しいのね。私からもお礼がしたい」

「また生きて出会った時にでもデートして欲しいな」

「デー……逃げて！」

突然のリーナの叫びで仁がとっさに後ろへ向く

見たのは部屋に入るきるかどうかわからないほどの黒い鎧を纏った怪物だった

その名を呼ぶ間も彼は与えてくれなかった

煉は血溜まりの上で倒れた仁の死を確認する

黒騎士に死は意味の無いもの

またいつかはゾンビのように復活して来るだろう

早急にここから離れようと彼は立ち上がった

「行こう」

啞然とするリーナへと声をかける

だが、彼女の目はずっと仁の死体を見ていた

「リーナ」

「……ええ」

躊躇うことなく、リーナも立ち上がる

仁に気遣う暇も無い

目的を果たした今、逃げる以外何も無かった

「俺は他の連中からも解放していく。リーナはここから逃げるんだ」

「わかった」

そして二人はその場で別れた

リーナはドアをこじあげ、煉は近くにあった鏡へと近づいた

静かに冷たい鏡へと彼が優しく触れる

水面に手を当てているかのように鏡の中で波紋が広がった

吸い込まれていくように、煉の体が鏡の中へ引きずり込まれる

彼が向かう先は彼が作り出す近道

その近道に向かって、彼の体全体が入っていった

鏡の世界はあるはずが無い

ただの金属の塊だ

そんな金属の塊を煉は武器にすることが出来た

鏡そのものを武器として使うわけでは無かった

サファイアの元に行けば、血に塗れたはずのハンナが目を覚ましていた

元々殺すつもりは無い

だが、人間をやめた姿を見ていると生かしておいても目障りだと思つた

「鳥人間が。後でジワジワとなぶり殺してやるから待ってるよ」

「煉、他のやつらは？」

「騎士団のメンバーは気絶させたただけだ。連中は生きている」

囚われているままのサファイアへと煉は近づいた

鎖を外し、解放を確認する

そのままサファイアへと逃げるように目で合図した

そして次の部屋へと……

部隊に皆が目印とした教会にリーナは辿り着いた

ここまで人間に見つかることなく、逃げることに成功したが、油断は出来なかった

ここにゴーレムやサファイアたちが辿り着くまでに時間はかかるだろう

中には目立ったまま逃げる者もいるはず

ここで気長に待つしか出来なかった

「……」

「逃げる事が出来たのに、なんで待つんだよ」

「！……！」

後ろから話しかけてくる人物の声に心臓が飛び出すような衝撃が走った

声の主は今さつき煉の手で殺された人物だった

「仁！」

「俺も見逃そうと思ってたよ。デートだってまだしてないし」

「デートって……」

軽い口調の仁が今度は憎たらしくなかった

ただ、彼女に会うために殺された後のことも気にしていない様子だった

「煉に殺された後でもよく言えるわね」

「何、殺されることにはなれている。君が浮気相手のために俺を殺そうと考えたら喜んで死んでやる」

「……意味わからない」

驚かされたことと、敵対している自覚を持たない相手に不信感を持つリーナだった

そんな子にどうやって好かれようか

緊急事態でも彼はそう考えていた

仁が持っている精神力が恐ろしく感じられた

仁本人はそろそろ、自覚してきたのだろうか
敵を前にして何を言っているのか

リーナと出会ってから自分がおかしくなっているようにも感じられた
「ああ、俺普段こんな人間じゃないのになんでだろう。こんな気持ちになったの……」

裏で何か呟いている仁

今、背を向けている彼をなぶり殺してやろうか

リーナはそう考えていた

「はあ……」

悩みに悩んだ二人が珍しく、同じタイミングでため息を發した

しばらくして……仁が口を開いた

「さて……リーナ」

「はい？」

「俺はちよいと離れる。ちよいと用事を思い出した」

「はあ……」

「じゃあな」

突然の別れ

彼がどこに行くのか知らないが
どこか切ない感じがした

しばらくたって中には死んだ者もいただろう

マリアは血を流したまま、どこかへ行ったのだろう

血の跡が見えていた

怪物というよりは白いモヤに包まれたものではあったがどちらにしろ人間では無い

殺しに向かおうと血の跡をたどり始めた

ディグニティの技を知った今、仲間に伝えるのは今しか無かった
幸い煉の仲間は皆、部屋から出ていないか既に逃げているだろう
願わくば、仲間が生きているように……

足を引きずりながら壁にすがり、隣の部屋へと向かった
そこに黄龍がいるはず
生きていれば……

「黄龍……先生……」

「逃げるのか？」

聞こえてくる死神の声

デイグニティの姿が見えた

元の人間のままで追いかけてくる

「お前を殺すのが任務だ。今度は首を撥ねてやる」

黒い大斧を鏡から取り出した

鏡を使用した能力

今まで見た事の無い能力を持った者がそこに……

その姿は死神そのものだった

これで怪物の姿だったらもつと震えていた

だが、逃げる

逃げて彼の能力を伝える闘争が彼女を動かした

「はあ、はあ……」

すぐに殺しにかかると思っていた

だが、彼は歩いてくる

けが人を相手に本気で掛かってくるつもりが無いのだろうか

甘い考えだとマリアは思ったが、彼の持つ能力を考えると油断が出

来なかった

歩く速度が増していく

黄龍がいるかもしれない部屋のドアへと近づいた

開いている状態のドアへと向かっていく

早く……辿り着きたい

そしてドアの間近へと迫る

「……着いた」

ドアノブへ手を伸ばした

希望がもう少しでそこに……

ここで後ろを振り向いて煉がいることを確認すれば、良かったのか
もしれない
だけど、必死で逃げようとする彼女にはそこまで考えることが出来
なかった

すぐ向こうに悲劇があることも知らず……

突然閉ざされたドア

それはマリアの手によって閉ざされたわけでは無かった

閉めた記憶が無いマリアだったが、なぜドアが閉ざされたのか

ドアの向こうにいる人物を見て理解したと同時に今までに無い絶望
に包まれるのを感じた

「怪物に希望などあつてたまるか」

黒い巨体と黒い大斧

恐怖を具現化したであろう怪物がそこにたっていた

ただ神を殺すために

神の存在を否定するために

デイグニティはマリアの前で立ちはだかっていた

13 恐怖の具現（後書き）

とりあえず、更新
イエーイ

14 人の姿

神の尊厳を殺す者と呼ばれてきた
人間の尊厳を守る者と呼ばれてきた
時々わからなくなる

俺は人の尊厳を守ったことなど無い
ただ自分の正義を貫き通すだけ
友達との約束を果たすために俺はいる
人を守るため……

だが、恐怖で震えているであろう彼女を見ていて思った
今、こうして震えている姿は人間そのものだったのだから
体が光に纏って何も見えないが
ただ、震えているのはわかった

現実逃避していた
人間を殺し友達に傷つけ、その現実から逃れるために
友達との約束を盾にしてただ人を殺してきたのかもしれない
それを考えると自分の存在価値がわからなくなってきた
彼らのために生きている……はずだ
ずっとその幻想を抱えて生きているのか
時々考えさせられる

『人の姿』

残酷だった

今いる部屋は大理石で作られている

その大理石にはマリアの姿やデイグニティの姿を映し出していた
鏡、水

現実を映し出すものであれば彼はそれを移動手段として

または武器として扱うことが出来る
今、マリアの目の前にあるのは絶望だった

絶望を前にしてすぐに死ぬのだろうか

マリアの絶望をかき消す出来事があった

希望と呼ぶにはあまりにも惨い姿だが今の彼女からしたら光だった
黒い影につつまれた騎士

その影からは無数の白い人の顔が血のように赤い目をぎらつかせて
いた

デイグニティも後ろから感じる殺気と悪寒で彼の存在に気づいた

「明神！」

「仁さん！」

煉とマリアが彼の名を呼ぶ

黒い影の中で面をあげた黒騎士が静かに歩き出した

「まだ、人間の心を捨て切れていないな」

「……」

黒騎士の言葉が心の響くようだった

今まで悩んでいたことを解決してくれるのではないかと確信させる
ような人物がそこに……

「明神。俺は……」

「前にいたんだよ。神になろうとして、精神もろとも擦り切れた馬
鹿がな。気づいた時にはもう遅かったさ」

「精神もろともって……」

詳しく知りたくなった

気づけばいつのまにか変身を解いていた

「死んだのか」

「死んだのかどうかは知らない。全ては闇の中だ」

闇の中……今の自分と同じだと煉は感じた

苦悩する煉に仁はただその様子を見守っていた

しばらくして、仁が話をし始める

「友人を傷つけた罪悪感と君が虐殺で失った心が今のディグニティを作り出している。私はそう思うね」

「……お前」

「そう、さっき言った者は黒騎士という神になるうとしたんだ。それに取り付かれて結果、彼は闇武者を作り出した」

「話をやめろ。てめえは仁じゃねえ」

煉の言葉に仁が話を止める

語っていたときの表情が無となり、驚いた様子も無く彼を見ていた近くにいたマリアは何があったのかと戸惑うばかり

「いや、嬉しいね。やっと気づいてくれたよ」

後ろから聞こえてくる仁の陽気な声にマリアが振り向いた

彼は笑いながら血を流しているマリアの体に触れた

黒騎士の力で傷が癒えたマリアとその傷を受けた仁 正しくは仁を乗っ取った誰かがいる方向へと煉が怒りに満ちた表情を向ける

「マリア様、久しぶりだな」

「誰……？」

「いや、面識が無いのかな。佐々木先生は元気かな？私を最後に殺したゼウス、ヘリオス、狗神は元気かな？」

最後の部分を聞いたマリアの顔色が青ざめていった
聞き覚えのある3体の神とそれに殺された者

心当たる人物が一人いた

「闇武者……」

「JACK POT！！だけど、気づくのは遅かったかな」

仁の姿をした闇武者を前にマリアはディグニティを前にした以上の絶望に見舞われる

今まで希望と化してた彼が実は過去の敵だったなどと、悲惨な状況を前に立ち尽くすしか出来なかった

「そんな……仁さんは……」

「仁くんには許可をもらったさ。彼は聖經会潰した後で疲れていた

んだらうね。しばらく体を私に任せて眠っているよ。無論、その間私が出たことや話した内容は彼の記憶に残る。恥ずかしいことを言えば怒られるさ」

「闇の中って今……言ったのは……」

それは武自身から出た言葉だ

闇の中

それは永遠に目覚めることの出来ない世界と思っていた彼女自身の解釈だったが

「闇ってのはただ暗い世界だと思っていたかね？」

闇武者の言葉はマリアのその価値観を否定するような口ぶりだった

「黒騎士と1番生活してきた君にはわかっていると思っていた。黒騎士の中にある闇ってのは何かが……」

「アナタはさつきから何を……」

「黒騎士の存在そのものが闇だよ。神でも何でも無い。神であって神にあらず、また人であって人であらずが黒騎士。あゝい、ここテストに出るよ」

軽い口調の言葉は煉にも向けられたものだった

今まで人間に見えた仁が元々、闇そのものだと知った時が衝撃だった
「仁は生きている」

「ああ、生きている。俺が言ったのは『黒騎士』が闇ってことだよ
！ボケ、話聞けよ」

そして長い沈黙

しばらくしてその沈黙に耐えられなかった闇武者が話を続けた
静かに怒りに震える煉を嘲笑しながら

「デイグニティ。君の目に映る仁は人間だ。肉体も心も……」

「あいつは一体何なんだよ」

「ハハハ、彼は全てを超越した『怪物だよ』君の目にそう映っていても実際は怪物であることに変わりない。だけど、君やマリアとは違うんだよ」

「彼は……特別だ」

今度は煉の後ろに回りこんでいた

耳元でささやく武の言葉はどこか誘惑をしているようにも思える
だが、気色悪いことに変わりなかった

「てめえ……」

「そして、他が人であっても怪物に見える君も特別だ」

黒騎士同様に……武がそう心の中で言っているようにも思えた

「君は怪物のみを殺して人間を生かしている。良い事だよ」

「何だよ」

「煉と言う存在は黒騎士とは対なるものだ。狂気の世界で殺戮をし
た黒騎士。そして、過ちで人を殺した君」

武が手のひらを打ち鳴らした

そこから本題を始めるかのように……

「問題はそこからだ、デイグニティ。君の正義は人のためにいるこ
とだろ？美しい正義とやら」

「何が言いたい」

「人間の尊厳と生命を守ろうとするその姿はまさに神だ。正義を貫
く神。それで……そんな君に私が助けを請いたいんだよ」

武がひざまづく

神へと祈るような様だった

「マリア様を救って欲しい。彼女は唯一黒騎士を殺せる存在。なに
より1人の少女だ。たとえ神の力を持っていても少女だ。助
けてやってくれないだろうか」

仁の姿をした知らない人物が助けを請う姿を見てどこか罪悪感を感
じた煉だった

敵でありながら、かばう姿を見せる武にマリアも驚くばかり
なぜ、こんな真似をするのか

「武、何を……」

「美しく罪深いマリア様、アナタの命を守ることが出来るのなら喜
んでデイグニティへ命を捧げましょう」

「な！」

今度はマリアの後ろに回りこんだ

武が彼女を抱き寄せ、長く美しい金髪へと彼は顔を近づける
その匂いを嗅ぐかのように彼の荒い息が吹きかかってきた

「きゃっ！」

「美しい。人間も人間の心を捨てていない神、悪魔も美しい。はあ

……」

「仁さん！目を覚まして……」

マリアがいくら呼びかけようとも彼はやめようとしなかった

仁の心が戻ることも無く、武は欲望むき出しの笑顔を彼女に見せ付ける

「美しい。今まで、仁の目を通して見たが私の者にしたいと思って
いた。私の心……君に届くか？」

「やめて！やめなさい！」

「マリア、マグダラに落ちてはいけないのか」

「助けて！助けてええええ！！！」

悲痛な叫びが響く

敵である彼女の言葉が煉の心に痛く響いた

「やめる……やめるんだ……」

煉の脳裏によぎった叫ぶ人間の姿

専門学校の教室内で自分が友達を傷つける姿

人間を殺していく姿があった

マリアの叫びと友人の叫びが重なる

そして、煉の心の中で何かが切れる音がした

「調子にのるなあああ！！！」

気づけば煉は武の後ろに回り込んでいた

鏡から上半身のみを出した黒い怪物が怒りに満ちた目で武を見下ろ
し、今にも黒い大斧を振り降ろそうとしている様子だ

「その女から手をはなせええええええ！！！」

そして、黒い大斧の一撃が武へと降ろされた
鏡が割れる

武はマリアを突き放し、ギリギリのところまでデイグニティの攻撃を
よけていた

笑いながら、彼の視線はデイグニティの方へと……

蔑むような笑みでは無かった

「それが正義だ。君がマリアの叫びを聞き、過去と改めて振り返る
ようになった。君が求めていた正義だ」

「クソ野郎！」

怒りの一撃が再び

だが、その一撃は武直接では無く、彼自身を映し出している鏡に放
った

斧の刃が武の首を切るようかのように鏡に食い込んでいる

妙だと感じた武がしばらくして、その無駄な攻撃の意味をやっと理
解した

「貴様……」

不意に首を抑える

垂れているのがわかる黒い血

切れている首の肉

デイグニティの攻撃の影響が出ていることがわかった

今度は鏡から出た尻尾が武の頭部を貫いた

既に首と胴体が離れたため簡単に離れ、今やその首はデイグニティ
の尻尾に刺さっている

胴体と離れながらも武はしゃべるのをやめなかった

「なるほど、だから『鏡』か」

「鏡は真実を映し出すと同時に凶器だ。俺らの世界からかけ離れた
馬鹿には何もわかるまい」

「いやはや、最高に面白い。正義に相応しい姿では無いが、勇者そ
のもの……」

「やかましい！」

怒りで狂っていた
デイグニティが武へとさらに攻撃を加えようとする
悲しい過去を思い出させた男を殺そうと、容赦無い攻撃が繰り出されようとしていた
鏡を切り刻み、武の体がバラバラになるであろうそんな状況の中で
…… 武が笑った

鏡がすべて闇に染まる

デイグニティの動きがそれで止まった

「何……」

「周りを見てみる。君は……何人殺してきた」

武のその言葉でなぜ周囲が闇に染まったのか

気づいた時には遅かったのかもしれない

足が、手が……

体を何か冷たいものが巻きついてくる

「そんな……」

うめき声が聞こえる

彼らだと煉はすぐに気づいた

専門学校で怒り狂った彼に殺された連中

本来、罪も無い人物だ

殺された理由が気に入らず、彼らはなお煉を怨み続けていた

「ごめんなさい！ごめんなさい！ごめんなさい！ごめんなさい！」

どこか闇へと引きずりこもうとする

光も無い世界で煉の目に映ったのは怨念の塊

そして、煉の力に惚れた武の笑み

（もう離さないよ。永遠に離さないさ）

（俺らを殺しやがって……ゆるさねえ）

（化け物が！ばけものがあああ！）

「さあ、どうする？デイグニティ」

「ごめんなさい！ごめんなさい！耐えなかった俺が悪いんだ。怪物

の俺が……生きてるから悪いんだ。ごめんなさい」

死んだ学生達に謝る

これだけで自分の罪が許されるわけでは無いのはわかっている
それでも謝り続けた

自分が死ぬまで……

「待て！」

暗い世界の中、叫んだのは彼だった

黒騎士の本来の力を持った仁

彼は煉の手を握った

「彼は望んでこんな姿になったんじゃない。彼は人間だろ」

白い肌に黒い髪

黒い目からは赤い血が流れていた

悲しみか怒りかはわからないが……言葉からしてどこか悲しい面があった

「それ以上、彼を苦しめないでくれ！償えるはずだ。彼は……」

「仁……」

「助けてやる。いいだろ？助けても……」

白い手が煉の額に触れた

その手のひらから零れる光

その光が次第に煉の体を包んでいった

「仁、何を……」

何が起きたのか

気づけば、元の場所にいた

闇も消え、マリアがただ座っている

武もない

彼が乗っ取った肉体も今は元の主が戻っている

「煉……」

「仁、俺は……」

「前、殺したばかりのやつが悪戯だ。悪かったな」
なぜ、戻ったのか

困惑する煉に仁は笑った

「ただ、元の世界に戻したただけだよ」

「……殺されるべきだったんだな」

「え？」

「俺も怪物だ」

煉がつぶやいている

その言葉一つ一つが悲しい

「待てよ」

「仁、俺は償えないよ。どこにも居場所は無い。彼らが生きていたとしても……」

涙が流れる

鏡のようにすべてを映し出す涙

肌を伝う銀色の涙が耳元まで流れていく

デイグニティが泣いていた

「元から無かったんだ。俺の居場所なんて、逆に奪ってしまった。

皆の居場所を……」

「いまさら嘆いたって……」

「どうすればいい。どうすれば……」

「どうすれば……か。ふむ」

しばらく悩んで仁が応えた

「何も出来ないなら、ゆっくり考えていけばいい。視野を広げていけば見つかる。だろ？マリアちゃん」

仁と煉がマリアの方へ向いた

人間じゃないやつは本来、怪物として目に映るはずだった

そんな特性を持つ煉がマリアを見たたん、硬直する

「そんな、あんたがマリアかよ」

今まで人間の姿として映っていなかったものが本当の人間として映っている

自分の視界が戻ったことに涙を流す

「……戻ってる。何をした」

「マリアちゃんを助けたお礼だよ。武の馬鹿が変なことをしようとしたところ、あんたは助けたんだ」

「そんな理由で……いずれは殺すぞ」

「嘘つけ。もう殺せないよ。そんな純粋な子、殺せるか？黒騎士と関わったってだけで殺せるか？」

啞然とする煉

仁は心の底から自分を信じているとわかった

「お仲間が言ってたな。きっと、マリアちゃんらが化け物に見えなかったら暗殺の対象になってないだろうってね。本当に人間に優しいってことも……」

「俺は……罪だ」

「神様は煉の行為を罪だと言い張るかな、マリアちゃん」

仁の視線がマリアへと

戸惑う彼女へと答えを促した

自分を狙おうとした煉

彼の罪を許していいものかどうかも迷うところだったが

「……今回は神も見えていないようです」

マリアは空を見るように煉から目をそらしては言う

彼のやっていることが罪だと言っていたマリアが、目を背けた

その言葉を最後に彼女はそこから離れていく

残った仁は煉へと手を差し出した

「てさ、お仲間のところに帰りな」

「おい」

「皆が待ってる」

「……」

マリアも見逃した

いや、もう殺せなくなった

そう悟った煉が立ち上がっては鏡へと触れる

逃がすなんて、と思っていた

「……………」

煉は何も言わずただ、涙を流した

黒騎士の力で目が戻った

未だにその感覚はなれなかった

リーナ達の下へとたどり着くと彼らが人間に見えることに驚いた

「皆……………」

「煉、大丈夫？」

「皆、そんな顔をしてたんだ」

鏡の涙を流した

今までありえなかった煉の行為を目の当たりにして、啞然とする

「煉、今なんて？」

「皆が見えるんだ。人としての姿が……………」

「まじかよ」

忘れられない出来事だった

今まで怪物だ、悪魔だとののしってた相手が純粹な人間の姿をして

いるなんて……………」

彼らの顔を見たのとたん、地の上へと倒れこむ

「皆が見える。怖かったあんな姿じゃない、気持ち悪かったあんな

姿じゃない」

目の涙を拭いに拭った

赤くはれた目がまた彼らを見た

「皆、人のままなんだ」

生まれて初めて、自分が殺してきた怪物が実は人間だったんだと……………」

顔を伏せて泣き出した

14 人の姿（後書き）

まだいろいろ訂正中です

超展開乙はむしろ、褒め言葉です

番外編 『かつての仲間達』 (前書き)

休憩

番外編 『かつての仲間達』

聖經会との戦いの後、行く当てのない綾牙とシエリーは陽達、創世大学の学生らと行動を共にすることにした

天寧は騎士団からの命で煉の調査を続けることで山日に残ることに

……

あの戦い以降、聖經会の処理が長続きするために1度大学に戻り再開することにした

山日県から西に向かった遠い地方『関守県』

県の南、海沿いに聳える巨大な大学があった

『創世大学』

優秀な人材を生み出すためと歴史と文化を重んじ、国内そして国外の古くからある歴史へ更なる追求を求め
神々の力の秘密も少なからずあった

久々の大学に辿り着いた生徒達が懐かしむ

そして、初めて訪れたシエリーと綾牙に零が手軽に説明を行った
神々の力が集まっているとも言われているところだ

どんなものがあるか楽しみだった

「すごいね。創世大学」

「どう？満足できたかしら？活動するには申し分無いところよ」

「ほお、ヘリオスはここで生まれたのか」

綾牙が巨大な大学の前に立っている

感嘆を漏らす二人と二人を誘導している零へと人数の確認をした陽が近づいてくる

陽が零と目を合わせ、合図

今度は大学の中を案内することになった

「ご案内しますわ。ようこそ、創世大学へ」

優雅な大学へと手で示し、挨拶をする零
彼女と大学そのものが、二人の神を歓迎していた

『かつての仲間達……』

仏道

神道

ギリシャ

ローマ

アステカ

それぞれの資料がどっさりと並んでいた
サークル活動のための室内とは言え、規模が大きい
サークル内の人数が多いのなら納得できるが
それでも、アリーナー一つ分があるだろうこの広さ
シエリーは啞然とするばかり

「……え？」

「そこまで驚く必要は無いかと」

「いや、ぱねえっす……まじぱねえっす」

「さすがだな」

後ろで高評価のシエリーと綾牙を見て零は誇らしげにしていた
自分のことではないがと思いつつも鼻を高くして……

「仁タンもここにくれればいいのになぁ」

神の資料を溜めているとなれば仁も喜んでいたはず
黒騎士の力を説明しようとして今動いているところだが、いつかは訪れ
るかもしれない

その時のことを3人は想像する

きっと目を輝かせて本をあさっているかもしれないと……

「仁さんは仁さんでがんばっているでしょう」

「デュアル・イーグルとの接触を考えると、事が大きくなりそうね」
シエリーの読み通りなのかかもしれない

暗殺部隊の奇襲を聞くと大きな戦争になりかねないとの不安もあった
「どう思う？ 零ちゃん」

「防ぐ方法はいくらでもあります。慎重な交渉が1番かもしれない
ん」

「デュアル・イーグルは生半可な組織では無い」

零とシェリーの会話に綾牙が入ってくる

「過去、最低な独裁政治を行ってきた小さな国を潰してきたんだ。
俊敏な暗殺と不規則な活動。それでもあいつらデュアル・イーグル
を支持する者も多い」

「どういうことよ？」

今の言葉だけでは理解できないとシェリーが更なる説明を要求して
きた

綾牙が1冊の本を棚から取り出す

ロマノフ王朝の名が書かれた西洋の本だった

「ロマノフ王朝が滅んだ後のロシアがどんなに酷いか。それこそ格
差があるから、ロシアの国民の何%かが王朝の復興を望んでいる。

その中には能力者だっているんだからな」

「核以上の力をその再興のために使うのね」

「その力を認めてくれるやつなんてそうそういない。いるとしたら
相当の物好きか」

「権力者だつてそう言いたいのか？」

シェリーの言葉で綾牙が頷いた

「この国の皇帝陛下も私達と会った時もそんな顔だったわね」

皇帝陛下のことを思い出したシェリー

栄都で呼ばれた時、何気なく皇帝陛下の話聞いて考えていたが
よくよく考えると干渉してはいけなかったのかもしれない
権力者へ「力を貸しますよ」と示しているようなものだ

案の定、仁は聖經会が邪魔だという皇帝陛下の言葉を受け、聖經会

を潰した

力の貸与を認めたことになる

「本人は全く気づいていないだろうがな」

「あちゃ……」

黒騎士は核以上の力を持っている

多分、他の連中と比べれば格が違いすぎる

物にすれば強大な武器になるはずだ

権力者なら誰もが欲する

今後、黒騎士をめぐっての争いがあるかもしれない

「一応、脳に留めとくべきだ」

一言言っつて綾牙は本を直した

番外編 『かつての仲間達』 (後書き)

綾牙「俺の過去……」

作者「心無い神様で掲載予定」

15 殺意と恋

あの戦い以降、煉は戸惑っていた

マリアの暗殺も失敗して居場所は無いと考えていたのかもしれない
彼はホテルの入り口で座り込んで思いついていた

煉自身が見出した小さな『正義』

その正義で彼は本来の人間性を取り戻した

それも敵の言葉で……

仲間は快く受け入れてくれた

だが……組織は簡単に受け入れるはずが無い

誰もがわかつていることだった

「トップはともかく、他のメンバーも許さないだろうな」

「煉を慕うやつもいるんだから、そいつらは間違いなくキレるだろうよ」

「なら、マリア様をまた殺しに行くの？」

「煉はのらないぜ。あいつは恩人には手を出さない」

仲間は煉の背中を見ながら話す

中には何も話さず、戸惑っている仲間達を見ていらだつ者もいた

「ふざけないで」

「リーナ……」

「煉が元に戻ったのは良い。私も受け入れる。だけど、任務を捨てることは許せない」

椅子から立ち上がり、怒りを露にするリーナだけがマリア暗殺を続ける
と主張した

殺せるチャンスはいくらでもある

それを逃した煉に任せるばかりでなく、別のものが動くべきだと……
それでも他の者達はその気になることが出来なかった

「俺達はある意味あいつらに助けられたんだ。それに俺らは暗殺向
けか？煉がいるからこそ、良い作戦だと思っただけだなあ」

「まだ終わっていない！」

弱気なゴーレムの耳を引っ張り、尖った犬歯をむき出したリーナが恐ろしく感じられた

ヴェノムもヘルファイアも引きつったような笑みで固まる

1人…… サファイアだけは平然としていた

「他の国では成功してきた。今ここで止まれば私達の組織の士気にも関わる」

「リーナ。引き下がろう」

今まで黙り込んでいたサファイアが冷静に諭す

「今回は煉が提案してから上から命令が出たんだ。情報に誤りがあり、敗北したと言えば許してくれる。黒騎士がいたんだから……」
黒騎士がいないのを前提で行った作戦だったためか狂いもあつた
そう分析するサファイアにもリーナは刃向かう

敗北者の言い訳だと……

「私1人でもやるう」

「やめとけ。黒騎士に捕まるに決まっている（性的な意味で）」

ヴェノムがとめようとするもリーナは怒りで反論するのも忘れてしまった

仲間達の手を振りほどき、彼女は煉の止まりまで歩いていった

悲壮感漂う彼の背中をひどく叩き、煉の意識を自分の方に向かせた

「煉が何かを得たのはかまわない。だけど、任務は必ず遂げる」

「リーナ。おい……」

「貴方が止めるのなら殺しあっても構わない。だけど、必ずマリアの首は取る」

そっぴい残し、リーナは去っていった

煉が止めようと袖を掴もうとするも、虚しくも宙を掴む

複雑な心境の中、ただ敵地へと向かうリーナを仲間達は見ているだけだった

進化の目前で死んだ牙のことを不意に思い出した

彼は神の力を持った仲間を殺して凶悪な進化をしようとして……マリアの手で命を落とした

黒騎士の進化は無限にある

無限にあるにも関わらず、全てが危険なもの

強さを得るというメリットに対して世界に対しては多大な悪影響を及ぼすと言う事実が仁を戸惑わせた

(リーナを殺すか殺さないかは貴方にお任せします)

暗殺部隊への処刑を行う前にマリアからそう言われた理由がわかった
だが……

「マリアちゃん。俺を処刑に立ち合わせるなんて……」
納得が出来なかった

それもリーナを相手に……

「何の話ですか？」

「いや、なんで俺を処刑の場に立ち合わせたのか」

「……いえ、人手が足りなかっただけ」

笑顔で爽やかに答えるマリアに仁は怒りをぶつけるようなことも様子も見せなかった

ただ、悲しい目で彼女を見下ろしているだけ

「嘘だ。俺がリーナを殺さないってのは予想できてた。新手ないじめか？」

「いえ、なんと言いますか」

「マリア様だってあの少女を殺すつもり無かったでしょ」

近くで話を聞いていた黄龍が笑顔で答えた

彼女の真意を代弁しているとわかった時は仁の目に宿っていた悲しみも消えた

「……まじか」

照れ気味で頷いたマリアを見て目に喜びの光が戻った

「マリア様、マジ女神だ」

リーナを殺すのに躊躇ったのは仁だけじゃない
敵であつても相手は少女だ

まだ11歳

この世界から身を引いてくれればと思い、仁の行動を考えたマリア
がとつた方法は……

仁の手で逃がしてもらつたこと

だが、煉の力で結局脱獄される結果になつたが……

「結果オーライ？」

「そういうことになりますね」

マリアも仁も顔を見合わせて苦笑いする

奇妙な偶然だと……

マリアがお情けで逃がしたのは知らなかった

だが、彼女らが逃がすチャンスを作つたところで今再び暗殺を実行
することが出来る

「感謝するわよ。聖女様……だけど、自ら首を捧げているのと同じ」
日が落ちる寸前

微かに浮かび上がる月が彼女を見下ろしていた

黒い悪魔の翼を羽ばたかせ、教会の天辺にある十字架に座し、リー
ナは時を待ち続けた

まだサファイアの跡が少しばかり残る教会

仁は目の前で広がるサファイアをどうにか売れないだろうかとフラ
ンベルジエを取り出し、削り取るうとしていた

「んっ、ドリルが欲しいな」

「股間のドリルなら貸すぞ」

「鬼神さん、自重」

下らない冗談を言う鬼神にも興味を示さない

目の前にある高価な結晶を取り出すのに必死だった

「サファイアってどのくらい売れるかな」

「マリア様が大分高いって言ってたぜ。0.5で5000円だ」

「わからんとです」

「このぐらいなら100万越えるんじゃないね？」

「100万と聞いて、仁の目が異様に輝く」

「100万あれば何が出るか……」

「100万……」

物欲に輝いてしまった仁の目が鬼神にとってどこか邪悪なものに見えた

時折、色欲に燃える自分といいレベルだ

マリアがこの話を聞いていたら2時間以上の説教になりかねない

聖なるこの地で淫猥な会話も物欲の強い心も迫害されることだけは忘れなかった

「ああ、仁……前に説明したことあったけな？」

「あまり欲深くなく、謙虚でいた方がいいんすよね」

「そつだよ。今のサファイアと言い、もう一つ……あの女の子に關してもだ」

サファイアを掘り起こそうとする仁の手が止まった

鬼神がリーナの話を話していると気づくにはそこまで時間がかかるものではなかった

「リーナがどうしたって？」

「キリストは色欲をひどく嫌っている。あとはわかるだろ？」

「シスターさんをナンパする貴方に言われても説得力無いですよ」

苦笑いで言う仁に苛立ちを感じた鬼神

それでも自分にも問題はあると認め、抑え込んだ

「そつかい……」

「ん？」

「どうした？」

不自然にとまった仁に鬼神が声を掛けた

仁は黙ったまま目を閉ざし、何かを感じ取るかのような様子をとっ

ていた

鼻を動かしているところを見ると匂いがするのだろう

「リーナだ」

不意に呟いた仁の言葉に鬼神が驚いた

敵の名を呟き、周囲を見回す彼を見て近くにいることがわかった

「どこだ？どこだよ、仁……」

仁に居場所を聞こうと彼の方を見る

だが、仁の姿は既に消えていた

必死に削り取っていたサファイアを残して……

日が落ちるのにそこまで時間がかからなかった

夜になり、皆が眠りに落ちればそこでマリアを殺せる

そう策を作っていたはずが……

「リーナ」

いきなり声を掛けてきた彼の存在に絶望を感じた

「なんで、黒騎士がここに……」

「髪の毛いでわかったんだよ」

「ああ、そうですかい！」

リーナの美しく白い手が仁の頭を叩く

だが、叩く音が鳴らなかった

変わりに起きたのは能力の発動

今、リーナの手元にあるのは仁の脳だった

普通の人間であれば死ぬもの、相手は黒騎士

動きを止めるぐらいは……と思っていたが

「……あれ？」

リーナが掴んでいた脳はすぐに砂へと変わった

その砂が風で散る

砂は仁の周りを舞った

主の元に集う砂が頭部へとめり込むように入っていた

砂全部が仁の中に戻る

中では脳が作られ元に戻ったのか

ぼんやりとしていた仁の目に光が戻った

「……俺、何があったの？」

今まで暗殺で使っていた技が彼には通じない

一番の痛手だった

「クソオ……」

「駄目だよ。女の子がそんな汚い言葉を使ったら……」

リーナの額を人差し指で突く仁に彼女の苛立ちが強まった

月の如く綺麗だった少女も鬼の形相をすると恐ろしく見える

「そんな怖い顔をするなよ」

今現在進行形で惚れている仁にとって鬼の如く怖い顔も愛することが出来た

「惚れてまうやろうがー」

「うるさいわね。黙ってなさいよ」

彼に合わせるのも疲れるとリーナは無視する方向をとったが

「マリア様暗殺を続けるのか」

仁のその言葉で無視が出来なくなった

心の中を読まれている感覚があったためか

嫌悪感よりも恐怖が強かった

「黒騎士って悪趣味ね。人の心を盗んだり、殺した相手を取り込んだりして……あと、いきなり後ろに回ったり、気持ち悪い」

「Mでよかった」

「……」

1度、ひっぱたいて屋根から突き落としてやろうかと考えた

「殺したい」

「君に殺されるなら本望かな」

笑いながら言う仁に怒るのも疲れてしまった

突き落とそうという発想もすぐに消えた

悪意の無い敵を前にするのはなぜか慣れなかった

血塗られた世界と間逆は今まで避けてきたためか……

彼のように好意を見せる男に会うのも今まで無かったことだ
だが……敵だ

任務を邪魔するのであれば殺されてでも良い
排除をするつもりだったが

「こんな高いところで話すのもあれだ。お茶しようよ」
「は？」

拒む間も彼は与えなかった
リーナを連れて仁が飛び降りる
それも数十メートルあるう高い屋根からだ

「殺す気!？」
「俺はとつくに死んでいる」

飛び降りながら言う仁と驚愕するリーナを何かが包み込む
黒騎士の力を感じる
仁がそれを悪意で使っていないことはすぐにわかった

黒い闇

怨念が集う禍々しい影が二人を包む

彼が今まで殺してきた者

黒騎士の戦いで巻き込まれた者等

その人数は無数にあった

「貴方は……」

暗殺していた彼女自身も黒騎士が抱いていた暗黒の怨念を前に震え
が止まらなかつた

恐怖で一杯

今回ばかりは死について初めてなんらかの感情を抱くようになる

闇の世界を出た後に辿り着いたのは食堂だった
それもシスターや騎士団のメンバーがいる食堂
敵陣の中に送り込まれたリーナの顔を青ざめる

「まさか、騙したわね!黒騎士!」

怒りを露にしたリーナが仁へと掴みかかった

白い手に血管が浮かぶほどに、異常な力が込められている

シスターや騎士団が見ている中、仁は冷や汗をかき首を横に振り続けた

15 殺意と恋（後書き）

リーナ？

いや、アクエリオンは関係無いよ？

銀髪だけど関係ないお？

マリア？

金髪だけど、まりほ関係ないお？

名前変えようかな……

「俺が招いた客人だ。れれれれ、冷静になれ」

と仁が言いつつも、既にマリアは神の力を発動し、ガイアは頑強な木で作られた巨体を晒し、鬼神は肉体も表情も鬼の如く、ハンナは怒りの雷を音を鳴らせ……

それぞれが、いまにも戦闘態勢に入ろうとしていた

「お前、敵だぞ！」

さつき辿り着いたと途端に力を解放した鬼神も信じられないと言うような表情で仁へと言い放った

「庇うのかよ。またマリア様を殺しに来たのかもしれないじゃないか」

「ないない」

「いや、殺しに来た」

仁は笑顔で庇うものも、それも虚しくリーナがあっさり否定したもちろん、シスター達やマリア達が警戒を強めるのも無理無かった神の力を発動させたマリアが静かに近づいてきた

「なぜ、ここに来たのですか？」

「貴方を殺しにきました。マリア……」

マリアの問いに当たり前かのように答えるリーナ

その答えは周囲の怒りをさらに増長させた

無粋な輩が聖域に踏み込んだその怒りは強く、恐ろしいものだった

そんな中、明らかに場違いなオーラを出す男が二人

庇う姿を見せる仁

そして……

「待たれよ。マリア様」

静かに食事を取る黄龍だった

コーヒーを置き、周りをなだめるかのように前が出る

「私も仁同様、この子を客人として招き入りたいと思っている」

黄龍の提案を快く思う者は少ない

それを理解しつつも彼は続けた

「リーナの行動に関してはこの黒騎士と私が責任を負うことにする。異論はあるか？」

それは信頼できる者からの言葉だった

マリア達は次第にその怒りを抑えていく

「仲間に責任を負わずつもりはございません。その役目、私にも背負わせてください」

「待て待て！」

やりすぎたとマリアの言葉、黄龍の言葉をとめたのは仁だった

申し訳なさそうな表情で苦笑いをしていた

「悪かった。申し訳ないです。ただ、リーナと食事を取ろうとしていただけだ」

「……はい？」

「あれだよ。その……」

言うのを躊躇おうとしている様子でもあったが照れくさそうにモジモジしながら、何とか言葉にすることが出来た

「……デートだよ」

その言葉で彼らがいる食堂が凍りついたのは言うまでも無い
幼い子と18になる男のデートなどと……

仁とリーナを囲む人間皆が、冷めた目を向け始めた

『焦り』

新鮮だからか、まんざらでも無い……

いや、ありえない……リーナはただ否定し続ける

黒騎士がどんなに愛を注ぎ込もうと（他人からすると相当変態ではあるが）否定し続けるつもりだった

「あんななんかに興味無い」

「どうやったら、心を開いてくれるかな」

まぶしくも無ければただ無垢な笑みを浮かべる者を見ると殺したくなる

人の過去も知らず……よく惚れるものだと、嫌悪感に塗れた表情を仁に向けた

「なんでこんな馬鹿な真似を……」

「なんでだろうなあ」

「モジモジすんな、キモイ」

どんな罵声も愛として彼は受け止める

その時の表情が優しく、暖かい笑顔だった

仁の愛は歪んでいるものなのか

異常なほどの性愛を彼は抱いていない

ただ優しく、包み込むような愛が目に見えるようだった

そう……かつての牙が自分に向けた温もりとも言えた

あの温もりが今度は違う人間に向けられている

なぜか、嫉妬のような感情が彼女の心に沸いていた

神の申し子そして女神『マリア』

生まれて初めて嫉妬という感情を抱いた時だった

「ありえない。私がこんな感情を抱くなんて……」

ベッドの上でグッダリと寝込むマリア

いつのまにか独り言を呟いていた

黒騎士の牙が死んで以降、久しい呟きだった

それでも珍しいとも思っていない

人間だからか……心を抱いているだからかも……

「ああ、わかんない。ムシャクシャする！」

綺麗で長い金髪をクシャクシャ掻き毟つても結局は元に戻る

何度も何度も……マリアは苛立ちが抑えられず自分の髪をいらった

「……何でだろう」

「何で、君のような子がこの世界に入ったんだろうか。納得できな

「いよ。教えてくれないか」

「私かなんか暗い過去を持ってここの入ったとか考えてるの？」

その言葉は仁の心を悟っているかのようだった

仁の目は明らかに可愛そうな者を哀れむような目

その目は明らかに今の自分を救おうとしている目だった

「いやね、そんな目でそんなこと言われるなんて」

「ウホツ、良い目。聞いて悪かったのなら謝るよ。紅茶どうぞ」

「ありがとう」

仁がいつものまにか入れた紅茶

リーナはその紅茶を口にした

馬鹿が入れた紅茶がどんな味なのか

「あ、おいしいわね」

「そうか？良かった」

紅茶の淹れ方が以外に上手なことに驚いた

ふんわりと芳しい花の香り

どこか癒される

「アールグレイ？」

「マリアから勧められたんで飲んだらおいしかったわけだ」

「いいわね。意外と好みよ」

「遠まわしな告白か何か？」

「いや、ちがう」

どんな些細なボケも返してくれるリーナが愛らしく思えた

仁がほんわかな笑顔をしているのがどこかイラつく

……がその苛立ちもアールグレイの匂いで飛んでいく

「俺はもう昔を語ったよ。リーナ、君のことが知りたい」

「……」

仁がどんなにお願いしてもリーナは語ろうともしない

その様子から語るのも辛い過去なのかと、不安そうな表情をする

「そんなに話したくないか」

「もう誰の手でも解決できない。煉の過去や貴方の過去なんて比に

ならない」

「…………え？」

「捨てたのよ。もう……………必要無いってね」

「そうか」

捨てたのなら良い……………それ以上はいらない

仁は目の前にある自分のカップにも紅茶を注いだ

「君がそう言うなら、俺も諦めよう」

「ああ、そりゃ良かったわね」

「んじゃ、今の君を愛させてくれ」

「…………おい」

相手に仕切れないとそっぽを向くリーナの横顔

彼はただその横顔を見ていた

何もついていない

ただ、愛らしい人形を眺めているような笑み

その笑顔にはもう慣れてしまった

煩わしさも既には消えていたが、最早空気だ

マリアも殺せない、任務に進展無し

帰ろうかとも思っていた

……………黒騎士を利用して殺させるか？とも考えたが

「変なこと考え〜ない」

既にそれも考慮している

油断ならなかった

リーナが戻ってこない

不安になった仲間達の前に変わりに現れたのは神々しいまでに輝く

少女だった

もちろん、見覚えがある

つい最近まで敵としていた相手だ

「マリア……………」

時間は深夜……

そんな夜中にと1番驚いたのは煉だ

「こんな夜中に美女がたむろっていいのよ」

「大丈夫ですよ。大体、近づいてきた男は皆、あざだらけで病院に送られるので」

「そりゃ、怖いな」

ホテルの前から響く男女の笑い声

それもふざけたような会話も聞こえてきた

……日本語なところがさらに奇妙だった

「それで、何のようだ？」

「ああ、あの銀髪の女の子ですけど……引き取りにきてください」
たったそれだけのことが……

煉が顔を引きつらせて笑った

深夜に来るにしてもくだらない用件だったと

「わかった。近々、連れ戻しに行く」

「後、もう一つ……」

マリアから手渡された資料

唐突に押し付けられたそれを煉は目を通した

「……『黒騎士レポート』？なんでこんなものを俺に、これこそ凶虎の連中に渡せばいいもの……」

黒騎士とは違う自分とは関係無かった

返そうとするとマリアが拒絶する

「凶虎と1番関わりが深いのは貴方です。かつて刃を交えた者同士なら行方不明になった凶虎について理解をしやすいと」

「生きてるかどうかわからない。いまさら救えつてのならばパスするぜ」

「黄龍先生が言っていました。その人はそう簡単に死なない子だって」

黄龍のどこからそんな自信が出てくるのか問い詰めたかった

だが、ここまで言われればどうでも良くなってきた

「確かに戦いはしたが、殺してはいない」

「なんせ、人を助けるのでそれどころじゃなかったもんな」
後ろから話に割って入ってきたのはゴーレムだった

彼は1部始終を見ていた

その頃の記憶も煉と関わってきて1番印象の深いものだった

「命をかけた戦いを投げ出してまで人を救うなんざ、そう簡単には
できないからな」

「まあ……うん」

照れくさくなる

煉がその表情を見せまいとマリアに背を向けた

「そうだよ。なんか周りからしたらそう見えるみたいだな」

「何、このデレ率、マジ受けるんですけど」

からかつてくるヴェノムに煉は何も反応を示さなかった

赤らめた顔が元に戻るまでは振り向くことすらしない

そんな煉をゴーレム達が笑いながら見ていた

暗殺部隊……本当にそんな部隊なのか疑問になってくる光景だった

「人間くさい組織ですね」

本当に人間臭いやつだ

仁を前にしたリーナが不思議だと感じる

煉が彼を気に入るのもなんとなくわかった気がした

馬鹿者同士で分かち合えるものがあるからか

……ああ、だから私は彼の心がわからないんだ

今の平凡が信じられなかった

「夜も遅くなった。ホテルまで送るよ？」

「別にいいわよ。自分で帰れる」

静かに席から立ち、背を向けるリーナを仁は止めようとしなかった

彼女が1人でいるのを望むのなら……と黙ったまま笑顔で手を振る

気づけば、彼女は既に消えていた

自分もいつものようにリーナの後ろについていきかけた

ゆれる銀髪につられそうで……

マリアを殺すまではここから離れることが出来なかった
このまま部隊に戻ればどうなるか
長年組織にいたリーナにはわかっていた
間違いなく首を刎ねられるだろう
暗殺部隊の仲間達が許しても、その他の部隊が許さない
不安と恐怖に駆られていたか焦っていた
早くマリアを殺さなければ……
早く……

仲間達が数メートル離れるぐらい黒く禍々しいオーラが漂っている
異常なまで怒りに満ちた黒い瘴気
血でさびた黒い大鎌は最早殴るためにあるようなもの

その武器で仕事お怠った者を制裁するために彼らは来ていた

「ああ、こんなこととして上から怒られるぜ」

「……」

「ハーデスさんよ。なんか言えよ」

「ああ、駄目駄目よ？ハーデスは今『イメージナリーフレンド』と頭
の中で話してるのよ」

奇妙な会話の中、話しているのは巨体の怪物じゃない普通の男と女
人間の姿のままだった

イメージナリーフレンドと話していると言うハーデスは瘴気を放った
まま

どんなに話しかけても黙ったままだろう

生きている証かもしれない光の宿った瞳と聞こえる呼吸音

だが、奇怪な姿と何もしゃべらないところから人間とは到底思えな
い不気味な姿だった

16 焦り（後書き）

久々の更新

ごめんなさい、実習やバイトで忙しいんですよ

あ、期待してみてる人いないか^^;

地震が起きてから正直不安しかないです

ですが、負けないでください

募金は欠かさずやってます><

ボランティアは迷惑ですから……

17 不意打ち

何も無い夜

こんな夜はどうも落ち着くことが出来なかった

中国では毎晩、戦いに明け暮れていたからか何も無い世界が馴染めなかった

寂れたバーの中へとヘルファイアが足を踏み入れる

乱闘があれば参加でもしてやろうかとそう考えていた

だが、寂れたバーに人は集まらない

いるのは店の経営困難で頭を悩ませる店主とその奥さんだけだった

「久しい客人だ。何にするよ？」

「マスターのオススメは？」

「カンパリとかどうだい？まあ、俺が好きなのだけだが」

「マスターが勧めるなら大正解だ。いただく」

「OK」

少し太った店主が見慣れぬ客相手でも気楽に接してくる

こんな気の良いところで乱闘をしようと考えた自分はずかしい

今回は語り明かすだけでも気が楽になるかもしれない

この寂れた雰囲気身を任せようと、目の前に出されたカクテルを彼は手に取る

「お兄さん、目綺麗だね」

ただ、公園のベンチのところで座っていたら10もっていない少女がそう声をかけてきた

「青い宝石みたい」

「……そうかい」

穏やかに過ごすことになれないサファイア

少女に向ける笑みもぎこちないものだった

「てか、イタリアの言語って意外と話しやすいもんだな」

「お兄さん、この国の人じゃないの？」

「遠い国から来たんだよ。友達と一緒にね。座っていいよ」

こんな夜遅くに……と思っていたが、サファイアは空いている席を譲った

「お嬢さんはどうしてこんな夜に……」

「ん〜、お散歩」

「こんな夜遅くじゃ変な男がよりつくぜ」

「自信持って不細工といえるから」

と、本人は言っているが仁がここに居れば間違いなく惚れるタイプだ彼の価値基準がどんなものかは知らないが……

「それでも変態がいるんだよな。気をつけないと」

「そうですね。気をつけます」

「ああ、きいつけてな」

サファイアが夜空を仰いだ

何の変哲も無い空だ

中国では環境が悪いせいか空が汚れていた

あの頃と比べたら美しい光景だった

『不意打ち』

一昔前の某国

民衆を弾圧し、搾取

国民の権利も尊厳も無い

そんな国だった

そこで起きたテロ

デュアル・イーグル筆頭のテロが起きていた

「くそおおお!!!」

逃げ惑う敵を黒い炎で焼き尽くす

彼らは民主を弾圧する独裁政治化を守ろうとするような連中だ

いくら殺しても罪悪感など感じない

彼らが行ってきたのはそのぐらい残酷なことだ

デュアル・イーグル戦闘部隊がその制裁を与えている

ヘルファイアもかつてその中にいた

黒い炎が焼くのは肉体そのものじゃない

相手の精神、神経もろともやきつくし、動きを封じる

たったそれだけの力ではあるが、人間からしたら充分過ぎるほど強力なものだ

どんなに硬い装甲を纏った兵器に乗っていても黒い炎の前では意味も無い

「ぶっ殺してやる」

ヘルファイアが涙を流していた

黒い炎に包まれた怪物が怪物らしく無い

そんな1場面

彼は殺されている赤ん坊の死体を抱いていた

「てめえら、全員殺してやる」

同じ怒りをあらわにして敵達をなぶり殺していく怪物達

政治家が中心に集う閣内で3体の怪物が人々を殺していく

ところどころ形成された青い結晶の中には今まで悪の限りを尽くしてきた政治家がいた

「いい装飾品だな。だが、コレクションとしては飾れない」

サファイアが大剣を振るう

中にいた政治家ごと装飾が砕け散り、中にいた者も絶命した

独裁政治家の命が散る最後の瞬間

美しい散り方だとサファイアは笑った

そうやって独裁政治家を潰してきた

今までは前線で戦ってきたヘルファイア

そして、死体を残さないために暗殺を担ってきたサファイア

彼らはそれぞれの部隊で戦ってきた
煉と出会ってから……全てが変わった

多くの過ちを犯した者がよくこの組織に入る
煉もその1人だった

煉はある意味、組織に影響を与えた人間
誰もが認める存在だった

サファイアもヘルファイアも次第に彼に惹かれるようになった

組織内は分裂しているようなものだった

それはトップに近いものだけであり、その部下は違っているが……

「ああ、また喧嘩かよ」

「やってらんねえな、おい」

互いに盃をかわす中のサファイアとヘルファイアはまさに言い争う
トップと正反対

勝利の盃を交わすのなら誰と飲んでも美味しいもの

「これどうよ？」

「美味しい」

「ブラン・ド・ブルーってやつだ」

「なにそれ、俺の目にちなんでか？」

自分の瞳の色と重なる酒が美味しかった

辛口ではあるが、口に合う

「幸福の青い酒って意味だ」

「この酒の青は幸せを呼ぶだろうな。だが、俺の青結晶と違う。不
幸をなんたらかんたらってやつで……」

「でも、俺は幸せだ」

「その会話まじ、勘弁。そんなに欲求不満か」

「……ヴェノム口説いてくる」

つまらなそうにその場から離れるヘルファイアの姿が面白い
渋々去っていく

その後、煉にご執心のヴェノムへとセクハラをしたヘルファイアへと猛毒の制裁が加えられたのは言うまでも無い

部隊の再編

数少ない暗殺部隊へと煉が任命された

それを聞いた時、彼に付き添っていたゴーレム、ヴェノム

そして彼に興味を持つ者達が集った

それが今結成された13人の暗殺部隊

周り曰く『ノリと勢いの部隊』

煉を筆頭とすれば確実な暗殺が出来る

強力な部隊であった

ホテルへと向かうリーナがあまりにも気になった

気になったせい、結局リーナに嫌々言われながらもついていくことに

「貴方って人は……黒騎士って本当に意味わからない生き物ね」

「本当にな……正直、日が浅いからな」

「以外ね。何ヶ月なの？」

「2ヶ月だ」

「はい？」

2ヶ月で黒騎士の力を使いこなしているところが信じられ無かった
思っているものよりも扱いやすいものなのか

それとも彼に素質があるか

次第に気になってきた

「黒騎士？」

「ほえ？」

「晩御飯まだなんだけど、一緒にしない？」

「喜んで！」

早すぎる返事

仁の満面な笑顔が夜の暗さを掻き消す

そこで二人が行った先は夜のレストラン
安っぽく、気軽に入れることが出来た

サファイアが話をしていた
好奇心

暗殺部隊と直に言うのはさすがに相手も驚くだろうから作業員と言
う風には言ったが
仲間との出会い

突然の新入りの登場

そして今の仕事についても

「俺のお友達がさ。相手に恩を感じてもう、仕事どころじゃなくて
……」

笑いながら語るサファイアの話が少女は楽しそうに聞く
まるで作り話を楽しむかのように

その笑顔を見るたびに語るのが楽しくなる

「その友達さ、最初はいろいろ辛い過去があつてさ。俺達仲間を裏
では信頼してたけど、表では角とがらせてたんだよ」

「いい人なの？」

「いい人さ。弱い者の味方だ。最近になって彼が変わったんだ。あ
る人に出会って俺らに心を開くようになってな」

「……お友達なのに心開いてくれなかつたの？」

「まあ、いろいろあつてな。腕は良いけど、頑固な感じ」

いつのまにか仲間のことを語るのが楽しくなってきた

少女が楽しそうに聞いてくれるのが嬉しかったか止まらない
この子はどうか知らないが自分にとっては楽しい時間だった

ヘルファイアも同じように語っていた

店の店主も奥さんも話に交わり、聞いている

名前の無い客人

そして自ら『黒い奴隷』と話す客だ

「以前に君に似た雰囲気の客人が来たんだよ」

「どんなやつだ？」

「髪のとんがった韓国人だ。鬼神って言ってたな」

「ほお」

以前来たやつがつんつん頭で鋭い歯をしているあの人間と気づくには時間がかからない

あの怪物も人間臭いところがあると……ヘルファイアが笑った

「知り合いだ。ついこのまえ喧嘩した相手だ」

「俺もよく覚えてるぜ」

後ろから聞こえた男の声が彼だと理解して、振り向いた

「ああ、こいつだ」

「ああ、間違いねえ。こんな馬鹿だ」

対面した鬼神とヘルファイア

二人があの中の時の戦いを思い出した

「ヘルファイア。あんときは本気で来なかったなあ、おい」

「ハハハ。何言ってるんだよ。最初から本気でやるつもりは無かったぜ」

「負け惜しみか？」

「勝負に勝つことだけが全てじゃない。全ては目的を果たすためのものだ。組織の一員なら覚えとけ」

カンパリを飲み干す

空のグラスをテーブルの上においては笑いながら鬼神の方へと向いた

「仲間が目的を果たすためなら命なんて投げ出す覚悟をしないとな」

「わざと負けてわざと捕まって……それでマリア様に近づいたわけか」

「カカカ……そんなところだ」

不穏な空気が漂う

寂れた店で再会した黒い炎と鬼

だが戦おうとする気配は無かった

「今回は戦う気が失せる。こんな良い店で面倒ごとなんてな」

「俺もだ。今日はマリア様もないし、仁もデートだし、他は知らないが」

「……おごるぜ。たまには強敵と語るのもいいなと思うんだが」「悪いな。むしろ、俺がおごってやりたいぜ」

敵でありながらもなぜか心許せた

似たような雰囲気の手相手であるためだろうか

安っぽい酒で語り合うのが楽しみだった

その時間がすぐに消えることも知らず……

「楽しんでるところわりいね。俺も混ぜてくれないかな？」

鬼神、ヘルファイアが振り返る

店の入り口にいる人物が声高らかにそして挑発するような口調を発しながら近づいてきた

ヘルファイアが……信じられないと言いたそうな表情を浮かべた

「冗談じゃねえぞ、なんででめえがここにいる」

「ようようよう、ヘルファイア。でめえは何遊んでるんやら……さつさとマリア様の首を奪ってしまえばいいものの」

赤い髪を逆立たせた男が近づいてくる

それも冷酷な笑みが印象に残るような、近づきがたい男だ

傷の入った片目をバンダナで覆いかくしているのも目に入る

そして威圧するかのような赤いロングコートは汚れていた

黒い染みが多く、その元が何なのか把握できなかった

「隣のやつは騎士団の連中か？よくは知らないが、自己紹介してやる」

丁寧に足を揃え、おじぎをする

「デュアル・イーグル暗殺部隊兼北ヨーロッパ支部前線部隊副隊長

……。まあヘルファイアの仲間の『バースト』だ。よろしくな」

バーストと名乗った赤い男が鬼神へと近づいた

彼が触れたのはグラスの乗ったカウンタートーブル

何をするのか……鬼神が息を飲み見守る

「挨拶代わりだ」

大きな音と共になる爆発音

鬼神達の間近で爆発が起き、その衝撃で皆が吹き飛ばされた

「くそお！」

「バースト、てめえ！」

遠くへと吹き飛ばされたヘルファイアが怒り黒い炎をその身に包む怪物と化した彼の黒炎の腕がバーストを殴りつけようとした

バーストは精神もろとも焼き尽くすその黒炎を避けようともしない手のひらでその腕を掴んではテーブルにやったのと同じ『爆発』

物理的な攻撃を喰らわないはずのヘルファイアの腕が粉々になった

「くそ……冗談じゃねえ」

「ヒハハハ、ヘルファイア！ちょっと遊びすぎだぜ？」

片腕の消えたヘルファイアを嘲笑うバースト

自分が良い状況じゃないとヘルファイアが感じ取った

「なんでてめえらが来たんだ」

「上からの命令だ。あのマリアを潰すようにってな……」

「俺達がやる任務だ」

「いやいや、マリアだけじゃねえさ」

赤く光る手のひらをヘルファイアへと向けた

その光が自分にどんな攻撃を与えるか

バーストの能力を知っているヘルファイアはとっさに避けようとする

「逃がしはしねえよ」

伸びる赤い手が間近に迫ったとき

バーストの後ろでは別の手が迫っていた

「後ろを忘れるなよ。危険物？」

鬼の一撃

強い拳がバーストの顔へとめり込んでいく

どこか刺々しいものもついているその拳で赤い体が壁を貫き吹き飛んでいった

危機から逃れた

ヘルファイアが安堵で胸を撫で下ろした

「悪いな、鬼神」

「腕が……」

「どうでもいい。とりあえず逃げるぞ」

バーストが立ち上がる前にと、ヘルファイアが起き上がった

近くで倒れている店主を起こし、担いでは丁寧に入り口から出て行く
鬼神も店主の妻を抱えて、彼の後に続いていった

これでどこまで逃げるか不安はあったが、敵が起き上がる前にと急いで走る

少女とサファイアの間で衝撃が走った

ギリギリ当たりはしないものの、その衝撃が敵襲と感じた時、サファイアが女の子を庇うかのように前に立った

「誰だ！」

サファイアのその問いに答える者はいない
変わりに夜空で浮かび上がった文字が答える

『scribble』

その名を見た時、サファイアが震えた

口に来る無い恐怖で今まで以上に

次々と宙で浮かび上がる文字

『snip』と書かれた文字が光の刃へと変わる

目に留まらない速さでその刃が斬ったのは、サファイアの右腕
噴出す青い血を見て絶望する

彼はとつさに少女の方を見て叫んだ

「逃げる！」

少女は何も言うことなく、逃げる

恐怖で立ち尽くすことなく動けたのが救いだったと心の隅っこでは
安堵したが

敵を前にして、サファイアが変身をした

右腕の無い青い結晶を纏った怪物

片腕だけで彼は青い大剣を構えた

「なんでお前がそこにいるんだ！」

暗闇の中では笑っている者がいた

金髪のシヨートが目立つ女性

彼女の手元には小さいノートと黒いペン

その姿をサファイアは知っていたのか不意にその女の名前を叫んだ

「スクリブル！」

奇妙な笑みがさらに恐怖を際立たせている

闇の中、静かに近づいてくる彼女から感じるのはただ純粹な殺意だ

17 不意打ち（後書き）

どせ？

黒騎士の説明をより詳しく丁寧にする
他人にここまで語るのは初めてだ

「リーナ、何人も殺してるだろ」

「ええ」

「悪霊つてのは後ろによくとりつくんだよ。そういった悪霊を取り
込んで君の後ろに回ることが出来るんだよ」

「だから、すぐに後ろ憑くのね」

「そうそう」

こうやって楽しそうに語るのが好きだ

リーナが好奇心旺盛な目を向けているのが愛らしい
惚けている仁に対し、リーナは心の中で黒く笑った

……黒騎士の弱点がわかるかもしれぬ

だが、聞いていて……

死なない能力

殺傷能力の高い攻撃

悪霊を駆使する能力は過去何度か見た事があつた

『冥府の騎士』

彼も似たような力を持っていた気がする

「でも、相手の傷を癒す能力と心の負を取り除くなんて、おもしろ
いわね」

「正直、マリアちゃんらも解明できていないんだよ」

「へえ」

人の少ないレストランで二人が語る

テーブルの上に置かれているジュースとパスタがさらに雰囲気を持
ち添えていた

「そうそう、黒騎士」

「ほえ？」

「噂だから確実には知らないけどさ……近くで私達みたいな神や悪魔の能力を持つやつが死んだら狂うって本当？」

リーナのその問いからふと思い出したのは牙の死に様彼は仲間を過って殺した

そして、進化……

その寸前でマリアに殺され……と、そのぐらいしか知らない

「詳しくは知らない、けどなんか危ないらしいな」

仁の言うその危ないがどれだけなのか、具体的に思い浮かべることが出来なかった

自分らに危機があるだろうか、とリーナは考え込んだ

「ありがとうね。私を送ってくれるなんて」

「恩人を相手に礼儀だけは忘れない」

騎士団の施設へと帰ろうとするマリアを送り届ける煉達

ゴーレムはただ、煉の後ろにつき、ヴェノムは後ろを気にしながら歩いていった

「何度も後ろを振り向いてどうしたんだ？ヴェノム」

「何でだろう……胸騒ぎがするんだけど」

「……煉、マリア様。俺らはちよっと様子見てくるよ」

「わかった」

ゴーレムの提案を煉は受け入れる

不安はあるものの、彼らを信じることにした

『混乱』

バーストとスクリブルそしてもう1人の怪物がここに来るまで……

デュアル・イーグルの1人が煉達の動きを観察していた

最初の宣戦布告

偽りの襲撃

そして煉を中心とした反撃

だが、その反撃も何も結果が出ないまま終わった
今は停戦状態どころか……

「リーナと黒騎士がデートってどうよ？」

「ロリコンだよ、警察に通報しようぜ」

「警察どころじゃないつす。ぶつ殺すつすよ」

心囚われた煉とリーナの行動に不信感を感じたトツプが決断を下した
マリアに敵意を見せない煉を殺すこと

そして、引き続きマリアを殺すこと

心痛む決断だった

今回現れた3人の怪物も同じであった

町の中では爆発が起きていた

バーストが触れたところからそれは発生して、町の中を混乱に陥れる

「ヘルファイアアアア、おにがぁみいいいい！！どこだぁ？」

叫び、町を破壊するバーストから逃れるヘルファイアと鬼神
彼に触れられたら粉々になるのはわかっている

どう逃げるべきか

「鬼神！どうすればいい？」

「俺に聞くな、お前の仲間だろ？」

「ああ、そつだよ！だけど……あいつの言ってることがよくわから
ねえ」

「マリア様以外にも殺す敵がいるのか？」

鬼神もバーストが口にした『マリアだけじゃない』と言う言葉に疑
問を抱いていた

マリア以外にも殺す敵がいると考えるのが妥当なのかもしれない
自分達騎士団もろとも潰すか

それとも任務を怠ろうとした煉達が

「お前らが仕事してないのがいけないんじゃないねえの？」

「あいつらは元々日本へ飛ぶ予定のやつらだったはずだがなあ」

「裏切りものと思われたんだろ？さっさと逃げろよ」

片腕の無いヘルファイアがまともに戦えるとは思えなかった

1本しかない腕で店主を担いでいるところだ

これ以上は体力がもたない

「この人、頼む」

鬼神が店主の奥さんをヘルファイアに預ける

「おい、鬼神!？」

「来るなよ!絶対に来るなよ!」

そう言つて釘を刺す鬼神

戸惑うヘルファイアを置いて彼は街中へ出て行つた

バーストが暴れる地へと自ら踏み入つた

翼をもがれた青い結晶の戦士が横たわる

かろつじてまだ息があつた

口から流れる青い血がもがれた翼へとつく

死の寸前のサファイアを冷たくも踏みにじるは女『スクリブル』

「はぁ……マリアを殺すことなど造作も無いと思つていた。だが、
気まぐれで暗殺に行かせるべきじゃなかったわね」

宙で書いた文字は『pain』

その文字が光の粒子となりサファイアの体内に入る

彼の身に宿つたのは文字通りの『苦痛』

サファイアが悲痛な叫び声をあげた

「心臓痛む?胃も痛む?締め付けてるのよ」

さらに文字に浮かぶ『pain』

度重なる攻撃と体の中で走る激痛が彼を苦しめた

「ああ、退屈……。あんたが何も力を発揮しなかつたところが残念
よ」

苦痛で苦しんでいるサファイアの髪を引つつかみ、その顔をスクリ

ブルは覗き込む

光が消えかけている目

血の泡を吹く口元

スクリブルが優しく拭う

「いい男が残念ね」

「うるせえ……」

「声がうざい」

不意に宙で殴り書きした文字

『silent』

その文字が書かれたと同時にサファイアが何かを吐き出した
青い血に染まったそれは口の中にいつもあるものだった

舌……

スクリブルの能力でそぎ落とされたそれを見た時、サファイアが叫んだ

声にならぬ叫び

残酷な技だとサファイアが涙を流した

「何？何が言ってみなさいよ？ほら！アハハハ」

冷酷に笑うスクリブル

その高笑いが公園内で響く

「下品な笑いは嫌いだ。ゲス野郎」

聞こえてきた少女の一声

その声にスクリブルが気づいた

「誰がゲスだ……と？」

スクリブルが振り向いた先に彼女はいた

雷を纏い、電気の走る羽ばたかせた鳥人

怒りの雷を帯びた神の攻撃が何の前触れも無く始まる
地に降り注ぐ無数の雷がスクリブルへと襲い掛かった

「なによ。これ……」

遠くで天高く飛び上がった鳥人

その姿はマリアとは違う神々しさが備えられていた

「……」

……ケツアルコアトルがきた

怒りに塗れている

戦ったときは全く違うことにサファイアが驚く

夥しい血が流れる口が動いた

(ケ……ツア……ル……コ……ア……ト……ル)

それを遠くから見たケツアルコアトルが領いた感じがした

「今、お前らに死んでもらっては困る。黒騎士が消えた後にじっくり殺してやる」

怒りの雷撃が降り注ぐ

その雷撃が狙うはスクリブル

ケツアルコアトルの存在に気づいた彼女が牙を向けた

「叩き落としてやる！」

宙で書いた『kill』

その文字が光の槍へと変わった

殺しを意味するの槍が羽を貫いても体を傷つけても相手は死ぬ

死ぬはず……だった

だが、宙から降り注いだ怒りの雷撃が槍をかき消す

「おいおい……」

今まで使っていた強大な神や悪魔の力を簡単に消された

スクリブルが続いて『kill』『kill』『kill』と続け

て宙に書く

光の槍が3連放たれる

だが、雷が槍をかき消す

ずっとその繰り返しだった

「その雷はこの世界の雷じゃないわね」

攻撃能力をかき消す雷が相手だと何も出来ない

厄介なものにあったとスクリブルが一瞬引き下がろうと片足を下げる

遠くにいたケツアルコアトルはその動きを見落とさない

「はー」

掛け声と同時に地へと雷を撃ちはなった

地を削り、進んでいく

逃げようとしたスクリブルへとそれは向かっていった

「逃げられないのかしらね？」

『rock』

宙でそう書いた文字が光へ

そして巨大な岩の盾に変わった

雷を通さない

単純な発想ではあるが、逃げ道を作るチャンスが出来る

そう思っていた

スクリブルのその発想がただ、単純だと

ケツアルコアトルの口元に笑みが浮かんだ

岩を貫いて放たれた雷がスクリブルの体へと走った

体内に流れる電流が強いと、脳にまで影響が出る

心臓も止まりかねない

ただ強いだけの電流

だが、ケツアルコアトルの放った雷は時に刃のように動くことも出来る

彼女が放った2発目の雷はスクリブルの左腕を切り落とした

「ああああ！！！」

赤い血が噴出した

その腕の痛みには耐えながら、雷から解放されたスクリブルが死にも
の狂いで走る

今の危機から逃れるため……

地に落ちた書き物だけは手に取り、公園から姿を消した

残ったのは青い血に染まったサファイアだけだった

「……暗殺者だろ。表に出る必要は無いだろうに」

一言、変身を解いたハンナが言い地へと降り立った

「お前らの仲間は強いけど、完璧では無いな」

いくら言っても会話が出来ないのはわかっていた

サファイアが返事を出さないことも……

「話しても無駄か。すぐに黒騎士の下に連れて行く。あの馬鹿なら迷わずその傷を治すだろう」

爆発が起きる町

仁王立ちする鬼神をバーストが見つけた

その瞬間、爆発を起こす手の平を向けて走り出す

「だあああああ!!!」

迫ってくるバーストへと鬼神は余裕の表情を崩さない

取り出したロザリオと自信の鬼神の力を解き放ち、地獄の玉座を作った

地を割って出てくる獄炎がバーストへと襲い掛かった

その獄炎すらも彼は触る

起きたのはいつもの通り爆発だった

玉座に座る鬼神が皮肉に笑った

「冗談じゃねえぞ。原始の炎じゃねえんだ。なんでそれが触れるんだよ」

獄炎をかきわって入ったバーストが高らかに笑った

その様は薄っぺらいものに触れるかのようだった

「考えてちゃ、負けだぜ？勢いだけで人間ってのは何でも出来る。

殺人もテロもな……」

玉座に座っている鬼神の間近でバーストが舞う獄炎を椅子として座る

「俺は『爆撃者』だ。暗殺向けでは無いが騒ぎを起こす役として動いていた」

どおりで派手な技なわけだった

納得する鬼神

そして今彼が起こしている爆発が何を意味するかもそこでわかった

「ただ派手に暴れるだけじゃねえな、おい……」

「ハハハ……口が軽いからばれちった。そうだよ。もう今頃てめえ

の『マリア様』は今……魔女狩りにあっているところだろうよ」

予想通りだった

ただむやみに爆発を起こすところに裏があった

今更見抜いても遅いと鬼神が悔しさと歯軋りをする

「くそお……」

予想通りだった

どこかで大きな爆発が起きている

それも近い爆発だった

それに加えヴェノムとゴーレムの前に現れたのは黒く禍々しい巨体だった

デイグニティとは違った

漆黒の鎧を纏った半人半馬の怪物がコンクリートの地に蹄のあとを残す

デュエルイーグルに入って2ヶ月と間もない二人でも彼が誰なのかすぐにわかった

「冥府の騎士……ハーデスじゃねえか」

「何でここに来たのよ」

ヴェノムが問うもハーデスは答えなかった

何も言わないところを見ると逆に恐ろしさを感じることが出来た
冷酷な暗殺者

だが、彼が行うのは暗殺と言うよりはもっと別のものだった

それが何かは仲間である二人は知らない

教えてもくれなかった

だからこそ、恐ろしい

「命令だ……僕のお友達が殺せって……」

鋭い爪を持つ手で自分の頭を掻いた

幼い声からして本当に彼が暗殺者なのか疑いたくもなるが

ゴーレム、ヴェノムは警戒を強める

「煉……殺したくないよ……」

泣きながら言うハーデスが何をやらかすか

放たれた緑色の猛毒が様子を見る

岩石の塊が自身を守るように構える

攻撃の方法と目的がわからないハーデスと戦いが始まる瞬間だった

だが、二人を黒く禍々しい技が襲い掛かった

18 混乱（後書き）

。。。混乱しているのは小説のストーリーではなく、俺の頭です
。。。あしからず

ハーデスの中には友達がいた

無数の友達だ

男、女と人間もいれば中には喋れる馬に牛

そして変わったものではハゲタカの友達がいた

それも全てイマジナリーフレンド

霊的なものなのかどうかは知らない

それぞれの共通点は『処刑人』と名乗っていると言ったこと

ハーデスが何を言っているのか

組織の皆は理解出来なかった

リーナを除いては……

「爆発、あまりいいものじゃないわね」

レストランの間近で爆発し、ガラスが割れてもリーナは平然としていた

背中から出した黒い翼が盾の変わりとなっていたためか傷はついていない

だが、仁はガラスに刺さったまま料理だけを体を使って守っていた
黒い血を流しながら刺さっているガラスの破片を取り出していく
痛みも感じない様子で丁寧に一つずつ……

「ギガント・パフェ大丈夫かな？」

「貴方が馬鹿な真似してまで守ったものは生きているわよ。どうせ
貴方の胃の中に入るんでしょうけど」

「君と一緒に食べるんだよ」

「血まみれの顔で笑顔作らないで、夢に出てくるから困る」
「……わかった」

店の奥に隠れていた一般市民たちがおそろおそろこちらを見ていた
中には仁の様子を心配する者もいた

「心配しているんだろうが、イタリア語がわからん。あ、英語で言ってるの？ Thank you!」

「黒騎士。行きましよう」

食事を終えたリーナが立ち上がった

仁がテーブルの上を見た時、絶望の表情を浮かべたままかたまるワインのびんと同じ高さとどデカイ横幅の『ギガント・パフェ』が無くなっていた

「ちょっと、リーナちゃん。俺のデザート」

「日本人はおごってもらおうとき、こう言うのよね？」「ごちになりました」って……」

静かにそう呟いたリーナに仁が向けたのは悲しみの涙で溜まった目だった

最後の最後までとっていたデザートを一瞬で食われたために……空となったパフェのグラスと立ち去るリーナを交互に見ていった

「……あれ？俺のおごり？」

『炎上』

ヴェノムは身動きが取れなかった

岩に縛られているために手を振り上げることも動くことも……

能力で解放しようとしても能力自体が発動することが出来なかった
嘘だ……

ヴェノムが絶望した

「久しい処刑だ」

「さあ、どう料理してやろうか
しゃべっている者がいる

上を見上げればそこには声の主達がいた

「はげたかって」

「覚えているか？ハーデスのお友達だ」

飢えてヨダレを垂らしたハゲタカが話す

「嘘だ！」

「……残念だが、さよならだ」「」

馬が走り出す

両腕、両足を縛った縄が引つ張られていく

「くそお……」

力で抵抗しようにも相手は馬4頭

馬の力は並大抵のものじゃない

昔の中国でも今と同じような処刑が行われていたのを彼は知っている

今彼自身はその処刑を受けようとしていた

「子供達はどうすべきだ。煉もリーナも……彼らはどうするんだ」

「……安心しろ」「」

走りながら馬が言い放った

「……後でお前と同じ地獄に送り届けてやる」「」

「やめろ……彼らには手を出すなあ！」

「……足掻くな……」「」

絶望的な状況下で馬が言い放った一言

その後は4体ともがゴーレムの手足をちぎれるまで引つ張る

激痛と噴出す血が痛々しく見える

そんな中でもゴーレムが不安に思うことは残された自分の子供達

そして、仲間達だった

しばらくして、彼の体は血を噴出しながら無残に裂かれていった

ハーデスの近くでは体中、鳥にすればまれた跡を残し死んだヴェノ

ムと左足以外裂かれ死んだゴーレムの体があった

誰も生きていない

無残な死体と化したもの以外何も無い

殺す相手もないと受け止めたハーデスが蹄を鳴らしながら歩き去

っていった

煉達が向かった騎士団の教会へと……

「……なんだろう」

胸が苦しくなる

リーナと共に爆発したところへ来ていた仁が突然胸を抑えた
こみあがる苦痛

それがだんだんと強くなっていく

「痛い……痛すぎる……」

「痛いのは貴方の方かと思う……大丈夫なの？黒騎士」

地べたの上でもがき苦しむ仁の様子を本気で心配した

リーナが仁の手をとる

「うそ、冷たいよ？貴方……」

「はあ……はあ……」

欲情ではないことはわかった

氷のようにつめたい肌に唇が青ざめていた

異常すぎる……

「黒騎士！」

「ああ……あああ、ああああああああああああああああああ

ああああああああああああああああああああ

長い悲鳴

仁が黒い血の泡を吹き出し、黒い涙を流す

「誰か……誰かああ！」

悲鳴をあげる仁を助けようとリーナが無意識に人を呼んだ

「誰か助けて！」

「仁！」

街中を偶然通りかかった男が1人……

刺青の入った黒人の男　ガイアが慌てて彼の元へと駆け寄った

「仁！大丈夫か！」

「私は何もしてないわよ！」

「わかつている。教会に急ぐぞ！」

急な出来事なのか

ガイアが発作を起こした仁を抱えて走り出す

何も考えていない
考える暇など与えてくれない
リーナも彼に続いた

状況がわからない

煉達が辿り着いた頃には教会には傷ついた市民達がいた
突然の敵の襲来に不安を隠せない者が大勢
仲には家族が殺され悲しむ者もいた

「どうしたんだよ」

「近くの町で爆発が起きたって言うけど、どうして……」

「マリア様！」

空から聞こえる声

変身したハンナの声だとわかった時は安心したが……

彼女が抱えている者の姿を見た時の絶望感がひどかった

「サファイア……」

「サファイア！」

仲間である煉も悲しい表情で叫んだ

降り立ったハンナからサファイアを抱きとめる

死にかけている友人を見て気が動転した

「サファイア、何で……」

「敵襲です。マリア様」

「誰が彼をこんな目にしたのでですか？」

「奇妙な敵でございます」

「ケツアルコアトル、教えてくれ。誰が……」

泣きながら問う煉

ハンナの顔にも今までに無い悲しい表情を浮かんでいた
敵である相手に対する哀れみだった

だが、今の煉にそこまで読み取る余裕は無かった

「文字を使った技だ。こいつは知っていたらしいが」

「文字……」

サファイアが知っている人物と言われてもわからなかった
入って間も無い自分を憎んだ

「わからない」

「どちらしろ、我々の敵だ。殺すに値する」

怒りの雷撃を纏った翼が開く

マリアからしたらいつもの風景だった

聖域を穢すことをハンナは許しはしない

たとえそれが一般の犯罪者であっても……彼女なら八つ裂きにする

「マリア様、私は防衛を……」

「私は騎士団皆に連絡をします。デイグニティ……」

マリアが煉にも協力を仰ごうと彼の方を見る

だが、彼は既にいなかった

死にかけているサファイアを残し、彼は鏡の道を通してどこかへ行
った

わかる

彼が殺されかけた仲間のために敵を探し出したことが……

爆発が続く

バーストが触れるたびにそれが人間であっても物であっても火を噴
出しては破裂

『バースト』

その二つ名に相応しい力を彼は持っていた

バーストが触れれば地獄の玉座さえ石コロにされる

それに対するは鬼神の放つ獄炎

神と悪魔が相手であればその力は増す

「ヒヤハハハ、ヘルファイアほどじゃねえな。悪いが俺に爆発なん
ざきかねえよ？」

鬼神が手を上げる

それに合わせて宙で舞っていた獄炎がさらに高く舞い上がる
渦になりながら獄炎がバーストを囲んだ

「死にさらせやあ！」

両手を強く打ち鳴らす

それにあわせ炎がバーストの体に巻きついた

その炎に彼が触れたと途端、起きたのはバーストがいつも放つ爆発

そして周囲に黒い煙が広がる

ああ、いくら焼き殺そうとしてもこいつには効かないのだろうな

そう悟った鬼神がバーストが気づく前にその場から走り去っていった

煙が消える

そして鬼神の姿もいつのまにか消えていた

「どこに消えたんだよ。楽しくねえ」

建物に触れる

案の定、壮大な爆発でそれが崩れ落ちた

「どんだん、爆発してぶつ潰しちゃうぜ？いいのかよ？」

「ああ、手が滑ったああああ！」

別の高い家の屋根から声が聞こえてきた

飢えから降り注ぐ液体

アルコールの匂いがしたところで酒と認識したが……

「うそだろ！てめえ！」

それ以前に水分が体に付着したところでバーストが焦る

水分がついた腕から青い火が吹く

しばらくして、彼の腕が爆発した

「だあああ、くそお！」

「お？」

高いところから見ていた鬼神が不思議そうに見下ろす

たださっきの店でもらった酒瓶をかけただけが

なぜか、影響が出ている

「ほう、水に弱いのかよ」

たった水をぶっかけただけ……

それがこんなに戦況を有利にしたと思うと笑いが止まらなかった

「水だけかよ！水すげえな！カハハハ！」

「ぶっ殺すぞ！クソやろう！」

逆上したバーストの手が鬼神のいる家に触れた

家が爆発する

飛び散る破片と共に鬼神も勢いに身を乗せて飛んだ

「水に弱いやつなんて最高のジョークじゃねえか！」

「くそお……………」

「なんなら小便でもかけてやろうか？おい」

宙で獄炎を身に包み変身した

「町をこんなのにした責任とつてくれるんだろうなあ？」

急降下……………」

そして火の舞う町の中へと降り立った

ただの殺し合いになるだろうと思っていた

バーストもそのつもりでいるのだろう

血まみれの腕をやぶいた服で止血し、戦いの体勢をとっている

「まだ、来るのかよ」

「町を守るためとか言ってここに来ていいのかよ？マリアの首はも

う……………」

「そう簡単に死なないぜ。マリア様は……………」

胸ポケットから取り出したロザリオがバーストの姿を映し出した

今から殺す相手だ

この力を使うには容赦はしないつもりだった

「俺の知り合いが守ってる間はフリーダムだ。ヒハハ……………」

作り出された地獄の玉座

その玉座にいつものように腰をかける

後はどう殺すかを考えるだけ

ただ、殺しあうだけの単純な戦いになると彼は笑う

「てめえなんざワイナー一本でいけるぜ。さあ、来いよ！」

「しばらく遊んでやる……………」

19 炎上（後書き）

俺の心がヒートダウン

20 『静かな怒り』

発作を起こした仁の手をずっと握っていた
本来なら敵であるはずだ

その敵になぜ自分がこんなに心配しているのかわからなかった

「黒騎士」

顔も白くなっている

顔色と対なる黒い涙と鼻血の色がさらに際立っていた

彼を背負っているガイアの肩にも黒い血が垂れ落ちている

なぜ、こんな姿になったのか……

「ひど過ぎる、なんで……」

「お嬢さん、黒騎士の情報ってのは持っていないのか」

黒騎士の情報など……リーナは首を横に振った

「仕方ないさ。ちょっと休憩しよう。ここからなら町から離れてる
しな」

ガイア達が辿り着いたのは町から遠く離れた古い城だった

昔からある伝統的な城

観光地として客が訪れることはあった

だが、今は避難場として使われることになる

虫の息である仁をおろしてガイアが大きくため息をついた

リーナは隣で仁を心配している

死にかけているかもしれない彼をどうしたら救えるか

ずっと頭の中ではそのことばかり

「黒騎士……」

「大丈夫さ。少し収まってきている」

「黒騎士はどうなるの？」

「そうだな。説明するなら黒騎士そのものがどういったものか」

「それは知ってる。悪霊の塊で能力も無数にあるとか」

「それだけ仁が話したんなら本題に入ろう」

そして始まる黒騎士の話

ガイアは最初この言葉から話を始めた

「そうだな、進化だ」

『静かな怒り』

心無い神 武が見つけた答えなど無かった

多くの人間を殺して多くの怨念を取り込み、束縛した結果彼自身は偽りの神となった

飢えに飢えた結果、彼自身が自分を見失った

そして心無い神が生まれた

仁からその話を聞いたマリアは黒騎士とは関係無いと言ったがその話に不信感を感じたのがガイアだった

まだ仁には語っていない『進化』

もしかしたら彼が唯一知りたかったものかもしれない

「黒騎士つてのは確かに怨霊の塊だ。だから君みたいな悪魔の力：

…何の悪魔かは知らないが、他にマリア様や俺達のような神の力を持っているやつとは違う。レア物なんだよ」

「レア物……」

「ああ。同じようなものはもう語らないから、簡単に説明するけど、黒騎士には進化の可能性があるんだ。それも無数にな」

その無数という数字にイマイチ想像が出来なかったリーナ
ガイアがもう少し噛み砕いて説明しようと思った

「黒騎士は人間と幽霊に敏感でな。周りの悲しみや怒りに左右されやすいんだよ。そして、俺ら人間じゃない連中の生と死にも深く関わってくる」

「周りに流されやすいつてことかしら」

「そう捉えてもいいさ」

「で、どうなるの？人間が無数に死んだらとか……」

「正直言うと、解明されていねんだよ。唯一わかるのは近くに
いる『神の力』の持ち主が死ぬことで進化があるということ。それだ
けだ」

神の力の持ち主が死ぬことで影響が出る

その言葉でリーナの脳裏に浮かんだのがマリアの姿だった

自分らの組織が狙っているのだ

もし、誰かに殺されたのならその影響で仁がこうなっているのかも
しれない

「私達の組織が……マリアを……」

「マリア様は死なないさ。周りが死守する。それにこれは……お前
達の仲間が死んだものだな」

驚愕で言葉が出なかった

リーナが不意に燃えている町の方を見る

こんなに爆発を起こせる能力は『バースト』以外誰もいない

自分達以外の暗殺部隊がそこに来たんだとそこで始めて理解する

「でも、仲間同士で争いなんて……そんなこと……」

「お前さんの仲間が関わるならちよつとやばいかもしれないな」

ガイアの言葉は自分の仲間に対する危機感では無かった

黒騎士の力の覚醒

そして、デュアルイーグル暗殺部隊の安否に危機感を感じた

「あんなドでかい花火を打ち上げてたら人間は死ぬし、他の組織の
連中が同士討ちしたり……最悪な状況じゃねえか」

「皆が危ない……」

もうガイアの話は耳に入っていないかった

リーナが立ち上がった

仲間の裏切りに絶望を感じて、仲間の死に不安を感じて……

「みんな……」

そしてリーナは黒騎士とガイアを置いて炎上する町へと向かって走
った

ガイアは止めなかった

止める必要が無いと思っていた
だが、横になつて仁を見て……リーナが危険なところへと向か
つているのかもしれないと考えた時、彼もリーナの後に続いていった
「待てよ！お嬢さん！」

煉は二つの遺体の前で立ち尽くしていた
彼の前にいるのは無残な死体だった
かつての仲間だとわかる証もある

「……ゴーレム」

頑強な男の死体がゴーレムとわかった

彼には二人の子供がいた
その子供を残してなんで死んでしまったのか

「……ヴェノム」

無残に鳥に食われたかのような死体がヴェノムとわかった
美しくも気高い強さを持った女性だった

その美しさも今は消える

「そんな……そんな……」

泣き崩れ、煉が涙を流した
仲間の死が彼の心を苦しめた
今まで共に戦った仲間が……

馬鹿みたいに笑っていた仲間が死んでいる
その現実を受け入れることが出来無かった

「くそ……。誰がやったんだ。誰が……」

マリアとハンナが守備に回る
大きな教会へと市民達を避難させて、この中で唯一能力を持ってい
る者達が防衛に徹していた

出来ることならここで敵が来ないで欲しい

そうマリアが願っているもの……その願いも無残に消えてしまった
「誰だ!？」

奥からみえる見知らぬ男と彼が担いでいる仲間を見て唾然とする

「鬼神……」

「残念だったな」

黒こげになる鬼神を投げ捨てる

今まで彼を担いでいた男が敵と見るやいきなりハンナがケツアルコアトルの力を解放した

無言でそして、電光石火の如く速い攻撃

鳥人の怒りが宿った目には男の姿が写っていた

片腕の無い男

どんな能力があっても殺せると……

だが、もう片方の手が襲い掛かるうとするケツアルコアトルの腕に触れる

……そして爆発

「……」

腕を失う痛みなど無かった

怒りだけがケツアルコアトルを揺り動かした

「痛みが無いわけか。おもしろいな」

「貴様が鬼神を……」

「その男のことか？ハハハ、強いこと言っておきながら気絶しやがったぜ。ヒヒヤヒヤヒヤヒヤ」

高らかに笑う男が倒れている鬼神の頭を踏みにじった

「人質とつたら、すぐに怯んじまったよ。大馬鹿なやつだぜ」

その言葉からその男が外道だとすぐにわかる

そして今回の混乱の原因だと

右腕が消えた

だが、ハンナにとって苦戦するようなものでも無かった

心の中で唱える

ケツアルコアトルの雷が腕のような形となる

それが消えた右腕の変わりとなり、彼女が動かそうとすれば望みの動きが出来た

「奇怪な技だな」

「お前ほどでは無い。触れただけで爆発を起こせるなど、狂気そのものだ」

「ハハハ、最高の褒め言葉だぜえ？ 気に入ったぜ」

バーストが足元に落ちていた石を数個手にした

触れたものが爆発する能力ではあるが、石を拾っても爆発はしなかった

「バーストだ。楽しませてくれよ」

無数に持っていた石を投げつけた

ただばら撒いただけでケツアルコアトルへとぶつけるような様子は無く……

「かかってこいよ。最も、近づくことが出来るもんならな……」

罾があるとケツアルコアトルが読んだ

マリアを後ろに教会の近くへと下がらせ、雷を纏った翼が羽ばたく彼が投げた石に罾があるのなら……

踏まなければいい

そう思い、天高く羽ばたいた

その姿を見た時、バーストの口元が笑みで歪んだ

飛び立ったケツアルコアトルが突然、大きな音を立てて爆発をする

突然の攻撃に彼女自身も何があったのかわからなかった

何もわからぬまま、爆風で遠いところまで吹き飛ばされていく

その1場面を見ていたマリアが目の中の光景に啞然としていた
仲間の敗北に動揺する

「そんな……」

雷鳥の羽が舞い落ちる

命を散らすかのように、薄緑色の羽も散り落ちていった

「ハンナ！」

「……もう、届かないぜ」

距離を縮めてくるバーストへとマリアは怒りの表情を向ける

騎士団の1人としてでは無く、ただ悪を憎む人間として……

「許さない」

「許さないで結構。俺達の目的はお前だ。邪魔者を1人や二人潰したところで俺らにとっても何の影響も無い」

その言葉でマリアの怒りが頂点に達した

静かに呼吸をし、目を閉じる

彼女は心の中で祈った

悪への滅びを……

静かな怒りを露にした

バーストにもそれがわかっていた

「来るのかよ。女神様が……」

研究室から戻った黄龍が驚きを隠せなかった

爆発した町

そして大きな教会の下で光る金色の光

敵襲であることに今更気づき「しまった」と自分を恨んだ

慌てて大きな教会へと向かう

デイグニティも遠いところでさまよっていたハーデスもその光に気づく

自分らが探しているものがそこにいると二人が理解した

「そこか……」

黒い大斧を手に煉は鏡の道を通して向かう

別の場所でハーデスが無言で大きな教会の方へと振り向き、ゆっくりと歩いていった

20 『静かな怒り』 (後書き)

バイトに向けておやすみノシ

21 穢れきつた家族

目を覚ませば、そこは暗い古城だった
誰もいない

いるのは自分だけだった

「ん」。俺は一体……」

仁が覚えているのはリーナの傍で倒れたところだけ
あと、血まみれになったこと……

「へ、彼女に恥ずかしいところ見せちまったぜ……」

黒い顔の血は既に拭かれている

血を拭ったであろう白いハンカチが近くに置いてあった

「すまない」

リーナへと……今はそこにいない彼女に感謝をした

そして仁がその白いハンカチを手に取る

「何……」

視界に広がる銀色の光

仁の脳裏にその記憶は刻まれた

物を手に取ったと途端にその持ち主であろう記憶が……

リーナの過去だった

狂った男と女が捕らえたのは幼い少年だった

その子の手足を縛り上げて台所の上に放り投げる

その後は……肉切り包丁で胴体を切り落とす

そこまでは良い

見慣れているものだった

その後も……見慣れてはいるもの本来目にしてはいけな光景が起
きていた

胴体から出た内臓を食する一家

焼くこともせず、炒めることもせず

ただ生で同じ人間を食べている
そんな異常な光景の中
見覚えのある少女がいた

「リーナ……？」

親の後ろで待っている少女と少年

少女の方は髪が短く、背が小さい

が、幼い頃のリーナとわかるには時間がかからなかった

（おいしいわよ。食べてみなさい）

奇妙な笑みを浮かべ、母が少年の方に人肉を差し出した

そして、幼い頃のリーナにも同じものを与えようとした

（やだ……ママ、やめて！）

……ああ、わかった

今の光景がリーナにとって『知られたくない過去』

その過去を見て思うことなど特に無かった

ただ、この過去を知った上でアノ少女を愛せるかと聞かれたら……

答えるのが難しいものだった

「リーナ……」

『穢れきつた家族』

マリアでさえ触れる事の出来ない領域

バーストが作った石の爆弾はどういう仕組みなのか

すぐにわかるものじゃなかった

ケツアルコアトルが動いた途端、彼女が爆発した

触れたわけでも無く……近づいたわけでも無い

たった1メートルか2メートルほど飛び立ったところで襲撃を受けた

解明するには時間がかかるだろうと覚悟していた

バーストは周囲を見回している

「ハーデスが最初に来ると思っていたのに……あいつも遊んでいるのかよ。まあいい」

とりあえず……と、彼は教会の前で立つ標的へと向いた
こいつの首を狩るだけでいい
あと、この町をどうしようか

彼が悩んでいた

「まあ、いい。先にマリアちゃん。てめえのその首とってやるよ」
冷酷な笑みが浮かぶ

バーストが殺意むき出しにしているのがわかった

そのまま首を差し出してこの地を救えるのなら……そう思っていた
「その後は町そのものを全て殺して、組織そのものを壊滅に追い込んでやる」

「彼らには指一つ触れさせはしない!」

敵の一言でマリアの闘争心が頂点に達した

市民達にまで危害が及ぶなど許されない

騎士団の1人として

何より、神の力を持つ者として……

「その力で罪の無い人間を殺すなど。ディグニティが知れば許さないわよ」

「まあか。上からの命令だ。もはやディグニティがどうとか考えられないんだよ」

そうはき捨て、バーストが小石を手にマリアへとぶん投げる

それが近くまで来た時

小石が発光する

そして……マリアの目前で起きた爆発

人一人を巻き込み、紅蓮の炎が広がった

それで死ぬわけが無い

バーストの目に映ったのは黒い煙をかき消して現れた金色の女神
光に包まれたマリアが姿を現した

その光がまぶしく輝く

「おいおい、そんなことしていいのかよ？」

目を覆い、バーストが話す

「この町にはあと二人、俺の仲間がいる。そんな光放ったらそいつらが気づくぜ？」

「私にも信頼できる仲間がいます」

「シグナルか」

この場を戦場と化しようとしているマリアのやりかたに異常を感じた町の人間がいるであろう教会がすぐ目の前にあるのに……

「教会まで巻き込むのか？」

「いえ、ここは守ります」

自分がどんなに傷つけられても……

自分の組織が潰されても……

マリアの意思は固いものだった

バーストの前に立ちはだかった巨大な黄金の女神がその意思を具現化していた

町の中を走る

リーナが燃える町を見回し、仲間の姿を探した

見つかる可能性が低いのは彼女自身もわかっていた

「煉！みんなあ！」

叫んで仲間を探す最中

見覚えのある女が1人いた

片腕を無くし、もう一つの手には小さなノートと普通のペン

その道具だけで女が知り合いとわかった

「スクリブル！」

「……」

女 スクリブルがにらんできた

その目はかつての仲間に向けるものではない

敵に向ける目だった

そして、スクリブルが宙で『k i e e』と描いた

文字が光の剣となり、リーナへと放たれる

仲間の裏切りの刃を前にしても彼女は動じることなど無かった

剣の隙間と隙間を瞬間移動して、リーナが距離を縮める

スクリブルの目前まで辿り着く

黒い蝙蝠の羽を広げ、鋭く黒い爪が敵を写す

爪はのど下を……

スクリブルが書いた『k i e e』と1単語書ききれていないものがり

リーナの眼前に……

二人ともギリギリの位置にいた

「何の真似よ！スクリブル！」

「上からの命令よ。全員まとめて殺す！」

殺意に塗れた目を見て、スクリブルの攻撃を止めることが困難だと理解した

「ああ、もう駄目ね」

「もう煉もゴーレム達も……暗殺部隊は滅ぶ。存在価値も無くなつたのよ」

暗殺部隊が滅ぶ

その言葉が信じられなかった

「彼らは私の家族。その家族の存在価値が消えることなど……」

「家族ねえ、血塗られてるわね」

皮肉な笑みを浮かべスクリブルがペンを動かそうとする

そのわずかな時間

書くことに気をとられたスクリブルの背後にはリーナが人間のままでの姿で立っていた

目の前にいないと気づいた時には彼女の体に異変が起きていた

体には傷一つ無い

だが、スクリブルの周りには脳や心臓など体内の臓器や大量の血液が散っていた

体の中にあるもの全てが消えたことで、スクリブルは何一つ痛みを感じること無く絶命する

痛みも感じず……

何より自分が死んだことすら知ること無く……

何も知らず死んだかつての仲間へリーナが語る

「あなたもそうだった。ハーデスも、煉も。ほかのみんなも家族だった。かつての異常な家族じゃない、本当のぬくもりのある家族……」

心が痛み、悲しみに涙が流れる

リーナはこぶしをつくり自分の胸に持っていた

「大切な……何にも変えられないものだったのに……」

それを家族の手で壊されてしまった

悲しくて、辛い

「うそよ。こんなこと……」

上からの命令というのが信じられなかった

彼らデュアルイーグルのトップが暗殺部隊を殲滅するなど。

まして同じ暗殺部隊の刺客を送って……

「ボス、なんで……」

「なんか裏がありそうだな」

後から来たガイアが冷静に分析するように話した

「お前が家族と呼んでいた連中がまさか裏切るなんて、映画やゲームじゃよくある話だ。だが、今回は……」

「騎士団の連中は介入しないで！」

悲しみの抑え、震える声でリーナが言った

「私たちの問題は私たちが解決する。あなたであっても、黒騎士であつても誰にも介入させない」

リーナのその言葉の後、ガイアはもう何も言わなかった

目の前にいる少女を今以上に悲しませる必要も無いと、彼はその場から静かに離れていった

から静かに離れていった

鏡の道を通る中

煉の目に入ったのは悲しみで顔を伏せるリーナだった

傍にはかつての仲間であるう女が死んでいる

組織に入ったばかりの煉は見覚えはあってもその女が誰かわからなかった

リーナの元へと彼は鏡の道から抜ける

「リーナ！」

「……」

涙を流したばかりで目は赤くなり、唇には怒りと悲しみでかみ締めた跡がはつきりと見えていた

そこにいる仲間の死を悲しんでいるとすぐにわかった

「……リーナ、そいつは」

「最初の暗殺チームの仲間。あなたと組む前の仲間……」

「……そんな」

その仲間が牙を向けてくる

リーナの立場に立っていたら自分も同じようになっていたであろう

悲しむ彼女を煉はただ静かに見守ることしか出来なかった

これからどうなるのか

その不安が心の中で渦巻く

そんな二人の前に黒い巨体の怪物が足音を鳴らして近づいてきた

「……ハーデス」

最初に気づいた煉の言葉でリーナも敵となったハーデスの存在に感づいた

驚く二人に対し、ハーデスは無表情だった

ただ、顔が見えないために何かは抱いているはずだった

「なんでよ、エリック……」

「……リーナ」

今まで一言も喋らなかったハーデスが硬い口を開いた

見た目に反して幼い少年の声だった

「僕は……僕は……」

「ハーデス、いや、エリック。お前までもが……」
「……さようなら」

ハーデスのそのたった一言で始まった
煉への処刑

過去の仲間へと制裁が始まるうとしていた

まずは彼を縛り付けるところから始まった

近くにあった縄が一人でに動き、それを煉の手足を封じる
次は近くにあった化学薬品を取り扱う店からビンがひとつ、浮いて
きた

イタリア語で硫酸と書かれたそのビンが煉の顔の前まで動き、そし
て一人でに破裂した

出てきた液体が案の定、煉の顔にかかる

「ぎゃあああああああ」
目をつぶされ、顔が焼け爛れる

ハーデスがそれを確認して、次の制裁に移ろうとした

「やめて！彼を傷つけないで！」

仲間が止めるのも聞か無かった

ハーデスは黒い瘴気を放ち、それを武器に変えた

漆黒の大鎌

それを手にハーデスが見たのは煉の耳だった

「二度と、動けないように……そういわれたんだ。許してくれ、煉

……。五体すべてを切り裂く」

「ああ……くそ野郎……」

煉が悲しくため息をつく

「エリックに……こん、こんなことさせ、させるなんて……」

「煉……」

ハーデスもそれ以上は何も言わなかった

何も抵抗せず、煉がその処刑を受け入れようとしている

そんな彼を見て、ハーデスの手が震えた

殺すことへの快感か

仲間を殺すことへの悲しみなのか

誰も知ることができなかった

そして、煉の耳をそぎ落とそうとして鎌の刃を振り下ろそうとした

「煉！リーナ！」

名前を叫び、黒い怨霊達を自分の周りに漂わせながら黒騎士は現れた
ハーデスの真後ろに現れフランベルジェを背中から突き刺した
黒い鎧を砕き、肉へと深く入る

刃を奥に……奥に……

黒騎士はさらに抉っていく

「！！！！」

その痛みは今までに感じたことの無いものだった

抜き取るうとして腕を後ろに回しても、何かがその手を止めていた

周りを見れば、悪霊達が集まって纏わりついている

白い腕が体に巻きつき、黒く長い髪が足元を絡みつく

黒騎士が扱う悪霊達が彼の意のままに動いた

「彼らを殺させはしない」

「邪魔をするなあ！」

ハーデスが振りほどこうとして暴れる

黒騎士は彼から離れ、煉とリーナの元へと駆け寄った

「今のうちに逃げるぞ！」

「……エリック」

「リーナ！煉！」

黒騎士が二人を抱える

重たいとは思いつつも彼は逃げる場所を探した

見つけたのは建物の影

その影に向かって飛び込む

プールに行ったかのように黒い水しぶきが散った

そして、無音

ただ黒い水面は平面となり、元の影に戻った

21 穢れきつた家族（後書き）

花粉ひどい

22 狂気への第1歩

最悪な状況だということがよくわかった
その状況を打開するためにマリアが能力を解放した
金色の神が見下ろしている先には爆弾魔 バースト
そのバーストの周りは火と特殊な小石で包まれていた
どんな仕掛けがあるうがどうだっていい
今この場を守るためなら……

金色の拳が振られる

敵を倒すがために振られた拳

それは異常なまで巨大なものだった

だが、バーストが動揺する様子など見せない

ただ受け止めようと手のひらを向けている

「なめるなあ！」

「来いよ！女神さまよお?!」

『狂気への第1歩』

バーストの目はずっとマリアの方に向いている

意識の無い鬼神を放置して、殺したと思われるケツアルコアトルの
死体も確認せず

彼らのほかの仲間のことも忘れていた

足元にいる鬼神が起きたことに気づくこと無く……

「……へッ」

顔をあげた鬼神が笑う

片腕だけが鬼の手となり、その手で地面に触れた

地にひびが入り、その隙間からは微かな獄炎

それを確認した鬼神がただ待ち、攻撃の機会を伺った

煉の傷もふさがった

だが、目に光が戻らず本人は……

「見えない。何も……」

視覚が潰れている

絶望的な状況だ

「冗談じゃねえぞ。煉の目が……なんで……」

「ハーデスの技は神経そのものもつぶすのよ。拷問、処刑、罰則……

…変わった技を敵の体に影響を与える」

「拷問、処刑、罰則……」

「マリアに心を狂わされたがために受けることになったための罰……

…神の力で治った視覚をハーデスはつぶしたのよ」

「だから、硫酸のあとを治しても……」

視覚が消えた煉をこれ以上救うことが出来なかった

悔しさで歯軋りした仁が頭を抑えた

「くそお。ただでさえ、気分が悪いんだ。マリアが言った進化か

何かの前兆みたいだな」

「変化は無いけど……大丈夫？」

仁はただ頷いた

何も言葉を発せず……だが、どこか苦しいように見えた

光の拳が爆破　そして砕け散る

同時にマリアの手に傷が入り、赤い血が噴出した

痛みが表情が歪んだ

それでもマリアはその痛みを耐え、もう片方の拳を振った

またさつきと同じ攻撃を受けるだけ……

嘲笑ったバーストがさつきと同じ動作を繰り返す

「マリア！やめろ！」

男が叫んだ

黄龍でも鬼神でも無い

黒い炎を身にまとい、バーストの後ろをとったのは片腕を無くした

怪物

「ヘルファイア！」

マリアもバーストも驚きを見せる

予想もしなかった男の登場

それは戦況を変える出来事であった

「バーストオオオ！！！」

黒い炎の玉を放った

背後を取られたバーストの動きが1歩遅れ、反応出来なかった

「くそお……だあ！」

突然、降りかかった水しぶき

そして、顔の半分が小さな爆発を起こした

何が起きたのかと見下ろす

最高の笑みでバーストを嘲笑う鬼神

その手には赤ワインが握られていた

「ざまあねえぜ。爆発を起こす体に水ぶっかけると体が壊れて普通に戻るんだ。いやにアニメみたいでつまらねえな、おい」

「鬼神……てめえ！」

下にいる鬼神に憎しみの表情を向けるもすぐに襲い掛かる黒い火の玉の方へと向いた

間近まで迫ったその玉をバーストはまともに食らった

精神、神経そのものを焼き尽くすその炎はバーストの動きを封じる

「くそおおおお！てめえらああああ！」

「鬼神、その範囲内で技ぶつ放せ！」

「周り吹き飛ばしてもいいのかよ？」

「策はあるさ」

静かに目を閉じる

何かためらっている様子でもあったが

決心したヘルファイアが大きく息を吸い込んだ

「……サファイアアアアア！」

力強く叫んだヘルファイアの言葉

それに答えた教会の入り口付近にたっていた男が手を上げて返した
「任せろ。ヘルファイア」

サファイアが指を鳴らす

バーストを守っていた爆発の小石の周りに地響きと共に青い宝石が
姿を現した

いくつにも練成され、塔を築くかの如くそれは重なる

天高く……いつしか、マリアが操る金色の神よりも大きくなっていた
「鬼神、ぶつ放せよ」

青い結晶の塔の中に封じ込められた鬼神へと切に願う

攻撃のチャンスを逃さないでほしいと、ただ勝利の瞬間を待った

「狭い中で野朗と二人なんて誰得だよ？」

「くそお！だせえ！サファイア！だせえええええ！」

バーストの……歩けない姿と半分砕けた顔から今までの威勢が嘘の
ように思えた

鬼神は能力を開放する

強靱な肉体と怪物の牙

尖った爪がバーストの足を裂いた

「ざまあ無いぜ。もう使えない足だ。捨ててやるよ」

声にならない悲鳴が結晶内で響いた

ここでこうして叫び声を聞くのもまた悪く無いものだど鬼神は笑っ
たが

「時間が無い。さよならだ」

鬼の拳が地面を叩き割った

地割れが起こり、割れたところから現れた獄炎が満身創痍のバース
トの体を包んだ

何の変哲も無い紅蓮の炎

バーストが感じたのは熱さじゃない

とんでも無い数々の苦痛

誰が感じたものなのか把握できないものだった

「獄炎つてものは楽しいものだぜ。今まで俺に殺されたやつ死に様を味わうことが出来るみたいだぜ」

「ハア……ハア……くそ……てめえ……」

顔を抑え、荒い息で必死に言葉を発しようとするバースト

嘲笑う鬼神はずっと見ていた

様々な痛みと苦しみを感じ、今日の前にいる鬼がどんなに残酷な怪物なのか彼が感じた時

彼と戦ったことを後悔する

だが、顔に浮かんでいたのは狂気の笑みだった

「ヒヤハハハ、俺以上に残酷じゃねえか」

青い結晶が消えた

血の煙が舞い、その中からは男を引きずって鬼神が歩き出した
侵略者をつぶしたことを証明するため

バーストの死体をマリアの前に投げ捨て、一言……

「一人また消えたぜ？マリア様」

勝利……

それを前にして本来なら喜ぶべきだと、心のどこかでは感じていた
だが、それ以上に不安があった

これまでに何人の神の力、悪魔の力を持つ者が死んだのか

そのせいで、今、仁がどうなっているかも……

「いい面じゃないぜ。喜んでくれよ」

「黒騎士がどうなっているか不安です。ハンナも黄龍先生も……」

マリアが何を心配しているかわかった時、鬼神の顔から笑みが消えた
ハンナはまともに動けない

黄龍もどこにいるのか調べることが出来ない

仲間の安否を気にする

「ハンナをお願いします。私は黒騎士を……」

「そんな暇を与えてくれないとかマジ勘弁だよ、くそつたれ！」

「はい？」

鬼神が汚い言葉を発したところがさらに危険が増しているようにも思えた

そのとおり……

マリア達がいる教会へと黒い巨体が近づいてきた

デイグニティでもそして黒騎士でも無い黒い姿

見慣れぬ姿の怪物が迫っていた

「マリア……」

怪物がマリアを呼んだ

禍々しい姿に幼い少年の声

「敵か」

その見知らぬ怪物が敵だと気付くにはそんなに時間が掛からなかった

煉を背負って仁達が向かったのは教会だった

マリア達がいるであろう拠点へと向かった

リーナは不安で焦りを隠せず、苦し紛れに歩く仁を気遣いながら

「仁、大丈夫？」

「大丈夫だ。早く……マリアの元へ行こう」

「わかった……ん？」

歩きながら、仁が奇妙に笑うのが怪しいと感じるリーナ

恐る恐る聞いた

「なんで、笑う？」

「いや……リーナがやさしいから」

「……」

ふざけた答えだ

そう思っていたリーナが無意識に笑っていた

優しく、温かみのある笑み

リーナ自身、自分が笑っていることに気付いていなかった

仁に言われるまで……

「リーナの笑顔も素敵だよ」

「……………」

言われた後は顔を赤くし、前を向いた
良い笑顔なのに……
仁が残念そうな顔で小声でつぶやいた

誰が望んでこんな光景を作り出したのか

ヘルファイアは地べたの上で木の棒に突き刺され……

サファイアは細かいピアノ線に巻きつかれ、細かい傷跡を刻まれた
まま血を流し……

鬼神は両手、両足を釘で刺され動きを封じられ……

マリアは茨に体を巻かれ十字架に張り付けにされていた

キリストを信ずる者にとってもっとも忌み嫌う死を今、迎えようと
している

「そんな、クツ……………」

手首に突き刺さる釘で痛む

傷跡から流れる深紅の血が木で作られた十字架を塗らす

最悪な状況の中

黒い巨体の怪物　ハーデスは彼らの死を待った

マリアの死も近い

「楽しみだ。待ってるよ」

標的とかつての仲間達の死も近い

処刑も終わり、この血塗られた殺しも終わろうとしている

ハーデスの心は歓喜で満ち溢れていた

「やっと終わるんだ。やっと……………」

22 狂気への第1歩（後書き）

どうあがいても、絶望

てか、もうなげやりっぽさがムンムンじゃないか

いや、MHFやってるせいかもね

23 散り行く家族愛

ハーデスがこの地に来る前

彼が思い浮かべていたのは家族の姿だった

異常な殺人鬼の父

売春婦の母

そんな二人の間に生まれた自分と妹 リーナの姿

狂気に満ちた親の元に生まれていながら二人は純粹に生きていた

あの日、ハーデスが親を殺すまでは……

血塗られた兄をリーナがやさしく抱きしめた

まだ兄は11歳

そして自分は8歳だった

兄が当時何をしたのか鮮明に覚えている

それがどんなに重い罪だとしても受け入れた

「大丈夫、お兄ちゃん。大丈夫だよ」

「ごめん……ごめん、リーナ……」

「私達は救われたのよ。貴方の力で……ありがとう」

親を殺した兄に感謝した

こんな残酷で醜い生活から開放されたことで、自由に解き放たれた

ことで喜んでいた

「エリック……」

リーナの愛だけが生きが이었다った

人間らしいぬくもり

その温もりだけがエリックを生かしている

共にデュアル・イーグルに入った時

馴染めない組織の中でリーナはエリックを守るように生きてきた

そして戦場では何人も殺して地位を築き自分の居場所を確保してきた

『冥府の騎士』とエリックは称された
『白銀の穢れた華』とリーナは呼ばれた
どちらも組織の中ではサファイアやヘルファイア同様に強大な力を
持つ者として評価された
後に来たデイグニティ
人としてのやさしさを備えた彼が揃ったことで真の暗殺部隊が出来
上がった

「リーナ？」

珍しく煉が話しかけてきた時だった

彼は自分ら組織のメンバーから避けていた
珍しく話しかけてきた彼を快く受け入れる

「珍しいわね。あなたから声かけるなんて」

「そうか？まあ、どうでもいいさ。唯一話しかけやすいんだよ」
彼の目に映るのは怪物の姿

心の醜い人間と自分らのような人間じゃないものたち

それに話しかけるのが恐ろしく煉は今まで避けていたのかもしれない
話しかけやすい……その言葉でリーナは興味深々で話を聞いた

「エリック……あいつは脳になんかの障害があるのか？」

「ん？まあ、お兄ちゃんはお知恵遅れだから……母のおなかの中にい
る時にいろいろあって……」

「そうか」

しばらくして……煉が笑った

「エリックは笑うと良い表情になるな」

「そう？貴方には彼が醜く見えないんだ」

「ああ。綺麗なんだよ」

綺麗……

その言葉をかけられるエリックがうらやましく思えた

「そう……」

「エリックがよく言っていたよ『リーナのおかげで今まで生きてこ』

れた』つてさ……」

「お兄ちゃんがねえ」

「大切な妹から愛されているってのがわかって……」

「愛されている……ねえ」

唯一の家族である兄を大切にしてきた

互いに助け合い、どんな困難も共に乗り越えてきた

今でも変わらず大切な家族だ

これからも……

「家族つていいな。あの頃が懐かしい」

不意に呟いた煉

その言葉を聞いたリーナが小さく笑った

「私達部隊の皆が迎え入れてる」

「……そうなのか？」

「貴方の考えはボスの言うとおり、神聖なものだ……元々、私

達の組織は人間のためにいるんだから」

「そうか」

煉も驚いていた

こんな非合法の組織の中でも家族のように接してくれるなど

親がいながらこんなこと……と一瞬ためらったが

「うれしいね。俺はまだ君達が人間に見えていないのに」

「私も……温もりがある仲間達でうれしいよ」

二人が顔を合わせて笑った

出来たばかりの家族

それが近いうちにバラバラになるとも知らずに……

『散り行く家族愛』

リーナがつけている眼帯が気になっていた

右目についた眼帯

昔何があったのか

聞こうにも聞けなかった

ただ、不思議そうに彼女を見ているだけだった

「この眼帯が気になる？」

リーナが気づいたのか、そう聞いてきた

仁は無言で何回も頷いた

「その目は……」

「エリックの人間の姿はまだ見てなかったわよね」

「ああ、まだな」

「彼はオッドアイなのよ。片目が緑、片目が私と同じ金色」

「はあ……なんで？」

走っていた足が止まる

仁の疑問に答えるようにリーナは眼帯をとった

無くなった眼帯の奥には暗い闇

底が見えなかった

「目が……」

「こついうこと」

「移植か」

片目の無い兄のために自ら片目を捧げた

兄想いの良い少女だと……

感動した仁が涙目になったのを見てリーナが苦笑いした

「どうでもいいことよ。私は兄に助けられた。親から虐待を受けた

時に兄が庇って……」

「今、兄って言ったか？」

「……」

自分が気づかぬ内に口にしてしまった事実

リーナがしまったと言いそうな表情で焦った

「ごめん、忘れて……」

「馬鹿言つなよ。つてことは君は兄に狙われているってことに……」

「お兄ちゃんの意味じゃない。お兄ちゃんは煉を慕っていた。なのにこんなことするなんて……」

突然の仲間の裏切りが信じられなかった
動機も言ってくれない

ただ、煉の失敗を許していなかった様子ではあった

「嫌だよ。お兄ちゃん……なんで……」

片目から流れた一粒の涙

唯一の肉親だったエリックに対する悲しみ

その悲しみが仁の心にも伝わってきた

(唯一の肉親に裏切られるってのは辛いことね)

(亜樹さん?)

久しく聞いた声の主に仁の涙が止まる

父からの性的虐待

今まで優しくかった父の狂気に自身の人生を狂わされた彼女がリーナの気持ちを感じていた

(たった一つの家族の温もりってね、意外と重いものなのよ。父も然り、兄も然り……)

(亜樹さんは結局、父を憎んでいた)

(今まで大切にしていたが故に捨てられた時、辛かった。だから憎んだ。いずれ、彼女も……)

堕ちるかもね……

その言葉がさらに不安を煽られたように感じた

だが、すぐに笑みを作り、たった一言で彼は……

(そりゃ、無いさ)

そう結論付ける

(……仁)

(リーナの笑み見ただろ?あれを崩すなんて、わしゃ考えたくもないわい)

(どこのジジイだよ)

(まあ、そういうことだ。亜樹さん、君の二の舞にさせないから、安心してよ)

必ず助ける……仁の決意は何よりも固いものだった

「リーナ、煉を頼むよ」

抱えていた煉をリーナの元において仁が笑顔で頼み込んだ

「ここで待っていて、もし戻ってこなかったらこの電話番号で『仁の仲間を呼んで』って言えばすぐに出るからそこで助けを求めてな」

「え……仁、何を？」

突然のことで慌てるリーナ

とりあえず、冷静にさせよう……彼女の頬を優しく摘んだ

「ここから先は俺に任せて欲しい。それだけだよ」

「……ハーデスを相手に戦うつもりなの？」

「戦わないよ。たぶん……。助けにいくんだよ」

安心させようとしている口調で仁が言う

殺すつもりも無い

そして、悲しませるつもりも……

リーナに対する気持ちを隠すことなく話した

「煉も助かるさ。そしてエリックも……非力だけど助けるよ」

「私も行くわよ！」

「NO THANK YOU」

と、間拔けな面で仁が両手を離れた

リーナが止められないようにと走ろうとするものの足には何かが絡み付いて動きが取れなかった
足元を見れば……

「なんで！黒髪！ぎゃあああああ！！！」

地面の黒い影から白い肌と血にまみれた女性の幽霊が姿を現していた
顔だけが出ているためか、真っ赤に充血してにらむその表情からは
どこか恐ろしさを感じる

そしてその女性が出しているであろう黒く長い髪はリーナを行かせ
ないと足に絡み付いている

「やめてよ！どうせ縛るんなら、まだ怖くないものを……ってじい

「いいん!!!」

いつの間にか姿を消した仁の名を高らかに叫んだ

こんな恐ろしいものを目の前に置く彼の気がしれないと

リーナは髪を引っつかんでいろいろ対策をするもの

「いてっ!」

……幽霊が小さな悲鳴をあげる

その悲鳴でリーナも引っ張るのをやめた

「お嬢さん、痛いっす」

「あ、ごめんなさい……」

涙目になっていた女性の幽霊

リーナは申し訳なさそうに頭を下げた

「ハンナ!」

教会の裏までたどり着いた黄龍が倒れている仲間を見つけた
片腕をなくした彼女を見たときは絶望してしまうかと思った
死んだのか……いや、信じたくなかった

ハンナの体を抱えて声を掛ける

「大丈夫か!しっかりしろ!」

「先生……」

わずかだが意識があった

安堵する黄龍だったが

その安堵もハンナの次の言葉ですぐに消える

「マリア様が、中央聖堂で……早く行ってください……」

「マリア様……」

「私のことは後で……すぐに向かいます」

「だが……」

「先生!」

ハンナとマリアの元へとガイアが辿り着いた

瀕死のハンナの傷を処置をしようと能力で治療効果のある薬草を生み出した

「俺がなんとかします！先生はマリア様の下へ……」

「わかった。頼むぞ、ガイア」

教え子達の必死の説得で黄龍は立ち上がった
中央聖堂へと

マリアに危険が降りかかる前にと必死で……

殺すのにためらう必要など無いつもりだった

だが、上からの命

苦しませて殺せとの命令

ハーデスは遂行することを誓った

「裏切り者は後で良い。マリア……ディグニティの穴埋めを僕がするんだ」

殺意を見せ付けるハーデス

釘で動きを封じられたマリアに鬼神が必死に叫ぶ

「マリアちゃん！やべえよ！俺ら死ぬぞ！」

「だめです！力が出ない！鬼神！」

「俺もだめだぞ！くそお！」

能力も封じられ……

処刑も間近になり……

黒騎士を殺した時と同じ絶望を感じたマリア

動こうとするたびに手首から血が噴出す

悪魔が刻んだ聖痕

その悪魔へとマリアは睨む

「絶対に許さない」

「もう誰も助けに来ないよ。強がったところで何の意味も無いよ、聖女様」

ハーデスは小さくそして憎たらしく笑った

今のハーデスを一瞬で絶望に落す方法があるとしたら何だろうか
鬼神が不意に考える

ここに彼が来たらそれこそ、最高の絶望を与えることが出来ないだろうかと思っていた

今笑っているハーデスが……

「こにやにやちわ〜」

そんな腑抜けた挨拶と後ろから突き刺さったフランベルジェを目にした時、彼の表情が一瞬で暗くなったような気がした

鬼神が……静かに笑った

フランベルジェで突き刺した後、黒騎士が放ったのは悪霊

物理攻撃では仁自身、最低ランクと称するが悪霊達を使役するには満足だと言うように彼は操っている

悪霊がハーデスの腕を突き通ったとたん、漆黒の巨体の片腕が一瞬にして傷だらけになる

深く……手の神経を切り落とし、左手を封じた

ハーデスが激痛と体の一部を失ったことで叫んだ

「うわああああああ！きさまあああああああああ！」

「呼ばれてないけどジャジャジャジャーン。あ？著作権的にだめ？」

「ふざけるなあ！黒騎士いいいいい！」

拷問器具であろう巨大な車輪を砕けた地面の破片と近くにあった巨大な木で一瞬にして作り上げた

その巨大車輪から黒い触手のようなものが出てきては黒騎士の体を巻きついていくが……

黒い一閃がその触手を切り落とした

「エリック！」

漆黒の兜の奥から見える仁の目

悲しみに涙ぐんでいるように見えた

「なぜ、泣いている？黒騎士？」

「そう見えるか？そう見えたのなら良かったよ。あんたにもまだ、心があるんだって……」

今度は悲しみから安心へと変わった

兜の奥でやさしく笑っているみたいだとハーデスには見えていた

「やさしいおにいちゃんにやさしい妹……俺じゃあ考えられないよ」

「……リーナに何を言われた」

「聞いたことと言えば……目の移植だけ。エリック……自分の体を犠牲にしてまでリーナは君を助けたんだ。わかるだろ？」

その気持ちをこんな形で壊すなんて……

また黒騎士が悲しみで震える

「他人事だと思って見過ごそうと思ってたけど……。ごめん、リーナの笑顔を思い出すとそんなこと出来ないよ」

「黒騎士……君は……」

「理由を教えてほしい。言わずに仲間らに危害を加えるんなら、容赦はしない」

フランベルジエを構える

本当なら穏便に済ますことを望んでいた

（どうだろう、黒騎士？）

（亜樹さん、彼の過去が見えない）

（ご家族が取り付いていると思うってたけど無いみたいね。私にも見えないよ）

（……闇武者）

（いや、私にも見えないな）

体内に宿るかつての敵達もハーデスの過去が見えなかった

ハーデスにとりついてる悪霊達はただ狂気と苦痛で叫び声をあげ、助けを求めている

話を聞こうかと思っても聞ける状況ではなかった

「ハーデス……」

「仁さん！」

ハーデスと黒騎士の会話をさえぎったのはマリアの叫び声だった

「逃げて！もう体が限界に近いはず……」

「牙さんの二の舞にはならないつもりだけど」

「だめ！これ以上は……これ以上は！」
マリアが何に対して心配しているのか
大体察しがつく

この中で二人も能力持ちの人間がやられた
ヴェノム、ゴーレムの姿が見えないところから彼らも……

だが、異変は血を流した時だけでそれ以降は何も無い
「俺は打ち勝ったんだよ。たぶんな……」

仁の心の中でどこか傲慢な心があった
進化をしかけた牙のようにはならない

マリアの手で殺されるなどありえない
ただ、今は……

リーナとエリックを助けるために戦う

「マリア様、すぐに助けるよ」

「仁さん！」

マリアの目に映っていた黒騎士はあの時と同じだった
今にも自我を崩壊しかねない牙

あの時も彼は笑っていた

仁の余裕の笑みと牙のあの時の笑顔が残酷にも重なる

「牙お兄ちゃん……」

二人を引き裂く結末を想像していた

だが、その結末を避けたい

黒騎士がその気持ちを抱く

「エリック！助けてやるよ！」

「黒騎士！」

4つの足についている蹄の音を鳴らしながらハーデスが大鎌を手に
襲い掛かる

対する黒騎士はフランベルジェを構えて待った

ハーデスが刃を向けようと振りかぶった

その隙を見て黒騎士が足元から滑り込む

黒い鎌の一閃はむなしくも宙を切った

彼が真下にいる

そう気づいた時、フランベルジエによる一突き
刃にある波の部分が肉を抉る

「くそお！」

「まだまだ！」

真下にいた黒騎士が今度は真後ろに回りこんでいた

今度はフランベルジエとは違う黒い剣が2本が握られている

それを今度は背中へと突き刺した

柄を回してさらに肉へと抉っていく

慣れた痛みだ

ハーデスが後ろにいる黒騎士の場所を把握する

「てめえ！」

黒騎士の頭を掴んだ

満足げな笑みを浮かべたハーデスが彼を投げ捨てた

マリアの近くまで飛ばされ、黒騎士がすぐに体制を整えた

「仁さん、何を……」

「もうこいつの仲間はいないから。助けが来ないと思って……封じるんだよ」

楽しげに笑いながら仁は指を鳴らした

フランベルジエと黒い剣2本が無数の悪霊となる

黒く長い髪がハーデスの体中にまわりついた

腕を封じ、足を封じ……

攻撃も何もさせまいと体全体に巻きついた

「くそお、動けない。動けないよう！」

「殺しはしない」

動けないハーデスへと黒騎士が1歩1歩近づいてくる

「助けたいって言っただろ。エリックだってリーナちゃんを殺すつもりなど無いはずだろ」

「縛られるなんて、いやだ……助けて！」

ハーデスの悲痛な叫び声

その叫びを受けてか

今まで彼をまわりついていた黒い髪が消えていく

「なんだよ、変わった能力だな」

そう簡単には行かないと思っていた

試しのこれがだめなら別の方法を……

だが、そこまで考え付かなかった

立ち上がったハーデスの前で黒騎士はただフランベルジェを構える
いつ来るかわからない攻撃から回避することにも集中する

「お！」

最高のチャンスと言うとこのことだろう

空から現れた黄龍の姿を見た途端、そのチャンスに乗じて黒騎士が
動き出した

走る……ただ、黄龍の姿がハーデスの目に映らないように誘導しよ
うとする

「黒騎士……」

ハーデスへと黄龍が飛び掛る

鱗をまとった腕が首を絞めた

「容赦しないぞ！侵入者があ！」

怒りで口から放ったのは金色の光線

放ちきつた後で黄龍がその場から離れた

0距離で放たれたそれはハーデスの巨体を守る鎧を砕いた
見えてくる人間の頃の姿であろう白い肉体

弱点が見えた

「死ねえ！」

黄龍が再び放とうとする光線

むき出しにされた白い肉体へと一撃を食らわそうとする

「しまった！先生！待って！」

「ああ……あああああああああ……！！！」

黄龍を止めようとする黒騎士

自分の姿があらわになり、泣き叫ぶハーデス

その場所に不穏な空気が流れた

ハーデスから出ている黒い瘴気

その瘴気を黄龍と黒騎士が吸い込む

「体が……」

「……」

何の瘴気かわからない

ただ二人が感じたのは異常なまでの倦怠感

何か絶望に自由を奪われたかのように二人が座り込んだ

動く意思を奪われた二人

ハーデスが怒り狂いその二人を殺すと黒い鎌を取り出した

「あああああ！！！！あああああああああ……！！！」

処刑用の鎌が映し出すは黒騎士

何の能力も理解していないハーデスが怒りすべてをぶつけようと襲

い掛かった

黒く禍々しい瘴気を物ともせず、彼女は立ちふさがった

兄であるハーデスから黒騎士を守るうとして……

少女の 妹の姿が目に入った時はハーデスの怒りがすぐに消えた

「……リーナ？」

「お兄ちゃん、やめて……」

「リーナ……何をしてるの？」

兄は信じられなかったのかもしれない

今まで共にすごしていた妹が……

唯一の肉親である妹の敵を庇う姿は今までに無いショックだった

「何でそんなことするの？」

「それよりもなんで私達の仲間を殺すのか……教えてよ」

サファイア、ヘルファイア、煉を傷つけ……

ゴーレム、ヴェノムを殺して……

その理由を知りたかった

「ボスは私達を裏切るようなことはしないはずよ、何で！煉達を捨てるなんて……」

ハーデスは……何の前触れも無く泣きじゃくった

その姿は幼い子供が何かからとられたかのような悲しい泣き方

リーナはただ彼の答えを待った

「ボスが変わった」

「ボスが……」

その言葉が信じられ無かった

リーナも驚きを隠せない

「ボスが変わるわけじゃないじゃない……ありえない！」

「ありえないよ……」

「ああ、ありえないよ」

泣き声が止まる

ハーデスが……顔を上げた

奇怪な怪物の面が見えた

悲しみて流したのは赤い涙

その悲しみはリーナに向けられる

「リーナが僕の前に立つなんて……抱きしめることなく、ただ立ちふさがるなんて……」

「……！！！！」

周りの鉄がひとつに集まる

それが溶けてはくつついていく

だんだんと形になってきた

「何それ……」

ハーデスが作ったのは黒い鉄で作られた鉄飾り物

女性の形を模した鉄器具で上から見ると中身は何も無かった

あるとしたら扉越しにつけられているであろう無数の針

その器具が何なのか、理解した時リーナは凍りついた

「鉄の処女……」

「リーナに相応しい死に方だよ。相応しいねえ……」

逃げようと黒い蝙蝠の翼を出した

だが、すでに鉄の処女から出た触手がリーナの体に巻きつき、逃げることも許さない

鉄の処女が無数の針がついた扉を開く

リーナの後ろまで来ては彼女をその中に入れてはエリックは楽しみ、楽しみだと笑った

処刑寸前

目の前まで迫った自分の死

リーナは逃れる方法を探そうとする

「……やめて！やめて！エリック！」

「いいよ？助けてあげても？」

簡単にそう口にしたハーデス

しばらくして、周りを見回した

「こいつらを殺していいんなら、リーナ……君だけを救う」
「……」

あまりにも残酷な選択だった

仁達の命

そして自分の命

今までそんなひどいことを言うような兄では無かったのに……

「何が、貴方をそんな残酷な人間にしたの？」

「わからないよ。僕が知りたいよ。さあ、選んで……でも、その前に言わせて欲しいんだ」

ハーデスが続ける

「唯一、願うならリーナ……。生き残って欲しい。ボスには言い訳をする。家族である君を失いたくないよ」

ハーデス……弟としてのエリックの切なる願い

その願いを聞き届けるか否か

リーナは結論を出すことなく戸惑った

「貴方の望む結果になれない」

「ほかのやつなんか忘れてよ。リーナ」

「いやだ。サファイアもヘルファイアも生きてる。煉も……」

「そして敵を庇ってる。何で？」

「永遠にわからないわよ。だって……」

うつむいていた顔が上がる

リーナも今までのハーデスのように涙を流していた

今まで純粹で無垢だった兄がこんな罪を犯したことに……

「貴方はあの時みたいに危険から私を守るんじゃない……奪おう
としてるじゃない」

「そんなこと……」

「あの時の貴方はもういないよ。もうやさしいお兄ちゃんじゃないよ。あの時のお兄ちゃんなら……私から家族を奪わなかった」

……こんな馬鹿なことをしなかった

悲しく呟いたリーナの言葉にどこか決られるようだった

「煉もサファイアもヴェノムもゴーレムもヘルファイアも……皆、

家族のようだった。あんな荒んだ家庭だからうれしかった。お兄ち

やんを煉は兄のように接してくれたりもしたし……」

大切な妹から何を奪ったのか

ハーデスが理解した時……その気持ちが自然と涙に変わった

「……リーナ」

「さようなら、エリック。地獄で会いましょう」

リーナが選択をした

自分の命を捧げて仲間とそして黒騎士達を救うため

今日の前にいる狂った兄の姿を忘れたいがために

その意思で扉が勝手にしまった

黒騎士の目に映っていたのは一人の少女の死

あの笑顔の綺麗だった少女の死

ただ家族を大切にしてきた純粹な心

その心が今、目の前で消えた

「リーナあ……………」

彼女の死で仁が立ち上がる

何かに駆り立てられ、涙を流して…………

ただ沈黙

ハーデスは呆然と立ち尽くした

目の前で血を流して死んだ妹を前にもう何も考えることが出来なかった

「リーナ……………」

「……………ハーデス」

痺気から立ち上がった黒騎士が足を引きずりながら立ち上がった

「……………リーナは……………」

目の前の状況が信じられない様子だった

そんな黒騎士にハーデスはただ一言…………

「死んじゃった」

その一言で…………

黒騎士が怒りを露に…………

彼はハーデスの後ろへと回り込んだ

肉弾戦を得意としない彼が放ったのは拳

ハーデスがその一撃で遠くへと吹き飛ばされた

「あの子を殺したのか」

ハーデスは何も理解できなかった

妹が死んで自分がどうなっているのか

目の前が真っ白で何もわからなかった

逆に黒騎士は怒りで震えた

1歩、1歩踏み出すたびに足元にあるコンクリートから毒々しいま

での黒い足跡がつく

彼自身何も気づいていなかった

怒りと絶望で出来上がったのはマリア達が恐れていた姿
黒い鎧がはずれる

重たい音を立ててコンクリートの上へと落ちる
現れたのは筋肉のついた髑髏

頭部から生えている2本角が黒い雷を帯びていた
神経も出ているであろうその外見にはなんらかの薄い膜が張られて
あるのが光の反射でわかる

手の甲から出る剣が映し出すのはハーデスの姿
今殺そうとしている相手を映し出している

「ハーデス！」

背中であたらずんでいた骨だけの翼が広がった
無意識のうちに仁が成ったその姿を直視することが出来ずハーデス
が怯えた

「いやだ！ごめんなさい！ごめんなさい！ごめんなさい！」

無論、容赦はしない

進化したかもしれぬ黒騎士が剣を構えた

「リーナ……辛いよ」

仁の口からその一言

そして、黒騎士が飛び掛る

怒りに身を委ねて絶望を切り裂くかの如く……

23 散り行く家族愛（後書き）

第2投下！

あれ？投げやりかも？

まあ、いいや

24 残ったのは炭と抜け殻だけ

マリアの目に映ったのは過去の悲劇とは違うものだった

黒騎士本人が異常なまでに苦しむほどの進化

狂った悪魔の如き、奇怪な形となるはずが

仁が成ったのは髑髏の悪魔

「何で……」

牙がなりかけた進化とは別のものだった

「何なの、その姿……」

ハーデスへと切りかかろうとするその姿はしっかりとした人の形

背中にある骨でつくられた翼と両手の甲から出ている刀身のような

ものを除けば姿は人間に近いものだった

「進化……?」

「進化だな」

「そんな……」

黄龍の言葉が信じられなかった

黒騎士の研究をしてきた彼の言葉でも……

牙の時とは大違いだ

彼が苦痛の果てに成った進化であれば……

仁は悲しみと怒りに満ちた進化であろう

どちらにしる危険な力であることに変わりなかった

「仁さん……」

マリアから出た金色のオーラ

かつて黒騎士だった牙を殺した能力

それを今解放とうとしていた

ハーデスが攻められていた

進化した黒騎士が見せ付けるそれは恐怖とは違う

彼に切り刻まれていくたびにリーナを殺したことに対する罪悪感が

強くなつていく
進化した能力のせいか

ハーデスは今まで殺してきた人間の分だけ罪悪感を感じるようになった

その罪悪感が重みに変わり、体が動かない

「幻惑……」

「忘れるなあ！本物の痛みだ！家族に裏切られたリーナの心！」

怒りを込めて放たれた拳がハーデスの胸をつらぬいた

飛び出たのは人間と同じ赤い血

その血を見て仁の髑髏となつた顔が表情ひとつ変えず、静かに言う

「てめえが人間であるはずがねえ……くそおおお！！！」

リーナの笑顔を殺した敵へと牙を向けた

むき出しになつた筋肉と神経を裂いて何かが現れた

体内に本来ある肋骨

それがいくつも重なり、鋭い牙として形を成していた

「同じようにしてやる！彼女の苦しみを味わえ！」

広がる肋骨と骨の翼

凶器と化したそれは今にもハーデスへと襲い掛かろうとしていた

残酷な死に方

エリックは今にも受け入れようとしていた

降りかかった罪悪感がそうさせた

「リーナ……僕は……」

『残ったのは炭と抜け殻だけ』

冥府の神へと罪を背負わせる

最高のひと時だった

だが、黒騎士は笑わない

怒りだけが彼を動かす

肋骨を尖らせ、不気味に光らせる

人型のアイアンメイデンの出来上がり
進化した黒騎士が処刑道具となり迫って来る
恐怖のなにものでも無かった

(制御できるか?)

そんな問いが彼に向けられる

武から……

鉄雄から……

美恵から……

亜樹から……

仁が今まで殺してきた者達から言われる

(出来ない)

(危ないわよ)

(危ないな)

(危ないぜ)

そして今夜、イタリアで死んだデュアル・イーグルの神と悪魔達も

……危機感を感じていた

(やばい……やばすぎるよ)

(やばいじゃすまないぜ、くそやろう)

黒騎士があまりにも不安定な状態となっている

『心無い神』以上の禍々しさはさらに不安を煽らせる

鋭い刀身がハーデスの体を裂く

そして地を……

木を……

さらには建物も……

禍々しく黒い瘴気を放つ黒騎士をとめる術であるマリアの力

それが解き放たれようとしていた

だが……ただ発光するだけで何も起きなかった

しばらくして、光が消える

マリアはただ驚くばかり

「そんな……使えないなんて……」

ハーデスに処刑される瞬間と同じだった

能力を開放することが出来ず、ただやれるのを待つのみ
それはほかの者も同じだった

「うそだろ」

黄龍も今起きている現象を疑っていた

今まで使えていた能力が使えない

戦うことすらも出来なくなった

「能力が……」

「黒騎士が暴走しても……能力が使えないなんて」

最悪な状況だと顔を青ざめる

もし、黒騎士が周りを殺害していくようになれば……

もし、ほかの地域にも被害が出るようであれば……

彼が世界へと飛ぶことになればどうなるか、理解したとき、マリア
の顔が青ざめる

「仁さん……」

「マリア様、逃げましょう。皆をつれて……」

「……はい」

黒騎士の力を止められないのなら最悪できることはひとつしか無い
被害を最小限に抑えること……

マリアが仲間達へと声高らかに指示を送る

「黄龍先生！シスターと市民達の非難を！」

「マリア様……傷の方は？」

「大丈夫です。早く！」

マリアに促され黄龍は行動を起こした

教会の中へと入り、市民達へと呼びかけていく

次に近くで倒れていた鬼神をたたき起こした

「サファイアを抱えて逃げて！」

「おお……わかったよ」

そう言い放ったマリアが次にヘルファイアの元へと行く
自分よりも一回り多いであろうヘルファイアを背中に抱えようとする
痛みに耐えながらそれでも軽々と彼の体を持ち上げた
その体からどうやったら力がひねり出るのだろうかと……
サファイアを抱えた鬼神が彼女を見た時、すごいなと笑っていた

進化は仁を残酷な道へと向かわせる
苦しむハーデスをぶん殴り、肋骨で敵の体を刺して仁は優位な状態
に立っていた

攻撃一つ一つが今までのと比にならない
肉弾戦が苦手と自分で言う今までの仁では無かった
ただ怒りに任せて殴り、斬り、打つ
そして……とどめを誘うと手を伸ばす

「……………」
だが、体がおぼつかなくなり、突然地へと座り込んでしまった
体内から出た肋骨も戻っていく
武器も収められ、殺意の見えない仁に戻っていった

「ああ……………」
しばらくして、彼はもう動かなくなった
電池の切れたロボットのように微動だに一つもしない
ハーデスが恐る恐る黒騎士を見る

ああ…………彼は動かなくなった
このチャンスを機にとハーデスは立ち上がった
攻撃を…………普通の人間ならそうするだろう
だが、彼は逃げた
助かるうとするため…………では無かった
黒騎士から逃げようとしている様子でも無い
罪から逃れようとしている逃げ様であった

(仁！大丈夫か？)

（仁君！）

（おい……おい！）

誰かが呼んでいる

だが、何も認識出来ない

リーナが消えてから……同時に意思が消えてしまった

何も感じることも出来ず……もう何も……

あの時と同じだ

亜樹が生み出した偽者の家族が殺された時がそうだった

ああ、自分がおかしくなる

おかしく……

（落ち着いて、仁……）

綺麗で澄んだ声が聞こえる

自分がよく知っている声だ

その声を聞いているとなぜか眠たくなる

（大丈夫よ。もう大丈夫）

「リーナ」

（エリックはもうわかっていているの。これ以上、彼を苦しめないで）

その声が誰の声なのかもうわからなくなった

ただ、言えることは聞き心地が良いということだけ……

其の声で自分は静かに眠ってしまった

火も消えぬまま、町には日が昇る

予想されていた危機も無くなった

様子を見に教会から出た後、黄龍はホツとした

いるのは倒れている仁だけ

マリアも鬼神もどこか安全なところに行ったのかもしれない

「仁……」

仁に呼びかけても彼は答えなかった

ただうつろに地を見下ろす

「仁……どうしたんだ」

もう彼は答えなくなつた

どんなに呼びかけても、もう……

「どうしたんだ、仁……」

さつきから能力が使えなくなつたり、何が起きたのかわからなかつた
とりあえず、止血が出来たことでハンナの一命は取り留めた

「ハンナ！」

「……ガイアか」

「助かつたぞ」

「……そうか」

ハンナもガイアも安堵した

だが、ほかの仲間達が心配になつてくる

「他のやつらを探してくる。おとなしくしてろよ」

ハンナはただ静かに頷いた

不安だけが残り、ただ祈るだけ……

「マリア様……みんな……」

地下にいた市民達を宥めていたマリア

そしてシスター達がヘルファイアとサファイアの治療に専念していた

あれから上でどうなっているかわからなかつた

あの仁もどうなっているのかも……

「……仁さん」

日が昇つたのがわかつた

だが、不穏な空気は消えない

そして、仁の気配も消えた

「仁……」

リーナは……不意に仲間を探す

リーナも消えていた

「リーナ……うそだろ……」

仲間も3人死んだ

皆が皆……自分から離れていった

「みんな……」

つぶされた目から涙が出る

ガラスと同じ性質を持つている涙

その涙が映し出すのは悲惨に焼かれた町

そして、数は少ないがバーストの爆発に巻き込まれた死体もあった

仲間も罪も無い市民も殺された

今まで綺麗だった町並みも地獄と化した

「何で……」

わけもわからないまますべてが終わった

最悪な結末で……

「くそお……くそおおおおお！みんなあああああああ！」

悲痛な叫びだった

仲間を失って、自分自身も機能のほとんどをやられ……

ただ何も出来なかった弱者と自分に言い、叫んだ

「あああああああああ！！！」

イタリアの小さな町

仁とリーナが訪れたレストランも消えた

煉達が泊まっていたホテルも消えた

少なからずあった思い出の場も炭と化した

かつての光を取り戻していた煉がその光をまた見失った

リーナの笑顔のために戦った仁が彼女を救えなかった

そして、町の中で渦巻いたのは静かな悲しみだけだった

24 残ったのは炭と抜け殻だけ（後書き）

訂正後

まだだ、いくよお

白銀の騎士団修道会 + メンバー紹介

マリア「あれ？私達は？」

煉「……目が見えない」

仁（魂が消えた……）

作者「ムシャムシャ（イカ天うめえ）」

孫権「外伝からチヨリース」

響「ファッ！フック！アックユー！」

陽（助けて……イカレそう）

マリア「肝心なこと忘れてた作者をただいま処刑中です」

作者「ああん、ムチさいこう／＼」

ハンナ「マリア様、ちなみにそのミスというのは……」

黄龍「大体、予想は出来ているが……私達の紹介がまだなんですよな」

鬼神「マリア様のスリーサイズは上から……」

ガイア「黙ってる。光にされるぞ」

『白銀の騎士団修道会 メンバー紹介』

騎士団の存在

元々は黒騎士率いるローマ法王の側近の部隊だったが、マリアの夫婦が亡き後、黒騎士『牙』の意志でマリアが騎士団のトップとなる今ではやっていることは工作活動

仁が黒騎士の力を手にしてからは彼に対するサポートなどを目的に活動をするようになる

マリア「思ってたんですがこの組織名つてもはや日本語でも何でも無いですよ。以後『白銀の騎士団』でよくないですか？」

作者「某カードゲームの組織名に近いから抵抗があったんですが、もう『騎士団』で通称してるんでいいや」

マリア「光にしちやろうか、われえ」

作者「仕事してます！これでも仕事してます！」

仁（魂が……助けて……）

メンバー紹介

マリア

年齢：16

特徴：155 金髪の髪型だけど、読者の好みでいろいろ変えてください

能力：『マリア』

黄金色の巨大な女神を召喚

そして、ダイレクトアタック……では無く、神の力を行使する

黒騎士の力を完全に無力化する唯一の黒騎士殺しの能力を持っている
召喚した化身を意のままに操ることも可能

同化してダメージを最小限に抑えることも可能

デメリットはあまりにも強大なために黒騎士以上の暴走もあり

そのため戦いの地に降りても能力は発動することは無い

作者「知り合いからはまあ ほ っくだよなと言われたけど、なにそれ？」

マリア「深夜アニメ枠は得意なほうじゃないっけ？」

作者「最近R18の方に走って」

マリア「聖職者の前で何を……死んでください」

煉「マリア様の力はスタドよね。もう、俺顔真つ青だよ。時止められるかと……」

マリア「全巻読破しました。メタカLOVEですね」

作者「ちゃっかり、カミングアウトしなくてもいいっす」

黄龍

年齢：30

特徴：185 中国人でオールバック

能力：『黄龍』

この世界にある気体、液体、固体を自在に操る

たとえば、酸素濃度の低い場所でも酸素をつくって体内に取り入れる
敵の血に含まれている鉄分を減少させる

水の素質を大幅に変えて毒水に変えたり、硫酸に変えたり、ビタミンCを取り入れて栄養のある飲み物にすることも可能

作者「この人の力一つで地球温暖化とか余裕つすね」

黄龍「そこまですごいものなのかどうかちよつと……」

マリア「イタリアの下水処理も大体この人の能力で綺麗な純水になりますよ」

作者「すげえよ！バイオハザードとか起こせるんじゃないんですか！？すげえ！」

マリア「『黄龍ハザード』 今年冬発売です」

黄龍「細胞までは……ごめんなさい」

ハンナ・フローレンス

年齢：16

特徴：165

能力：『ケツアルコアトル』

能力はゼウスとは違って自然界の雷を扱うのではなく、神の力や悪魔の力を消す雷を扱う

ハンナ「それだけ？」

作者「それだけ」

鬼神

年齢：20

特徴：180 犬歯の鋭いイケメン

能力：『鬼神』

地獄を具現化させる

敵が殺人鬼であれば今まで苦しめた者達の苦痛や悲しみを地獄の炎で攻撃出来る

また亡き牙の肉片をロザリオに込め、その力をさらに強化する『地獄の玉座』を使う

鬼神「シスター萌えって入れないの？シスター萌えって……」

性癖：シスターをこよなく愛する。純粹に愛して愛して愛しまくるだけ

それがセクハラという形になる

鬼神「そうそう、それ……あれ？セクハラ？」

マリア「大体、会ってます。あと年上も含むって……」

仁「熟女か！この変体め！」

鬼神「ロリコンには言われたくないな」

ガイア

年齢：20

特徴：180 顔に刺青あり 冷静沈着

能力：『ガイア』

自然界の支配

植物を自由自在に操り、枯れた木も復活させることが出来る

また、漢方薬の性質を応用してより強い薬草を作ることが出来る
相手が放つ毒素等を体に取り入れ無害なものにすることも可能

作者「特に特徴は無いんだよね。でも、強いかもな」

陽「火に弱そうね」

ガイア「否定は出来ないな。本当に火に弱いから……」
響「植物を扱ってるんだ。どこにでも種づけしてやがる。ヒャハハ
ハ、きめえきめえ」
マリア「ハッ！卑猥……」
煉「どこから来た？」
響「知るか、ポケエ！歩く生殖器！続ける！」
ガイア「歩く生殖器って……」
作者「イメージは本当に体が木なんだよ。それ以外思いつかないぜ」
鬼神「変身すると頭に無かった髪が生えるってところは？」
作者「ああ、生えるねえ」
ガイア「葉っぱだよ。ばか」

+

バースト

年齢：??

特徴：赤いコートに眼帯

能力：『爆発』

爆発全般をこなす

また、爆発物の爆破を無効化に出来る

スクリブル

年齢：??

特徴：小柄な少女

能力：『落書きを具現化』

ノートに書いたとおりの現象を起こすことが出来る

killerであればその具現化したものに触れることで死ぬ

cutであれば文字通り切る

ただし、相手に攻撃を加えるための能力で自分の傷を治すなど、治療目的では扱えない

ハーデス

年齢：13

特徴：??????

能力：『ハーデス』

拷問器具の召喚、具現化

処刑の実行

術にはまったものは能力を使用することが出来ない

また、日常生活にあるものを使った殺人も可能

マリア「最後の三つは何？」

作者「おまけです。何も無いとかわいそうだなって思って……」

ガイア「俺らはもう出ないの？え？出ないの？」

作者「これからのことは知らんです。狂ってきたけど、まあ小説だし問題無いよね」

煉「脳内フックは驚いた」

マリア「昨日食べたコンフレーク、さっき吐いて来ました」

煉「規制だろ、なんで生き残ってるか不思議でならない」

作者「ヒント：人気が無いから」

煉「ああ、納得した」

白銀の騎士団修道会 + メンバー紹介(後書き)

思い残すことはもうありません

インサニティ　く狂って踊れ、異常な虐殺者く（前書き）

ごめん、ネタが尽きたから不意に思い出したネタを投稿

え？展開読めない？

ノリと勢いで^^^

インサニティ　　く狂って踊れ、異常な虐殺者く

過去、どんな目にあってきたか覚えていない

ただわかるのは、自分が傷つけられてきたこと

痛みも感じる

悲しみも感じる

それが永遠に疼いているように感じられて狂ってしまうぐらい辛かった

自分に何があったのだろうか

思い出そうにも思い出せない

悲惨な状態となった自分を鏡で見るたびにイラついてくる

怒りだけが湧き上がってくる

その怒りをどこへぶつければ……

『インサニティ　　く狂って踊れ、異常な虐殺者く』

黒騎士達がいる町とは別のところだった

西日本の地方にあるそこは陽達が通う『創世大学』付近の町

4年前

何件か悲惨で残酷な事件が起きていた

ある事件で殺されたのは万引き常習犯の男だった

とある店で万引きをした後、店員から逃げようとして走っていた時

男がいつものように隠れ場所としている下水道への穴へと入る寸

前に何が起きたのか

店員が穴の近くで死んでいる男の死体を見つけた

頭半分が破裂して、脳も飛び出て、血まみれの姿は追いかけた店員

も悲鳴をあげるぐらい……

その血で男の首筋の裏にただ1文字『笑』と書かれていた

ある事件で殺されたのは少女を中心とした不良学生と一人の中年の男性だった

彼女らは出会い系で釣った男から金を巻き上げていた

中年の男もその毒牙にかかりそうになった時だったのか

通報した者の話では学生らも男性も胴体裂かれるなど猟奇的な殺され方をしていた

少女の胸には刃物で切った跡で『笑』と書かれ、男性の腕には『罰』と書かれていた

そして次は中学、高校の少年グループ

万引き、婦女暴行、様々な悪事をすることで有名だった彼ら

だが、ある日いつも屯っている公園のところで全員がまた猟奇的な方法で5体をバラバラにされ殺されていた

リーダー格である高校生の少年の腹には『狂』と簡単に書かれていた

以後、同じような事件が10件以上も起きていた

犯罪者

不良学生

暴走族

暴力団組員…… e t c

それも前の話で今は何も起きていない

この事件の犯人も……

被害者達に刻まれたものが何を意味するのか未だ誰もわからないまま、一般の市民達が『てけてけ』『妖怪』など都市伝説として扱っていた

日本 東部

もつとも犯罪率の高い地域

西部で起きていたあの事件が再びそこで起きようとしていた

「待てよ！俺はただ肩にぶつかっただけ……」

金髪の男の言葉を聞くことも無く、鋭い爪がのど笛を掻ききった
頸動脈ごと切り落とす

噴出す血を浴びて鋭い爪の持ち主が静かにそして残酷な笑みを浮か
べ、呟く

「殺されるお前が悪いんだよ」

その言葉を今度は別の男に向ける

「てめえもな……」

何が起きたのか理解出来なかった殺された男の仲間も首を刎ねられた
噴出す夥しい血

ここまで来たらほかの仲間達も恐怖で逃げるしか無かった

だが、誰一人として怪物の鋭い爪から逃れることが出来ない

爪を一振りするだけで、周囲に集まっていた不良達が体ごとバラバ
ラにされる

怪物が一瞬で作り上げた地獄

その地獄の中、怪物は声高らかに笑った

「笑いとまらねえ。どうすりゃ、とまるんだろう。最高だ。ウへへ

へ……」

無邪気に笑うその表情には返り血

月の光が路地裏にいる彼の姿を映し出した

血塗られた爪

使われるのかわからない古ぼけた紅の翼

阿修羅の如く6本もある腕

だが、それが仏教徒で言う『阿修羅』や古代ペルシアの聖典に出る

『アフラ・マズダー』のような神聖なものでは無いのがよくわかる
残酷で禍々しいただの『怪物』

または『狂気』

そう呼ぶにふさわしい姿だった

インサニティ く狂って踊れ、異常な虐殺者く（後書き）

訂正後

インサニティ編は全部終わってるけど、個人的に好きなキャラ
邪気眼臭プンプンするけど、きにしない

25 奇妙な事件

イタリアの町がつぶれたことがニュースに流れていた

大規模の爆弾テロ

その割りには死傷者が少なかったと言う

まあ、外国のことなどどうでも良い

……と、言わんばかりに街中にある巨大なテレビを素通りする彼
黒い髪がストレートなのか少しパーマがかかっているのか、見たと
ころわからない

半そでのパーカーを着て、胸ポケットにはチューニングキャンディ
ーの入ったケース

青いジーンズの尻ポケットには黒い長サイフ

もう片方には携帯電話

ここまで見れば一般の人間とは違うところなど何も無かった
違うところと言えば……彼の頬にナイフで掻っ切った後のような傷
跡が残っていた

片方だけだが、耳に近いところまで切り傷が入っている
通りすがりのサラリーマン、不良学生、奥様方が見る度に恐ろしげ
な顔をしては足早と逃げていく

外見だけで嫌われることにはもう慣れていた

「ケツ……」

尻ポケットの携帯電話が鳴る

折りたたみ式の電話を取り出すと、小さな画面には「A」

その名前を見た途端に携帯電話を開いた

「ジャパニーズ、OK？」

『日本人の君には敬意を表して日本語で話そうと思う』

「アハハハ、貴方は日本語が上手い。どうぞ続けてくれ」

彼は電話の向こうにいる相手に話を促した

『三日前、イタリアで起きた爆弾テロを知っているか？』

「ああ、知っている。今テレビでやってたな」

『あのテロの裏では様々な組織が関わっている』

「はあ？馬鹿どもの戯れかよ」

『いや、デュアル・イーグルと白銀の騎士団の2組織だ』
彼自身も聞き覚えのある組織の名だった

デュアル・イーグルはロマノフ王朝の再興を望む組織
騎士団はキリスト崇拝の組織

過去の栄光と神の存在を崇高しすぎたが故に争いを起こした馬鹿どもとしか捉えることしか出来なかった

「つまらねえ話だな。ただの喧嘩かよ。とつとと本題に入れよ」

『イタリアとは別にデュアル・イーグルにいる別部隊と騎士団のメンバーがその日本にいる』

「殺せばいいのか？ん？」

挑発的な問いに電話の向こうの人物が笑った

『殺しは任せる。君に任せたいのは黒騎士の調査だ』

「前々からそれを目的としてきている。ただ情報を伝えるために電話に来たのなら今すぐ切れよ。電話代がもつたいない」

「殺せ」と「つぶせ」以外の言葉以外に興味は無い

笑って「出直して来い」と言い放った

「俺にとつて有害なやつは全員、殺す。黒騎士が相手だろうがなんだろうがな」

『そうか』

声の主も仕方なしに笑った

ここまで言われたら言い返すことも出来ない
最後に……

『知ってるか？響』

「ああ？」

『同じ携帯会社だったら無料だぞ』

声の主はそれを言い残して電話を切った

啞然とする彼 響がしばらくして……小さく笑う

「そうだった。そうだったなあ、忘れてたよ」
人口密度の多い街中へと彼は早足で入っていく
どこに向かうかなど決めていない
ただ、狂ったように笑いながら彼は歩くだけだった
「ああ、忘れてたぜ。頭んなか狂ってるからよお」

『奇妙な事件』

『輝天県』

その町の治安は最悪なものだった
暴力団『暁』が警察を買収して、政治家を裏で操り彼らが望む地を
作ろうとしていた
その治安の悪い町の中で地方毎に置いてある支部がどんどんつぶれ
ていく

1日で2箇所

三日前から起きて6、7箇所つぶれてしまった

暁の組長『金子 公也』は焦り始めていた

「どこの組がやっているのか、わかるか」

「いえ、私には何も……」

部下に聞いても『わからない』と一言

「近々、県知事の選挙があるのに……どこのやつかわからないやつ
にわしらのやつていることを表に出されて……くそやろう！」

「そして、私達の部下もすべて死亡……私には人間の行動だと思え
ません」

「とは言え、黙っているわけにもいかない」

公也が動きを起こそうと重たい腰を上げた

部下も自分のボスがここまで動くということに事の重大さをさらに
覚えた

「銃火器の使用を認める。各支部で警戒を……」

「組長！」

支持を出している公也へと違う部下が慌てて彼の前に出た

「支部が各支部が……」

「どうした?!」

側近の男が慌ててきた部下へと強く問う

「何が起きた?」

顔を青ざめた男が息を荒立たせる

そして、大きく息を吸い込み……叫ぶように言った

「支部が全部つぶれました!支部にいた組員も皆、死んでしまいました!」

全部……つぶれた

組員も全員死んだ

たった4日目で自分の周りにいる部下が皆……

公也は信じる事が出来なかった

「嘘だろ」

「嘘いうんじゃない!」

気性の荒い組員が報告に来た男へと掴みかかった

「組員は本部を含めても5万いるんだぞ!それが4日で全滅なんて!」

「人間じゃないです!あいつは怪物だ。狂った怪物だ!」

「馬鹿野……」

怒鳴りあっている本部が何も音を立てずに一瞬で瓦礫となった

何か目に見えない重たいものにつぶされたかのような荒んだ形となった

同時に瓦礫の下敷きと目に見えない重力によって組員も本部も全て

……死に絶えてしまった

土煙の立っている瓦礫を見ていた男が一人……

響だった

「……ああ、楽しい」

顔に浮かんでいるのは狂気な笑み

ただ、つぶしたいものをつぶせたことで彼は満足感に浸っていた

「最高じゃねえか。よし、スイーツ食いに行こう」

最高の優越感に浸った彼が虐殺をした後とは思えないさわやかな笑顔で町の中へとまた歩き出した

日が沈んだ

7時を越える頃、喫茶店に集まるのは仕事帰りのサラリーマンか学校帰りの学生しかいなかった

カウンター席の前に響はいた

店員に出されたチョコパフェをつまみながら……店員へと楽しく語る

「警察多いっすね、町田さん」

「まあ、そうだねえ。暴力団がどんどんつぶれていくからうれしいけどねえ」

「そいやあ、だいぶ数減ってきましたね。何で？」

「さあねえ。お兄さん、確か創世大学近くの田舎町に住んでるって話でしたけな？」

突然、話を変えた店員へと響は不思議だと感じながらもうなづいた
「神虎町知ってるんですか？」

「知ってるも何も、3、4年前からすごい殺人事件の数が多かったところじゃないかい」

「ああ、おきてたな」

その事件を響はよく知っていた

知っているというか……その真犯人だからだ

それを町田が聞いたらどう思うか

顔を真っ青にするだろう

響が一人怪しく笑った

「ありや、まじ驚きましたね。当時は怖かったけど、今思うと殺されたやつは……」

「皆、不良か犯罪者だろ？重たいか軽いかは別として、犯人は相当、

英雄気取りのやつだろ」

「ハハハ、本当に……。狂ってますぜい」

響は笑う

たとえば、自分のことを悪く言うやつが目と言おうが正しいことだと笑う

「そいつ自身も自分が狂っているって自覚してりゃあ、いいけどなあ」

そう……。誰よりも狂っている

彼自身、すでに理解していることだ

夜の街を歩く

響が向かった先には大きなホテルがあった

高級でもなければ質素なものじゃない、ただのビジネスホテル

入り口の付近で不意に見つけたのは暗い町の中でただ光るコンビニ店

「なんかおいしいものないかな」

フラリと彼はコンビニ向かった

中に入れば奇妙な光景が広がっていた

最初、目にしたのは怖がっている店員

次に見たのは包丁で店員を脅している男

ああ、強盗中でしたかと響が小さくため息をつく

「くそガキは出て行け！」

「……ご勝手に」

二人を後にして響が店内を歩き回る

カゴなどを持たずにカップラーメン、ポテトチップス、チョコクッ

キー、チョコアイス……。大量の食べ物を手にした

「店員さん、会計お願い」

「ぶつ殺すぞお！くそがきい！」

男が店員から何食わぬ顔で来た響へと包丁を向けた

鉄の刃に写っている響は何ひとつ動揺した様子も見せずに……。ただ、

サイフを取り出す

「どうぞ、ご勝手に」

「てめえええ……え？」

包丁を持った手が動かなかった

男が自分の手を恐る恐る見てみる

「……はあ？」

「店員さん、お会計お願いします」

男が、店員が見たのは今まで見たことの無い光景だった

「会計してくださいよ」

笑顔で言う響を見て、二人は驚愕した

正しく、言えば、彼の背中から出ているもうひとつの腕……

人間とは思えない、毛深く、鋭い爪を持つ手が響の背中から突き出て男の手を握っていた

その腕は何の動物の腕なのかわからない

突然……

「ああ！」

今度は店員の頭部を何かが掴んだ

響の腕だが、本来ある腕では無かった

突然出てきた毛深い腕とは違い、黒い昆虫の甲殻を纏った細い腕と手が店員の頭部を掴んでいる

5本あるその腕の中の親指が店員の頭へと深く入っていく

「痛い！痛いです！」

「早く会計しろよ！」

「てめえ、いい加減にしるおおお！」

逆上した男が包丁を強く握って毛深い腕を振り払った

再び包丁を手に襲い掛かろうとしてきた男へと

響が向けたのは……残酷な笑み

「うるせえよ」

また、背中から腕がひとつ増えた

今度は機械的な腕だ

どこかさびしさが背中から漂っているが、それを目にするものは誰一人としていなかった
ただ、死体となった男の目が響を恨めしそうに見ているだけ……

後に店員が語る

6本の腕を持つ少年が人を一人殺して、買い物をしたとか顔を青ざめながら……

誰も信じなかった

強盗である男の死体を見ても、店員の話をさらに詳しく聞いても、店長も警察も信じなかった

カメラを……と店長が回そうとしたが、カメラが故障したのか砂嵐しか無かった

奇妙な出来事だと、誰もが言う

25 奇妙な事件（後書き）

狂ってきたZ E

股間が！

26 インサニティ

おかしいのはわかっていた

八工を殺すかの如く、人間を八つ裂きにする

ああ、批判されてもおかしくない

だけど、よく考える

殺されたくないなら、それなりの対策はしろよ？

なあ……なんで、俺が批判されるの？

響が殺したのはただの不良学生

未成年でコンビニの前でたむろっていた5人の学生
彼らはタバコを吸っていた

いや、吸っていようが関係なかったのかもしれない

ただ、コンビニの入り口で邪魔だったから……

5人の頭を破裂させただけだ

道中で40人以上いるであろう暴走族を見かけた

爆音をわめき散らす輩どもを……彼は許しはしなかった

ああ、邪魔だ……

ホテルへ帰る前に、彼は彼らの走る道路の上を血の海にした
なんでか？

ただ、うるさかっただけ

「お前はようやるよ。町ひとつ滅ぼす気か？」

男……長い銀髪にタバコをくわえた20代であろう男がため息をつく

「本当にお前……狂ってやがるよ」

「最高のほめ言葉ですよ。赤城さん」

男が放つ批判も彼にとっては言葉通り『ほめ言葉』

自分の行動を間違っていると認識している

それでも止まらない残酷な行動

「殺されるやつが悪い。五体満足でありながら自分の身を守れないやつはただの馬鹿だ」

「俺の仕事を増やす気が、やめてくれよ」

「ごめんなあ、警察のお偉いさんよあ？逆に仕事減るかなって思っ
てなあ？どう？」

「暴走族辺りはまあ、仕事減ったな。だけど、一般の人間を殺すの
はなあ……」

困り果てた表情の赤城へと響は笑いながら続けた
狂気の笑みがさらに異常さを増している

「一般か？コンビ二の前で屯って人の道をふさいでいるくずどもが
……単車乗り回して騒いでいる連中どもが……」

「おいおい」

「いやだなあ。そんなやつらが言うだよ。『邪魔なら来るな』『轢
かれるてめえらが悪い』馬鹿みたいに本当の意味での一般市民を寄
せ付けない。調子にのんなよ！」

テーブルの上にあったペットボトルを投げ捨てた

それも赤城の顔に向かって強く……

「調子にのるなよ？おい」

「おいおい、怒るなよ！落ち着け！」

「……はあ」

落ち着いた響がベットのの上にすわり込む

小さく、そしてただ悲しくため息をついた

自分の行為に後悔したわけじゃない

ただ、ただ……

むなししいとため息をついただけ

「……くそつたれ」

『インサニティ』

(あちらの組織はなんとも言わないだろうけど……ぶっちゃけ、俺ら警察は迷惑してるぜ)
部屋を出るまえの赤城が残した言葉を思い出した
そろそろ、隠蔽も無理ということだろうと考えた響がこの町からも
う出ようと決心する

「何、んじゃこの町を出るっての?」

町田が驚いた

今まで楽しそうに語り合っていた仲間がこの町から消えるという話だ
悲しく、どこか切なかった

「まじかよ、寂しくなるな。楽しい仲間がいなくなるなんて……」

「落ち込まないでくださいよ。俺も楽しかったんですから、最後ぐ
らい笑顔で送ってください」

「悪いな……俺、涙もろいもんでな」

「良かったですよ、お客がいない時で……」

哀愁漂う音楽にお別れのムード

いつもクールな町田が涙を流すのも無理無かった

「町田さん、いつもので」

「……え?」

「いつも通ってるのに、え?は無いつしょ」

「忘れてた、チヨコパフェだろ?待ってな」

最後の別れに出されたチヨコパフェ

響は惜しみながらも少しずつ口に入れた

どこかしょっぱい味がした

その味を感じたとき、狂った自分でもまだ人間性が残っているのか
と……

彼は心の隅で感じていた

それからはどんどん語りつくした

長く……名残惜しみながら

ホテルの部屋を出る前……

いつものポケットの入れていた携帯電話が震えた
着信が来たと響が取り出す

「メール……」

送信者はただの1文字『K』

その1文字で誰からかすぐにわかった

内容は……喜ばしいことに依頼だ

目的の場所であろう住所が書かれていた

そして標的は『10人』とその単語だけ

内容を確認した後、響は部屋から出た

町を出る前に殺しを請け負うなどと……そんな自分を笑った

場所はおもちゃ工場

ずいぶんと寂れた使われていないところだった

そこで、見える微かな光と騒いでいるやつ等

響はそこへ向かう

「……」

10人も騒がしい連中がいる

ああ、うるさい

最高にうるさい

「あ？誰だよ」

ドアを荒々しく開けた音に反応した不良が近づいてくる

異様に長い金髪が目が悪い

間近まで迫ったその男の首を響は有無も言わずに撥ねた

首の無くなった胴体から吹き出る血をけり倒し、返り血を浴びるこ

となど無く、集団の元へ向かった

「残り9人」

「なんだあ？くそがき……」

「はい」

指を鳴らした

同時に起きたのは周りが驚愕するような出来事……

2、3人ほどの頭が破裂

脳みそも目も跡形もなく、消え残ったのは首の無い胴体だけ
周りが悲鳴をあげ、さわぎはじめた

「なんだよ、こいつらただのくそ野郎じゃねえか。なんでこいつら
を殺すことになるんやら……」

響は自分の周りで逃げ惑う不良達を束縛する

彼の放った目に見えない何かが、不良達の足を絡めていくのがわかる
まだ束縛していない動く手を……携帯電話を操作しながら一人ずつ
踏み潰していく

骨を折るだけでは気がすまないのか、手は粉々になり、骨が見えて
いた

「お、やっと出たか。おい、キャサリン！」

『実名は困るわよ？』

「困るわよ、じゃねえよ。答える、何でこんな害虫駆除を俺に任せ
た。警察でも動かせばいいだろうが」

自分が出るほどのことじゃない内容だ

殺人犯か質の悪い連中かと思っていたがどれでも無い
殺す価値も無いと思っていた

『こいつら、アメリカのサーバーに攻撃したハッカー集団よ』

「ほお」

『無様にもそれが私らの組織に関わることと知らずにね……』

「へえ……んじゃ、殺すわ」

そう一言残して、電話を切った

そして振り向く

束縛された不良どもへと狂気の笑みを向けて……

「はいはい、くずども。つてことは『インサニティ』の名も知って
るみたいだな」

痛みで苦しみ、もがく不良どもへと……更なる拷問

荷物の中に入れていたものを取り出した

「これ、何だと思う？」

「か……なんだよ、それ……」

「お土産用のからし」

本来仲間のために買ったからし

それを不良どもの手の傷跡へと塗りたくった

寂れた工場内に響く悲鳴が耳に心地良かった

「何を知った？くそども」

「あああ……」

拷問していく中で不良達が何を知ったのか吐いていった

メンバー皆のこと

組織の役割

その中には自分の情報もあった

「はい、それ」

指先を不良の額にあてた

肉が裂ける音と噴出す鮮血

一人また命を絶った

「あい、次……」

「助けてくれ！許してくれ！もういやだあああ！」

「はい、しね」

また違う不良の頭を指ひとつで二つに割る

簡単に人を殺していく響のその姿を周りは異常だと恐怖を感じた

また一人……そしてまた一人……

響は何のためらいも無く殺していく

残った最後の一人……

死ぬ間際に思い出したのはインサニティという言葉だった

「インサニティってあんたのことか」

「ウヒヤヒヤヒヤ……何を驚いてるんだよ」

「国一つを滅ぼしたのも、軍を一つつぶしたのも……」

「待て待て！そんな展開ないぜえ？アニメじゃないんだから、頼む

「よお」

「ふざけるな！お前みたいな狂った怪物がなんでこんなところに…」

…」

「え？」

響が硬直した

「なんで、ここにいるかなど……くだらない質問だ」

「理由なんて無いさ」

「てめえ……なら、この場所だって……」

「勘だよ。怪物になると結構、冴えるんだよね。ヒヤハハ……」

猟奇的な笑みを浮かべてそう言う響が恐ろしく思えた

死んだ仲間を見て彼が自分に対してどんな殺し方をするのか

想像できなかつた

恐怖で胃が苦しく、不良は頭を下ろして苦悶の表情を浮かべた

「そうだ、殺すときはサーブスで俺の姿見せてやるよ」

「は？」

突然何を言い出すのかと……不良が顔を上げた

目の前にいたのはあの狂った男の姿では無かつた

さらに狂っている怪物の姿

背中から出た4つの腕

そして、白い鳥の片翼と黒い蝙蝠の片翼がさらに狂気を具現化している

犬歯が鋭く、黒い角の生えた仮面をつけて……もうかつての面影が無かつた

「さあ、くそやろう！シコってもいいぜ！ヒヤハハハハ！」

工場の中から聞こえる笑みと叫び声

壁に影として写っている奇妙な怪物が腕を振り、何かを引き裂く動きをしていた

所々に飛び散る液体と何かに塊が影として見える

一夜にして工場内は血の海と化した

やっとなげ殺が収まった

長い沈黙の後、聞こえてきたのはカメラのシャッター音だった

『完了』と『K』にメールを送る

それも添付ファイル付で……

しばらくして響の電話の元にメールが届く

送り主はもちろん『K』

題名には『確認』という文字だけ……

そして内容にも少しだけ文があった

『あと、死ね!』

そのメールを見て響は腹を抱えて笑った

「画像が効いたか。あのビッチが!ヒヤハハハ!」

無惨に裂かれた死体を投げ捨て、踏みにじり……

狂ったように頭を振りながら笑った

この光景を画像として見たら漏らすに決まっているだろう

Kが漏らした姿を思い浮かべた

「ヒヒヤヒヤヒヤ……笑いがとまんねえなあ、おい」

死体をまた蹴る

何も動かない死体が反応することなど無かった

「おい、おもしれえだろ?なあ、おい。答えるよ?おい」

何度蹴っても死体は動かなかった

諦めた響が携帯電話を畳んで立ち去る

ふらふらと、何事も無かったかのように消えていった

暗い闇の中に消えた後……

また響が何か思い出したかのように笑い始めた

その狂った笑い声がまた工場の中で響いた

26 インサニティ（後書き）

ゴールデンウィーク

日曜以外全部バイトの俺が響以上に狂いそうです

でも、楽しいもん

27 眩しい純愛(前書き)

マリア「読者の皆様へ、仁さんから」

仁「……あれ？アドリブ？」

マリア「はい！以上、仁さんから一言でした！」

仁「……おい」

前書きごめん

狂ってしまった結果がこれだよ

『眩しい純愛』

夏の日差しが強くなった

公立の学校にはエアコンといった装備が無いために、いつも風で暑さを凌いでい

「はあ……」

ああ、暑い

どうにかならないか

そんなことを思っただ敷きで自分を仰ぐ

「マリ！」

友人の声だ

……ああ、暑苦しいかも

ウェーブの掛かった髪が外から来る風で揺れている

……香水臭いぞ、友人よ

「アイス！アイス！アイス！アイス！」

「何回も言わないでよ。あんたがアイス連呼するとドラッグ欲しがってるみたいな感じがしてキモイ」

「グへへへ。とりあえず、学校終わったらアイス食いにいこー」

「……ごめん」

「彼氏かーい！彼氏かーい！ブー、ブー。金持ちでイケメンでああ
くこんちくしょー！」

友人……もう名前出しちゃおう

明菜は文句を言ってひねくれる

「うらやましーよ。いいなあ、ブーブー」

「悪いわね。さき帰るよ」

「さぼり？マジで？なんで？」

「……だるいから」

そう言っただけ私は学校を出た

明菜の言う通り……彼氏に関係することだ
彼と落ち合う場所である公園へと向かう私
道を歩く時、通りすがりに自分と同じ身長の子が入った
黒くストリートなのかパーマがかかっているのかよくわからない髪型
そして左唇が耳元まで傷が入っているのが気になっていた
怖い……恐怖以外の何ものでも無かった
「何、あれ……」

「麻里！」

公園で待つてた彼氏が名前を呼んでくれた
さわやかな笑顔が素敵な彼だ

「賢ちゃん！」

「学校さぼってまで来るのかよ。悪いやつだ」

「だって、会いたかったんだもん」

「ハハハ、そうかい」

笑顔で頭を撫でてくれる彼が好き

この幸せが続いて欲しかった

いつまでも……

町を変えてからそんなに日にちが立たない

てか、2、3時間もたっていないわけだ

ATMで以前の任務の報酬が入ったのを響は確認した

「100万か」

……くずを殺すだけで、ヒハハハ

実際には言わないものの、心の中ではそうつぶやいた

人を殺すだけの簡単なお仕事ですとでも職業安定所にあつたらせひ
とも電話しているところだ

……いや、嘘だ

とりあえず、ホテルの手配も済ました

町に慣れようと彼は銀行を後にした

通りすがりに見えた雌豚から不穏なものが感じられた

高校からきたというところから時間的に授業をサボって出たのだろう
くそガキが……

後ろから心臓をとってやるうかとも考えたが……その考えもすぐに
消えた

空腹でお腹が鳴る

「……レストランいこうか」

「大丈夫か？お腹の中の子も……」

「うん、大丈夫」

「今年の秋に籍を出すんだったな。楽しみだ」

「うん」

彼は幸せにしてやるって言ってくれた
3ヶ月前のあの夜から……嬉しかった

「ありがとう、賢ちゃん」

私は彼氏の手を握った

暖かくて、力強く、そしてやさしい手
その手を握っているだけで幸せだった

賢と出会ったのは5ヶ月前

彼はすでに社会人だ

有名な会社に就職した社会人

県議会の息子でも有名だ

そんな彼がなぜ自分を選んだのかわからなかった
ただ、何の変哲も無い女子高生

すごい、嬉しかった

3ヶ月前……

（結婚してくれ）

その言葉に最初は戸惑った

なんせ、理由が……

(初恋の人と瓜二つでさ)

それだ

彼は純粹だった

その純粹さに惹かれた自分がいた

……そして今に至る

18になる今年の秋には籍を入れて、挙式を……と段取りも組んである

その日が待ち遠しかった

響は腹ごしらえだとレストランで食事をとっていた

イタリアンレストランのミートソーススパゲティをほおばっていく左の頬の傷跡にもソースがつく

だが、それを気にすることなく口につき込んでいく

そんな彼の元に……一人の少女が近づいてきた

響もその気配に気づいた

「キャサリンか赤城から御仕置きをするように言われたのか？ええ？」

「何、言ってるのよ」

何を言い出すのかと少女がきょとんとした

羽の髪飾りが似合うようなまだ幼さを残した少女

少し赤みが掛かった綺麗な髪とその美を具現化したような顔と容姿はファミレス内にいる男皆を振り向かせるほどだった

そんな美女へと、響は吐き捨てる

「もし、そうならその髪、ひんむいて脳天ぶちまけてるところだけえ？雌豚が」

ひどい言葉に対しても少女は傷つく様子など無かった

「不愉快ね。デートでもしたいなって思ったのに……女の子の心つてもろいんだよ」

「もろいのは持ち主の心構えがなっていないだけだ。壊されたから

と言つて発狂すんなブス、用件を言え」

「響はいつも不機嫌だね。慣れたけど」

そう一言言い、少女は胸ポケットから2枚の写真を取り出した

「私達は元々、こんなのを生業にしているわけじゃないけど、あなたのせいでこうなつたわよ。責任とつてよ」

冗談を言うような微笑がさらに響を不機嫌にした

だが、目の前に出された写真の人物を見た時、その不機嫌な表情がすぐに明るくなる

「ちょうど、良かった。俺もこいつむかついているところだったさ」

響が小声で、そして含み笑いを言った

その写真はさつき、通りすがりに見えた不良女子学生

この女がどういった人間かわからない

が、ちょうど学校をさぼつたところを見てむかつてきたところだった

「くそがきが調子に乗つてるんだからよお、ちょっとはしつけてやらねえと何度も過ちを犯すんだから……」

「結局生かさないでしょ、あんたは……話、戻すわよ？」

「どうぞ、説明をしてくれ」

余裕な笑みで響が促してから少女からの説明が始まる

その5分後……

彼が手に持っていたドリンクのグラスが割れた

そこで、響がやっと少女の名前を呼んだ

「……ピピ」

耳まで裂けた傷跡から血が出るほど怒りで力み、グラスの破片を掴んだ手からは血が噴出すほどに……

「もう1回言つてみる。まさか、あの有名会社の社員で県議会議員の息子さん。そいつの婚約者がこの雌豚とか、勘弁してくれ……」

「え、響くん？」

「お客様……大丈夫ですか？」

血まみれの手を見て駆けつけた店員へと響はにらむつけた

「グラス代は後で払う。気にするな」

「ですが……」

「大丈夫ですから」

店員は慌てた

だが、ほかの仕事もあるためにその場から離れていった

それで良い……響が話を続けた

「そりゃ、県議会議員のパパもご立腹だ。こんなビッチが相手なんて

世間がゆるさねえ。愛だのほざいて非行するようなくずどもだ」

「言いたいことはわかるわよ。表面上は婚約を許しているようにし

ているけど……後々、その女について調べたら暗いところがわかっ

てさ」

「……あろつがなかるつがぶつ殺すけどな。あと、この男がその婚

約者か？」

もう一枚の写真は男の写真だった

女にだまされた男かと思っていた

響の問いにビビは……首を横に振った

「……は？」

「こいつはその女の元カレよ。県議会議員のパパが調べたら出てきた

わけよ、更に深く調べていったら……すごいことがわかったわけよ」

「聞かせろよ。内容によっては殺し方を決める」

響が促す

その彼の顔に奇怪で凶悪な笑みが浮かんだ

口の傷から血を流しながら笑う

それが更に凶悪さを際立たせていた

「今日、仕事は？」

「土曜だ。休みだよ」

「え？マジで？いいなあ」

「麻里だって学校さぼってるじゃん」

麻里と賢が町の中を歩く

楽しそうに会話していくその様は周りを和ませるほど……

その二人を後ろから見ている人物がいた

金髪のとんがった髪が荒々しく、鋭い目が二人をにらんでいた

「……フッ」

彼の口元が笑みで歪んだ

人の多い街中

日本の首都『栄都』に近いこともあり、ある意味都会に近い

それ故に空気が汚く、人間も汚く見えた

「ビビアナ、手はず通りに動けよ。殺せばいいだけの話だ」

凶悪な笑みで言う響へと少し納得のいかないような表情でビビが頷いた

彼のやり方があまりにも悲惨なもののため、気乗りでは無かった

いつものことではあるが……

「男を集めるの？」

「あの雌を囲んでいる男なんて山ほどいるんだろ？なら、肉欲でよだれダラダラの犬なんざ、いくらでもいる。楽しみだねえ」

「本当に……悪魔か外道ね」

「そんなものじゃあ、俺を口説くことなんざできねえぜ？怪物を褒め称えるんならたった一言だ。わかるだろ？」

怪物の力を強めるなら……

響の意欲を引き出すなら……

たった一つの言葉で良かった

その言葉をビビアナが……躊躇いながらも言った

「狂ってるよ」

その一言で響が笑った

満足げな笑みで、ビビアナの頭を撫でた

「ああ、狂ってるさ。最高にな……」

27 眩しい純愛（後書き）

バイトで疲れて更新が遅れる

申し訳ないです

え？見てない？

誰もいない？（キヨロキヨロ）

やりたい放題やってやりますよぉ、ブヒヒヒヒヒヒ！

28 主演は3人、そして喜劇へと……（前書き）

グロ注意かもしれませんがね

女性で妊婦さんの方は出来ることなら見ないでください
次回から話はたぶん、つなげていけると思っているので

何があっても責任とりません（キリッ

28 主演は3人、そして喜劇へと……

純愛に狂ったやつほど見えるものも見えなくなる
そしてだまされたやつはいつも言うんだ

「だまされたんだ！俺は！」

まあ、よくあるさ

そういう女もいる

だまされたやつが頼めば殺してやってもいい

俺もそういう女は嫌いだ

まあ、頼んできたやつが善人かどうかで決めるがな

今回の任務もそうだ

本人では無く父からの依頼ではあるが……

本人は善人だ

助けてやりたいぐらいに……

むかつくのはこの女子高生だ

どう殺してやるうか

ビビから話を聞いた時……このくそな雌豚への処刑方法が決まった
どうせ、この女は残酷な結末を受け入れようと思わないだろ
ならば、忘れさせてやるのが1番の慈悲だ

『主演は3人、そして喜劇へと……』

この町に来て三日が立った

女を殺すだけなら簡単だ

だけど、どうせこんな雌豚殺すならこのぐらい彩っていた方が楽し
いだろう

そして俺は標的の友人を全員、とっ捕まえた

学校がある日は毎日のように明菜の元に来ていた

だが、親から聞いた言葉で麻里は驚きを隠せず啞然とした

「明菜がいなくなったなんて……」

「何も連絡が無いから……不安ね」

「……そんな」

友人の失踪は昨日から起きていた
4人

そして明菜を含めたら5人となる

「なんで……」

自分の周りから人が消えていった
結婚を祝ってくれる友人達が……

「皆……」

どこにいるんだろうかと麻里は学校に訪れることなく町の中を探し
回った

「あ」

突然、鳴り出す携帯の着メロ

今流れている着メロは麻里から来たとわかるように設定した曲だ

麻里はとっさに自分の携帯電話を開いた

メールの件名で顔を青ざめてその携帯電話をすぐに閉じる

「おまえの罪を俺は知っている」

こんな酷いメール、明菜が送るわけが無い

彼女は祝ってくれている

祝ってくれているから……

心の中で違うと祈りながら再び携帯電話を開いた
メールの文章に住所が書かれていた
すぐ近くだ

今はもう使われなくなった工場

「みんなそこにいるのかな？」

明菜と偽ってメールを送ってきた相手も……

警察に……と思った瞬間

メールがまた来た

麻里が件名を見て強い恐怖を抱いた

『警察に電話したら友人の首を落とすしちゃうぞ』

その件名を見たたん麻里は走り出した

殺されるかもしれない友人の元へと……駆け出した

「皆……」

誘拐した馬鹿どもの口を閉ざすのは簡単だった

ガムテープも使わずに口を縫わず……相手をだまらすのは簡単だった

「な？一言喋るとどうなるか、こうなるんだよ」

5人の中の一人の両腕、両足を切り裂いたことでほかの学生らには恐怖が植え付けられた

ついでに声帯も切つてさらに話さないようにした

「このくそガキみたいにならなくなかったら、黙つてな。メインイベントはまだ始まつてすらいんだからよ」

響が散らばった両腕、両足を遠くへと投げ捨てた

どう処分するかは後で考えよう

また学生の元へと静かに歩いていく

「なあ、麻里つて子は確か婚約者がいたんだよな？くそがき」

響に話しかけられた男子が頷いた

「俺もよく知つてる。あいつの彼氏はいいやつだから……」

「怖がらないでまともに返すやつは久しぶりだ。友達として会つてたら最高だつたるうによお？だけど、それも無理なこつた」

「はあ？何を……」

残念そうな顔で響が写真を投げ捨てた

地の上にあるその写真を男子学生が見た

写真に写っているのは……自分自身の写真だった

そして、もう一人女子学生が写っている

「麻里？」

「ご名答、三津 直哉くん。麻里の元彼だったな」

「……」

「そんな顔真つ青にするなよ。まだメインキャラ出てないのに真相解明なんて創作物じゃあありえねえよ。頼む、耐えてくれよ！」

響の高笑いが廃屋の中で響く

その高笑いをとめるかのように、ドアが音を立てて強く開いた
主演が来た……

響が笑うのをやめてドアのほうを見る

「おい！」

中に入ると悲惨な光景が目に入った

学校でも仲良く話す男友達が無惨に両腕両足を切り裂かれて血を流し、声も出なくなっている姿

最悪だと麻里は目を背けた

「なんでこんなことするのよ……あんたは誰よ！」

「……」

男子学生を無惨な姿にした男が黙り込んで『笑いながら』こつちを見ている

口元の傷が痛々しい

片耳まで裂けているところからまともな人間じゃないのがよくわかった

口裂け女みたいだった

「気持ち悪い」

「きたな、メインキャラ」

男がやつと口を開いた

女のような細い体つきと男のたくましい体つきが片側ずつにわかれているのが腕を見てわかる

その体でどうやって友人を引き裂いたのかわからなかった

「ようこそ、真実と向き合う地へ」

「意味がわからない。皆を放してよ！」

「それもこれも決めるのはお前さんでもここにいる友人達じゃない。

俺も状況によつては殺すか殺さないか判断する。それを左右する主演があともう一人……ほら、来た」

響が別の方向へと向いた

廃れた工場のべつの入り口

それも歩く音がする高い方へと……

「いらつしやい！美しい花嫁は目前だ。貴方は受け入れるかどうかは知らないけどな」

暗くてよくわからなかった

その人物が誰なのかわかった時、「そんな……」と麻里が小さく、悲しげにつぶやいた

「賢ちゃん！なんで！」

これでメインが揃った

響が笑い、賢の後ろにいたビビへと叫んだ

「もうすべて提供済みだろうな？おい！」

「言われた通りにこの人にも説明はしたよ！」

「まだ信じられないさ」

賢が不穏な表情で俯いた

彼になんの事実が告げられたのか

麻里は不安な表情で彼を見守った

「すべては事実です、賢さん」

「麻里が……俺をだますなんて」

……だます？

……何を言ってるの？

賢の言葉に耳を疑った

「待ってよ！賢ちゃん！何で私が！」

「やめてくれよ、もう時間が無いんだから。この男も一緒だし、そろそろ動機を説明していこうじゃないか」

直哉を見て……

賢を見て……

そして、麻里を見て響が微笑んだ

ビビから手渡された紙とテープレコーダー

まずはなんらかの資料と思われるものに目を通してその内容を話した
「麻里さん、お腹の中の子はさて、何ヶ月だったかな？脱いでも以外とお腹は出てないように見えるねえ。元々細身だから違和感が無いのかな？」

「3ヶ月よ。それがどうしたのよ」

「あ、そうだったの？へへ。そいや、お父さんは産婦人科のお医者様だったよな。診療したのもお父様だったよな？」

「ええ……賢ちゃんもそれは知ってるわよ。それがどうしたのよ！」
麻里の表情にはどこか静かな焦りがあった

その表情を見た今日が静かに笑う

「君のお父さんは快く、娘さんのカルテを差し出してくれたよ。なんでかわかるかな？」

「……え」

「共犯者だつてことをばらされたら誰だつて困るものだ。特に産婦人科の先生だ。おえらい身分でよくやるもんだねえ」

「言ってることがわけわかんない！何が言いたいのよ！」

「君は妊娠3ヶ月で賢さんの子供だと言い張っているけど、この記録じゃあ、5ヶ月前……そうだな、3月頃にはすでに妊娠していることになってるんだよ」

「……はあ？わけわかんない」

「ごめん、低脳には難しかったか。いや、俺の独り言だ聞く聞かないは勝手だ」

「警察呼んでやる！」

そう叫んで麻里が携帯電話を取り出した
手に持っている桃色の携帯電話

それを目にしたとき、響が何かを投げた

麻里の手から血が出た

手のひらをかすった程度で無事だったが携帯電話は完全に真つ二つとなっていた

「痛い！」

「痛くないとそりゃ、おかしいだろ。人の話は最後まで聞かないといけないって親から……」

「少しずつ歩いてきた響が……」

突然、瞬間移動してきたかのように間近に来ていた口から流れた血でまみれた顔が目の前に……

麻里が小さく叫ぶ

「!!!!」

人間じゃない……そう悟った時

響が麻里の髪を引っつかんだ

「聞いてないか？甘えられたから指導がなつてないみたいだなあ、クソビッチがああ！」

響は麻里を死体のある方へと思いつきりぶん投げた
長かった髪が手に残る

その髪を汚らしいものを捨てるかのように投げた

「くそやろう。髪の毛で手が切れたじゃねえか」

細い糸が食い込んで出た血が流れる

響から赤い血が流れているのが不思議だった

「響……」

「まあ、いい。さてと……続けよう。君が『わけわかんない』と言ったけど、カルテでは5ヶ月。君はいつから賢さんの子供をもっちゃったのかな？」

「……てめえ」

「お前、高校生だろ？俺、18なんだよ。まだ高校卒業してねえくそガキが生意気言ってるんじゃねえよ！」

そして、また瞬間移動

麻里の目の前に立っては彼女の顔を蹴りあげる

鼻の骨が折れた音がした

悲鳴を上げた麻里を見下ろし、響はあざ笑った

「ウヒヤヒヤヒヤ、聞こえたぜ？雌豚が……」

「ああああ！痛い！痛いよ！」

「ああ、痛いだろ？すぐに終わらせてやるから話をさせるよ。結論だけ言わせるや！このクサレマ コがああ！」

そして、狂気の笑みが工場の中で響いた

息が切れ掛かったような笑い方が麻里の耳に恐怖として植えつけられた

「……………いやあ」

「お前の中にいる子が誰の子か、そろそろ教えてやろう。賢さんもすでに知っている。そして、この俺も知っている。何より……」

地の上で倒れた麻里の顔を踏みにじりながら、手に持っていたテープレコーダを示した

「この機械が真実をより深く知っている」

再生と書かれたボタンを押す

そこから聞こえてきたのは……………あえぎ声

行為が終わった後、男女二人が笑った

「大丈夫かよ。お腹の中の子……………」

「大丈夫よ。3ヶ月は大丈夫だってね」

「そうか」

「私が直哉の赤ちゃん産んで、それから成長した後にあっちから離婚するように差し向けるのよね」

「そうそう。やれば出来るじゃないか」

「出来るかな。あっちのお父さんが怒るかも……………」

「普通の会社員より医者の方がえらいに決まってるだろ」

「そうかもね」

「それで、その後だ……………。あの男からは」

「子供の養育費を払い続けてもらう」

そして二人が笑ってまた快樂の境地へと入った

そこで響がテープレコーダーを止めた

「良い話だねえ。直哉くん」

響の言葉に直哉はただ黙り込む

「感動だねえ、男をだまして真に愛した男と結ばれる！シンデレラかと思つたら違つたでござるかよ……笑いがとまらないねえ」

その言葉の後に狂い笑つた

「最高だねえ！チープな発想で完全犯罪を考えたかのようにしてたけど、最高だねえ！」

頭を揺らしながらよだれをたらして笑い叫んだ

「最高じゃねえかあ！それで、幸せになれるんだからな。それも関係無い人間を犠牲にしちゃって、金ふんだくって！」

絶望に伏した麻里と直哉の顔を覗き込みながら高らかに笑つた

ただ、笑う

狂つたように笑う

「笑い殺される！助けてよ！まじ、助けて……腹筋崩壊だよおお！
ヒヤハハハ！クヒヤヒヤヒヤヒヤ！オヒョヒョヒョヒョ……」

突然、笑いが収まつた

真顔になつた響が麻里に近づく

突然、笑うのをやめた彼の手にはテープレコーダーも麻里の妊娠を記録した資料も無かつた

すべて投げ捨てた

変わりに彼の手が……数本生えた

「！！！」

「ひい！」

「なんだありや……」

囚われた者が全員、驚く

手だけではなく、姿形が変わつた

突然、気の狂つた男が人間で無くなつた瞬間

黒い片翼と白い片翼がはばたいた

ああ、やつと人間じゃないことがわかった

「化け物……」

「殺すのか、やめろお！」

直哉が止めようと叫んだ

「ヒヤハハハ、殺しはしないぜ。言つたる？真の判断は賢さんに任せてるって……俺は殺す準備をしているんだからさ」

能力を開放したのは処刑を下すためじゃない

ただ、見せ付けて殺意を見せた

たつたそれだけだった

「賢さん、こんな穢れたシンデレラをなお花嫁として迎え入れる覚

悟が……」

「無い」

「お？」

「！……！」

即答する賢に響は首を振りながら大爆笑

麻里は婚約者の言葉にさらに絶望を感じた

「なんで……賢ちゃん！」

「もう、つらすぎる」

「裏切るの？なんで……」

「どっちが裏切ったのか」

背を向ける賢へと麻里は手を伸ばした

麻里がいくら名を呼んでも彼は止まらない

ドアまで行つたところで立ち止まった

「よく考えることだな」

真実を知ればそうなるかわかっていた

それでも、最後までわずかな希望にすがりたかった

「賢さん！賢さん！」

彼はそれでも立ち止まらなかった

いくら許しを請いても……

寂れたドアが閉まったと同時に希望が途絶えた

処刑方法はすでに決まっている

最高の殺し方をしよう

響は無言で絶望で何も言わない麻里の腹を蹴り上げた

「もう泣けないぜ。絶望はこれからだからな」

「……酷い、赤ちゃんが……」

「ああ、そうだった。赤ちゃんがいたか。悪い、悪い。ごめんなさいでちゅね、名前決まってる？俺がつけてやるうか？」

「やめてよ！もうやめてよ！」

叫んだのは明菜

だが、その彼女の言葉も耳に入らなかった

「赤ちゃんを傷つけることなくどうやってお前を殺してやるうか。

俺は小さな子供を殺すつもりは無い。安心しろよ」

「このくそやろう！調子にのるなあ！」

「黙っとけよ、直哉くん。もう君もこの雌豚も見放されたんだよ。

ならもう後は殺されるだけだ」

「やめる！やめてくれ！」

「やめないさ。グッバイ！」

黒い甲殻の手が振り下ろされる

武器も何も持たない手は麻里の……お腹へと

甲殻が血にぬれていた

そして羊水が所々ついている

胎児は12週間ぐらいで頭がピンポン玉ぐらいになるがそのぐらいあるう胎児が響の手の中に入った

へその緒も破られ、新しく生まれようとした生命が無惨な姿で……

「キヤアアアアアアアああああああああああ……」

それを見た麻里が痛みだけではなく、残酷な場面に発狂する

自分の中にいる子が……

彼氏の子がこの狂った怪物の手の中にある

「やめてよ！殺さないって言ったじゃない！」

「母強しだな。殺しはしねえよ。黙れや！」

掴みかかってきた麻里をまた蹴り付ける

顔は鼻が折れ、目にあたったのか充血している

すでに虫の息かな？響があざ笑った

「ビビ……お上がなんであんたを派遣したのかわかったよ」

ビビは響の異常な行動を見ても顔を青ざめるなど吐き気を感じる様子など無かった

麻里と直哉を取り巻く友人達は大量に吐いている光景と比べるとだいぶ違う

彼女は自分がすべきことをわかっていた

「わかってる」

響に近づき、胎児を手渡されたビビが小さく笑う

響とは違ったやさしい笑みで……

「この子は元気になるわよ」

「不思議そうな面で見ると、ビッチ。ビビの力はそれこそ『神』

の力だ。死ぬかもしれない生命を其の手で保つことが出来る。成長

も意のままに……」

その言葉が信じられなかった

だが、目の前でおきている奇跡が間違ったことをしていないようにも見えた

そう感じた麻里の目に光が戻った

「元気……ですか」

「元気よ。すつごく元気にな……」

「ヒハハハ！安心して死ねえええ！」

胎児を生かしたことでよみがえった希望を消すかのように……響の拳が麻里の顔を殴った

獣の拳を食らって死ぬかもしれない……恐怖でおびえた

「……やめてよ。助けてよ……」

「ああ、やめてやるよ。てめえらの悲鳴も俺の言葉もこの胎児にとつては害悪だ。だから、そろそろすべてを終わらせる」

指先が麻里の額に当たる

突き刺すわけでもない

響が触れたと途端に異変が起きた

額から血が流れる

何が起きたのか、麻里が額に恐る恐る触れた

「穴？」

「おっと、触るなよ？骨も取り出し、肉も取り出した。ここからでも脳みそがよく見えるぜ」

「え……」

信じられなかった

額に触れただけでこんなことが起きるなどと

触れようとしたら確かに穴があった

その奥へと指を入れるのが恐ろしくなる

「何をしてるの」

「彼氏さん、生きたい？生かせてほしい？友達もろとも生かしてほしい？」

響の問いに直哉は何回も頷いた

「逃がしてくれ。すまなかった。俺は何も関係無い。何も……」

「なんで、直哉……」

「全部、この女が仕組んだことだ。助けてくれよ。俺は……」

死を目の前にすると命を乞う

その様が無様でならなかった

「いいぜ。生かしてやるよ。ただし、この女ブチ犯したらな？」

「そんな……」

麻里が首を横に振った

直哉へと、恋人を見て「やめて」と……

「俺にそんなことさせるのかよ」

「いいじゃねえか、このビッチの中にドピューって出してそれで生かされるんだぜ。得だろ」

「最悪！この悪魔が！」

「その言葉は俺にとっちや最高のほめ言葉だぜ？くそビッチ……やることが一つ一つ残酷だった

死にたくなつたと麻里が涙を流した

「やめて、直哉……やめて……」

「いいだろ？だけど、中に出すつてのはさすがにこのビッチが孕むことは出来ないさ。猿みたいにズコバコやってもなあ、ねえ？」

「何が言いたいんだよ」

「こいつのでこに穴あけたのには理由がある……」

静かに呟いた

しばらくして、突然豹変したかのように声を張り上げた

「要はこいつの頭の中にてめえのソコを突っ込めつて話だよ。その中でぶちまけちゃえや、ヒヤハハハ！」

「……」

「あれ？君ら、国語の成績1？ゆとりですか？」

「待つてよ。何がいいたいのよ」

「穴は黙つてろよ」

「いやいや！待てよ！そんなことできねえよ！やめてくれよ！」
必死に直哉が拒否する

人の脳の中へと自分のモノを突っ込むなど……嫌悪感しかわかない

「やめてよ……お願い、許して……」

「やつたら生かしてやるよ。やらねえと……」
奇妙な笑みが近づいてくる

残酷な選択をするように急かしてきた

「……皮はぐぞ」

異常なまでに目をぎらつかせてインサニティは言った

わずかな沈黙の後のその言葉は恐ろしかった

直哉は何のためらいも無く、学生服のズボンを脱ぎ出した

その後の光景が麻里の目に浮かぶ

「嘘！いやよ！やめて！」

逃げようとした

だが、逃がさないようにと響の背中にある4本の腕が足を……そして手を封じる

逃げられない

もう逃げられない

「直哉！直哉ああ！」

「なあ、勃たねえ……たた……」

「俺に任せろや」

響の手が直哉の頭を掴んだ

手のひらから発せられた光

その光を見た時、自然と体が熱くなった

直哉の今まで起きることの無かった性器がだんだんと反り立つ

彼が何の力を使ったのかわからなかった

だが、それもどうでも良かった

これで生き延びることが出来るのなら……出来るのなら……

何も躊躇い無かった

「わりい、麻里。本当にわりい……」

「いやよ！いや！やめて、やめて！やめてやめてやめてやめてやめて……」

て……！！！」

首を激しく振ってもまた、響の手で止められた

だんだんと近づく反りたった恋人の性器

狂っている

狂っている

夢であつて欲しかった

だが、その願いは儚く叶うことが許されなかった

頭の中で脳みそをぐちゃぐちゃにされればどうなるか

まあ、何も感じないし、判断も生活も出来なくなるだろう

彼氏のがぶつといいものであれば、もうちょっと奥まで行けただろう
たぶん、前頭葉の辺りまでしかぐちゃぐちゃにならない

ああ、だめだ

それじゃあ動くことが出来るだろう

記憶はたぶん、保たれない

まあ、人格がまともじゃあ無くなるししゃべることも出来ない

脳全体をぐちゃぐちゃにするにはどうやるつか

ああ……左右と後ろの頭にも同じぐらいの穴を開けて腰ふらせれば
良かった

そして、俺はこのビッチの左右と後ろ頭にも額のと同じ大きさの穴
を開けた

「わかってるだろ？」

そう言うと彼氏さんは躊躇いもなく左にも、右にも振り続ける

そして後ろに回る

「目、見えてますか？」

「……」

だめだ、何の反応もなしだ

ざまあ無いわ

くそガキが社会人をなめた結果がこれだよ

あまり調子にのるからだ

「忘れてたよ」

任務完了だ

この後はどうせ、全員殺すけど……

まずはこの光景を任務完了の証として送っておきたかった

カメラで……

メールに添付して……

送信

直哉君が額のところで絶頂した時……

あいつの顔がばかばかしかった

これが俗に言う『アへ顔』だ

血にまみれた性器

抜き出すと白い液体と脳みその破片が流れ出てくる
最高の光景だ

俺はカメラでとりながら大笑い

「これが本当のマインドファック！」

響と胎児を生かしたままにしたビビが工場を出た
外では賢が立ち止まり、二人の帰りを待っている
悲しい表情で……

「賢さん、良かったですね。俺も久々に楽しませていただきました」
「……」

「良い女はほかにもいるんですから。ビビ、てめえの処女でも……」
「狂ってるよ」

賢の言葉で響もしゃべるのをやめた

「あんだ、狂ってる」
悲しい表情がだんだんと気の狂いそうな恐怖に満ちたものとなる
すべてを見ていたのか

賢は荒い息で言った

「正気じゃない！あんたは異常すぎる！最悪だ！」

「ありがとう、最高のほめ言葉だ」

「君は何をやっているのかわからないのか！」

「何って……これですよ」

閉めかけたドアを開けた

その向こうにあったのは学生達の死体
すべて爪で切り刻んで、ただの肉片に変えた
麻里を除いて……

「ごみ処理です」

そう笑顔で答える響が異常だ

異常すぎて賢は何も言えなかった

殺しを躊躇うこともせず

何よりも異常な行為を強要する

父がなぜ彼と関わったのか……

「……そんな」

「遺体も処理させます。警察にも隠蔽工作を頼みました。賢さんは……別にこのことほかの人に言っても問題は無いですよ？」

「何？」

「このときの記憶があればの話です」

響が手を伸ばした

その手で賢の視界がやみに包まれた時、彼は頭の中から何かが消えていくように感じる

しばらくして……白目向きながら彼は地の上で倒れこんだ

響は笑う

「この人を自宅に帰してやるように赤城さんに言ってくれ。俺は帰るよ」

無言で立ち尽くしたビビへと彼は言い残した

まだ昼だ

少し蒸し暑くなった気候に響が小さく文句言いながら町へと向く

「まだ、この町の限定スイーツ食ってないんだよなあ。じゃあな」

残酷なことをした後とは思えない表情、態度で静かに去っていく

彼はずっとこんな生き方をするのか

恐怖とは違ったものがビビの中にあっただ

いつまでこんなことをするのか

ただ、いつまでもずっとそのことを考えるばかり……

28 主演は3人、そして喜劇へと……（後書き）

さっき投稿したけど、いろいろ矛盾あったから訂正したのを再投稿ももちろん、医学的に無理なところもあるんだけど所詮はフィクションの小説

ただのくそ小説と見ていただいて結構でございます^^

ここまではインサニティ 響の自己紹介みたいなものです（仲間でたけど後ほど）

次回作からちゃんとした話にしていきます

29 兄妹と怪物

翼が赤くなっていた

短期間で赤い錆びのようなものがこびりつき、深紅の翼となったそれを
見て響がため息をついた

鉄のにおいがわずかにする

風呂場の鏡で確認して、今度は自分の体を見た
変わらない

昔から変わらない肉つきだ

だが、下半身を見ると……彼の中で吐き気が込みあがってきた

口元を手で押さえて、吐き気に耐えようとす

「くそお……」

「大丈夫かよ。いつもいつも気づかないところで吐いちゃうんだから
恐ろしいな」

風呂場の入り口で立っていた赤城が笑いながら言った

「狂いすぎてその股からなんで肉棒が切られたか忘れちゃったか？」

「いや、あの時の記憶は残っている。あの痛みも、あのくそビツチ
の面もな」

鏡に映る彼の下半身に性器はうつっていなかった

あったのは傷跡だけ

横に、斜めに……股には傷跡が大量に残っていた

過去受けた傷が時々疼く

記憶と共に……

「どいつもこいつもくそだ。殺してえぐらいにな……」
シャワーのノズルを回した

冷たい水が翼についた赤い錆のようなものを流していく

水と混ざり、赤く染まった液体が排水溝へと流れ、10秒も立たな
いうちに翼は元の白と黒の2色に戻った

鉄を含んだようなにおいがまだした

「赤城さん、もう血のおいはしないか？」

「ちよつと、するなあ」

「わかった。そろそろ上がるう」

翼が体内に戻る

殺してきた数ほどの血が消えた後は体が軽くなった

「最高だ。気分がいい」

「行くうぜ」

「ああ……」

赤城が先に……その次に響が風呂場を出た

まだ血のおいがわずかだがする

後始末もめんどくさいと彼はその場を後にした

『兄妹と怪物』

依頼者は既に部屋にいた

着替え終わった響を待っていたのはカップル一組と外国人の幼い兄妹だ

カップルの男は黒髪にワックスで洒落た男

だが、さわやかな笑顔で不快感が無かった

女のほうはごく普通の女子だ

これでも18歳らしいが、まだ高校生じゃないかと思うほどまだ幼さが残っている

今回の依頼者はこのカップルらしい

「なんで俺らみたいなのやつに仕事を頼む。てか、俺の存在をどこで知ったか知りたいわ。へへ……」

「1番安心できるって友人の上司から聞いたんです」

「ほお。牧原 晋さんかな？そっちの女性は……」

「あ、林 美保です」

「林さんね……」

カップルのことなどどうでも良かった

気になるのは依頼の内容

そして、目の前にいるこの小学生ぐらいの子供達
妹のほうが兄の袖を掴み震えていた

「怖がらなくて良いよ」

響が笑顔でそう言うが……

笑うたびに口元の傷が更に目立ち、少女もその傷で小さな悲鳴を上げた

「……こわいよ」

「ハハハ、そうか。これなら許してくれるかな？」

ジャケットの胸ポケットからチューニングキャンディを取り出した
兄妹へと2個ずつ、わけて手渡した

それだけで強張っていた兄妹の顔が緩んだ

「全部コーラ味な。好きかな？」

「ありがとうございます」

「ありがとう！口裂けお兄ちゃん」

「ブツ」

少女の無邪気な言葉に噴出した赤城と響

笑みで体が小刻みに震えた

「そりゃ、口避けてるけど……」

「おもしれえ、ビビヤキャサリンが聞いたら大爆笑だぞ」

「絶対言わないでくださいよ。絶対に言わないで……フフツ……」

「失礼した」

5分ぐらい休んで再び元の話に戻した

「依頼の内容というのは護送ってあるけど、誰を護送するんですか？」

「この子達を栄都の光神女子高等学校つてところまでお願いしたいんです」

有名な女子高の名前が出た

あの皇帝陛下の親族が通っている学校でもあった

そんなところまで護送…… どういう意味なのかわからなかった

「あの女子高か。そりゃ、別にかまわないけど……」

「お願いします。彼ら、偉い事件に巻き込まれちゃって……」

「それについても詳しく聞かせていただいていいですか？」

大きな事件であれば自分ひとりの力では解決出来ないであろう

そう思つて聞いた結果……

「実は、この子らはデュアル・イーグルのメンバーのお子さんなんです」

「……」

響は啞然とした

目の前にいる兄妹が犯罪組織のメンバーの息子だと

その子らを庇うことに意味があるのだろうかと考えた

「貴方がたは……」

「俺らの友人がこの子を頼むつて言つて……」

「その友人さんの子供さんなのか？」

「いや知り合いの子供とは言つてましたが、それ以上は重体だっ

たので何も聞けなかつたんです……」

友人からの頼みを遂行するために……

晋と美保が死に掛けている友人のためになぜそこまでするのかわからなかつた

まあ、理由がどうであれただ護送するだけだ

人を殺すほどじゃないが簡単な仕事だと響は言うが

彼とは違い赤城はどこか不穏な表情をしていた

電車を使うことも無く、ただ車で送るだけ

この町から栄都に送るのにそんなに時間がかからないはずだ

赤城に頼んで兄妹を車で護送することにした

「日本語しゃべれるんだよね。すごいな」

何も話が無いのはつらいと響は兄の方へと気軽に話しかける

兄は頷き……

「父さんが日本好きだったから、教え込まれたんです」

「良いお父さんだ。日本ほど外国人に優しい国は無いからな。日本を代表して歓迎するよ」

「口裂けお兄ちゃん、キャンディーちょうだい」

6歳の妹がお菓子をねだってくる

和んだような笑顔をして響が「あいあゝい」と胸ポケットのケースを取り出し

「エマ！」

兄が妹の名を呼んでは怒った

妹 エマは少し泣きそうな顔をした

その顔を横から見た響がもっと和んだかのような表情で……

「かわゆいのう、わしゃ気にしないからのおゝ、良い子だ良い子だ」

「響、お前……」

「失敬、警察が前にいようがいまいが、馬鹿なこととはしないからな安心しろ」

ケースを元に戻した

赤城はまだ不信感を漂わせ、バックミラーで響をにらんだ

響はそんなことも気にせず、ちよっと残念そうな表情をしたエマの顔を楽しそうに見ていた

「お兄ちゃんのほう、名前は？」

「イーサンです。イーサン・マクスウエルです」

「イーサンか、よろしくな。俺は河埜 響だ。響でいい」

「よろしくです」

少年 イーサンは無表情でそう挨拶する

普段笑顔をみせないのがよくわかった

一方、エマは……

「……」

「どうした？エマちゃん？」

さつき、兄に怒られたばかりなのにもうお菓子をねだろうと響を見ていた

妹の粗相を見て、イーサンは小さくため息をつく
そんな光景を見ては和む
響は小さく笑った

ちようど化け物を通るであろう道についた

男の水色と緑が混じったような髪が風で揺れる

顔に刻まれた翼の刺青に触れて、彼が笑った

「もう、どうしようもないなあ。こりや……人多いし、邪魔だし、
どうすりゃあいいんだよ。どいつもこいつも切り刻んでやるうか？」
男の影に隠れていたもう一人の姿

それがちよこつと顔を出す程度だが、姿をあらわした

「だめだよ。煉からも言われたでしょ、関係無い人間は殺しちゃい
けないって……」

高校生ぐらいの少女だ

茶髪のポニーテールがかわいらしいが……

「あつ……と、左目とれた……」

そのかわいさが片目が空洞になったことで激減した

どこに転がったのかわからない少女を男が困ったような表情で見る

「エンバの馬鹿が……」

「左目、左目……左目、あつた……」

「煉がいたらなあ、なんであいつは俺達を……」

「『鏡の化け物』がとたんに『人の鏡』と変わったか。あれ、この
二つ名かつこよくね？ブラッド？」

「くそだ！0点。煉は『デイグニティ』のままがいい。あいつには
それが似合う」

「あつそう……あつた、あつた」

義眼は後ろに転がっていた

そこまで駆け寄り、拾っては袖で拭いたり、水をかけたりする

衛星面などどうでも良いといわんばかり、義眼を左目にはめ込んだ
「衛生面大丈夫かな？」

「自分ではめといて……」

「んで、どうするの？ブラッドからはじめるの？」

「俺からいくさ。インサニティが相手だとてめえは逃げたくないだろ？」

高いビルの真上に彼らはいた

40メートルあるうビルの端にブラッドが足を置く

今にも飛び降りそうな姿勢だが、エンバは止めようとしなかった
むしろ……

「いつてら」

「ああ？」

勢いつけてブラッドを突き落とす

落とされた本人は不思議そうな顔で突き落とされ、ビルの上からは
エンバが笑顔で手を振るのが見えた

「あの馬鹿……まあ、いいさ」

身を翻し、プールへとダイビングするかのような体勢に入った
30、25、20……とコンクリートが間近になった時……

「見えた」

目標となる黒い車が見えた

同時に、ブラッドの体が血の液体となり、散った

響の知らないところで攻撃が始まるうとした

「赤城さん、止まってくれ」

突然、何を言い出すのか

響の注文に赤城は一瞬耳を疑ったが
とりあえず、したがった

「あいよ……え？」

突然、大きな音を立てて降り出す尖ったもの

血のように赤く鋭く尖ったそれが何なのかわからなかった
頑強に整備された穴あきにされるほど強力なところから

人工的に作られたものだろうと赤城は読む

「敵かよ！」

赤城の大声でイーサンもエマも怯えた

真ん中に挟んでいた響に二人がしがみつこうとするが

「あれ？響さん？」

既に彼の姿は無かった

車の外で、エンジンそのものまで突き刺さり壊れたフロントの部分に腰をかけていた

「久々だ、人間じゃないやつとここで会うとはな」

周りを見てもただ逃げ惑う民衆ばかり

どこにも攻撃してきた人物の姿が見えなかったが

響には既にわかっていた

「いやに血が濃すぎねえか？おまえのお父さん、お母さんは兄妹か従兄弟か？」

車に刺さった赤く小さな武器を引き抜いた

目の前に投げ捨て、散らばった武器をただ見下ろす

「正体見せる、劣等遺伝子。鉄のにおいがプンプンするからいらつくんだよ」

その一声で……血は動き出した

目の前に投げ捨てられた血の武器は液状化

そしてそれが一つに集まり、大きな血だまりとなった

その血だまりが人の形になった時は、さすがの響も驚く

「劣等遺伝子はなしだ。最高に気味の悪い怪物だよなあ」

血のように赤い髪が逆立つ

両腕にある黒い刃が冷たく光る

赤く長いローブ

そして黒い仮面が更に威圧感を与えているようだった

人の形はしているがやはり怪物だ

そう見た時、彼も意を決した

「フリークが、目的は知らんが襲い掛かってきたからには死んでも文句いわせねえぜ！」

勢いよく、車から飛び降りた響がいつもの黒と白の翼を広げた
背中の肉を裂いて現れた4本の腕
それぞれ指が小刻みに震えて、戦いのをときを待っているようだ
翼が彼の体を隠して再び、禍々しい黒い光と共に彼は姿を変える
狂気と残酷な怪物の姿へと……
「来いよ、殺しに来い」

29 兄妹と怪物（後書き）

小説かいてると、なんか血のにおいしかしてこねえ

あ、鼻血だった

30 ほんの少しの躊躇い

「ふむ……」

栄都から近いところで事件が起きていた
デュアル・イーグルの襲撃かはわからない
だが、警戒するに越したことは無かった

「酷いな、この殺気は……」

「黄龍さん、俺いつてみましようか？」

町中を歩く黄龍と付き添っていたヘルファイアとハンナ
彼らも黄龍同様とおいところから殺気を感じていた
同じ能力を持つている者だからこそ、わかるものだった
黄龍はしばらく考え込んで……

「控えよう。デュアル・イーグルであれば私達は控えるべきだ」

「わかりましたよ、先生」

潔く、下がったハンナ

彼女とは反対にヘルファイアはずっと気にしていた

向こうに何が起きているのか

このまま引き下がれない気がした

ビルの屋上から戦いが見えた

ブラッドも例の「化け物」も楽しく戦っているのがわかる

「楽しそうだ。ねえ、ハーデス」

隣にそれはいた

だが、半人半馬の姿では無く、人間のままだった

幼さの残る少年の姿

生まれついで短い銀髪

片目は移植された妹の目が埋め込まれていた

リーナからもらった目に触れて、ハーデス エリックが悲しく顔を
うつむかせる

「僕は……どうしようも無いことを……」

「まだ、リーナの死を嘆いているんだ。自分で殺したくせに……」

「ああ、最低だよ。僕は……僕は……」

あの戦い以降から彼はずっとそんな様子だった
自分の妹を手に掛けてからずっと……

命令とは言え、残酷であることには変わりない
なぜ、上がこんなことを命じたのか

「今度はゴーレムの子供達を殺すことになるなんて……うそだ、ありえない」

「裏切り者の親戚もすべて殺せだなんて、わけがわからないね」
上からの命令と自分の意志がぶつかる

その葛藤が二人を思いとどまらせた
ブラッドがなぜ、そんなことにためらいもせず任務をこなせるのか
二人は信じられず、悲しむばかり

『ほんの少しの躊躇い』

狂ったこの怪物がどんな技を持っているかわからない

だが、どんな状況下でも暗殺をするのは得意な方だ

ブラッドが警戒することなく静かに近づく

インサニティは動くことなく止まって相手の動きを待った

「笑え、笑え……てめえがそうやって笑っていられるのも今のうちだ」

挑発するようなブラッドの言葉

だが、インサニティが返事をすることも言葉を発することも無かった
次の一歩で……攻撃を仕掛けよう

何秒も待って、ブラッドはやっと動き出した

襲い掛かったととたんにブラッドの体が赤い液体へと変わった

その液体が無数に散り、インサニティの腕、足、翼を切り刻んでいく
次に切り刻んだ傷跡に液体となったブラッドが入った

何が起きたのか、冷静に把握しようとするインサニティ
体内の血液の流れがどこかおかしいようにも感じた

しばらくして、左胸から血が噴出した

大量に……死に至るかもしれない大出血

その血がインサニティの前で人の形と化する

元のブラッドのへと戻り、またさつきと同じ嘲笑を浮かべた

「ハハハ、楽しめねえなあ、おい」

傷だらけのまま立ったインサニティを見る

これで殺した気でいたものの、切り刻んだはずの敵の顔を見てブラ
ッドの表情が豹変した

「何が可笑しい。死ぬ間際で狂ってんのか？」

「いや、ほめてやりたい。その能力好きだわ」

「何言ってる」

「血になって刃となり、弾丸となり、そして敵の血と同化できるな
んて……だが、足りない」

残念そうな表情に変わったインサニティの顔がどこか恐ろしいもの
に見えた

「何がだ」

「足りないんだよ。俺と対等に渡りあえるほどの力じゃない。まだ

まだ、渡り合えない」

「何だよてめえ……」

「殺す敵の状況を把握しないとどうなるか。こういうことになる」

インサニティが自分の傷跡を指で指した

その傷跡をブラッドが固唾を飲んで見る

傷跡が塞いだ

ブラッドの力で切り刻まれた傷も心臓を切り刻んで出来た致命傷も
すべて

その様を見せてインサニティの『どやっ』といわんばかりの笑み
傷つけた当の本人は信じられないと驚きを隠せなかった

「まさか……肉体を再生させてんのかよ」

「いや、そんな能力でもないさ」

傷が全部塞いだところでインサニティが余裕の笑みを浮かべる

「ただ、俺はすべてが狂っている。たったそれだけだ。それ以外にわからない。俺も能力自体がわからないんだよ」

翼を羽ばたかせる

狂った姿が間近に、目に留まらない速さだった

「本当の殺し方を教えてやる」

背中から生えた4本と本来ある2本の腕がブラッドの体をつかむ車のある方へと投げ捨ててぶつける

血にならないときは普通の体なのだろう

「くそぉ……」

ブラッドが痛みで小さな悲鳴を上げた

「てめえ」

「あらよつと！」

親指をクイツとあげたインサニティ

その動きに合わせて車のフロント部分からブレーキホースをいくつもの部品が重なったものが現れる

ブラッドの体を巻きついて動きを封じて……インサニティが止めをさそうとした

宙で黒く禍々しい光が現れ剣の形となった

その剣を何本も空間で飛ばしてフロントで倒れているブラッドの体へと突き刺していく

「おら！おら！おらおらおらおらおらあああああ！」

悲鳴もあげず、ただ突き刺されていくだけ

これで死ぬのかこの男は……

久々に楽しめると思っていたものが期待はずれだった

ブラッドの体から血が噴出していく

その血を見て、インサニティの動きが止まった

死んだというわけでも無い

彼はまだ生きていた

どんな悲惨な姿になっても敵は笑っていた

「さよなら、怪物」

ブラッドが指を鳴らした

其の後、何が起きたかというと……

空を仰げば怪物とコンクリートの塊で作られた中型の生き物を引き連れた少女の姿

半人半馬の姿で黒い鎌を手にインサニティへと振り下ろす

その攻撃をギリギリのところでかわした

鎌の刃がアスファルトの上で火花を散らした

かわした先には次の敵

片目が義眼の少女 エンバが邪悪な笑みを浮かべて来た

「ナイストユミ、トユ、クリーク」

片腕をあげた

彼女が引き連れていた生き物が牙をむいてインサニティに襲い掛かる

腕にコンクリートの牙が食い込んだ

どうやって作られたのかその原理がわからないが生き物として動いている以上

殺さないわけにはいかない

「死に晒せ、犬畜生があ！」

空いた腕でコンクリートの生き物を粉碎した

その後インサニティが見た先で少女の力でまた新たな生き物が作られていた

誰も乗っていない車やビルの破片を一つにした巨大な怪物が敵を見て唸っている

その上に少女がすわっていた

「キヤハハハハ、素敵よ。その姿。貴方がどれだけ狂っているのかわかるわ」

少女のその言葉の後に怪物がほえた

窓ガラスがわれ、物が吹き飛ぶ

巨大な叫び

一歩踏むたびに鳴る地響き

目の前で起きているのは現実とは程遠いものだった

「最高じゃねえか。ここまで楽しませてくれるのかよ」

目の前の敵を見て楽しんでる最中

インサニティの周りに白い牙が数本も現れた

体を貫くことは無く、牢獄のように彼を閉じ込めている

「あれ？」

なんだこれと牙の牢獄を叩く

この技を発している敵が目の前に……少女の横にいた

黒い半人半馬

その男が放った技だとすぐにわかった

「へえ」。面白い芸だ」

「楽しませるつもりは無い。用が済んだらお前もすぐに殺す」

半人半馬の怪物 ハーデス

そして車から起き上がったブラッド二人が目を合わせた

本来殺すべき相手の元へと二人が歩く

車の後ろの席にいる兄妹二人だった

赤い血に染まつた手がドアノブへと伸びた

少し躊躇いがちで……彼は開けた

「ここまで来て……ごめんな。イーサン、エマ……」

「殺しにためらっちゃいけないぜ」

隣に口に含んだタバコに火をつける黒いスーツジャケットを着た男がいた

長い銀髪がゆれる

美景な顔つきがブラッドの横目にチラッと……

その姿を目にしようとしたとたん、突然、無数の黒い羽が現れた
目を覆うほどの黒い羽が舞い散り、ブラッドを、ハーデスを混乱さ

せる

「何だこいつは!?!」

「逃げて!ブラッド!」

ハーデスが言葉を投げつけるがその前に黒い鉤爪が光る足がブラッドの体とハーデスの足を蹴った

強い衝撃が二人を吹き飛ばした

黒い羽が空高く舞う

車の横で黒い羽毛を纏った怪物がイーサンとエマを抱きかかえている

「おじさん!」

「すごい……」

「25はおじさんに入るのか?知らなかったぜ」

背中の黒い翼が羽ばたく

空高くへ舞い上がった彼らをブラッド、ハーデスが止めに入ろうとするが

彼らに向かつて巨大な怪物が飛んできた

ギリギリのところまでよけた二人が何が起きたのかと見回した

ハーデスが作った牙の檻を見た

そこにはあの怪物 インサニティが入っているはずだったが

その中にいたのは仲間のエンバだった

檻に入れられた本人も何がおきたのかわからず「え?何?」と戸惑っている

インサニティがこの怪物を投げ捨てたのだろう

彼の姿を無我夢中で探した

だが、目立つ怪物の姿は無く、失敗で終わった屈辱で怒りを露にしたブラッドが叫んだ

「どこだあ!くそ怪物があああ!」

『栄都へようこそ!』と書かれた門の前で空間が歪む

黒い亀裂が入り、闇の満ちた世界がそこで広がるうとしていた

その中から、あくびをしながら出てきた響とイーサンとエマを抱き

かかえた赤城が出てくる

「ついた。最初からこれ使えばよかったよ。でも、いちいちめんどくさいしな」

「人の車をだめにしやがって……中古車だからいいものの」

「弁償はするぜ？ただし、あの敵持ちでな」

「今日、買ったばかりの10万円だ。もういいさ」

冗談を言い合う響と赤城が栄都の中に入った

赤城が抱きかかえていたイーサンとエマも地面に下ろされ、見たことのない都会を見回した

「すごい……」

「ここに君達の知り合いがいるんだろな」

「うん」

エマが満面の笑みで響に向かって頷いた

「ブラッドお兄ちゃん達にも会えたし、今日は楽しいな」

「そうか。そうか、良かったな……はい？」

エマの言葉で響と赤城がかたまった

さっき、戦った敵の名前を言っているのだろうか

半ば笑っている響がひざをついてエマと視線を合わせる

「さっきの赤いの……ブラッド？」

「うん！」

満面の笑みで大きく頷いたエマ

未だその子の言葉が信じられず、響は啞然とした

「デュアル・イーグルだったのかよ」

「襲い掛かってきたんですね。ブラッドさんやみんなが……」

イーサンは信じられないと表情を暗くした

「父さんが組織を裏切ったとかなんとかで……僕達が……」

彼の言葉を聞いて、響が大体把握する

組織を裏切った親族を殺しに来たのだろうと……そう思ったとき、

また納得のいかないことがあった

「友人のお子さんを狙ったのか、あいつら……」

「助けにきてくれたのかな」

無邪気なエマの言葉がまだ何も知らないのだろうと思わされる

どこか悲しい表情をする響が真実を伝えるべきかと考えていたが、

彼はやめた

今はそれどころじゃない

彼らを安全なところまで連れて行かないとまた攻めてくるだろうと

……

「行こうか。君たちの知り合いがまってる」

響は二人を連れて目的の場所へと歩き始めた

30 ほんの少しの躊躇い（後書き）

暑い夏がまたやってまいりました。

皆さんはいかがお過ごしでしょうか？

作者からの大切なお願いです！

水分補給はしっかりとね

31 聖女の嫌悪感

不良、オタク、暴力組織、悪徳業者

彼は様々な分野の人間を殺してきた

依頼と関係無しに害があると思われる連中をすべて……

彼が殺してきた人間達の死体はみな警察の手で隠蔽してきた

国務大臣国家公安委員長の地位である赤城がすべてその行為をしてきた

この国の総理大臣と響の属する組織のトップが彼の力に目をつけ、

警察の頂点に立つようしてきた

すべては響が広く動けるため……

響が組織の上からの命令を遂行するために彼は今日も動く

今は護送のため……二人の子供を守っていた

イーサンとエマを連れて二人は目的の地へとたどり着いた

巨大な敷地に小中高とそろい、また別の敷地では大学がある

高校と大学に関しては男子と女子をわけている

その中にある『光神女子高等学校』

その校門の前に二人は立った

「あの女か」

響の目に入ったのは外国人

長い金髪の少女が学校の入り口から走ってくる

依頼者からは『デュアル・イーグルを抜けた者』に預けて欲しいと

言っていたが……

「あの女は神様か？」

「美しさは女神様以上じゃねえか」

「どの女もくそビッチに見えてしまう。行こうぜ？エマ、イーサン」

大きな建物を前に唾然とする二人を促した

走ってくる少女の元へと近づいていき、任務の終わりを感じつつあ

った

本来彼らに関係無い戦いに巻き込まれることも知らずに……

『聖女の嫌悪感』

イーサンとエマが警戒していた

目の前にいる少女が他人だと言う目をしている
そのせいか

少女に二人を明け渡すのを躊躇ってしまった

「デュアル・イーグルを抜けたやつか？」

「私は……デュアル・イーグルではないです」

少女の告白に「はあ？」と響が声を上げる

「デュアル・イーグルを抜けたやつじゃねえと渡せねえんだよ。部外者は帰れよ」

苛立ちで満ちた言葉を放った響に少女がにらんだ

あまりにも言葉が酷すぎる

耳を覆いたくなるような表情をしていた

「申し送れました」

「あ？」

「白銀の騎士修道会団長　マリア・パウロ。法王と日本皇帝陛下の命によりデュアルイーグル対策部隊として活動しております」

もう一つの告白で……赤城が顔を青ざめた

つい最近までイタリアでデュアル・イーグルと合間見えていた者の
トップと聞いたとき

無礼な言葉を言い放った響を制止する

「響、口を慎め」

だが、響は慎まなかった

「お前さんが誰であるうが関係無い。こちらら依頼主の通りにしないといけないんだ。騎士団の連中が来たんじゃないやあ、依頼どおりにな

らないんだよ」

「響！てめえ……」

「早い話、デュアルイーグルの連中を出せ。じゃないとこちらも安心してこの子らを預けることは出来ない」

イーサンとエマの兄妹を見てそう言い放った

友人のために自分を頼った人間らの期待に答えるために……

「抜けたやつなら誰でもいいさ。とつとと……」

「イーサン！エマ！」

二人の名前を呼ぶ男の声

その声を覚えていた兄弟が振り向いた

そして彼の名を呼ぶ

「オーバン！」

「来たのか。お前ら……」

オーバン 長い黒髪の男がサングラスをはずした

「元気じゃねえか。良かった」

駆け寄ってきた二人をオーバンが抱きしめた

涙を流して、強く強く……喜びに満ちた涙はどこか輝かしいものだった

オーバンがデュアル・イーグルの一人と気づくにはそんなに時間がかからなかった

「デュアル・イーグルの連中か？オーバン」

響の問いにオーバンは二人を離して答えた

「悪い、本名は呼ばれたくない。ヘルファイアって呼んでくれ」

「ああ、そうかい」

「それで……昔はそうだった。今は俺らが裏切られて騎士団に寝返ったけどな」

仲間だった組織に裏切られる

それがどんなに愚かしいものか

響が小さく笑った

「まじかよ。それで仲良しになったのか？おもしれえなあ」

「楽しがつてるところ悪いが、気に入らないな」

ヘルファイアの後ろで黒い短髪の女が睨んでいた
片腕の無い奇妙な少女

挑発的な響の言葉を気に入らなかったのか

敵意を向けた目で少女が近づいてくる

「あまり調子に乗るなよ」

少女が間近になった

同時に響が残酷に笑う

「イーサン、エマ。目を閉じろ」

「おい！響！やめろ！」

いやな予感がした

赤城が叫んだときにはすべてが遅かった

肉を貫く音

血しぶきと同時に内臓が飛び出る

響の右腕が少女の胸を貫いていた

「ヒヤヒヤヒヤヒヤ」

笑いながら右腕を引き抜いた

血塗られた手をそのままにして、彼は歩き去った

「ハッ！ハッ！」

響の攻撃を受けたハンナの仲間達が名を叫んだ

ヘルファイアは遠くへと歩こうとする響を止めようと走った

だが……

「来るなよ」

黒い目を鋭くさせ睨みつけてきた響

その睨み一つで……ヘルファイアが突然、胸を押さえて倒れこむ

「くそお！」

「組織にまんまと裏切られて、敵側に尻尾を振るようなくそども。
見えて反吐が出てくるぜ」

「てめえ！」

「ヘルファイア！今はそれどころじゃない！」

ハンナを抱きかかえた中国人の男性がヘルファイアへと叫んだ
響の侮辱に対し彼は怒りで震える

「くそ……」

マリアもヘルファイアと同じ気持ちだった

傍で見ていたが、響の言葉が心に残っている

残酷な笑みで冷酷な言葉

最低最悪な人間としか言えなかった

「なんて人なの……」

「申し訳ない。許してくれ」

申し訳なさそうな顔で赤城がマリアに頭を下げた

「本当にすまない」

「依頼とは関係無いから別にいいです。ですが、彼は……」

「インサニティ」

その名を聞いたとき、彼女は納得した

まさに狂気に酔いしれるあの男にふさわしい名前だと……

「あの『精神異常者』ってわけですか」

たった一人でイタリアのマフィアとその一家を滅ぼした『彼』

たった一人でアジアにある異常な独裁国家を滅ぼした『彼』

誰もが言う

『彼は気が狂っている、最低な殺戮者』

彼はどこにでもいる

狂ったように国々を回り、狂ったように人間を殺していく

『インサニティ』

彼はそう名づけられた

高校内にある女子寮

その中のベッドの上でハンナは無事一命をとりとめた

響が命を奪うかもしれない心臓部位の方を狙って、内臓を直接引き

出したにも関わらず無傷で済んだ

傍らにはアイスをはおぼる響

「屈辱か？屈辱でしゅかああああ？」

「いずれは殺す……いずれは……」

ハンナが復活するまでの話……

血まみれの彼女が部屋に運ばれたとき、救急車を呼ぶ寸前に響が来た
殴りかかろうとするヘルファイア、止めようとする赤城たちをふっ
とばして彼が行ったのは……

ハンナの額に触れたことだった

それ一つで何が起きたのか……

マリア達が驚く光景だった

見る見るうちにハンナの傷跡が消えていく

内臓も体内へと……

そしてすべてが元の状態に戻った

誰もがその光景が現実なのか疑った

マリアを除いて……

「黒騎士と似ていますね」

彼女の一言で響が目の色が変わった

元々、黒騎士の調査のために日本中を回っていたつもりだ

別の仕事が多く、それどころでは無かったが……

「黒騎士の話は興味あるな」

何かわかれば良いだろうなと思っていたが……

マリアはそっぽを向く

「突然、牙をむく怪物に何も話すつもりはありません」

「殺してでも聞いてやろうか」

「やめる！」

赤城が叫んだ

響が異常に興奮しているのがわかった彼が羽交い絞めで制止する

「響、てめえいい加減にしねえか」

「『鳴かぬなら！犯してしまえ！クソビッチ』だろ！剥いてやる！
その腐れたビッチ肌を剥いてやる！」

「わけわかんねえよ！」

「いやなら吐け！黒騎士は何者だ！ああ？」

むやみやたらに叫ぶ響をマリアは白い目で見ていた

品が無く、礼儀も知らない

ただのくそガキだと……

そう思っていた

「どうしたの？」

部屋の入り口から少女 エマ顔を覗かせる

あどけない少女の顔がどこか不安な表情を浮かべているのを響が見
て……

「ごめんねえ、大丈夫だよ。俺がばかなことしただけだから、ごめ
んね」

そして、彼がマリアの方を見た

「ぐおんめにゆあさいねええええ（訳：ごめんなさいね〜）？マ・

リ・ア・さ・ま？」

エマには見せない挑発するような『ドヤ顔』とふざけた口調

彼のそんな顔を見て、マリアの眉がひきつった

「……」

白い部屋の中

その中で横たわっているのは光の無い目をした仁

彼はイタリアの戦いからずっと眠り続けている

「いつになったら仁君は……」

仁を見守っている黒髪の長い少女 神子

そして彼女の後ろで壁に縋っている金髪の英国の少女 亜里沙の姿
があった

「久々に見たと思ったら、魂が無くなってるなんて、これが黒騎士

の姿ね」

「亜里沙ちゃん！何を呑気に……」

「神子さん、泣き言を言っても彼は起きません。目覚めさせたかったらまだ見守るぐらいしかありませんよ」

壁にすがった亜里沙がポケットから何かを取り出した

黒い刃の破片

日本刀らしきものからとったと思われるそれを神子が見た時、過去の記憶がよみがえってくる

黒騎士 仁を刺した闇武者の武器

黒騎士同様に悪霊を操る彼が愛用していた斬馬刀の破片

それを握って亜里沙が無表情のまま言う

かつて見たことのある残酷な目

脳裏によぎったのは黒く長い刀を武器としたあの怪物だった

31 聖女の嫌悪感（後書き）

みんな おひさ

そして、さよなら

32 黒騎士への第一歩

イタリアから彼は帰ってきた

うつろな瞳でベッドの上に横たわった彼を仲間達が見た時、誰もが不安を感じていた

あの黒騎士が心を閉ざしてしまった

シエリーも陽も……

綾牙も天寧も強くショックを受けていた

創世大学の生徒らに關しては今まで笑っていた彼の笑顔を思い浮か
んでは……

「なんで、どうしてだよ！」

「仁君……目を覚ましてよ」

ただ嘆いた

過去、黒騎士と深く関わった騎士団のマリア達でさえ、彼を目覚め
させる方法は知らない

解明することも出来なかった

そして彼は皇室の協力も得て神子の通う高校の地下に入ること……
デュアル・イーグルの目に入らないように……

当初はそれが理由だった

亜里沙の一言ですべてが変わった

「彼を……研究し尽くさない？」

そう言った彼女が見せたのは今も持ち歩いている

闇武者の斬馬刀の破片だった

『黒騎士への第一歩』

黒騎士レポート

その書類を書いた人物は黒騎士である仁と行動を共にしていた陽と
零達だった

黒騎士、闇武者、聖經会

そして、心無い神様

闇武者の最終形態をそう呼んだのは唯一、武の心に踏み入れた仁だった

イタリヤで偶然そんな名前を思いついたと言う

心にまで侵略できる力を持つ者は今のところいない

黒騎士は相手に取り付いている悪霊や背後霊と稀に話すことも出来る
アルテミスは相手の心をそのまま読み取ることが出来る

だが、彼らとて相手の心に踏み入れることは出来ない

それを唯一可能にしたのは黒騎士ただ1人

だからこそ、世界が目をつけている

今、目の前にいるこの男も黒騎士に目をつけてここに来たのか

そう思っていたが「子供二人を連れてきただけだ」と言い張るだけ

「子供の護送だけで50万かよ。お前さんらの知り合いってのは相
当わるよのお」

狂ったように笑いながら響が言った

マリア、鬼神、ガイア、ハンナ

彼らが取り囲んでも動揺しない

響がどんなものか知ろうとしていたが

「響にいちゃん」

ヘルファイアの横にいたエマが純粋な笑みで響の元へと走る

ソファアに座っている彼の横で彼女も座った

隣で大金を数える男とただ楽しそうに見ている幼女とシュールな光
景である

「エマちゃん、お菓子買ってこようか」

「いいの？」

「ヒヤハハ、いいさ。俺もちょうどアイス食いたかったところだ」

「食いしん坊だねえ。さつき食べたばかりなのに。太るよ」

「太らないさ」

ソファアから「よっこいしょおお」と勢いよく立ち上がった
唇の横の傷が歪む

狂気な笑みが似合いそうなその顔に純粋な少年のような笑顔が浮かんだ

少女 エマを見下ろして彼も同じ満面な笑みを向けては言う

「俺の体は狂っているからな」

サファイアとヘルファイアから告げられたのは父 ゴーレムの死
父が危ない仕事をしているというのは最初からわかっていた

だから父の死は覚悟をしていた

殺した相手が仲間であるハーデスと聞いた時
そのシヨックは父の死と同じくらい強かった

「エリックがそんな……」

「俺らも裏切られた。煉も目をつぶされて精神的に参っているしな」
煉の存在

組織の暗殺部隊のメインでもある彼の名を聞いた時、イーサンが顔をあげた

「煉さんは？あの人は！」

「病んでるぜ。目をつぶされ、ハーデスにおかしくされてもう何も見えなくなっただてな」

「……どこに」

「黒騎士の仲間がいる大学でだ。医療ですらどうしようも出来ないのと、あいつが起こした事件が関係して警察関係者が動いている」
ヘルファイアがすべて説明する

イーサンはただ何も言わず友の悲劇を聞くだけだった

彼は生きている

だが、精神的には瀕死に近いものだった

今、創世大学にいる彼は呆然と外を見ている

いくら話しかけようとも……

いくら触っても……

彼は何も言葉を返さない

彼が唯一動くとしたらトイレにいくか食事をするぐらいのものだ
ただの肉塊となった

「黒椿君……」

陽は学校にいる間、目を離さなかった

綾牙も天寧も同じく、彼を見守る

だが、1人だけは違っていた

「もう彼は敵じゃないね」

「シエリー？」

「いつまで、廃人相手に警戒をしているの？あんたらしくないよ」
心を読めるシエリーはいつもそう言う

人間の心は読めても死人の心はわからない

そんなシエリーが煉に対しては死人のようだと言う

「もう生きていられないさ。正気に戻ったときはすぐに自殺に走る
わよ」

完全に人間としては見ていなかった

シエリーがそう言い放つものの陽はそれでも見守ることはやめな
かった

「ショックで自殺に走るような人間なら彼は友人達を傷つけたとこ
ろで自殺している」

陽の解釈

彼女の言う言葉はどれも納得できた
だけど、今回はやはり……

「あの顔を見てると……彼はもう……」

「彼は生きているわよ」

そして、二度つぶやく

「彼は生きている」

「なんでそう言えるのよ」

納得のいかないシエリーが強く問い詰める

何も光の無い目をした煉を見つめて……

陽は悲しく笑っては答えた

「何かを待ち続けているのよ。何かを……」

彼も何かを待ち続けていた

コンビニの店員の前で……弁当の温めが終わるのを待っていた

「まだかな」

「できたみたいだ。楽しみに待ってる」

商品を渡され、金を出して……

「いこうか」

エマの手をとってコンビニを出る

これでエマが日本人だったらただの兄妹に見えたんだろうが

「あの子、外国人だろ？」

「なんであの傷だらけの男が手をつないでつれてんの？」

「おい、警察よべよ……」

そんな風に見られているのも仕方ないとは思った

周りの目を気にすることなく響は小さく、そして幼い手を握っては至福の瞬間を楽しんでいた

（ああ、小さい。小さい小さい小さい小さい、かわいいかわい
いかわいかわいかわいかわいかわいかわい。ウへへ
へへ）

心の中ではまさに犯罪者の笑みを浮かんでいた

そのままの勢いで襲いそうな表情でないことがタチが悪いものだ

「エマちゃん」

「なに？」

「このままデートしようか」

「ごめんなさい。マリアさんから『この人、変態だからデートはだ
めよ』って言われた」

そんなエマの純粋な一言で彼の中に生まれたのは……一つの純粋な

『殺意』

(くそビッチが……ぜって偽純情くされマ　「に卵かピンをぶち込んで腹の上からぶったたいて子宮壊してやる」
異常なまでの殺意であった

なぜ、自分達がここにいるかわからなかった

ただ一つ言えることは自分らが何を殺そうとしているのかということだけ

「サタン達は前線部隊だったろ？　デイグニティに好んで付きまとった女ども、トップが変わったととたんに煉の抹殺にいかされてら」
夕方から缶ビールを手にブラッドが立った

後ろに立つのはハーデスとエンバ
ハーデスがブラッドの質問に返事をする

ただ一言「そうだよ。もう二度とあの頃には戻れない」と……悲しい目で言った

ブラッドが小さくうなづく

「サファイアもヘルファイアもいいやつだったのになあ。殺してしまっわけか。くそつたれ。ああ！くそつたれ」

「1人の少女が来たよ」

エンバが指差した

学園の出入り口から金髪の少女が来る

制服を来た金髪の少女

その女がマリア……じゃないことは見てわかった

青い目をしたのはマリアじゃない

ハーデスから得た情報では彼女の目の色はまた別のものだった

「あの女は一般人か」

「学校帰りの子よ。私達は客人」

「ああ、そうだ。客人だが……その客人に対して、あれ……」

ブラッドが恐る恐る指差す

顔をひきつけて震えながら……

「客人を迎え入れるのに大きな刀をもって歓迎するか」

「彼女はその気満々ね」
だんだんと近づいてくる少女を見て3人が息を呑んだ
彼女が何をするのか
無表情のところ怖かった
そこで笑つたらなお恐ろしさ倍増だろうなと思つていたところで……
……二タア
少女が笑つた

黒騎士の力つてのは強力な割りには扱いやすい
だから素人の武でも扱つていた

ああ、闇武者が強いわけだ
唯一死なない能力は使えない
だが、それでも彼女は満足していた
耳元のマイクから聞こえてくる

『良好よ。亜里沙……テストを始めるわよ』
「テスト3回目。ヘルファイア、鬼神と続いて今度は実戦……」
実戦を前にして笑つた

「今度は闇武者の悪霊の試験ね」
『いきなさい。力を証明するためにね』
「わかつた」

斬馬刀を引き抜いた
力の証明のため……今、弱者から成りあがろうとしていた

紫色と黒のオーラが開放される
少女を纏つたそれがなんらかの形になってくる
かつての面影は無い

今彼女を纏っているのは異形な黒い武者鎧
何が始まるうとしているのか
いくつもの修羅場を駆け巡つたブラッドは既にわかつていた
だからこそ彼は誰よりも先に姿を変えた

深紅のロングコートに奇妙な仮面

インサニティに向けた時よりも巨大な殺意

武者となったたった一人の少女に向けた

「楽しそうだなあ。黒騎士に似たのが出てきたぜ！ヒャハハハ」

そしてブラッドは一步踏み出す

32 黒騎士への第一歩（後書き）

久しく投稿

コラムーチヨうめえ

33 血だまりと黒い影

黒い刃がすべてを裂いた
地も建物も……

そして、敵も切り裂かれている

切り裂かれても特に問題の無い相手ではあるが

「その技、聞いたところじゃあ聖経会の闇武者かよ
戦っていてわかる

強いというレベルじゃない

黒騎士の力を使っているわけだ

禍々しくそして残酷な能力

それを前にして自分がなぜ生きていられるのか、疑問に思うぐらいだ

「足りないか？満足な笑い一つ浮かべやしねえぜ」

闇武者に言っても彼女は言葉一つ返してくれない
今の戦いは試しているようなものだ、無駄話一つすることが無かつた

黒い斬馬刀を振るう

その一閃がブラッドの体を更に傷つける

痛みなどは無い

体がすべて血液と化した彼には通じない攻撃だった

赤い液体が闇武者の後ろで形を成した

赤いコートと黒のマスクを纏ったブラッドが現れ、闇武者もその気配に気づいた

「さあ、行くぜえ」

黒いマスクの口元が開いた

赤い牙が露になる

笑っているように歪むブラッドのその面が闇武者の目にしつかりと映る

そして彼女も……笑った

『血だまりと黒い影』

数々のモニターには赤い怪物と闇武者が戦っているところが見られる
それを見ているのは研究者らしい風貌の女だ

「闇武者の動きどう？マリアちゃんの目に写っている彼の動きは黒
騎士そのものかな？」

その女が隣にいるマリアへと質問する

黒騎士をよく知っているのは彼女以外いない

そのマリアも驚いた表情でモニターを見ていた

「あの闇武者を完全に再現させるなんて……」

闇武者の力を人間の科学力で出来上がるなど聖經会以来のことだ
なぜそれが出来るのか、不思議だったが

モニターの前で狂ったように笑うこの男の素性を知って納得できた

「マッド・ドクター。楽しそうね」

「聖經会で研究してた時よりもおもしろい。最高じゃないか」

今、ここに仁がいたら彼はキレてこの男を殴るだろう

マッド・ドクター

彼は元々聖經会で黒騎士の研究に携わっていた男

聖經会という組織そのものがつぶれた後、投獄されていた彼を皇室
が一時的に釈放することを要求した

それもこれもすべて黒騎士 仁を目覚めさせるために……

黒騎士を研究し尽くした彼なら其の手がかりがつかめると思っていた
釈放してすぐ、亜里沙の提案を元に研究が進んだ

「闇武者の力で黒騎士の心を取り戻すなんて、亜里沙ちゃんもすこ
い発想だな」

「非科学的だ……とは思ったが、これは良い材料だ。頼むよ、マッ
ドドクター」

「データ採取に行動記録、ああ！楽しませてくれ！」

そしてマッドドクター中心に記録の採取が始まった

窓から鬼神とヘルファイアが見ていた
亜里沙から研究に協力しろと言われた時は「何を言ってる、このガキ」と思った

だが、あの女は本気だった

なぜ、黒騎士の力を欲しがっていたのか

聞けばただこう答える

（指輪とかそんなものと同じですよ、アクセサリーとなんら変わらないです）

なおさら、ガキだなと思っていた

だが……

闇武者の力を短期間で使いこなしたところから本当に力を愛している
と伝わった

神も認める鬼の力を持つ者

暗殺のための黒い炎を纏った者

その二人を退けたのだから、誰もが驚きを隠せなかった

血まみれの道路を歩く

どんなに切り裂かれても生きているブラッドが恐れることなく攻める
闇武者の鎧を砕こうと力任せだが、それも通じない

鎧が硬すぎる

傷一つつけることが出来なかった

黒い刀とかみそり以上に鋭い赤い液体が更に戦いの場を無茶苦茶に
していった

コンクリートの欠片、車がバラバラに……

戦場に生き物がいれば何一つ残らないだろう

そんな過酷な戦場で二人が立っていた

無口で二人が睨み合う

コンビからの帰り

響もエマも啞然としていた

響に関しては黒騎士と同類の怪物を見ていて喜んでいた

エマはそれこそ、ブラッド達が戦っているのを見て不安そうに見守っていた

「ブラッド！」

「殺しにきたお友達を心配しているのか、エマちゃん」

「お兄さん！止めてよ！」

エマが懇願する

今にも泣きそうなのその目を見た時、どこか悲しくなった

狂いたくなるぐらい悲しくなってくる

「ああ、いいぜ。君のためなら……愛のために狂ってやるぜ」

たった一人の少女のため

少女の純粋な気持ちに応えたいがため

彼は漆黒と純白の翼を広げた

「そこで待つてな。その裏で弁当さめないうちに食ってな」

狂気を具現化した彼が天高く飛んだ

地の上で見上げているエマへと手を振って、狂気の怪物が笑った

「すぐ戻るさ」

ありえない状況だった

気づけば目の前には巨大な機械

戦っている相手との間にそれは落ちた

二人が目を見開かせてその機械をよく見た

「人工衛星？」

「何よこれ」

新たな敵かと……周りを見た

どこを見ても誰もいない

「……うそ！」

闇武者が気配を感じた

異常な殺気

体が溶けるように痛くなる

何かにならみつけられているようだった

「どこから……」

探し続けた

自分をにらみつける正体を……

ブラッドから目を離れたその瞬間、何か体がぶつかると

重たい何かが……

闇武者がコンクリートの上で音を立てて倒れこんだ

「なに！？」

上に覆いかぶさったものを見た

闇武者の上にはいたのは赤いロングコートの男　ブラッド

突進してきたのかと思ったが、違う

本人も何が起きたのか把握していない

そんな表情をしていた

闇武者が起き上がる

啞然としているブラッドをどかせて黒い斬馬刀を構えた

構えた先には異形の怪物

種類の違う六つの腕

漆黒と純白の翼

初めて見るタイプの怪物がいた

「何なのよ」

「さあ、なんだろうな？俺にも教えてほしいが」

一言しゃべったと同時に急接近

目の前に現れた怪物　インサニティが6本の腕を使って闇武者の体

を持ち上げた

数秒で鎧が砕く

異常な力だ

今までブラッドの力でも砕くことが出来なかった武者鎧が散らばった姿が露になる

長い金髪が揺れる

闇武者から想像できない弱々しい少女の体

それを見てインサニティが驚きを隠せなかった

「女か」

同時に彼が笑って腕を出した

闇武者の首を引っつかんだ

「おもしれえ、こんなビッチにもそんな力があつたのか！笑わせるじゃねえか」

新しいおもちゃを前にした子供のように目を輝かせる

闇武者という名のおもちゃは彼にとって刺激の強く、そして今まで異常に楽しめるものだった

「黒騎士の能力と同じだろ？なら、死にはしないはずだ」
殺すつもりでいた

だが、その気もふさがれる

闇武者の後ろにいるブラッドが仲間であるエンバに抱えられているところを見て、気が変わった

「おいおい、血みどろ野郎？」

「あまり調子にのらないほうがいいよ。お兄さん」
地響きと共にハーデスの黒い姿が落ちた

それと入れ替えてブラッドとエンバがその場を離れていった
しまったと、ブラッドを追いかける姿勢を見せたインサニティ

それも黒い鎌の一振りで止められる

「くそおお！」

「今回は僕らの負けだ。またね、狂ったお兄ちゃん」
ハーデスが砕けたコンクリートに触れた

いくつものコンクリートの破片が浮かびインサニティの体にまとわりついてきた

足は封じられ、動きがとれない

ただ、異形な悪魔ども3人が空高く飛んで逃げていくのが見えるだけ

ハーデス達の姿が見えなくなったと同時に破片も消えた

学校の地形がだいぶ崩れたなとインサニティが自分の頭を掻いた

「なんだよ、こりゃ……」

「ひつでえことをしてんなあ、おい」

学校の入り口から見慣れている男が歩いてきた

赤城と気づいた時にはどこか安心してしまった

「いいさ。すぐに直してやる」

解放され動けるようになった響が変身を解く

…… 軽い調子で彼はその場を直すつもりでいた

「まじかよ」

言葉通りに出来るのかよと赤城が笑った

彼の能力は計り知れないものがあるが、そこまではと思ったが……

10秒後

壊れていたものが元に戻った

車も建物も……

切り刻まれた跡もすべて消えた

元に戻ったその場を後に彼はエマを迎えに行く

そんな彼を赤城は見送った

インサニティが起こした行動に笑いながら今の光景を見回す

彼がやることはいつも無茶なことばかり

そして狂っている

だが、見ていて楽しいところがあった

「やっぱ、おもしれえぜ。インサニティ」

後で駆けつけてきたマリア達が亜里沙を回収

彼女は鎧を砕かれているが、生命に危険は無かった

ただ一つ……

「あの悪魔……」

予測もしなかった出来事と自分の能力を打ち破られたショックで亜

里沙が病んでしまった

黒騎士に近づけるために……

彼の心を目覚めさせるために作ったものが、壊された

研究員達も残念そうな表情で亜里沙を見る

だめだろつか…… そう諦めていた

再び、研究員達が黒騎士のレポートへと目を通し始めた時

「諦めない……まだ、まだ……」

引き絞るような声だった

亜里沙の思念が伝わってくる

「まだよ。まだ、黒騎士が完成してないのに、諦めるなんて」

「今はまだゆつくり休んでなさい」

心配するマリアの言葉で亜里沙が力を抜く

立ち上がるうとした様子も無くなり、ソファアの上へと身を任せる

「ごめんなさい。こんなことに貴方を巻き込むなんて……」

亜里沙を見るマリアの目に悲しい色が浮かんでいた

自ら黒騎士の被実験を望み、仁を目覚めさせるために苦痛も耐えて

いる

心から彼女に感謝をしていた

そして、申し訳なく思っていた

「……」

「黒騎士を使って兵器量産ですか？ええ？」

耳にするのもいやな男の声

その声が近づいてきた

「インサニティ……もう、依頼は終わっただけです」

「黒騎士が関係しているのなら、離れることは出来ない。こちらら、

上からも調べるように言われている」

響が何かを言うと怒り狂いたくなった

マリアは冷静に保つ

ここで怒りを露にしたくなかった

「なぜ、黒騎士を……」

「黒騎士の能力を持った髪、血をわずか数センチ、数ミリで何が出るかはマリア様も知ってるはずだ。その中国人も……」

響の視線がマリアから黄龍に変わった

「今じゃどうなったか知らないが中国の革命軍『無双』の連中、知ってるだろ？」

「ああ」

「あいつらも黒騎士の遺伝子で作られてんだ。しかも俺ら怪物らと同じ変な能力を持ったり、獣になったり……アメコミが現実になっってしまったわけだな」

冗談のように言うが、響の言った言葉がどんなに恐ろしいことが

響が何かを言っていくたびに心臓の鼓動が高まるのがわかる

「そうだな」

「そこまで動揺することは無い。おじさんが黒騎士について最初に研究したつてのは俺の組織皆知っているぜ」

衝撃的な言葉だった

黄龍が驚きを隠せず、マリアも響から目を逸らした

「組織か。君の組織が何なのかわからない」

「わからない？ 教えてやらねえよ。だけど、黒騎士について今何をしているか、教えてくれたら俺も教えるよ」

「おいおい」

響の肩を掴み、赤城が前に出た

「こいつらにそこまでいいのかよ」

自分らの組織を暴露するなど……赤城は躊躇った

「何も取引なんて……」

「馬鹿言え。親友なら間違いなく取引するぜ」

「なんでそう言える。あの方がそんなこと……」

「赤城さんにはわからないよ。あの人の考えなんて組織皆がわからない」

肩にのった手をどかした

響が赤城の横をとおり、静かに歩く

マリアの目前で、歩みを止めて……

「どうする？別に危ないことだからってこの施設とあんたらをつぶすつもりは無い。目的が危険だったとしてもな」

「……」

この男に話してなんの価値があるだろうか

無言でマリアが考える

沈黙が続く中、仲間達は彼女を見守り

響は期待のこもった目で答えを待った

そして、決断する

「私達が行っているのは黒騎士を増やすことじゃない」

うつむき様でマリアは続けた

「恩人を……今眠り続けている黒騎士を目覚めさせるためです」

33 血だまりと黒い影（後書き）

イエーイ

そして、おやすみ

34 全面協力

たった一人の人間のために時間を費やしてきた

黒椿 牙

不吉なその名はマリアの母によって名づけられたもの
能力そのものも不吉

そんな彼の力を騎士団達は長年、研究し続けてきた
仁に対する研究はその続きのようなものだ

彼らの力がどんなものか

どんな風に使えばいいか

今は黒騎士 仁の復活を期待して続けている

黄龍を通して中国からの資料

騎士団で扱われた資料

そして聖經会で使われた資料

すべてを合わせているところだ

それでもまだ足りなかった

悩み続けた

仁の心を取り戻すにはどうすればいいか

亜里沙の一つの疑問から始まった

「黒騎士の力は人の心にまで踏み入れることが出来るんですよね？」
そこから第2の黒騎士を作ることになった

『全面協力』

まともな状態で耐えられるものだろうか

亜里沙も最初は不安があった

だが、こうやって志願したのも理由がある

黒騎士と同様の力を得られるのなら、躊躇う必要など無い

「はじめてください」

そして始まった黒騎士の血の投入

最初は数滴で始まった

実験開始から数分後

耐え難い苦痛

奇怪な幻

黒騎士と同様の力が宿ってきた

黄龍からは「数時間たって危ないと感じたらすぐにマリア様の血を投入し、黒騎士の力を抑える」と言ってきた

だが、耐え抜いた

黒騎士の力を我が物にするために

「武はこんなことを……」

黒い斬馬刀の修復

フランベルジエを使えればと思ったが黒騎士の意思が無い今、再現することが出来なかった

その代理として斬馬刀を使用した

短期間で闇武者へと変身

何も問題も無かった

闇武者になるにはそこまでの痛みが無かった

だが、能力としては不十分

唯一死を免れる能力も20回

20回も死なない力などいらなかった

傷を治す力が欲しかった

たったそれだけ……

周りもそう望んでいる

黒騎士を目覚めさせるために……

より近く、それが同じものになりたい

亜里沙はずっと望み続けた

黒い炎が闇武者を包む

だが、精神をもやきつくす炎もすぐに無意味となった
悪霊達が盾になるのだ

形相もすべてが恐ろしい彼らでもこうやって従ってくれると心強い
ものだ

敵となれば絶対相手したくないもの

「やれ」

鬼神の足元で悪霊達が現れる

黒い髪が彼の肉体を縛り、動きを封じた

闇武者の斬馬刀を駆使した攻撃を繰り返す

元々、馬ごと敵を切り落とすためのもの

使いこなせば巨体を誇る鬼神の体を一刀両断出来る

鬼神が苦悶の表情で地を割り、獄炎と鎖を放った

今、目の前にいる闇武者は数々の悪霊を従えている

彼らが受けた苦痛の数だけ彼女に通じるはず

そう思っ放った

容赦はしていないつもりだった

「残念」

その獄炎も鎖もすべて跳ね返された

闇武者がどんなに強いか

何よりその闇武者を短期間で使いこなした亜里沙の精神力に驚かさ
れた

闇武者の資料に沿って研究は続く
正確な手順で行われていく

だが、仁の心に踏み入れるにはまだ能力がつかなかった

人間の力では無理なのだろうかと周りは諦めかけている

それでも、闇武者の強化は続いた

あるものは更なる可能性のため

あるものは過去の研究を完成させるため

あるものは友の目覚めのために……
それぞれが力を入れる

「と、簡単に説明すればそんな感じですよ」

「思ったより……おもしろくないな」

目の前に出されたスナック菓子をつまみながら響は笑った

「今おねむの黒騎士を目覚めさせるための研究かよ。親友があくびするぞ」

「そちらの組織がどう考えようが知ったことではないですが、仁君は私達を守ってくれましたから」

「ほお」

恩義をに尽くすため

その考えは嫌いじゃなかった

スナック菓子をつまむ手を止めて彼は拍手する

「悪かった。美しい恩返しだ。黒騎士がなんで心閉ざしたかは気になるが、あえて聞かないことにするよ」

真正面にいるマリアへと笑い、彼は立ち上がった

「人間の心を取り戻すなんて容易なことじゃない。はっきし言って人間技じゃないぞ。それでもやるのか？」

無理難題の問題だろう

それをわかってマリアは無言で頷いた

「いいさ。ちよつと知り合い呼んでこよう」

別に名案があると言った表情でもない

だが、奇妙な笑みのまま部屋を出る彼を見るとやはり、まともな考えをしていないだろうと予想が出来た

この近くにいるビビへと彼は連絡をとった

生命の進行を早め、また遅らせる力を持った彼女なら何か力になれるかもしれない

黒騎士を助けても得することは無いが、興味本位で何かやってみた

かつただけだが

こうやって関わるのもまた一つの余興だと……ビビへと皆を伝えた
『あまりおもしろそうとは思えないね。何で黒騎士を目覚めさせるのよ』

「1度話してみたい。俺の親友は黒騎士の大ファンだからな」

『過去のドイツなみの虐殺を行った悪魔が好きだなんて、あの人も権力者として失格よ』

「答える、お前の力で心閉じたやつを……」

『肉体の成長と老化しか取り扱わないわよ。残念だけど、私には出来ないね』

ああ、そうかと響が納得した

どこか切ない顔で上の空になり、誰がいただろうかと考える

「俺の組織内で精神とか扱えるやつは誰もいないよな。まして、心の中に踏み入るようなやつなんて……残念だ」

『それよりも、親友から手紙が来てたわよ。すごい内容の手紙ね』
あの親友から手紙だと……

電話で事を済ます仲だったために、不思議でならなかった

「言ってみろ」

『後でマリア様に渡しにいくわよ。場所は赤城さんから聞いているから、楽しみに待っててね』

「マリア様に渡すものか？わかったよ。んじゃ、俺は観光してくるよ」

『待って……』

電話の向こうにいるビビが焦って止めようとした

何か言いたそうだなと響は思いつつも、知らない振りで電話を切る話が続いてくと彼女はいつも説教をしてくる

それが聞くのがいやでいつも3分したら電話を切っていた

「ヒヤハハ、しみつたれた馬鹿が……説教もばくせえぜ」

「悪かったわね」

覚えのある声が後ろから聞こえた

響が後ろを振り向く

眉毛がピクピクとなり、さわやかな笑顔を浮かべている友人が立っていた

その笑顔の裏にはどこか強い怒りが感じられる

「ビビ……近くだっ……」

一言声を掛けようとしたら、血管の浮いたグーパンチが目の前に迫っていた

そこから強い衝撃と同時に世界が真っ暗になる

そんな感覚を彼は味わった

勝手にどっか行った響が心配だった

彼が何をやらかすのか予想が出来ない

突然、国一つを揺るがすようなことをしでかすような人間だから、なお心配になってくる

「悪いな、マリアさん。あいつ、素性を話さずにどっか行っちゃまったわな。許してくれ」

「1番、大人な人が残って幸いでした。あの人は受け付けられない」

「よくわかるよ。俺らのところでも大分世話が焼けるぜ。冷酷で残酷なやつだ」

「そんなやつとよく行動が取れるものですね。私にはわからない」
マリアの言い分もよくわかる

今まで共に行動してきたから仲だからわかっている

二度と治らない正確だということも……

「昔はあんなのじゃなかった」

「はい？」

「あの頃に戻りたい……」

小声だが、微かに聞こえてくる赤城の思い

その言葉はどこか悲しく、何かがあったのだと察することが出来た

荒々しくドアが開いた

マリアと赤城が驚いてそちらの方を見る

異様な光景がそこにあった

異常な戦い方をしてきた響が女に髪を引っ掴まれて引っ張られている場面

あの響が弱々しく見えた

「貴方は……」

「おい、ビビ！」

驚いた赤城が立ち上がった

意識を失っている響の元へと駆け寄り、彼の脈拍と呼吸を確認する彼はかるうじて生きている

「安心したよ。お前だったら、こいつの体内老化させて殴りそうだったしな」

「電話切った後に、陰口言ってたから殴ってやった」

「やることひでえな」

「マリア様ですね」

マリアを見つけたビビは赤城と倒れている響を置いて、彼女のところまで歩いた

手元にある手紙を握って、目つきが鋭く……

「私達の組織のトップからコンタクト希望があったので、私達3人で来ました」

「俺ら二人は最初からいるぜ」

「細かいことはともかく、多大なご迷惑をおかけしました。後ほど、損害被害などはこちらで……」

「その必要もそこまで無いかなと思います」

苦笑いしたマリアが響の方へと目を向けた

彼の能力のおかげで壊れたものはすべて修復され、闇武者の実験でも破損している武具を直すなど功績を残している

残酷で冷酷な男であっても助けられていた

「損害賠償とかはお気になさらず……」

「はい……自己紹介が遅れました。私はビビアナ。響、赤城同様諸

事情で来日しました。騎士団長　マリア様のお噂は聞いております。ご苦労なさったかと……」

「いえ、大丈夫ですよ。町も私達も落ち着きを取り戻しつつあります。それで……」

「失礼しました。私達の組織についてですが……恐縮ですが、こちらを見ていただいた方が把握しやすいかと……」

そう言ってビビがマリアに手渡したのは一通の手紙
印鑑も何も無いただ白い封筒だった

マリアがそれを丁寧に開ける

封筒から取り出した手紙とA4の紙が1枚ずつ

その内容に目を通したとたん、マリアの手が震える

ビビが、赤城が、そして響が所属している組織を知った瞬間、震えが止まらなくなった

「米国の……PPPって」

「赤城さんも響君もまだ言っていないですね。いかにも、私達は米
国大統領守護部隊『President of a protection』現大統領　アダムスからの指令であなた方騎士団と創
世大学への全面協力の表明書を届けに来ました。以後、お見知りお
きを、マリア様」

ささやかな挨拶と微笑

ビビの浮かべるそれは裏が無い

だが、裏表の無い怖さが彼らPPPにあるように見えた

34 全面協力（後書き）

キャラ増やしていくと誰か減らそうかなと思ってしまう

誰減らそうかな

35 突然の来訪者

日本の上空

夜空を飛んでいるのは大統領専用航空機

その航空機の中で今、現在進行形で……

「大統領、手を上げる」

ハイジャックされているところだった

4、5人のテロリストグループが銃を手にソファアに座っている白人の男を取り囲んでいた

「さて、読者の皆様、始めましてと言いたいところだが」

「何をわけのわからねえことを言ってるやがる！」

銃口が額につく

それでも大統領 ウイルソン・アダムの表情は冷静を保っていた

「私なりの読者サービスだ。そうも言ってるられなくなったけどな」

「その読者サービスってのをあんたの血で更に大出血サービスにしてやってもいいの？」

「寒いギャグだ」

ウイルスソンがため息をつく

「私の親友ならもつと楽しいギャグを提供してくれるんだけどなあ」

「いいぜ。てめえの親友も後で地獄に送ってやる。漫才はそこでや
つてる」

ハイジャックの犯人が引き金を引こうとする

今にも弾丸を撃つかもしれない状況の中でウイルスソンは微笑んでいた

銀色の刃が銃とテロリストの1人を斬った

どこから放たれたかわからない冷たく光る刃

テロリスト達が困惑するなか、また1人、そしてまた1人斬られて
いく

「どこだ！」

「お客様、ここで銃の使用は禁じられております」
どこから湧いて出たのか

薄い茶髪の青年がテロリスト二人の肩に触れた

「どうか、お控えください」

テロリストが無言で倒れていった

息もしない

触れただけで二人は命を絶った

テロリストは全滅

血にぬれた航空機内をウィルソンが見回した

「また、派手にやったな」

「大統領、ご無事で？」

操縦席から銀色の短髪の少女が姿を現した

手で握られている銀色の刃が機内を写す

血に染まった機内

人類には無い力を手にした者達

そして、一国の大統領

今ここにいるのは存在が危険視されているような連中ばかりだった

『突然、来訪者』

アメリカ 組織名『PPP』 光チーム

彼らは国内でインサニティの行動を観察していた

赤城とビビからの報告を元に今後、どんな行動がされるか予想される

別に仕事のために予想しているのでは無く、ただ暇つぶしでそうし

ているだけ

彼らは国内を中心に活動をしていた

大統領護衛

時として国内で起きたテロをつぶすのが仕事

動くことの少ないチームである

アメリカ 組織名『PP』 闇チーム

響を中心として活動している組織であった

米国以外の国で諜報活動

それが本来の仕事だ

だが、インサニティだけは違う

彼だけは殺しが許可されていた

大統領から直接、下される命

そして自分勝手に殺す意志

後者に関しては大統領もその意志を尊重している

インサニティが殺す相手はいつだって屑な人間ばかり

例えば、将来が約束された少年であっても、人として屑であれば殺すだけ

その危険な思想を一国の大統領が許していた

日本に航空機が向かっている

米国の大統領を乗せたそれは栄都の空港へと降りていく

今、彼は滑走路がよく見える管制塔の中にいた

「突然の来日だ。恐ろしいねえ」

「皇帝陛下が直々に向かうんですから、それこそ、恐ろしいですよ。何が目的なんでしょうか」

皇帝陛下と神子が降りてくる飛行機を見守っている

マスコミがいたら大騒ぎになっていただろう

幸いそのマスコミはいなかった

ただ、静寂が今の場所を包み込んでいた

朝になった

あのビビにぶん殴られてから丸1日、意識を失ってたみたいだと

赤城からそう聞いた時、響は笑った

「あの馬鹿は……まあ、いい」

「楽しそうだな」

「あいつも楽しんでるだろ。それでつい力んだんらるうぜ」
近々、何が起きるか

それに備えたためにビビにあんな力が入ったのだろう
響の予測は赤城を納得させた

「全くだよ。世の中、おかしいことばかり……」

「親友があんなことでここに力を貸すなんて……嘘だろ」

「……行こうぜ」

ベッドから彼は起き上がった

昨日のことが表明書、親友がどう動くか気になって仕方が無かった

マリアから見せられた手紙と米国大統領からの全面協力の表明書を見て誰もが驚いた

黒騎士の復活のために一国の最高地位の男が自ら名乗り出たのだ

何より驚いたのは響がその男の側近であったこと

「側近なのに日本に来ているのか。そっちに驚きだよ」

「マリア様……私としては……なお、警戒すべきかと」

黄龍の助言をマリアは受け止めた

警察のトップに立つ赤城

生命の成長を操るビビ

そして、猟奇的な力を持つインサニティ

彼らが米国の犬と聞いた時は恐ろしかった

デュアル・イーグルで無いだけ安心できたが……

「得体の知れない組織だな」

ハンナのその言葉を最後に誰も言わなくなった

今この近くに彼らがいるのだ

警戒を解くことが出来なかった

大統領と皇帝陛下

この世界でも充分、高い地位についているこの二人が乗っているのはただの一般者だった

黄色で染まったぼろい車

この車にしたのは大統領自らの希望だった

国民と同じ目線を彼は常に心がけていると言う

最初は観光からはじめようと思っていた

だが、大統領の希望は……

「親友の顔を久しぶりに見たい」

そんな希望だった

皇帝陛下は彼が何を言ってるのか理解できなかったが、神子はすぐにわかったのか

「んじゃ、私の学校に行きましょうか。彼はいますよ」

と笑顔で対応した

神子の言うとおりに車は光神女子高等学校に着いた

そこまで来て、大統領が何かつぶやく

「そいやあ、連絡してないな」

「え？」

「いや、親友達に此処に来るってことを……だね」

親友が誰かはわからなかった組織の部下であることはわかった

連絡無しで彼が来るとなったら光神女子高等学校にいる大統領の部下は皆驚くだろう

皇帝陛下が笑った

「そりゃ、驚くでしょうな」

「抜き打ちで訪問ですからね。しかし、申し訳ないです。突然の訪問で……」

「いえ、前日だったので問題無いですよ。ですが、もうちょっと盛大に歓迎したかったものです」

「いえいえ、今回ばかりはなるべく表沙汰にならないように……」

「失礼しました。参りましょう」

門が開いた

大統領と皇帝陛下を乗せた一般者は校門をとおり、学校の敷地内へと入っていく

「俺、胃が痛いです。うわ、まじで痛いです」

「私も……すごい、痛い」

後ろで着いていた金髪の青年と銀髪の少女が無事を確認した
自分らの仲間が今この学校内にいると思うと、やはり不安しか感じ
られなかった

あのインサニティだ

また何をやらかすか、想像も出来ない相手がいるのだ
胃が痛むほど不安が募った

ドアが開く

マリア達が集まっている部屋の中へと最初に入ったのは神子だ

「皆さん、元気ですか？」

そう笑顔で顔だけを出してきた

その次に……

「失礼します」

皇帝陛下が神子と同じ顔だけを出した

ここでマリア達が驚く

「……え？」

頭の中の整理が出来ない状態でまた1人顔を出してきた

「Hello、親友がお世話になってます」

その男の登場でその場が一瞬で凍りつく

誰もが自分の目を疑った

幻覚か

それとも偽者かと……

「ウイルソン大統領……嘘だ……」

突然の来訪者に誰もが後ずさりする

アメリカ最高権力者であり

インサニティ達を統率する唯一の男

そして、彼が唯一尊敬する男

ウィルソンの来訪はそこにいる皆を震わせた
マリアがひざをつく

「何でこんなところで…… 表明書は既に……」

「初めまして、マリア様。ちよいと、親友と久しく会いたくて来たんだ。プライベートルドで……」

周りを見回す

ウィルソンの目に写っているのはかつてデュアル・イーグルだった怪物達

そして、イタリアの騎士団の怪物達

インサニティと比べて彼らがどれだけ純粹か

ここで並んでいる彼らと親友を比べた

「私の親友ならここにいる皆をどう評価するだろうか」

「楽しいぜ」

親友の口からそう言葉が出てきた

違う部屋のドア越しから響が現れた

朝飯で食べているのか、チューイングキャンディーを三つ取り出し
てはそれを口の中で噛む

「黒騎士の研究をし始めたんだ。学校内と職場は悪霊でいっぱい、
ある女の子は黒騎士に志願。最高だな。笑顔の絶えない世界になり
ましたとさ！」

「ハハハ、やはり、最高のジョークだな」

「何を言ってるかよく、わからんが…… 大統領、たったそれだけの
ために」

赤城も驚きを隠せなかった

ここに来た理由が響に会いに来ただけとわかった時は、立場も世界
への影響も考えない彼の行動に異常性を感じていた

「ありえませんか」

「教師の家庭訪問と考えてもらっていい。個室を一つ借りたい」

その言葉は赤城には無く、神子へと向けられる

響のための『家庭訪問』を行うためとわかった時は神子も笑顔で答

える

「あちらの部屋へどうぞ」

とある小さな喫茶店

ビビは朝食をとるためにカウンターテーブルに座っていた

その隣には大統領を護衛していた青年と少女もいる

「護衛、お疲れ様。奢るわよ、朝ご飯」

「ありがとう、ビビちゃん」

「雪奈ちゃんと私の仲よ。大変だったでしょ、ジェイソンさんも…

…」

雪奈と呼ばれた銀髪の少女とビビが青年の方を見る

ヤケ酒を飲む酔いどれの男の如く、コーヒーを次々と飲んでいく

それもこれも大統領に付き合わされたことから始まった

「いきなりで驚いたよ」

「ジェイソンさん、コーヒー2杯はちょっと……一杯200円ですから」

「いいよ。自分のは自分で払うから」

そして3杯目を飲む

「あの人もやばいぜ。インサニティと同じだ。いきなり日本に来るとか言つて、立場わかっていないはずだ」

「こんな陰口言つてもあの人は許してくれるからいいよね」

「本当だ。本人の前で言つても咎めなしだよ」

ジェイソンが語っている通りだとビビも雪奈も笑った

大統領である地位を忘れて影響の無い程度に好き勝手している分、

ウィルソンは周りの批判をすべて受け入れる

いやな顔をせず「改善するよ」とただ笑うだけ

実際に改善した試しは無いが……

「笑えねえぜ。あの黒騎士が1人の女の子の死で眠っちゃったんだぜ」

「ある程度は聞いたさ。昨晚、ビビからのメールで聞いた」

ビビの段取りの良さにいつも驚かされる

響が笑い、話を進めた

「黒騎士のコピーで有名な闇武者が出来たんだぜ。あの糞宗教と比にならねえ」

聖經会の存在を二人が思い出す

世界で始めて黒騎士と類似したものを作り出した組織だ

ある意味評価されているとも言えた

「中年の男から今度は厨房の雌豚に変わったんだ」

「そうだな……」

ビビから話を聞いた時から気になっていた

闇武者の力を簡単に受け入れる者が出ることは覚悟していた

だが、1人の少女が闇武者の志願したと……

今でも信じられなかった

「その子も何か理由があつてだろうな。黒騎士と同じく目を離さない方がいい」

「大丈夫だ。何があつても……すべては簡単に終わるぜ。あんただ

つてわかつているはずだ」

響が皿の上に乗っているお菓子を手に取った

手のひらに載せてはそれを握りつぶす

乗っていたのは響が好き好んで食べるスナック菓子

それは粉となり、テーブルの上へと散り落ちる

「これと同じだ。物事、簡単に終わる。人間を殺すのもお菓子を

つぶすのも、そして黒騎士を終わらせるのもすべて簡単だ」

狂気の笑みが浮かぶ

口から耳まで裂けている古い傷跡で今の表情にさらに不気味さが増していく

「オナ　ーするほうが難しいぜ」

「してもらうか？」

「そのためのチ　コはクソビッチに切られちゃった。ああ、殺した

いぜ。めちゃくちゃにしてやりてえよ」

怒りか笑いかわからない感情表現を浮かべる響
彼はいつだってそうだ

今でも、これからでも変わらないだろう

見慣れた彼の狂気の笑みに対してウィルソンは微笑で返事をする

「期待しているさ」

「ヒヤハハハ、おえらいさんは楽しく観光でもしてな。ただ……」
「ただ？」

言葉が思いつかないのか、響は必死に思い出そうとしている

これでもない、あれでもない

数分して彼は……

「ああ、言葉が思い浮かばねえ。何もわからねえや」
そう言って、笑った

36 狂ったお話（前書き）

ネタが^らつきた

過去話に逃げる

36 狂ったお話

おもしろいことなど何一つ無かった

親友であるウィルソンと話した時間もすぐに終わった

最高に楽しめる時間だったのに……

ファミレス『グロリア』

そこで響は廃れていた

「はあ……」

近くで騒いでいる不良どもが気になる

ペチャクチャとペチャクチャと騒がしい学生どもが……

怒りが湧き上がる

案の定、彼ら不良達がファミレスを出てしばらくたつたところで……

5人いたが、その5人もろとも殺した

何のためらいも無い

残酷性を露にした今の響は止まることが出来なかった

「ヒヤハハハ……」

狂った彼が街中を歩き回る

特に何もやること無く、ただ暇つぶしで……

『狂ったお話』

響が17の時

彼が本格的に狂い出したのはこのときだった

何の経緯があつて狂ったかと聞かれたら本人はこう答えるだろう

「さあな、狂いに狂いすぎて昔のことも忘れちゃったよ」

プレジデントプロテクター
PPに所属する者らにとって1番の課題と言えば、インサニティの
ことだ

その未知なる力は誰も解明出来ず、彼の能力を知っているのは響自

身とそしてウイルソンの二人だけ
二人ともが口をそろえてこう言う

「知ったところで何の意味も無い。ただ単純な能力だ」
何も解明出来ない

研究者も他の者達もお手上げだった

「ありえねえ。楽しくもなんともねえじゃねえか」

ミサイルが飛び交う

相手は悪質な独裁国家 N国

これが過去のドイツのように国民共々一つなら襲撃を躊躇っていた
響が崩れかけのビルの上でワインをたしなむ

まだ未成年の彼が飲酒するところを誰が止めようか

ミサイルと弾が飛び交う戦地では止めるどころでは無いのは今の状
況を見れば誰でもわかるもの

そんな中、彼はゆっくりとしている

彼に目掛けて無数のミサイルが飛んできた

たぶん、流れ弾か何かだろうと彼は見た

彼が迷い無くとった行動は……

ただ、黒と白の翼を広げるだけ

大きな爆発

そして古びた建物が崩壊した

瓦礫と共に1匹の怪物が落ちる

黒と白の翼と六つの腕

この世のものとは思えない怪物が姿を現した

その怪物と一緒に落ちていく瓦礫を撥ね退けて、翼を羽ばたかせる
天高く、彼は舞った

夜空の彼方で見える無数のミサイル

その発射元がどこなのかインサニティの目ですぐにわかった
核弾頭も見えている

標的が見えてきた

甲殻を纏った手の平の上で光の玉が作られた

ボールを勢いよく投げけるようにしてそれを放った

標的へと届く

その瞬間に巨大な光の柱が立った

インサニティの一撃の後、兵器があつたところは音沙汰も無くただ

沈黙を漂わせていた

これで任務は終わり

さあ、どうしようかと……彼は静かになつた空を見上げた

N国の任務からしばらくして米国内のニュースでは『謎の光がN国の武器をすべて破壊、神の力か!?』みたいなニュースが流れていた
インサニティが放った光の玉と言うのはごく簡単なもの

それについても本人から仲間達に向けて説明があつた

「チャフグレネードを応用しただけです」

たった一言の説明

仲間達は全員口を揃えて「嘘だろ」と言う

「ありえねえ！あんた、チャフを応用しただけで兵器や武器類全部が溶けて無くなるか！馬鹿！」

「銃弾や核兵器だけならともかく、サバイバルナイフや拷問器具まで全部無くすか！すごいよ、逆に！」

赤城と雪奈の驚く顔がおもしろかった

響はただ純粹に笑つてはその様を楽しんでいる

「本当に能力がわからないな」

「そろそろ、教えてくれないだろ」

「教えてくれんと、食べちゃうぞおおおお」

仲間達が賞賛しても答えることが無い

響はただ笑う

しばらくしてやっと喋りだした

「人間でも出来る。むしろ、彼らがつくる方がもっと美しいものだ」

人間の美学

彼はその美学を愛し続けた

過去も今もずっとずっと……

その話がはじまると仲間達は「またか」と呟く

「わかってんか？てめえら、アメリカでうるさいアニメのウサギと酔いどれ刑事の映画を作ったのはなんの生物だ。人間だろ？」

「まあ、そうだな。あの映画はすげえ面白かったよ」

「ジェイソン。あんたはよくわかっている。あそこまでポップコーンの美味くなる映画は無いぜ」

「名シーンばかりだ。インサニティがああ映画で狂うのもわかる」

「ヒヤハハ、最高だ」

ジェイソンの映画好きは有名だ

響もウィルソンも「話していると酒とポップコーンをつまみながら映画が見たくなる」と評価するほどの人物だ

「最高だろ？人間ってのは最高なものを作ってやがる。奇跡に近いものも……だけど」

「人間の道に外れた作品はすべて汚らしいって言いたいんでしょ」
ビビが代言した

彼が何を言おうとするのかももうわかっている

そんな表情で続けた

「だから、この国は7年前に核兵器も生物兵器もすべて捨てた。そして兵器を量産していく国とそれを売っている国を貴方は『1人』でしかも『独断の判断』でつぶしてきたのも……貴方のこだわりってのはもうわかったわよ」

「ああ、お前さんらの話だとこの話もう40回か？」

「50回よ」

その後、仲間達が笑った

響を囲んで楽しく……

インサニティは時々すべてを忘れる

最大限に狂った時、仲間と過ごした時間も自分が殺した人間の顔も

……

そして、自分がどこで生まれ、どこで育ったものかも……

能力が反作用してそうだったのか

誰もわからない

すべてが未知の力だ

その能力の本質も本人と親友しかわからない

誰にも知らせようとしなかった

二人だけの秘密と……時々関係が気持ちわるいと周りが感じることもある

これも過去の話

アメリカにある殺人鬼がいた

少女連続誘拐殺人事件の犯人

裁判で彼は精神異常ということで無罪とされた

そのニュースを見た時、PPの中で誰よりも怒り狂ったのは「インサニティ」

ある日、怒り狂った彼が仲間の制止を振り切ってテレビ局を乗っ取った

チャンネルすべてを能力で支配したかれがテレビの中でその異形な姿を晒しては言う

「少女連続殺人事件の犯人が無罪でただで胸糞悪い。殺せ、何も躊躇うな。24時間以内にあの男を殺さないとこの国すべてをつぶす。警察も抵抗するな。娼婦も裁判官も議員も農民も関係無い。国一つが滅ぶのと殺人鬼が1人死ぬのどっちが得かお前らが一番わかっているはずだ」
そして狂気の高笑い

インサニティの存在は誰もが知っている

大量の核兵器を持っていた米国から核兵器をすべて排除した有名な

人物であり、そしてその核兵器そのものであることが知られている
そのインサニティの言葉だ

誰もが動き出した

1日で殺人犯は殺された

インサニティの言葉と同時に殺人犯に対して怒りを露にした者
中にはインサニティの存在と狂った行動に顔を真っ青にして殺人犯
を探す者

国民の誰もが武器を手にした

たった一人の殺人犯を殺すために……

殺人犯が死んだ後、インサニティは仲間から多いに責められた

それに悪びれた様子も見せず、正当化しようともしない

たった一言彼は言う

「すべては彼らの意思だ。俺の知ったことじゃねえ」

無論、大統領も彼の行動には大激怒

だが、理由は周りの者とは違う

「君が直接手を下さなかつたのが1番不愉快だ。残酷な殺し方を出
来る君がやってこそ本物のシヨー！なのに！」

そんな理由だった

36 狂ったお話(後書き)

バイトで疲れてんだな
タイガー&バニーみてくる

もう夜が来ていた

いつまでこうやって彼を見守ればいいのかわからなかった

寝ている仁をマリアはガラス越しで見ている

彼のために亜里沙の肉体を借りても闇武者を作った

目覚めたら怒られることも失望されることも覚悟している

牙と重なる彼とまた話したかった

純粹な笑顔をまた見たかった

「仁さん……」

「マリア様、まだ悲しんでいるのかよ」

嘲笑しながら話しかけてきたのは響だ

その姿を見て驚きを隠せなかった

「あなた、どうやってここに……」

「協力者だ。黒騎士の顔を見る権利はあるはずだ。と言っても……」

ガラス越しから見る仁の顔

光の消えた黒い瞳

植物人間と化した彼が果たして目覚めるのか

正直希望が見えなかった

「本当に彼を目覚めさせていいのか？」

「方法があるなら彼を助けたい」

「試したいことがあるんだ。試していいんならやるぜ？」

狂った人間の言葉を信頼していいものなのか

不信しかわかない

「悪魔め……」

「怪物なのは俺もてめえも、そして黒騎士も同じだろ」

「貴方ほど野蛮で下衆じゃない」

「どう言っても無駄か。いいさ」

いくら提案しても無駄だろうと笑う

男1人の意識を呼び覚ますのにネチネチとしかも、馬鹿な真似をせずとも簡単な方法があると言いたかったが……
「たぶん、提案してもあんたは反対するけど、もういいさ」

学園内の研究施設内が血で塗れていた

鬼神、ステイブン、黄龍、ハンナ

ヘルファイアにサファイア

彼らが血まみれで倒れていた

殺されているところまではいかなかったが、意識を失っている

その凶行を誰が行ったのか

後から来たジェイソン、雪奈、ビビはすぐにわかった

「あの馬鹿……何をやる気だ」

「止めに行こう。ジェイソンと私で彼を探すから、ビビちゃんは彼らの手当てをお願い！」

仲間へと指示を出してそれから各自が動き出した

狂いだした彼を止めるために……

『恩義』

暗い世界を見ていた

ここにいるのは殺された味方と敵達

その1人であるリーナの手をとっていた

「リーナ……」

銀髪の少女は悲しい目で彼を見下ろしている

「そんな悲しい顔しなくても……俺は……」

「ちよいと、縛りすぎたかな」

後ろから聞こえたのは男の声

それも久しく聞く声だ

「牙さん？」

「よ」

昔の黒騎士がそこにいた

仕方が無いなといわんばかりの表情で頭を掻いている

あの時に消えたものかと思っていた

「牙さん……」

「進化で狂ったところをちよつとシャットダウンさせたんだ。悪かったよ。あのまま放置してたら大変なことになってたかもしれないしな」

「進化……あの時のですか」

黒騎士の鎧を取っ払った姿をハーデスの前で晒したのを思い出した
髑髏の顔に鋭い角

鋭い肋骨を露にしてそれを武器にもしていた

今でも覚えているあの奇妙な力

「あの力の後、何があつたのか俺……」

「説明はまた目覚めた後、マリアから聞いてくれよ。まあ、目覚めることが出来たらの話だがな」

「そうか。またあの時みたいになつてるんすね。聖經会以降です」

こうやって暗闇の中に閉ざされるのも2回目だ

懐かしみたいところだったが、周りの顔色を見ていてそうでない
と仁は感じ取る

「……何があつたんですか？」

長い金髪を引っ掴んだ

マリアの体を壁へと叩きつけては響は残酷に笑った

「奇跡つてのは意外と身近にあるもんだぜ？マリア様よ？」

「何を……きゃああ！」

今度はガラス面の方へと強く投げつける

強化ガラスのためかヒビが入るだけだったが、マリアの体には強い
ダメージが残る

今ので肩の骨が砕けた感覚を覚えた

「痛！」

狂気に満ちた暴力が目の前に……

マリアはディグニティの時に感じた恐怖を思い出した
彼は助けてくれたが、この男は違う

この男は完全に殺しにかかってきていると……

窓ガラスが割れる

そのガラスの破片と一緒にマリアの体が吹き飛ばされた
強化ガラスを突き破って、出た彼女の体は腕が変な方向に曲がって
いる

額からは血を流して、マリア自身意識が消えかかっていた
仁が寝ているベッドの近くへと転がり落ちる

「よっこいしよういち」

ガラスの破片の上へと巨体が降りる

インサニティが何かを口ずさみながら破片を踏んでいった
意識を失っているマリアを見下ろしては、口ずさむのをやめる

「おいおい、まだ眠らせるわけにはいかないぜ」

長い金髪を引っ張り上げる

怒りと憎しみが込められたわけでも無い

ただ響は暴力を娯楽のように楽しんでた

「まだ、骨が砕けたただけだろ？出血多量なただけだろ？おいおい。立
てよ……聖女が汚物に変わるぜ？糞やろう」

機械の手のひらがマリアの額へと向けられる

青く発光していくその手の平

何が放たれるのかわからなかった

視界が薄れていく

血まみれになった視界に何が映っているのかわからなかった

「仁……さん……」

ただ、一つの希望に縋りたかった

彼の目覚めを……心から待った

希望は意外なところからやってくる

血の色の刃がインサニティの6本もある腕の内、女性のような手と甲殻虫の手を切り落としたことでマリアの死は免れた
彼の興味がマリアから別の人物へと変わったからだ

「おいおい、なんでここにいるんだよ。てめえらデュアルイーグルだろ」

インサニティの後ろで構えていたのは深紅のコートと白と黒の仮面をつけた怪物

デイグニティ達同様、暗殺者として活動していた彼がそこにいた

「血だまり野朗……」

「好敵手相手なら名前でも呼んでもらいたいものだ。俺の名は『ブラッド』。てめえの名前は知ってるけど、一応名乗ってもらおうか？」
ブラッドは答えを待つ

インサニティがどんな言葉を返してくるか

狂った答えを待っていた

「『インサニティ』だ。米国随一の狂人って呼ばれてるみたいだ。よろしくな」

「そうか」

ブラッドからしたら別に狂人でも何でも無いように見えた

彼以上の精神異常者なら何度も見たことがある

自分自身もそうだと自負している

「……そうか、それか」

笑いながらブラッドは納得した

血の刃で切り落とした腕が生えてきた

元のように白い女性の腕

そして黒い甲殻を纏った腕が元に戻る

「体の仕組みが異常なのか？てめえ」

「体の仕組みが異常なんじゃねえよ」

マリアを投げ捨てたインサニティの口元が笑みで歪んだ

狂気の頂点に立っていますといわんばかりの表情はブラッドを震わ

せた

「すべてが狂っているんだよ。俺も俺の周りにあるものもすべてな……」

ビビが全員への手当てを終わらせた

一命は取り留めたものの、一人姿が見当たらないことに不安を感じる

「マリアちゃんがないよ」

「マリア様なら地下にいるよ」

突然、後ろから聞こえる少女の声

誰かと振り向けば、そこには茶髪のポニーテルの少女がテーブルの上で座っていた

「どうも」

「貴方は誰？」

疑うことなく関係者だろうとビビは名前を聞いた

「デュアル・イーグルのエンバ。よろしくね」

「……エンバ」

「構えなくていいわよ。私じゃなくて相方がメインで動いているから」

「もう1人って……」

マリアや他の連中からは何も情報をとっていなかった
無理に戦う必要は無い

ここは穏便に済ませようと対応した

「何者よ。貴方達はなんでここに……インサニティが保護した兄妹を殺しにきたの？」

「喜んでよ。私もブラッドもそれは辞めた」

意外な答えだったことにビビが驚く

エマとイーサンのことを少し聞いていたが……

「なんでって顔ね？こればかりはインサニティに感謝しないといけないわね」

笑ってエンバが答えた

「ボスが変わって組織が可笑しくなつて……いやな命令を押し付けられてきたから、今回もその一つよ」

「兄妹の暗殺も……」

「うん。だけど、インサニティが彼らを守っているって聞いた時は今のボスが真つ青になつて『手を引け』って言つてたわね」

インサニティがどれだけ恐れられているのか

一組織のトップが部下に身を引けと命じるぐらいだ

やはり彼の存在は偉大なものだ

だが……

「なんでここに来たのよ。インサニティに殺されるかもしれないのに」

「マリア様の命の危険を感じ取つてここに来たのよ」

「また、マリアちゃんを殺しに来たのかと……」

イタリアのこともあつた

元々マリアを殺すためにデュアル・イーグル暗殺部隊が動き出したそのメンバーがなぜマリアの危機に駆けつけてきたのか

「マリア様を死なせるわけにはいかない。デュアル・イーグルとしているものの規律に『恩人には人としての敬意を見せて永遠に尽くせ。それが敵であつても……』てのがあるのよ。無論、ボスが変わつてからその規律も消えたけど」

「ずいぶんとおもしろいわね」

「そうでしょ？でも私達はその規律を今でも守っている。マリアは私の仲間を助けてくれたから、私達は今の組織の意志に反しても尽くさないといけない」

だからこそ、マリアを助けにいくんだと……エンバは最後に語つた「インサニティがマリアを痛めつけている」

耳元にあるイヤホンに触つてエンバが状況を説明した

「ブラッドと彼の会話を聞いているけど、マリア様に悲鳴を上げさせてそのショックで黒騎士を目覚めさせようとしているみたい。止めていいの？」

目の前にいるビビがインサニティの仲間であると意識して聞いた
もし、ビビがインサニティに手助けをしようとするならここで始末
しなければならぬ

マリアのために……と思ったが

「響君を止めて！じゃないと、大変なことが起きるよ！お願い！」
哀願してきたビビの言葉にエンバは驚きを隠せなかった

赤い刃がインサニティの体に傷を入れる

そこから流れるのは緑色の血

ブラッドがその血に目をつけた

「異常なのは体だけなのか？中身までは変えられまい」

彼の体が赤い液体へと変わった

液体となった彼にダメージを与えるのは不可能だ

どこからどう来るか

ブラッドの攻撃をインサニティは待った

赤い液体は無数に散らばり、インサニティの体に張り付く

その血を拭いながら床の上へと投げ捨てるが……

（もう入ったぜ？）

頭の中から聞こえてくるブラッドの声

その声で彼が自分の体に何をしたのか把握する

「まさか……」

気づいた時には体全体が重くなっていた

体の所々が痛く、耐え難い苦痛が走る

そして……

体中から血が吹き出る

緑色の血だけじゃない

黒に青色、人間のものであるう赤色の血も吹き出していた

「何だこりゃ……」

インサニティの体から出た血が独りずに勝手に動いて人の形へと成
っていく

赤いロングコートの姿へと戻った後、ブラッドは仮面を取り外した怪物になる前の顔が露になる

逆立っている赤い髪と獣のような赤い瞳が目立っている

血まみれで立っているインサニティの目にははつきりと赤い怪物として写っていた

「かつこいいねえ。血に混じって暗殺か。おもしれえ」

「まだ、使いなれていないんだよ。俺は7年前になつたんだからな」

7年前……まだ浅いと感じるがインサニティは笑わなかった

彼は今までに苦労があつて鍛えてきた

「最高だな。その力が羨ましい」

「いや、こんな能力でもまだまだ弱いさ。俺よりも強いやつはいる」

「俺も……その一人になるか」

謙遜して言ったブラッドが突然、驚いた表情に変わった

傷だらけにしたはずの怪物の体から傷跡が消えていた

宇宙にある人工衛星を叩き落すなど暴虐的な能力だけなのかと思った

「待てよ。能力は複数かよ。珍しいな」

「いや、簡単なことだ。一つの能力を応用的に使えばいいだけだ。

君みたいに血を操れるのなら敵の体内にある血から凶器を作り出すことも出来るはずだ」

勉強になった

だが、勉強になったと同時に目の前にいる敵が場数を踏んでいるとわかった

……インサニティ

初めて相手するが、組織のトップが恐れる理由がよくわかった

「教えてやる。ブラッド……こうするんだよ！」

赤い血が噴出した

体から出た赤い刃を見てブラッドは自分自身の能力が暴発していると悟った

それもこれも目の前にいるこの狂気の怪物の能力だと……

知ったところで何も対応できなかった
インサニティの体が目の前まで迫り、獣のような腕がブラッドの体を貫いていた
命まで奪われないもの、強大な敵を前に自分の弱さを改めて知る瞬間となった

様々な血が仁の体に降りかかる

マリアの純粹な返り血

ブラッドの能力を含んだ返り血

そしてインサニティの様々な色の返り血を眠っている彼が浴びていた血を浴びた仁の手が少しばかりだが震える

誰一人、目にすることは出来なかったが、微かな反応が起きていた

37 恩義（後書き）

眠れない・・・

38 騎士の目覚め、狂気の刃（前書き）

仁さんおはよう

38 騎士の目覚め、狂気の刃

マリアの純粹な心が流れ込んできた

誰かを前に恐怖しているものが流れてきた

記憶も流れ込んでくる

今までマリアを痛めつけていたのは狂気を具現化したような怪物

今までに見た中で心無い神と同じぐらい恐ろしいものだった

もう一人は血を自在に操るデュアル・イーグルの一人

彼の痛みも伝わってきた

狂ってしまうような痛みだ

今までに無い苦痛

見たことの無い奇妙な能力

狂った怪物の血を浴びて仁が感じたのは……耐え難いものだった

恐怖でも悲しみでもない

だが、やり場の無い感情が湧き上がる

言葉に出来ない怪物の心

彼が何を感じているのかわからなかった

いつ暴発しても遅くないその心

既に暴走しているのかもしれない

仁自身も危機感を感じた

「どうすれば抜けられるんだ」

この闇からどう現実に戻れるのか

仁は戸惑い、あたふたとするが

後ろから牙が背中を押ししてきた

「いってこい。あの馬鹿どもを助けにいけよ」

その言葉で……仁の目に光が戻った

『怨念VS狂気』

部屋が一瞬暗くなる

インサニティの目の前で倒れていた赤い怪物は血を流していた
だが、傷跡は塞いでいる

ブラッドの芸当かとそう思っていた

「おい」

初めて聞く男の言葉でわかった

黒騎士が目覚めた

そうわかった時、インサニティが静かに笑う

「黒騎士じゃねえか」

黒騎士 仁はマリアの体を抱えている

あの植物人間だったころの様子はも無く、今ではマリアの傷をなお
し自分のものにするほど状態が戻っていた

「なんでマリアちゃんにこんなことをする」

骨を折って、血を流して残酷な行動だ

目を覆いたくなるほどに……

「酷い」

「感謝してくれよ。そのおかげであんた目を覚ましたんだからよ」

「やめるよ。彼女らを傷つけてまで目覚めようと思わない」

仁の言葉をインサニティはただあざ笑った

自分とは考えが真逆だ

耳にしたくない言葉だと、唾を吐き捨てる

「おもしろくない。親友にこんなやつだと話したら間違いなく「お
もしろくないな」と苦笑いされるぜ。ならば……」

六つの手の内、本来ある二つの手が拳がった

他の甲殻の手、女性の手、機械の手そして獣の手は降ろされる

今まで人のままであったその二つの腕

その片方が形を変えていく

赤い鉱石を纏った右腕

そして左腕は銀色の鎧を纏った腕

「すべて揃っても意味無いけどな……ちよいとしたショーを楽しん

でもraithたくてな」

「させるかあ！」

黒騎士の叫びと共に彼の背後に悪霊が現れる

白い壁から上半身だけが出ている悪霊達が一斉に顔を上げた

血の涙を流して、黒い目はインサニティのみを標的として捕らえていた

「ここにいるやつらにはあんたが殺した連中だろ。見覚えがあるはずだ」

「……いや、1部だ」

静かに答えるインサニティ

無数もいるはずがそれをまだほんの1部だと……

黒騎士が解放した悪霊達を見回した

「これでも1部かよ」

「俺のことをどこまで知ってるかわからないだろ？ 気にするなよ、俺も知らないさ」

「自分を知らないって……」

「そいつら悪霊達の顔は覚えている。だけど、これから忘れてしまっただろうな」

そして引き笑い

鳥肌がたちそうな笑い方だ

仁が耳元を抑えた

「なんだよ、こりゃ……」

「ヒヤハハ、つかまつてるよ！」

右手の指をインサニティが鳴らした

同時に研究室そのものがゆれ始めた

白い廊下をずっと走っていた

響と寝ている黒騎士がどこにいるのわからない

迷っている最中、突然地下がゆれ始めた

「最悪！」

「あの馬鹿は……止めにいくぞ！」

「ジェイソンさん！もうだめ！」

焦り始めた雪奈が姿を変えた

銀色の竜の翼を羽ばたかせ、腕からは刃が生えてきた

肉体そのものが変化する

女性らしさがあつた体つきもだんだんと怪物のようになっていった

足先は爬虫類のように鋭いかぎ爪が3本

雪奈の顔を覆い隠したのは銀色の角を生やした竜の顔

綺麗な彼女だつたころ面影が消えた

「行きますよ！」

コンクリートが二つに割れた

銀色の刃が現れたところから間違いなく、刃竜 雪奈だとビビは把握する

「エンバちゃんだっけ？逃げなさい！」

「いやだよ、知り合いがいるんだから」

「……はあ」

銀翼を羽ばたかせて降りてくる刃竜の方を見た

彼女の足を掴んでいるジェイソンがいることを確認した

「ここまで大丈夫ね」

ビビが次に探したのはインサニティの姿

予想が正しければエンバの仲間

そして、マリアと黒騎士含めた4人がいるはずだ

どこにいるかまでは把握できないが……

研究所と学校の1部が崩壊する

そこから夜空に向かって何かが光と共にのぼっていく

かすかに見えた4人の姿

インサニティと黒騎士の姿が見えた

彼らに乗せた大きな瓦礫は雲の上で止まる

またかと……ビビは悲しい目でため息をついた

「うそだろ」

「ここは空の上ですよ、仁さん」

「ああ……」

上空にいるんだと仁とマリアが回りを見回した

後から起きたブラッドもインサニティの背後で驚きを隠せずにいる

「なんだよこりゃ……」

不思議そうに周りを見ている3人の姿を見てインサニティはただ笑うばかり

自分もここまでやることなど本来無い

なぜこんな芸当をしてしまったのか不思議でならなかった

ノリと勢いだろうなと彼は自身の中で決める

「ここから落ちることは無い。見えない壁でそうなっている」

「何を目的で……」

黒騎士が問うその瞬間

インサニティの体が目前に迫った

いつもの敵で見慣れている瞬間移動だが、今回ばかりは対応できなかった

「壁ハメ」

「！……！」

仁が抱きかかえていたマリアを遠くへと投げた

其の後すぐにインサニティの一撃が打ち込まれた

腹部へと一撃

見えない壁のあるところまで叩き込まれた

「まだ……」

黒と白の翼が羽ばたき、軽くとんだ

早い滑空

遠くにいた仁の元へと数秒の内にたどり着いた

「ヒヤハ！」

すべての手のひらの先が発光した

その手のひらを怯んでいる仁の体へと打ち込んだ
何をされたのか

未だ戸惑っている彼の体がしばらくして……破裂

内臓も骨もすべて跡が残らないくらい

黒騎士の絶命を感じた時、インサニティの口元に笑みが浮かんだ

「其の程度かよ、黒騎……お？」

黒い血溜まりが独りでに動くことに気づいた

唯一、死なない怪物がどう生き返るのか楽しみに待つ

黒い血は砂に変わった

それがインサニティの真上まで舞い上がった

無数の悪霊達が砂のままに形成される

口元を大きく上げ、血を流す悪霊が叫んだ

紫色の光線が口から放たれる

インサニティが今まで与えた苦痛をすべてその一撃に込めた

触れば必ず死ぬほどの力だ

躊躇うことなくそれを放った

無数の光線がインサニティの体を貫く

首を貫き、脳天を貫き、心臓

普通であれば即死するかもしれない部位を貫かれた

それでも彼は笑っていた

ずっとずっと……

紫色の光は消えた

インサニティが血まみれで倒れている

既に息絶えているのがわかった

本当ならここで喜びたかった

上空で浮かんでいた黒騎士がゆっくりと瓦礫の上へと降りる

「たった一撃で……」

狂気に満ちた怪物にしては強くもなんとも無い

だが、警戒を解くことが出来なかった

「手、抜いてるぜ」

ブラッドが立ち上がり言う

「インサニティは死んでないぜ」

「こいつは……そうだな、生きている」

死んでいるはずの敵を前にして二人が声を揃えて言う

不穏な空気が漂う

いつ動き出しても可笑しくないと、二人は警戒した

血だまりの上で倒れていたインサニティの体が動き出した

腕もとれかけ、骨も見えて、体の中は機能していないはずが突然、起き上がった

「痛いんですけど、すげえ痛いんですけど、どうしてくれるの？ チョコケーキ一個で許してやるよ」

彼は片足で歩き出した

バランスなど気にすること無く、見えない壁に手をかける

「はあ……」

軽いため息を一つする

同時に起きたのはインサニティの体の再生

細胞一つ一つが肉体を作り出していく

元々あったものは瓦礫の上で残したままにしてはそれと同じものが出来上がったといった

「心臓も問題無い。血圧良好、脈拍もOK」

完全に再生した彼の体

ブラッドも黒騎士もマリアもその様子を見て唖然とした

「黒騎士に……牙さんに子供いたのか？」

「いえ。ありません」

「俺の親は故郷で元気に生きてるぜ」

仁とマリアの言葉に彼はそう返した

「簡単なんだよ、どいつもこいつも口々に答え言ってるのに俺の能

力わかんねえって……はあ」

「てめえの能力は……現実をかえることか？」

ブラッドの答え

大きく間違っているとインサニティは鉱石の腕と銀色の腕で×印をつくる

「違う。そこまですごくねえよ」

「……暴発」

マリアの答えを聞いてインサニティが少しだけ笑った

それでも×だ

「いい線だ。だが、両方違う」

腕を交差させた

×をつくるわけでも無い

彼が行ったのは手のひらから光線を放っただけ

どういう原理で作ったのかもわからない光線

それがブラッドとマリアの体を貫いた

血を噴出して二人が倒れていく

残された黒騎士がインサニティをにらみつけた

「てめえ……許さねえぞ」

「仁、お前の答えはなんだ？まあ、外れて殺したところで死なないんだろうけどよ」

「狂っている！あんたは来るってやがる！」

「正解だああああ！ひやはひやひやひやひや！」

黒騎士の一言でインサニティが突然狂ったように笑い出した

正解だと……手を打って、腹を抱えて激しく笑い転げた

「そつだ！俺は狂っている！それが正解だ！」

「狂っ……」

突然、ハツとなる仁

インサニティの言葉でやっと理解できた

「狂わせるのか」

「そつだよ！ありがとう、すげえうれしいぜ！ありがてえよ！」

喜んだり、感謝するなど逸脱した行動しか行えないインサニティを
若干、引くような様子で仁が後ずさった
武を越えるのではないか
引きつった笑みで仁はまた一步下がった

38 騎士の目覚め、狂気の刃（後書き）

俺、おやすみ

39 満足感(前書き)

インサニティ編 最終話

39 満足感

すべてを狂わせてきた

人間の体内も自分の体内も……

地球上、宇宙の重力も原子も分子も……

黒騎士やブラッドと言った能力を持っているやつらの技も狂わせてきた

分子一つ、細胞一つも……

そうやって戦ってきた

そうやって戦争をしてきた

そうやって国一つをつぶしてきた

ただ、なんとなくすべてを殺してきた

戦車40台を前にしても『殺した』

軍人5万人を前にしても『殺した』

精鋭の部隊を10ぐらいを前にしても『殺した』

すべてを殺してきた

あ、幼女と少年以外……

『満足感』

「そつだよ！狂わせる！ぶっちゃけ、この一言ですべてが尽きるんだよ！」

ただ狂わせる

それだけでこの世界にあるものすべてを思いのままに出来るなど正気の沙汰じゃない

仁が後ずさる

死ですら狂わせて生き返った相手だ

倒せる気がしなかった

絶望の表情でまた引き下がる

「そのまま壁までいくのかよ。ならば、俺から殺しにかかってやる」
六つの腕と白と黒の翼が生える

また異形の姿へとインサニティは変わった

黒騎士は変わらないまま、フランベルジェを構えた

「楽しめよ、黒騎士。某ハンターゲームだと思って、俺を狩りに来い！目指せ、天鱗！」

飛び掛ってきた狂気に構える怨霊

また強大な力がぶつかり合おうとしていた

その間に……

金色の拳が割ってはいる

「何？」

「マリアちゃん！」

黒騎士が叫んだ

インサニティは金色の拳の前で立ち止まり、上を見上げた

金色の巨人がいる

そして、その肩には流れる血を手で抑えて苦し紛れで立っているマリアの姿があった

「許さない！絶対にゆるさない！」

怒りが消えない

マリアは刃をむき出しにした獣の如く、睨み付けては巨人に指示する

「殺せ！聖人！」

聖人と呼ばれた巨人が手の平をインサニティに向けては掴みかかってきた

自分よりも大きいであろうその手から逃れるために飛び上がった
見えない壁も消えた

インサニティの狂気はマリアへと向けられる

「聖人かよ！笑いがとまらねえぜ！」

「インサニティイイイイ！！！」

まだ動いていない右手が動き出す

巨大な金色の拳はインサニティへと一撃を加えた

一撃が入っても……インサニティは何も感じていなかった
ただ笑うだけだった

「クヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ！殺してやる！クソビッチ
！」

金色の拳にヒビが入った

同時にマリアの右手から血が流れた

「……」

冷静な表情で傷ついた血を見た

「同化！」

マリアが光の粒子になる

粒子は聖人の中に取り込まれていった

同化……それは聖人の力を更に強くしていく

聖人の手には巨大な白銀の剣

刃先がインサニティに向けられた

「怪物め！」

機動性も力も上がった

その巨体から考えられない俊敏性

インサニティも驚きを隠せなかった

だが、勝てない相手では無い

「来いよ！女神様よお？」

事が大きくなってくる

黒騎士の覚醒に金色の巨人

「行つて来るよ」

その存在に焦りを感じたジェイソンがすぐ行動を起こそうとする
雪奈とビビは走っていく彼を止め無かった

「あんたらのお仲間含めて皆、死に掛けるかもしれないよ」
ビビの言葉にエンバはうなづいた

「ブラッドは死なないよ。そう簡単にはね」
なら大丈夫だろう

ビビは走っていくジェイソをただ見ているだけだった

金色の聖人の元へとジェイソンは駆けつける
大きいと見上げるが眺めている暇は無かった
黒い霧が舞う

ジェイソンの体をそれが包み込む
霧を掻き切って異形な姿が現れた
灰色となった肌

強靱な肉体に逆立った髪
鎖が体をまとわりつき、下半身からはぼろ布で覆われていた

背中から肌を突き破り、生えているのは幾何学模様が刻まれた薄い
円盤

其の円盤が回っては黒い霧を動かしている
「眠れ、どいつもこいつも……」

ジェイソンが操る黒い霧が舞いあがった
夜空を舞う虫や巣の中で眠っていた鳥がその霧に触れたとたん、
落ちていく

黒く禍々しい霧が電灯の光を消した

黒い霧が舞う

ジェイソン……今はヒュプノスと呼ばれるべき男が気を違えたのか
その様子を見たインサニティが変身を解いた
仁も察して人間の姿に戻った

聖人も消えて、マリアは静かに瓦礫の上へと降りた
「仁さん」

「マリアちゃん！大丈夫か！」
血まみれでひざをついたマリアへと仁が駆けつけた
ブラッドも傷が自然と消えて動けるようになる

彼は浮遊している瓦礫から飛び降りて姿を消した

「ブラッドさんだったなあの人……」

降りていったブラッドの姿を見て仁がつばやいた

「ええ」

「またデュアル・イーグルに助けられたな」

笑って言う仁にマリアも笑顔で返した

煉に会いたくなる

そんな体験をしたようだった

インサニティは黒い霧を消した

浴びればどうなるかわかったものじゃない

静かに眠りながら死ぬことの出来るものであつて、慈悲深い能力ではあるが

それを簡単に振りまくヒュプノスの意志が信じられなかった

浮遊する瓦礫から彼は飛び降りてヒュプノスの前に立つ

「大馬鹿！戦場以外で使うなど……ヒュプノス神のやることじゃねえな？」

「え、響……」

自然とヒュプノスも変身を解く

驚きを隠せなかったのは響が自分の名前を呼んだことに対して……重力など最大限に狂わせていつもなら記憶が消えるはずだった

だが、彼は覚えていた

ジェイソンが少しだけホツとする

「戻しとけよ。大統領に迷惑かけるからな」

「ヒヒヒ、わかった」

ジェイソンの言葉に響がいつも以上にご機嫌な様子で答えた

それが逆に不安だが、暴走することも無く事が終わったのが1番の喜びだろう

だが……一応聞いておきたかった

「上機嫌じゃねえか。何があつた？」

「……親友への土産話が出来たことだ」
くだらない理由だと思っただが、それもまたいいのかもしれない
去っていく響を見送りながらジェイソンは静かに笑った

建物は戻った

いつぞやのように元の綺麗な形のまま

「一家に1台欲しいね」

「かえるぞ！エンバ！」

ブラッドがエンバの腕を引っ張って去ろうとする

それに釣られては歩き出したもの……誰かが走ってきたことでブラ
ッドが立ち止まった

「ブラッド！」

「……ヘルファイア」

ブラッドは黒い長髪の男の姿を懐かしそうに見ていた

対してヘルファイアは困惑気味の表情でかつての仲間達の肩を掴む

「ブラッド、エンバ……お前ら……」

「マリア様のことか？気にするなよ」

「違う……大丈夫なのかよ」

「トップは知らないさ。知ったところで大して得はしない」

そう言い切るのなら大丈夫だろう

ヘルファイアが安堵した

「イーサンとエマちゃんもあんたらを信じていたんだよ」

「……謝っててくれ」

ブラッドは顔を背けた

悲しい顔をしているのがわかる

後悔しているのだろうか

そう心を察したヘルファイアはそれ以上、何も言わなかった

肩を離して二人を解放する

「ハーデスは……いたんだろ、あいつ」

今は姿の見えない彼のことを聞いた

ブラッドもエンバも笑っては答えた

「ロシアに帰った」

「そうか」

「黒騎士が怖いって逃げちまったよ」

少しばかり納得出来た

イタリアでのハーデスのやられようを思い出すと確かに怖くなる

ロシアに帰ったのは妥当な判断だったのかもしれない

「じゃあな」

ヘルファイアを置いてブラッドもエンバも去っていく

その後姿を見てどこへいくのか

これからどうするのか

過去の仲間として心配になった

騎士団も皆、目を覚ました

仁が傷を取り込んだ後、騎士団皆が彼の復活を喜ぶ

「仁！」

「鬼神さん！抱きすぎです！痛い！」

「馬鹿、皆喜ぶに決まってるだろ……」

ガイアも鬼神とは反対の方向から抱きついてきた

表情をあまり浮かべない彼でも今回は笑っていた

「本当に狂った目覚め方でしたな。あまり目覚めよく無いです」

「黒騎士つてのは睡眠がいらさないけど、よく眠れただろ」

黄龍の言葉に仁はうなづいた

リーナが死んだときのショックも無い

闇の中で彼女の心を感じた

それだけでも気分が晴れ晴れする

「……心配おかけしました」

「いいさ。マリア様も救われたしな」

「ええ……デュアル・イーグルの人らのおかげでもありますけど」

「そうか」

黄龍がヘルファイア達を見た
かつて敵だった彼らがマリアへと手を差し伸べた
心強かった

過去、忌み嫌っていたのが信じられないぐらい……

「黒騎士、次も楽しませろよ」

響の叫びに仁が振り向いた

初めて会った相手にも関わらず、強大な力の持ち主であることがわかる

二度と、会いたくないとも思っていた

奇妙な笑みを向けた彼がその言葉を最後に去っていく

他の仲間達は申し訳なさそうに頭を下げてその後についていった

「米国大統領なあ」

響の後姿を見て思うことはただ一つだけ

世界がおかしい方向に動いているということだけ

「やばいだろ、こりゃ……」

ウィリアムがいたのは一般の喫茶店

夜でもバーとして経営しているそこで彼は親友を待った

ドアの開く音が聞こえる

彼が来たかと振り向く

「よ、親友」

3人の仲間を引き連れて響が店の中へと入る

静かな場所だと満足した笑みで彼はウィリアムの隣へと座った

「未成年だから、まあ……コーヒーお願いします」

店主へと注文する

笑顔で答えた店主が台所の方へと向かうのが見えた

しばらくして響が話を切り出す

「黒騎士……あいつは楽しいぜ」

「その満足そうな表情見るとわかるさ」

「ありがとな。ただの話題探しに権力振りかざしてもらって……敬意を表する」

「いいさ」

手元にあるグラスワインを口元にウィリアムが一口飲む
白色の純粋なカクテルが似合っていた

響が横で笑いながら親友を見る

「本当に50かよ。信じられねえぜ」

「まだまだ、若いものに負けられないね。息子にも君にもな」

「無理するなよ。50近い俺の親父はもう老眼だからな」

「ハハハ、大丈夫だ。君がいれば、病気も何も怖くない」

アルコール度数が高いカクテルを飲んでも酔う様子が見られなかった
空になったグラスワインをテーブルの上において響の方へと向いた

「さ、話してくれよ。酒の肴になるものを」

「いいぜ」

黒騎士との戦いを語り出した

静かな喫茶店の中

血なまぐさい話がされた

楽しげに語る響と聞き入るウィリアム

その二人の話は互いが飽きるまで続いたと言う

狂人だとかサイコパスとか

よく言われている

どうだっといういいさ、満足に生きればいい

楽しければいい

それ以上は何も求めない

ああ、殺しもやめない

凶行もやめない

狂っているだっ?

ああ、そうだ

俺は狂っているさ

今も……
そしてこれからも……

39 満足感（後書き）

とくにまとまった終わり方じゃないんだけど、許して
なんせ、狂ってるからな
次回……決まらないね

米国 P P + メンバー紹介

作者「……………」

響「何、賢者タイム入ってるんですかあ？」

作者「忙しいんですよ。就活に自動車学校にレポート……………これが無様な人間の成れの果てですよ」

響「笑えねえ。どうせ、何やってもだめなくせによ」

仁「それよりも、終わったね。魂が戻ってきて良かったよ」

作者「おはよー、おはよー」

仁「まむしー、まむしー」

作者&仁「こいつばい、コロツケ！」

煉「ちよつと、黙ってる」

ウィリアム「まずは組織の紹介から行こうか。私達 P P プレシデントプロテクターの求人表を見せようか」

響「人を殺すだけの簡単なお仕事です」

雪奈「違います」

プレシデント・プロテクション

P P

大統領とアメリカ政府の元で活動する組織

戦地へと赴き、核を排除する

また、大事件が起きたときに解決に向けて動く組織

ウィリアム大統領の命で彼らは動いている

だが、政治的なことにたいしての口出しは一切禁止されており、また大統領以外の副大統領、補佐官の命でもウィリアムの意志に反していても実行をしなければならぬ

ほとんどのメンバーが聞かないが……

二つのチームにわかれていて『光』と『闇』で役割が違ってくる

PP 闇チーム

河埜 響

年齢：18

身長：164

体重：54

特徴：口元の片方に大きな傷跡

威圧的な目にすぐさま凶行に走る性格で周りに迷惑をかけることが多いが本人は気にしていない

唯一心許せるのは親友であるウィリアムと幼女だけ

幼女に対して肉体的な性交渉は嫌い、心しか愛さない

同年代と年上の女性に対して嫌悪感を持つことがあるが過去の出来事からそうなった

能力：『インサニティ』

精神異常者と和訳が出来るが彼はその名のとおり狂気の産物といわれるほどの力を持っている

能力もただ単純にすべてを狂わせてから操る能力だけで重力、傷の回復、建物の修復も応用して使っているだけ

本人がその気になれば地球の核を停止させたり、分子一つ、細胞一つを狂わせて自在に操ることも可能

この力を最大限使うことで響自身の精神が1度崩壊した後、目覚めて普通に生活することは出来るが精神崩壊する雨の出来事はすべて忘れてしまう

忘れた後はウィリアムや赤城達から資料を提示され自分が何をしたのか等理解していくというやり方を行っている

インサニティ『ああ、狂っているさ。俺は狂っている』

赤城

年齢：25

身長：177

体重：67

特徴：長い銀髪の男性

警察の頂点の立つ男

それもこれも今いる警察官僚達の隠蔽や汚職が醜く日本のためにならないとウイルソンが片棒かついだおかげでこの若さでなったというウイルソンの命により警察は常の日本のためになれということである、左翼的な政治活動に対しても厳しく見るようになった

それもこれも赤城とウイルソンの動きがあつての結果

能力：『?????』

黒い人型のカラス

鋭い鉤爪と俊敏な動きで近接を得意とする

そのほかにも能力はあるが彼自身能力を表沙汰にするのは好まず使われることが無い

赤城『あの頃に戻りたい……』

ビビアナ

年齢：19

身長：167

体重：?????

特徴：少し赤みがかかった髪と綺麗な髪飾り

幼さは残るといつても響よりも身長は上

響のどんな言葉にも耐性があり、いざとなれば彼に手を下すこともためらわない

冷静ではあるが、どこかいまどきの若者と言った女性でもある

能力：『?????』

成長、老化の促進と減退を行える

また胎児や小さな命をその手で生かすことが出来、胎児であれば成長を出産直後と同じ状況にすることが出来る

成長した胎児は健康そのもので命に対する危険は無い

ビビアナ『お見知りおきを、マリア様』

雪奈

年齢：18

身長：164

体重：?????

特徴：少し銀色になりかけた黒色の髪の少女

響と変わらない身長と冷静な判断力を持ち、外出する大統領の護衛を行っている

響、ビビアナ、後に出てくるジェイソンとは仲が良い

能力：『刃竜』

刃の構築と使用

体の中から出すことも可能でそれを武器とすることが出来る

その鋭利な刃物はダイヤモンドを切り落とすほど

刃竜『行きますよ!』

ジェイソン

年齢：19

身長：170

体重：60

特徴：薄い茶髪の少年 PPきつてのイケメン

友達思いたが、周りを危険に巻き込まないために仲間を半殺しにすることもためらわない

後でちゃんと謝るそんな誠実さを持っている

能力：『ヒュプノス神』

睡眠性の高い黒い霧を放ち、動きを封じる

また霧を吸った者は30秒で起きなければそのまま眠ったように死

に至ってしまふ

使い方一つで大量の被害者を出すことが出来るが彼が使うのは基本戦場のみ

それ以外に使うと響に説教されることがある

ヒュプノス神『上機嫌じゃねえか。何があつた？』

+

デュアル・イーグル暗殺部隊

ブラッド

年齢：20

身長：167

体重：57

特徴：水色と緑が混じつたような髪

かつては煉やハーデス達とは仲が良く、行動を共にしてきたがイタリアの騎士団との戦いから自分の行動が正しいのかどうか迷っている性格は明るいのか少し残酷なのはあまり定まりが無いがそれも煉が消えた後不安定になつてきた

唯一大切にしていることは組織の前トップの教えに従うこと

仲間（煉やヘルファイアたち）を助けたマリアへと恩義を感じているがあまり表に出さない

能力：『ブラッド』

血を武器として扱う

また、相手の体内にある血を刃にして体内からの攻撃が可能

そして体全体は血で出来ているため、同系統の攻撃でなければ体内からの攻撃で無い限りダメージを食らうことが無い

ブラッド『好敵手相手なら名前でもらいたいのだ』

エンバ

年齢：16

身長：155

体重：45

特徴：ポニーテルの少女

ブラッド、ハーデスと共に行動をしているがかつては煉にあこがれて彼についていくことがあった

時折、仲間達や敵に二つ名をつけるのを好むが周りからはあまり気に入られない

唯一、煉は「好きだなあ」とほめている

仲間達の気持を誰よりも理解している

能力：『エンバ』

この世にないものを具現化させる能力

彼女であれば幻想の生物を作り出すのを好む

エンバ「私達は今の組織の意志に反しても尽くさないといけない」

日本国内 黒騎士の研究チーム

亜里沙

年齢：14

身長：156

体重：44

特徴：金髪の少女 日本で黒騎士と最初に出会った少女（心無い神様 第3話参照）

黒騎士の力を得るために研究の対象として人間性を捨てた

本来は仁を目覚めさせるためだったがまたそれとは別に目的がある

能力：『闇武者』

基本は武がなつていた闇武者と同じ

唯一違つとすれば過去のそれ以上に力が増大したこと

黒騎士同様に死ぬことも無いが制限はある

心に踏み入る力までは無いが、いずれはその力が増大するかもしれない

神子「人間キャラが待遇されないこの小説……」

作者「口内炎が三つ出来ただけど痛い」

亜里沙「蹴り！」

作者「なぐられたあああああ！！！！血でたああああ！！！！口

内炎が三つ増えたあああああ！！！！」

仁「病院……行こうよ」

作者のやる気が無いからもう次回予告

作者「釣られたな」

米国PPP + メンバー紹介（後書き）

ちよつと、現実見てくるよ

デュアル・イーグル前ボス（前書き）

プロローグ的な……あれ

デュアル・イーグル前ボス

「友人のために自分の正義を貫くか、人を救うことだろ？」

「あ、はい……」

「僕達の組織はならずものばかりだ。だから君のような人間がいるのは新鮮だよ」

「いや、ボス……」

ボスの言葉を失礼だとは思いつつも否定した

「俺は人間じゃありませんよ、鏡を見ればわかるとおり」

鏡に映る自分の姿を煉は見せる

黒い鎧を纏った巨体と蛇の下半身

これが人間かと言われたら誰だつて否定するだろう

「怪物です。でも、力があります」

「ああ、そうだな」

「その力で人を救えるんなら……って思ってますけど」

「デイグニティ……人間すべてを救うつもりかい？」

ボスが突然語りだした

彼の考えは賛同できるところが多く話も聞きやすく惹かれる

煉はただ彼の話を真剣な顔で聞いた

「こういう力って人間が1番欲しがるものなんだよ。今の君じゃあ間違いない世界を壊す道具として使われる」

「……大丈夫です。まともな人間とそうじゃないやつの見極めぐらいで来ます」

「そうだったな。だが、他のやつは君のように判断は出来まい。君が悪魔に見えるあくどいやつも他のやつからしたら人間の姿だ」

「わかっています。もし、他のやつがその道で正しいって言うんなら止めません」

「そうか」

煉の言葉だ

偽りが無いことはわかった

『デュアル・イーグル前ボス』

出会って間も無い頃

煉の良さを見たのはある戦地だ

市街戦の中でデュアル・イーグルの前線部隊の1部が女を搔つ攫おうとしていた

見学として来た煉がそれを見かけたとき、血相を変えていたのをまだ覚えてる

何も罪の無い人間に危害を加えるなどと思ったのだろう

彼は黒い巨体で前線部隊の前に立ちはだかった

その後はもちろん、前線部隊から袋叩き

それでも市民を守ろうと体を張った

「てめえら組織は外道だ。やることはこの政府どもとかわらねえ」それが許さなかった

戦場でそんな感情を抱くのは隙を見せるのと同じ

ボス自身もそう思っていた

だが、彼が人間を守ろうとする意思を見せ付けた姿に隙は無かった力強くそして優しい

荒々しい今の組織に新しい風を吹かせてくれると希望を抱いた

煉に賛同するものは予想してたよりも多かった

暗殺部隊を新しく結成しようとした時、リーナに次いで1番暗殺向けだったのはディグニティ

まだ幼い彼女を置いてディグニティを暗殺部隊のトップとして新しくメンバーを募った

希望したのは50名

戦地で彼の動きを見てそれに惹かれた者

ゴーレムやヴェノムのように恩義を感じている者
サタンやルシファーなど彼についていった者
それぞれがどんな気持ちを抱いてついていったか
だが、煉は何も知らずとなかった
彼らの好意は受け止めようとしたが目に写っていたのは怪物
誰をどう信じればいいのかわからなかった
メンバーはボスが適正や相性を考えて決めたが……
イタリアの戦いの後、彼は後悔した
大切な仲間を何人も亡くしてしまったからだ

植物の状態になるまで煉に意識があった
裏で前ボスと彼が密かに連絡を取り合っていたため、身を追われた
ボスでも状況を把握することが出来た

（お願いがあります。ボス……）
彼の口から出た願い……

ハーデスから真実を知った時に彼が1番恐れたのは賛同してくれた
仲間の身と関係者や親族の危機
ゴーレムの家族がそうだった

まだ組織内にいたボスが二人を連れて日本に逃亡
その後はマリアの元にいるヘルファイア達の元へと運んで欲しいと
煉から指示を受けた

表立つことが出来ないためボスが利用したのはインサニティ
ボスは煉の友人である美保と晋に頼み込んで、インサニティと接触
することを依頼

そしてエマとイーサンを連れたいンサニティが無事に栄都を到着
これで二人の無事は確実なものとなった
唯一予想外だったのが、エマとイーサンが暗殺の対象になったこと
インサニティがいることで恐れて近づくことは無いだろうと思って
いたものがその予想もはずれた
それも1番親しみのあるブラッドやハーデスに向かわせたこと

何よりショックが強かった

今では煉の目覚めを待つだけ

黒騎士は目覚め、アメリカが動き出した

未だ中国は動きは見え、デュアル・イーグルは刻々と裏切り者に対する制裁をしに来ている

今、この創世大学に敵が近づいてきているのがわかった

慎重は動きを保とうと、前ボスは身を潜ませ煉を見守り続けることに……

デュアル・イーグル前ボス（後書き）

おねむううううう

40 罪悪感

かつての仲間の笑顔が見えなくなった

そして仲間であるハーデスが牙を向けたこと

仲間が仲間を殺したこと

そのシヨックのせいか

またハーデスの能力のせいか

彼の精神は死にかけていた

微かな反応があるとしたら彼が持っていた音楽プレイヤー

その中にある曲を聞かせれば指が少しだけ動いた

それ以外は何も無い

介護をされている状態の彼をつきつきりで世話したのは陽だった

デュアル・イーグルとして活動していた彼の功績は見事なものだと評価した彼女が好んで行っていた

「介護慣れしてるな、陽さんは」

横から様子を見ていた綾牙が声をかけてきた

陽は優しい笑みを絶やさずに彼の方へと向いた

「私は元々、障害者施設に勤めたかったのよ。いろんな人と会えていろんなことを学ぶことが出来たからね」

「ふ〜ん……アメリカじゃあ、障害者は全部怪物扱いらしいな。シエリーさん」

今度はシエリーへと彼は話しかける

シエリーはと言うとエプロンをつけては棚の整理

埃を落としながら掃除をしているところで話を吹っかけられた

彼の言葉に首を横に振ったシエリーが笑いながら……

「映画だけの話よ。いくらアメリカでもそこまで酷じゃないわよ」

「まあ、そうか。映画俳優でも多いしな」

何気ない会話の中、ドアが開かれた

入ってきた人物へと3人が向く
そこにいた人物に皆が驚いた

「辻崎さん！」

現れたのは聖經会の時に共に戦った天寧 またの名をゼウス
彼女が連れてきたもう一人の人物にさらに驚いた

「おす、邪魔だったかな？」

「天寧のお父さん……？」

刑事の姿を見て、冷や汗を掻いた陽

彼女が不意に煉の方を見る

今近くで植物状態になっている人物は刑事が探している犯人でもあ
った

『罪悪感』

影次郎の訪問はもちろん、煉が起こした事件について

1度は数々の組織の力を借りてあの事件を無にしたが

「ちよっとおもしろいことを言われたんでな、1日旅行がてら報告
に来た」

「どうぞ」

「ありがとうよ、陽さん」

目の前に出されたコーヒーにまだ口をつけなかった

先に説明が行われる

「煉が犯した犯罪についてだ。もう少しで解決しそうだ。煉の証言
もあつて無事な……」

「其の辺りはわかっています」

「そこまではいいんだけどな」

手を組んでは額に当てて悩むような様子を見せた

「一人で出来る犯行じゃないって……それで上からは本当に彼が行
ったものなのかって言われてな」

影次郎の言う『お上』の言葉通り

彼が殺したのは数十人も越える

それを瞬時で一人で行うとしたら重火器を使うかそのぐらいしないと難しいだろう

現場ではその痕跡が無いため、煉が一人で行ったという事実が無くなった

「それって良いことじゃないの？」

「ん……まあ、そうだろうな。『異常な犯罪者』として考えたらそうだろうな」

疑問に持ったシェリーの言葉に影次郎は濁しながら続けた

「煉が犯人であるのは事実……だが、彼に秘めている力がどうとかを警察が認めるわけが無いからな」

「煉を無実だと言う証明は簡単に出来るわけだよな」

「だけど……本人が許さないんだよ」

影次郎の言葉にシェリーが首をかしげた

「本人？」

彼女が指差したのは植物状態の煉

影次郎はその疑問に対してうなづく

「煉自身の希望だ」

「どうして？てか、いつ？」

「イタリアで彼の荷物の中に入っていたと……これがな」

胸ポケットから取り出された手紙を陽達に見せる

煉の直筆だとわかるのに時間はかからなかった

俺は罪を犯しました

自分の暴走を止めることが出来ずに友人を傷つけ、同級生を殺しました

俺を殺してください

死刑でも良い

天誅でも良い

罪を償わせてください、殺してください

震えて書かれたその手紙を見て煉がどんな気持ちを抱いていたのか
彼らにはなんとなくわかった
罪悪感に苛まされていることも……
友人を失った痛みや悲しみが重ねに重なって……
彼の知っている世界はどんよりと混乱したものだっただのかもしれない
それでも唯一守ろうとしたのは『正義』
友人達との約束だった

『彼には助けられたこともあります。デュアル・イーグルから逃れることができたのは彼のおかげです』

パソコンの画面に映ったマリアがイタリアの時のことを話した
語るマリアの横には目覚めたばかりの仁

いつものように甘いお菓子をほおばっていた

『あいつは悪いやつじゃない。敵に襲われそうになった時には助け
てくれたしな。マリアちゃん』

『ええ』

仁もマリアも過去のことを思い出しながら語った

「煉君の正義って誰のためなんだろうね」

『さあな。大切なものなんだろうな』

陽の問いに意味深い答えを言い放った仁
煉の心を唯一見た彼の言葉だ

なんとなく説得力があるようにも思えた

彼の心理を結論づけることが出来ず、結局煮詰まってしまっ

こういった人物には様々な精神疾患が予想されるが、彼を精神科に
送るのはまだ早い

マリアや仁が認めるほどだ

きつと良い人物なんだろう

その彼と話してみたい

微かな望みを抱き、陽はまた煉の食事の介助をした

学校のある日、煉はシェリーたちに任せた

彼らは学校に入学はしていないが研究の協力者としてここにいてもらっている

研究や調査は陽が授業に出ていない時だけ

陽が講義に出ている間、煉の世話していたのはシェリー達

最初は難しいものだと思っていたが、ちゃんと噛んでくれ、飲み込みもわかりやすいためすぐに慣れた

「はい、煉夕ああああん、ああああああん」

「シェリーさん、きめえ」

「やかましい」

何も無く時間が流れていく

たった一人の男の世話をするだけで1日が過ぎていくのがもったいなかった

「ちよいと出かけようか」

「はあ？どこに？」

「この近くに神社あるでしょ？そこに行こうかになって」

「勝手にどうぞ」

「ちよ……女の子と何も出来ない男を置いて……」

「シェリーさんがかわいらしい『男の子』だったら俺は喜んでついていった」

綾牙が持っていたゲイ雑誌を振りかざしては笑って言う

その本がなければきつと良いイケメンだっただろうが、それ一つですべてが台無しだ

「……煉君はいい男かもよ」

「俺は仁みみたいな気弱な子が好みだ」

綾牙の言葉に2、3歩引いたシェリー

彼がここで男に手を出さず、我慢しているがよく出来るなど不思議でならない

今、講義に出ている正志が大学の男達の尻が危ないだろうなと思った
綾牙が来る気なしとわかったシエリーが車椅子を押し始めた

「わかった。煉君とデートしてくるよ」

そう言つて煉と共に部屋を出る

静かな空間となつた今の部屋

しばらくして学校のチャイムと共に外が騒がしくなつた

創世大学から出てきた二人の姿を男が捉えた

吸つていたタバコを彼は握りつぶして木陰に隠れ、見慣れた友と初めて見る女の子の様子を伺つた

「煉君……元気出ないか」

独り言、其の後男は笑つてその場に居座つた

木を叩く音が聞こえる

男が木の反対側の方を見た

そこにいたのは煉と一緒にいた少女

「……君は」

「さつきから怪しい男だなつて思つてたわよ」

様子を見ていたのをばれていた

男はあわてて言いわけを考える

「ごめん。ストーリーじゃないよ、僕は……」

「わかつてるよ。わかつてる……」

女 シエリーは既に知つているといわんばかりの真剣な表情で男に近づいた

彼女の瞳はすべてを見通しているかのようにだと彼は一步引いた

「もうわかつちやうのよ」

シエリーは男の襟首を掴んでは引つ張つた

彼女の行動に驚きを隠せなかつたが、その唇が近づいてくることで胸の高鳴りが抑えられなかつた

近くでみたら美人だと……

その美人が男の耳元で色っぽく囁いた

「貴方……デュアル・イーグルのボスでしょ」

40 罪悪感（後書き）

第2の煉の章 突入

今度はぐるく無いよ？

煉の様子を観察していたら突然、変な美女に声をかけられたがそれはそれで都合が良かった

創世大学の環境を知るにも良い

何より彼に近づけることが出来たのが1番のメリット

ボスはシェリーと煉の後を歩くことにする

「申し送れました。元デュアル・イーグルのマルク ご存知のとおり組織のトップに立っていました、今では追われている身ではありませんが」

「よろしく。シェリー・アヴァロン」

「アルテミスと伺っておりますが……」

「そうそう、あまり表沙汰にした覚えは無いけど」

シェリーは煉の乗った車椅子を押しながら語り始めた

「デュアル・イーグルには似たような能力持ちが多いと思ってたけど……」

「君のような能力は少ないな。彼は人の心を視覚的に捉えることが出来たのだから」

煉の方を見てはマルクは懐かしむように笑った

人間の醜い部分しか彼は見えなかった

アルテミスのようにただ単純に心を読むだけでは無く、醜い怪物を見ては人を判断していた

それで仲間に対して冷たく当たっていたこともあった

マルクが唯一彼に対して心を痛める場面でもあったが……

「彼の目が戻ったって聞いた時はうれしかったね。僕はこれでもイケメンだと思っっているからね。煉君に見てもらいたくて……」

「ナルシストだったか……あちゃー」

顔に手を当ててシェリーは大きなため息をつく

手をのけた後、白い目で後ろにいるマルクを見た

「……」

「そんな痛々しい目で見なくてもいいだろ。悲しいよ」

「アタシからしたらひ弱なロシア人にしか見えないわよ」

「悪かったね」

「能力も弟さんがいないと使えないくせに」

シエリーの言葉で今度は何も話さなくなったマルク

その表情は何か思いつめているかのような、暗いもの

シエリーは更に彼の心境を見た

マルクを裏切ったのは共に行動した一人の男

その弟とデュアル・イーグル前線部隊の裏切りを知った彼は二人の子供を連れて日本に逃げる

暗殺部隊の生き残りを頼ってきたのだろう

無事に子供二人は仲間の元に行き着いた

その後はここで煉の目覚めを待つことに……

マルクから読み取れたのはそのぐらいのことだった

『強襲』

シエリーが煉を連れて天凜神社に行くと綾牙から聞いた

ならば先回りしようと言った陽と零達学生は既にたどり着いていた

熱い日差しの下、皆が皆脱水症状を防ぐために冷たいお茶を口にしている

陽だけは違った

体温を操作出来る彼女は服も長袖の女性服のまま

周りが見たら熱がりそうだが、本人は涼しい顔で日差しにあたっていた

仲間達は案の定、熱そうな表情で彼女を見ていた

正志がお茶を横に置いてはため息をついた

「その力で地球温暖化防げないですか」

「無理よ。私そのものがその原因ですもの」

「そうですね」

陽は笑って言うが冗談で済まされないほど熱いと正志は団扇で扇いだ
「あちい……」

「しかし、陽さんも変わってますね。わざわざテロ組織の人間をか
くまうなんて」

煉の存在を未だ気に入らなかった

香織は前々からずっと陽に訴えていた

「私ら狙われますよ」

それはデュアル・イーグルから狙われることを恐れての主張
それを陽が聞くことは無かった

「仁君やマリア様の頼みよ。当然、協力者として受け入れる」

「それはわかりますけど……自分で火に飛び込むようなものですよ」

「私は燃えないわよ。『ヘリオス』だもの」

「まあ、それは……」

陽のジョークは時々怖いものだ

自分が神の力を持ったために何でもしてやろうという風な言い方をす
る時もある

行動にはうつさないが、その言葉で聖經会の人間を何人切れさせた
ことか……

怖い目にあっただこともあったが、最終的には陽の勝利で終わってきた
実力は信用している

「ですけど……」

「その姉ちゃんの言うとおりだ」

突然、話しかけてきたのは紺色の長い髪をポニーテルのように結っ
た男

外国人で身長が高い男だった

「危ない火に飛び込めばどうなるか、俺はよくわかっているよ。『
ヘリオス』」

神の名を口にした男に全員が不信感を抱いた

彼が何者かを探るばかり……

「おもしろいと思うけど、火遊びはいけなげ？」

「いや、もう遅いわよ」

陽が笑った

「神になっちゃったから、危険な目にあうことは覚悟している。目の前に敵がいても……」

赤い光で陽の髪が逆立った

笑ってしまった

突如、能力を発動させたのだ

水が蒸発するであろう100度の火の玉を作りそれを男へとぶつ放した

遠くへ吹き飛ばされる男の体

だが、体はなんとも無かった

陽は不適な笑みを浮かべて立ち上がった

「やはり……」

男も立ち上がったては小さく笑う

驚いた様子も苦しんだ様子も無く……ただ、笑った

「いきなりやってくるとはな。おもしろい」

「嘘だろ……ヘリオスの技をぶつけても……」

学生達が驚きを隠せなかった

ヘリオスの技を彼らは誰よりも知っている

その技をまともに食らって生きていけるやつがいるとしたら黒騎士ぐらいなものだろう

その技に耐えることが出来た彼の存在が不思議でならなかった

「太陽と同様の熱温度を出せる。ヘリオス唯一の能力だろ？」

男は生きていた

彼は体に何か水のようなものを纏っていた

体全体が蜃気楼のようにゆれている

能力を持っていると陽は把握した

「デュアル・イーグルでしょう。アポなしで来るなんて礼儀知らずもいところよ」

「いいな。coolじゃねえか、それでいい」

男が纏った水の色が透明から灰に変わる

姿形も人から変わっていく

青色の鱗を身に纏い、銀色の角が光る

向き出しの牙が冷たく、陽の姿を映していた

「来いよ。煉に会う前にお前と戦ってみたかったんだ」

陽も無言で神の姿となった

紅蓮の炎の鎧を纏い、炎を武器として手にする

広がった赤い翼は過去、鉄男を殺した時から何も変わっていないかった

煉は未だ目覚めない

マルクもシェリーも彼を起こすにはどうすればいいか必死に思い悩んだ

「彼には親しかった友人がいたはずだ。私も会っているはずだが」

「このまえ来たよ。だけど、何も変化が無かった」

「そうか……」

友人との再会に反応も無し

唯一音楽で反応があったと聞いて、マルクがたずねた

「その音楽プレイヤーの曲はもしかしたらダークナイトの『LOSS T S O R R O W』だったかな」

「それぞれ」

「煉の友人が進めた曲だったな」

マルクが懐かしそうに語り始めた

空を見上げる

あの時もこんな感じの空だったと……

そう、まだ組織から離れる前の2ヶ月前の話だ

青空を見上げながら煉は音楽を聞いていた

気に入っていた曲はヴィジュアル系だったり、クラシックだったり好きになったものはすべて愛していた

「これも良い曲よ」

そう言つてCDを渡したのはサタンだった

煉の目に映っているのは奇怪な怪物

その怪物から渡されたものを彼は素直に受け取った

「ダークナイトのLOST SORROWねえ……知らん」

「今のおんたにお似合いよ」

「そうかい。ありがとよ」

聞いた結果、煉は酷く気に入った

曲はすぐに音楽プレイヤーに……

毎日1〜3回は聞くようにしていた

ダークナイトは友人のサタンが勧めた

そう聞いた時、シェリーは彼女がかぎを握っていると感じた

「サタンつて人が来てくれたらね」

「残念だが、彼女はもう敵になった……煉の裏切りをたぶん、誰よりも許さないだろう」

「まじかい」

「もしかしたら、もうこの近くに来ているのかもしれない」

マルクの不吉な予想でシェリーが足を止めた

「来るの？」

「煉は仲間からよく信頼されていたからな、その分裏切られて彼女らもつらいのだろう」

「女でしたか」

「そう。モテたな、彼は……」

仲間から人気あつた彼も今は既に廃人の状態

彼女らが今の彼を見たら失望するだろう

出来ることなら見せたくないものだ

「その面影すら無いのがつらいよ」

マルクは煉の頭を撫でた
あの時のように話してもくれない
仲間の悲惨な姿が彼の胸を苦しめた

ゲイ雑誌を閉じた綾牙の目には一人の女の姿が映っていた
灰色の長い髪にサングラスをつけた女も外から彼の姿を捉えた
優しい笑みで誘惑するように手招きしてくる
さすがに女に興味は無かったが……
女の後ろで捕らわれてている人物を見て立ち上がった

「おいおい、天寧達じゃねえか」
親子であろう男と少女が捕らわれている
それが仲間だとわかった時、動かないわけにはいかなかった
「クソッ！」

煉の姿を見つけた
そして、デュアル・イーグルから抜け出した男 マルクもいた
早速標的を二人見つけたがすぐに襲うわけにはいかなかった
少女は屋上から様子を見てタイミングをうかがう

「煉……」
イタリアの後、廃人となった仲間を見るのは辛かった
裏切った代償と想っていたかった
だが、彼女の心の中にある何かがそれを拒む

『サタン、殺せ』
耳元のイヤホンから聞こえる男の声
その声に逆らうことが出来なかった
少女 サタンが怪物と化した
愛らしい姿だった肉体から何本も腕を生やし、ぼろぼろとなった翼
が現れる

少し黙ってサタンが答えた
「すぐに……」

雲が掛かった

明るい日差しも消えた

湿っぽい環境へと変わった

それと同時に不思議な気配をマルクは感じる

その気配が無数に存在するとわかった時……

ただ強大な絶望感だけが彼をおびえさせた

「嘘だろ……あいつらが来たのか」

41 強襲(後書き)

もうちょい飯免、もうちょい飯免、もうちょい飯免、もうちょい飯免r y . . .

4 2 怒りと血みどろの手を……

目を覚ましなさい、煉」

彼は目を覚まさなかった

どんなに声を掛けてもクールだった彼はおきてくれない

サタン自身、それはわかっていた

だが……受け入れたくない心はどこかでは思っていたのだろう

「あんたの声が聞きたいよ」

そんな言葉がサタンの口から出てきた

「サタン君！」

元いたボスが過去の仲間の名を叫んだ

今は敵同士

煉と鉢合わせにしたことに焦りを感じた

「来るな」

堂々と煉の前に出たマルクをサタンは睨んだ

何も用がない相手だ

殺すのも後回し

「邪魔しないで……」

サタンが目を閉じて念じた

アスファルトの地が紫色で光る

何も音も無く飛び出たのは血だらけの手

「な……」

マルクの手足を縛り、地の上へと倒しては拘束する

近くにいたシエリーも巻き込まれた

「うそ！アタシは無関係どえーす！……ウボオ！」

立ったまま縛られたシエリーをサタンが蹴り倒した

彼女が興味あるのは煉だけ

かつての仲間であり、恩人……

彼の声を聞くためだけに近づいた

何一つ動くことの無い彼の頬に触れて、その冷たさを感じる
息はあるのに死体のように冷たかった

「煉……」

起きてほしい

そうして彼女が願いをこめて行ったのは……やさしい口付けだった

『怒りと血みどろの手を……』

出会った当初はいやみな男だった

黒椿 煉

さっそく組織内で出会った途端、怪物呼ばわり

（人様に手を出すなんて許さない。絶対にやめるよ。人を傷つける
など）

そう言われたこともあった

7つの大罪を力とする彼女ら兄妹にとっては腹が立つ一言だった

その人間から屈辱を受けた

陵辱されそうになり、拳句の果てには殺されるかもしれない

そんな状況下で救ったのは煉だ

その煉が人を守る側に立っていた

組織の規則であるとも言われた

人間を守護するのが組織の役目

その力を悪に使うことは許されなかった

自分のための力では無い

人のための力

よくうるさく言われていた

その大切さをうるさく教えてくれたのは

煉 ただ一人……

口元を包帯で巻かれ、縄できつく縛られていた天寧と影次郎と彼ら

を捕らえた女へと彼は近づいた

強大な力をもつゼウスと刑事である父がいとも簡単に捕らえられたことに驚きを隠せなかった

「ありえねえ、夢だろ」

「すまないな。手荒な真似だが、こちらで預かせてもらった」

「どこの誰か知らないが、離せよ」

「森羅金剛組の狗神と見受ける。残念だが、その要求は呑めない」

「俺が脱いでも？」

「なおさら、だめだ」

綾牙のつまらない冗談を笑ってスルー

「我々の要求はただひとつだけだ。煉君を渡してもらいたい」

「ずいぶんとストレートに言うじゃねえか」

女の要求を聞いて綾牙が鋭く睨み付けた

デュアル・イーグル関係者とわかった時は、警戒をした

いつか来るだろうとは思っていた

「ゼウスが捕まるなんて、どんな曲芸をすればできるんだよ」

「簡単なことだ。能力は使い方次第……私はこうやって使うものだ」

両手を広げた

女の綺麗な髪が風揺れた

彼女から出てくる灰色の瘴気

その瘴気から感じたのは強い殺意だった

「……………」

札を一枚

古い文字が書かれたそれが宙で舞い、緑色の光を放った

綾牙の体を全体に包み込み、彼は狗神へと姿を変えた

「鎌鼬！」

後ろに現れた幾何学模様の円から2匹の小動物が姿を現した

両手足が鋭い刃となった小さな獣が笑った

口元には1本の葉巻

それぞれの獣が啜っていた

「あれ、綾牙さん、ちーす」

「うつす、綾さん！お元気ですか？」

「いくぜ、馬鹿兄弟！いたらん空気つぶすのはてめえらの役目だ」

「あああああああ！！！」

刃を光らせては狗神へと放たれた瘴気を切り裂いた

彼らが裂いた瘴気は消えた

「俺が狗神つてのをわかってるんなら、妖怪使いつてもわかってるんだろ？」

「わかつているから、ここに来た。もちろん、このゼウスの仲間つても聞いてな」

灰色の瘴気が女の体を包んだ

霧はだんだんと大きくなり、その中から微かだが巨体が見えていた
下半身は獣

2本の巨大な角に両手には巨大な剣

山羊のような仮面をつけているその怪物の姿がだんだんとはっきりと見えてきた

「っっすげえ」

一人と2匹が声を揃えた

姿を現した悪魔が高らかに笑う

矮小に見えた妖怪どもを前にして自分の勝利を確信したような高笑いだった

「ベルフェゴールだ。殺す前に名乗れて良かったよ」

「リヴァイアサンだ。よろしくな」

水と鱗を纏った怪物が名乗った瞬間、彼女の攻撃は始まった

太陽ほどの熱さでは無いが、十分火力はあるであろう火の玉を2

3発休むことなく撃ち放った

火の玉の間と間をリヴァイアサンは華麗にすり抜けては近づいてくる
彼が纏っている水で火の玉の火力が弱くなっているという分析は出来た

その水を武器として扱われたら厄介だということも……

リヴァイアサンの手の甲から出てきた水で作られた剣
その刃先がヘリオスの体を掠った

彼女はすぐに真横へと飛び避けてはまた火の玉を放つ

どこを突けばダメージを食らわせることが出来るか
弱点を探そうと距離を置いては受身の姿勢を保った

水の剣が振るわれる

その剣に対してヘリオスも炎の剣を作り出して応戦した

金属と金属がぶつかる音が響く

ヘリオスの仮面で隠されていない顔半分は苦悶の表情を浮かべていた

「隙が無い！」

「隙つてのは戦う前から見つけるものだけ。お姉さん」

リヴァイアサンの顔が間近に迫った

顔立ちの良いところだけが残っているせいか彼がウインクしても怪
物らしいと思えなかった

逆に危機感を感じる

俊敏な動きと強固な腕

そして太陽の力を弱体化させる水的能力

彼を相手にすると聖經会以降の大きな戦いになるかもしれない

そう悟ったヘリオスが学生らへと叫んだ

「散りなさい！煉を探して保護を！」

「了解つす！」

学生らみなが四方八方に散り、走り出した

それぞれが煉と彼をつれたシェリーを探しはじめた

彼らが行ったのを確認して、ヘリオスが再びリヴァイアサンへと向
きなおした

「無駄だ」

「……何をした」

「姉貴がすでにあいつと接触した」

想定内と言っべきか、そうじゃないと言っべきか

どちらにしるへリオスが心配したのは煉とシェリーの安否だ

「濃厚すぎる！濃厚すぎます！このキス……ブヘッ」
「うるさい」

サタンと煉の状況を実況していたシェリーの顔をサタンが踏んだ
うるさい口を黙らせようとしているのか口元へとつま先を突っ込んだ

「……煉に近づきやがって、このメス豚が！」
「むへ、ひよんなほほひへまへん（そんなことしてません）」
「……」

サタンの静かな怒りはさらに強くなる
怒りにわれを忘れているであろう彼女の隙を……

シェリーはすぐに見つけた

地から出てきた白銀色の小さな柱

サタンのあごを砕こうとそれは勢いよく出た
だが、その気配に気づいた彼女は身を翻し回避する

間髪いれず、さらにシェリーは柱を作っては足元からの攻撃を繰り返した

それも全部避けられ、サタンと距離は離れた
都合が良い

血まみれの手に縛られたシェリーがその状態で変身をする
白銀の鉄製で作られた体
蜘蛛のように8本もある足

かつてゼウスと戦った『アルテミス』の威厳は今でも消えていなかった

「残念なこと、そこで殺しておけば戦わずにすんだのに」
アルテミスが笑っては弓を構えた

対してサタンは構えない

変わりに人間だった頃の姿が変わっていった

体中から手が現れてはサタンの体を包み込んだ

そして背中から手に次いで生えてきた翼

ぼろぼろとなった翼は6枚

そして右手の甲に1枚現れた

サタンの真の姿

その名のとおり化け物のようなおぞましいものだった

「いやだねえ、サタンって怪物は……墮落したから見るもおぞましくなってる」

「私らのような怪物は見た目で決めるものじゃない。性能だ」

足元から手が湧き出てくる

その間を歩いてサタンは語り続けた

「どれだけ人の力になれるか、または害になることは無いか。それを考えていないの？素人なの？」

「次にお前はこう言う！『馬鹿なの？死ぬの？』」

「言わないわよ。……話にならない」

サタンの声で彼女に付き従っていた手が集まる

それぞれが肉体を重ね合わせて肉塊となっていた

無数の手が集まり巨大となっていく

「おお！」

アルテミスも驚くほどの光景がそこに……

出来上がったのは巨大な手だった

その上でサタンは腰をかけるようにしてすわり、敵を見下ろしていた

「ジャイアントウーマンも又開きたくなるほどの大きさじゃない！」

「下品なやつは嫌いよ。目障り。存在するのも許さない、絶対にな

……」

巨大な手が爪を光らせた

ああ、襲ってくるだろうとアルテミスが仕方なしに弓矢を構えては敵を観察する

どちらが先に来るか

互いが互いににらみ合った

感じてくる懐かしいぬくもり

そう彼女はいつも怒ってばかりだ

もし、意識があつたら俺は笑っていただろう

「また、怒ってるよ」って……

そして彼女は「何、笑ってんのよ」とまた怒るだろう

そういう時にいつも言う言葉があつた

「怒るところなんか、かわいいなって……」

かわいい（笑）のつもりで煽ったつもりが

彼女はいつも顔を赤くして俯いていた

あの時の思い出

微かだが、脳裏に浮かんでくる1場面だ

42 怒りと血みどろの手を……（後書き）

俺、仮免とったら……

公園の隅っこで一人さびしそうに猫をなでている小学生ぐらいの女の子に告白してk……

ほら！死亡フラグ回避したよ！警察きたから回避したよ！

43 意識なき正義の行い

3人共、苦戦していた

脅威の力を持つ悪魔を相手に成すすが……無いわけでは無いが、弱点を見抜くことが出来なかった

相手の癖を見抜くことが困難だった

必ずしも、隙はあるはずだ

だが……相手は戦いのプロだ

隙はおるかミスすら見られなかった

それぞれが能力を自分の思い通りに使っている

敵ながら天晴れだと……神の力を持つ3人は心の中で微かに評価した

「煉！目を覚ますんだ！」

車いすにのつたままの煉へとマルクは近づいた

どうやって彼を目覚めさせるかを考えて声をかけ続けた

「この状況を打開できるのは君だけだ！」

恩人の言葉は彼の心に届かない

ただ、微かな反応が見られた

「……タ……ン……」

その反応に戦っていたサタンも気づいた

優しい囁き

彼が名前を呼んだのがわかった

「煉……」

戦いの最中であっても彼女は振り向いた

車いすにのつた仲間の名を叫びたいと口を開きかけた

「れ……」

『意識なき正義の攻撃』

今の彼にとって何の行動が正義か把握していないだろう
何をすべきかも……

でなきゃ、一気に3人を叩き斬るなどしないはずだ
彼を目覚めさせようとしたマルク

煉を救おうと襲撃したサタン

そのサタンと応戦していたアルテミス

3人がディグニティの攻撃で横たわっていた

黒い巨体と蛇の下半身

ディグニティの目覚めはまたあの時のように血にまみれたものとな
った

当の本人は光の無い瞳をパチパチさせ、周囲を見回していた

「……」

人目のつくようなものではない水滴に彼は目をつけた

それに写っている自分の姿を見つめる

自然と彼の姿は水滴に吸い込まれていった

すべての光景を写す物から物へと彼は転移することが出来る

その能力を彼は無意識に使った

妖怪達がベルフェゴールへと襲い掛かる

だが、彼女の放つ瘴気は彼らを倒していく

静かな眠りへと……誘っていく

怪物へと変化したベルフェゴールの力はさらに増大する

鎌鼬の力でさえ利くことが無い

故に死の眠りを誘う瘴気は狗神を苦しめていった

「うそだろ……火車、牛鬼……」

強大な妖力をもつ怪物達でも瘴気に耐えることが出来なかった

倒れていく仲間達が消えていく

本当なら敵を潰して勝利の余韻に浸っているところだったはずだ

そのシナリオが崩れてしまった

「最悪だな」

「この最悪な状況下だ。お前は どうする？」

「ちよつと本気出そうか」

今までが茶番かのように狗神が笑った

適当にやってきたかのような言い方だった

「妖怪には有給休暇だ。今度はこいつらを使おうと思つ」

そう言つて取り出した2、3枚の黒い札

彼にとっては最悪で最強の切り札

こつやつて手にするのちためらつた

彼の思いを悟つたかのように二人の戦いを何かが妨害した

その何かの正体をすぐに把握したのはベルフェゴール

「デイグニティ！」

狗神も煉が来たとすぐにわかつた

救いだと思ひたかつた

この札を使うことなく事を終えればと……

その願いも無意味となつた

デイグニティが狗神へと襲い掛かつてきた

どこをどう移動しているのか仕組みがわからず、彼はすぐ目の前に

現れる

「わお」

黒い拳が一撃を放つ

狗神の体を纏つていたよろいは砕け、肉体にまでダメージを負わせた

彼は悲鳴をあげる間も無くコンクリートの壁へとたたきつけられる

今の場面を見たベルフェゴールが一瞬、安堵の表情を浮かべた

その表情もすぐに消える

デイグニティが姿を消したと彼が後ろに回りこんでいたことで

……

必死に煉を探し回っていた

だが、学生らの視界に彼の姿が映ることが無い
変わりに写ったのは見慣れた友人が倒れている姿

そして見知らぬ外国人二人

「うそだろ！シエリーさん！」

正志が血相を変えて3人の元へと走った

最悪な事態になっていると理解するのにまったく時間がかからなかつた

彼ら二人の前にもデイグニティは姿を現していた

水を纏ったリヴァイアサンと太陽を纏ったヘリオス

二人が戦いを忘れて黒い怪物へと向いた

「おいおい……煉」

「煉君！」

「……」

水滴から水滴を伝いリヴァイアサンやヘリオスを瞳を移動する道と
して……

黒い大斧を振り回して二人を叩きのめした

たった一撃で二人が沈む

リヴァイアサンは顔面を……

ヘリオスは腹部を打撃部分で叩かれる

意識を失った二人を後にしてデイグニティは黒い翼を広げ飛び立った

小雨が降り、灰色の雲がかかった空へと

彼が何を思っただけ飛んでいるのか誰もわからなかった

正志達のおかげで天寧と影次郎は解放された

目の前に起きた出来事を知っているのはこの二人だ

学生達は陽達を病院へと運び込んだ

敵味方関係なしにサタン姉妹も同じ場所へと……

意識を失っている彼らを零が見ていた

突然の奇襲

そして煉の凶行

これから何が起きるのか誰もが不安を抱いた

「なんで煉君は陽さん達を……」

「零、どうしようか」

同じく陽達を心配する香織からそう聞かれても……零は何も答えられなかった

「私達に対応するには大きすぎる……マリア様や煉君の仲間なら……」

「とりあえず、仁君やマリア様には連絡したよ」

「ありがとう。仁君は……あれから……」

1度長い眠りについた彼がやっと目覚めた

その後の動きが気になっていたが……

「自動車学校に通ってるって……驚いたね。すげえ回復したんだよ」
香織の一言で零は固まった

「……なんで？」

「いや、諸事情だって……」

「……そうなんだ」

こんなときに……と思ったが、彼が元気そうで何よりだった

そして、今倒れている『彼ら』も……

今、ガラス越しでこっちを見ている陽達は驚いた様子でこっそりと起きている

「……マジ？」

「陽さんら……そこで起きますか」

目を覚ました陽達が傷だらけの体に鞭を入れながら病院のベンチへと移動する

そこでしたのは自動車学校で奮闘する仁の話……では無く、今まで起きたこととマルク達

そして、煉の件

彼がどこに行ったのか、誰もわからなかった

もしかしたら、マルクや敵であるサタン達が知っているかもしれないと思っただが彼らはいまだ目覚めなかった

「サタンやその仲間は見張ってて……零ちゃんはマルクさんが目を覚ましたら煉に纏わる情報を聞き出して

「わかりました。連絡を入れましょう。陽さん達は……」

「私らは休暇よ。骨まで行ったみたいだから、しばらく休ませてもらおうかしら」

包帯をまいた体を見ては笑いながら言った

シエリーも綾牙も今はまともに戦える状態では無いと見てわかるが

……

「大打撃ですよ……敵は3人。煉君は凶行を起こして私達に襲い掛かってきますし……」

「零ちゃん、むしろ喜ぶべきよ」

良いと思えない状況下でも陽は前向きな言葉を言い放った

「デュアル・イーグルが動き出したのよ。彼らと敵対してしまったからにはなるべく情報が欲しい。勝つためのね」

「煉君を受け入れたのはそのためですか？」

「それもあるけど、ぶっちゃけ彼を受け入れた理由なんて無いわね」

「まじかよ、正気の沙汰じゃねえな、陽さんはよ」

綾牙の言葉に対しても陽は笑みを保った

「危険な存在であればもちろん、最初から受け入れるつもりは無かったわよ」

「なら、何でだよ」

「ううむ……」

そう聞かれてもすぐに答えることが出来ないのかうなった
しばらく考えてから陽は答えた

「さあてね。でも、悪い人間じゃないのは確かよね」

「煉が……俺らにこんなことを……」

「何か原因があるのかも、あの時の仁君と同じよ。ここがやられて
いるのかも」

陽が指し示したのは胸

それは心を意味しているんだと綾牙はすぐにわかった

「なるほどねえ。もろいやつは本当にもろいんだ」

「そのままにしておいたら、やばいでしょ?! どうすればいいのよ!」

シエリーが慌てふためいては陽の肩をつかみ揺さぶった

「私ら動けないよ!」

肉体的に危ない3人は動かずしてどうするべきかを考えていった
今現在頼れる人物がいるとしたら……彼女だけだ

「天寧ちゃんに頼もうかしらね」

陽のやり方で今は様子を見るしかなかった

連絡を受けた天寧も無理に動くことなく、表に出ないよう慎重に彼を探した

歩行者の多い町でも何一つ事件も無く、人々が通り過ぎていくばかり
サタンが大事そうに持っていた煉の写真と街中を見回した

煉らしき姿は見えない

「……いないか」

街に背を向けて天寧は立ち去った

黒い羽が舞う

煉がいたのは創世大学の近くでも無い

街によくある小汚い路地裏

そこではたくさんの死体が転がっていた

金髪に染めた若者

肉体を鍛え上げた不良達

肉体を裂かれた彼らを見て、吐いていたのは何も関係無い一般市民
24を超えるであろう男性だ

「かつあげだけで……君は……」

「ごめんなさい。彼らを殺さないと危ないと思ったから……本当に

「ごめんなさい。ごめんなさい」

小聲で謝っては去っていく

姿が見えなくなった後、助けられた男は啞然とその場に座り込んだ。突然の出来事で腰が抜けたためか、何分たっても動くことが出来なかった。

43 意識なき正義の行い（後書き）

仮免ウホッ

MTなんだけど、あのレバー持っているとやらしい気持ちになるよね

俺だけ？

44 ふりだし

目を覚ましたらまた過去のような怪物がいた

それが幻覚だとすぐにわかったが、耐えられなかった

醜い性格のやつらを見逃すことが出来ない

蠅がたかるほど腐った肉体を持つ怪物

何人もの血を袋につめて体中にぶら下げている巨体の怪物

それらが人間の中に混ざっていた

「殺さないと……危ない」

街中へと歩くことが出来ない

混乱だけは起こしたくなかった

「くそ……」

香織から話を聞いた仁が元デュアル・イーグルの仲間達を集めた
深刻そうな顔をして彼が切り出したんはもちろん、煉のこと

「その深刻な顔なのは5回ほどS字で落ちたからか」

「……」

虚ろな表情で仁は顔を背けた

事実ではあるが、さすがにこの状況だ

どちらを心配するべきかと言えば……

「んなことより、煉さんのことが気になる。あと、鬼神さん裏口に
来い」

「冗談だよ、そんな睨むなよ」

苦笑しながら鬼神は軽く謝ってきたが仁は睨むのをやめなかった

自動車教習のこと……では無く、煉の凶行に対することで力んでし
まう

「煉さんが陽さんらを傷つけるなんて……」

「仁君、彼の幻覚を治してくれたのは君だったな」

煉の仲間であるサファイアの言葉に仁は頷いた

「彼の脳や神経が何かに蝕まれていたんですよ。ウイルスとか病原とかじゃない……この世には無い何かです」

「何だっけ言うんだよ」

「彼は生まれた時からあの力を持ってたんですよ。リスクじゃないんでしょか。それを治しただけです。ただ、単純にね」

人間が人間に見えないの能力を持ったための反作用と仁は見ていたそのリスクを黒騎士の力を使って治した……仁は簡単だと最後に加えた

「すげえな。それって……」

「何もリスクを持たない核兵器を作ったのと同じだよ」

つくづく感じる黒騎士の脅威

傷を治し、心へと入り込み

悪霊を操り、殺傷能力も高い

サファイアもヘルファイアも彼と対立していたことを思い出し、戦わずして負けてよかったと二人は心の中で呟いた
まともな死に方はさせてくれなかっただろう

だんだんと顔立ちの良いイケメン二人が苦笑した

「かてつこないわ」

「ハハハ……」

「煉さんが元に戻ったのは俺の力が足りないから……」

罪悪感を感じたかのような仁の一言

ヘルファイアはそれを必死に否定した

「煉の精神が不安定なだけだ。彼は結局……何をしても救われないんだらうよ」

「いや、もう少しなんですよ。もう少しで彼を救うことが出来たはずです……彼の心を……狂った心に戻すために……」

後悔し続けた

見落としたところがあるんだと、仁は苦悶の表情を浮かべては言う
「彼も辛かったんだよ……唯一の支えが消えてしまったことが……」

『ふりだし』

看護専門学校がつぶれてから2ヶ月程度しかたっていない
思えばあの時、仲の良かった5人は死んでいなかった

それを知った時はうれしかった

だが、顔を合わせるなど出来ない

恨まれているとそう思っている

だからこそイーサンとエマのことを嫌がらず受け入れてくれた二人
に感謝したかった

(煉が無事で良かったよ、本当に嬉しかったよ)

まだ意識がある内に牧原が泣きながらそう言っていたとマルクから
聞いた

その報告を最後に何もかもわからなくなってしまった

そして今に至る

大馬鹿なことをまたしでかした

彼らは普通の人間のはずだ

未来のある若者にきつと近所では優しいと思われるであろう老人方

煉の目に映る彼らは『怪物』だった

それだけで……凶行を起こしてしまった

「……………」

煉は自分のポケットの中を探った

あったのは1000円札1枚

「……………寝たきりだったのかな。パットが気になるが取り出せばいい
や」

そう言つて公衆トイレのゴミ箱へと投げ捨てた

これで血がついてたら青ざめていたがまあ、それは無いだろう
休憩所としていた公衆トイレを後にして去っていった

目覚めれば病院の中にいた

まともに動くことも出来ない

デイグニティの攻撃で体がまだ痛むためか、腕を動かすのもいやだった

「クソツ……」

「おはよう、煉君のお友達さん」

「何!?!」

サタンが横を向けばそこには見慣れない女がいた
黒い長髪の女

すぐに敵だとわかった

「てめえ……」

「陽でえす、よろしく」

「煉をどうしたんだ」

「姉貴、ここはおとなしくしようぜ」

サタンの怒りを静めようとリヴァイアサンが止めに入った
顔を包帯で巻かれた彼の顔を見て顔を青ざめる

「うそでしょ、リヴァイアサン……」

「煉にやられた。ここにいるみな同じだ」

ベルフェゴール、リヴァイアサン

そして陽を含めて初めてあつた3人の男女

ここにいるみなが煉にやられたとわかったが、受け入れたくなかった

「あの煉がこんなこと……黒騎士の力で元に戻ったって……嘘なの」

「姉貴……」

「まあまあ、煉タンも隅におけないね、陽ちゃん」

シエリーが笑いながら言うがサタンが強く睨み付けてきた

「調子に乗るなよ、メス豚」

「カルシウム足りてないわね。禿げるわよ」

「くそ……」

体についていた点滴をはずした

ベッドから降りては足を引きずりながら歩いていく

痛みに耐え、周りが止めようとするにも関わらずサタンは部屋のドアまでたどり着き、振り返った

「煉が目覚めたんでしょ。なら彼を連れて帰る」

「煉君にそこまで執着心があるなんて……敵さんの目的がわからないわね」

陽の言葉で怒りを露にしたサタンの表情が柔らかくなる

ただ無言で俯いてはドアノブに手を掛ける

「まあ、こちらとしても複雑なわけだ。姉貴もそれでイライラしてんだろっよ」

サタンが去った後、リヴァイアサンやベルフェゴールが荒れた物品を片付けながら話を始めた

敵だから何も話さないだろうと思っていたためか陽達は少し驚く

「どういうこと？」

「ヘリオス、あんたらは煉を保護してたんだろ。守ろうとしてたんだろ？俺ら兄弟もよくわかっていたさ」

「意味深ね。わかってたのならなんでここに来たのよ」

「上からの命令だ」

今度はベルフェゴールが話を続けた

「煉を連れて来いってな……植物状態でも意識があってもいい。命令を遂行しないと大変なことになるからな」

「大変なことって……どうなるのよ」

「私達の兄弟がみな殺される」

命令に背いたらどうなるか

サタンが痛みに耐えながらも煉を探す理由がわかった

頼りになるのは匂いだけだ

その匂いをたどってサタンは街に出た

「人を何人も殺したのか、あいつは……」

煉の匂いとほかの関係無い人間の血の匂いを感じた

ああ、彼は間違はなく人を殺していると表情を曇らせた

「くそ……」

人ごみを掻き分けてサタンは走った

感じられる煉の殺意と彼の匂いで居場所を正確に把握して進んでいく
血の匂い、薬物の匂い

この街は人間の欲望が広まっている

怒り、怠惰、肉欲、嫉妬、強欲……

デイグニティがなぜ人間を殺しているのかなんとなくわかった気がした

それでも、彼を止めてつれて帰らなければいけなかった

サタンの頭に浮かんだのは自分の兄弟と煉

彼女らと煉の安否だけが心配でならなかった

彼は教会にいた

何も目的の無いままここに辿りついた場所

呼ばれたわけでも無い

ましてや誘われたわけでも無い

ただ、なんとなく……

「どうかしました？」

話しかけてきたのは神父

顔色の悪い煉へと心配そうな顔で話しかけてきた

「具合悪そうですね。ここで休んでいいですよ」

「ごめんなさい。ちょっと座らせてください」

「どうぞ、お掛けください」

良い笑顔で言う神父の言葉に従い、長いすの上へと腰をかけた
煉自身、今どうしていいのかわからない

顔を抑えては深いため息をついた

「……」

「何か久しぶりに起きたばかりって顔ですね。何かお悩みですか？」

「2週間……2週間も眠ってしまっただけで、今まで何が起きた

のかわからないんですよ」

不意に自分の素性を語ってしまった
過去、暗殺部隊の一人であったこと

何人も殺していることを隠しながら冷静に語った

外国にいて……

日本に逃れ……

過去仲間だった者に裏切られ……

この短期間で様々なことがあった

「何が起きているのか……わからなくて……」

「2週間も昏睡状態でしたか。混乱するのも無理無いでしょう」

「ええ、本当にわからないです」

救いの無いものが最後に頼るのはどこか

天寧はよくわかっていた

悲しみと絶望に落とされた人間が現実逃避をする時だってある
そう、自分のように……そして今の煉のように……

だから、天寧自身も自然と教会に足を踏み入れていた

二人の会話が聞こえてきた

「教えましょうか？」

教会の入り口から声が聞こえた

見知らぬ少女が煉の素性を知っているかのような口ぶりで煉へと近づいてくる

短い髪と同じ年齢か年下であろう

煉と神父は不思議そうに彼女を見た

「君は……」

煉の目に映るのはもちろん怪物の姿

雷を纏った異形な姿

つい拳を作っては力んでしまう

「煉さん、あなたの目に映るのが異形なものだとしても私は敵じゃ

ない。人を襲うのも好きじゃない。殺すのももちろん……今はね」

「……」
「あなたと同じよ。昔の私は異形なやつが怖くて何もかも殺してきた」

近づいてくる天寧が首にかけていたロザリオを神父に見せた

そのロザリオは騎士団の証明となる物

騎士団の存在を知っていたのか、神父は一礼して立ち去る

それを確認した天寧が続けた

「殺された母の復讐のために悪魔崇拜を虐殺してきたこともある。

老若男女関係無く……」

「……」

「2、3年前の私が今のあなたと同じよ。同じ境遇だからこそ、止めに来た」

「そうか」

敵では無いと悟った

自分の今の姿と重なって見えているんだと……

煉はそう感じ取った

「普通の人間や私みたいに異能持ちの人間が怪物に見えるの能力の副作用よ。これから永遠に付き合っていけないといけないね」

「付き合えない。俺はもう……」

「自分の殺人行為を正義だと抜かして人を無残に殺しては後悔する矛盾ばかりの人生。友達が悲しむわよ。信頼していた友達が自分らの約束で人を殺してるって……」

「見えるものが全部恐ろしい。今だって……あんたが怖い」

悲しく、光の無い目は天寧に向けられる

「生まれた時から持っていないながらコントロールしきれないんだ」

「出来るのか」

「……出来る。ただ、時間はかかる。生まれた時から馴染んでいる幻覚だから、リハビリは必要になるわよ」

出来るのなら……この幻覚を消し去りたかった

どんなに時間が掛かっても……

だが、雷の怪物を相手に信用していいものなのか
疑いを持った煉の目が鋭くなる

「……考えさせてくれ。そう簡単に信用出来ない」

あいつが見ている

一瞬でも気を抜くことが出来なかった

煉をつれてこなければ兄弟がみな死ぬ

まして裏切ろうとすれば……

煉や兄弟だけじゃない

ここにあるものすべてがどうなるかわからなかった

サタンは煉の匂いを辿っていった

街中にあるこの教会から匂ってきた

「煉……」

サタンが感じたのはほんのささやかな殺意

たった一人の殺気

いつ襲い掛かってきても良いぐらい強いものだった

「すぐ終わるわよ、すぐに……」

44 ふりだし（後書き）

ごめんな……路上教習でエンストしちゃった時、後ろでクラクシヨ
ン鳴らしてたおじさん
まじ、ごめんなあ……

45 フリークス

仲間達と映画を見ていた
マルクから勧められたものだ

戦場で爆撃を受けた若者が性器と延髄と心臓だけを残し『生かされていく』

そんな救えない映画を見ていた
しゃべることも出来無い

自殺をすることも出来無い
そんな若い男の映画だった

煉は『デイグニティ（尊厳）』と呼ばれている
彼は目に見える限りの人間を守ってきた

そして、目に見える怪物を殺してきた
この映画を見てもその行動は変わらなかった

人を守り続け、怪物は殺し続けた

ある日……ある国との戦争の際、サタンとマモンが悲しい顔で男を
連れてきた

映画で出てきたかのような四肢の無い
顔も砕けている

口も無い
左目だけが残っていた

それでも生きている男
煉の目に映っていたのは

醜い怪物

政府の人間で今まで残虐な行為をしてきたのだろう
本当ならすぐに殺していた

だが、無残な姿を見た途端に躊躇った

「こいつはどうするよ？」

「民間人が政府の人間かぜんぜんわからない。どんなにデータ調べてもね」

周りが死に掛けているであろうこの男をどうするか
慈悲で殺そうとする者もいる

だが、生かそうと医者を呼ぶ者もいる

その中でどちらにもつかなかったのは煉だった

ただ、何も出来ず涙を流しているだけ

何もすることが出来ない自分が無残だった

左目から流れ出た涙は『殺してくれ』と言っているのか『生きたい』
と言っているのか

どちらを示しているのかわからなかった

今でも……わからない

その男は今も生きている

デュアル・イーグル組織の医務部で静かに生きている

『生かされている』と言っているだろうか

医務部で専門の者に囲まれて一人寂しく……

いつかその男に対して手紙を書こうと思っている

そしてどうにかしてコミュニケーションの方法を探し、そして聞き
たかった

望まれて無いのに生かされているのか

それとも望んで生きているのか

『フリークス』

「わざと植えつければいいのよ。目の前にいる皆が害の無い人間だ
って……ちょっと強引ではあるけど」

「受容しろってことか」

「簡単なことでしょ？」

天寧の提案はそれこそ精神修行と同等のものだった

はつきり言つて『無理難題』

出会つたばかりの敵の言葉だ

そうすぐには信じられなかった

「無茶言つのもやめてくれ！そんなの人間の出来る技じゃない！」

「仲間が怪物の姿だったにも関わらず、貴方は耐えることが出来た。どうやって耐えたのかわからないけど……」

「周りが信頼出来る人物だったからだ」

「貴方はまず……どんな人間にでも慈悲深い目を向けることが大切ね。敵がどうかはその後に判断する」

「出来るのか……そんなこと。それとただ勧誘しにきたのか」

「元々、マリア様のいた教会がなんだつたのか知らないわけじゃないよね」

天寧の言葉で煉は思い出した

元々能力持ちで病んだ者をマリアの教会は受け入れていた

黒騎士がいたことで能力の知識や扱いについてどこにも負けないくらい強かった

それが中国や今の日本で残酷な結果を招いたわけだが……

天寧は自分を受け入れてくれた教会を愛していた

牙のため、マリアのため

仲間達のために能力の知識を身に付けていた

誰かの救いになりたいがために……

組織皆が協力して能力の解明とその恐怖に受け入れることに努力した精神的な病を治すにはまずは仲間の支えから……

今、こうして煉の助けになろうとしている

だが、自分だけでは難しいかもしれない

マリア達の助言が欲しかった

「……マリア様なら何かヒント持つてるかもね」

「あの人と黒騎士のおかげで助かったからな。だけど……彼は？」

「彼はイタリアのときから2週間たってやっと目を覚ました。今では自動車学校に通えるほどにね」

「まじかよ、彼が……」

つい笑ってしまった

気の弱い、能天気でマイペースで……

「事故ってそつで怖いわ」

「短期だからもう少しで仮免だよ」

「そつか」

仁は既に目覚め、もう目標を見つけている

自分が寝ている間にいろんなことがあつたんだと……

なぜか取り残されているように感じた

「黒騎士に会いたいな」

「……会えるように支援はする。貴方自身を救うために」

天寧の言葉に少し勇気を持つことが出来た

もう過去のように偽りの正義を振りかざすことないように生きてか
った

二人が教会を出た

彼らの前に立ちはだかつたのは一人の少女

それは煉も見慣れた者だった

「サタン……」

彼女の体から出ている血は自分が今さつき傷つけたものだ……

怪物と思って傷つけた結果、それは仲間だったのだ

過去と同じ繰り返しをまた行った結果がそれだ

「俺のせいだ……」

「あんたを連れ戻しに来た。上からの命令で……」

「なぜ、そんな姿になつてでも彼を連れ戻そうとするのかわからな
い」

警戒で剣を構えた天寧がサタンへと聞いた

「組織のためか……それともこの人のためか」

「ゼウスには関係無いわよ。煉を渡しなさい」

「……なぜ、私を知っている」

サタンと出会ったことは無いはず

彼女がなぜゼウスの存在を知っているのか

天寧の目が鋭くなった

「俺はお前を知っているぜ」

聞こえてきたのは男の声だった

しゃがれた声で語りかけてきたのは一人の男

振り向くと、そこに男がいた

彼は両目に傷跡があり、失明をしていた

天寧もその男には見覚えがあつた

「……悪魔崇拝者」

母を殺した悪魔崇拝者の関係者

天寧の表情が変わった

強い怒りが雷と具現化された

「見覚えがあると思った。まさか神様だとは……」

男は死体を持ち上げていた

教会にいた神父が顔を青ざめたまま死んでいる

苦しんでいるところから首を絞められた後も無い

それが男の能力だと天寧にはすぐにわかった

煉もその男が誰かわかった

入って間も無い頃に戦場で猛威を振るっていた

それも特殊な力で一国の兵士達をなぎ倒していく

そのさまは『暴虐』

あまり関わりたくないと思った

別に暴力だけで支配するところを怖いと思ったわけじゃない

能力発動するときが怖かった

人間の生命力を武器にする

『なぎ捨てる者』

マルクからはそういう二つ名だと聞かされていた
本名は……

「ビートさんだったな」

「デイグニテイ！久しぶりだな！」

ビートは笑顔で近づいてきた

親しそうにしてくるが信用することが出来なかった

「サタンが一緒だなんて……」

「ああ、そうだ。俺らの組織に脅威になるかもしれん君を殺すか、
連れ戻しに来たんだ。俺としては後者を選びたいさ」

「貴方も俺と行動したいって志願してましたもんね」

「ああ！あんたがマリアに救われたって聞いて、敵なんだって思っ
たよ。残念だ……」

神父の死体を投げ捨てた

強靱な肉体から棘が生える

鋭く紫色の棘が毒々しく光っていた

「デイグニテイ、なるべくくつれて帰るぜ？」

「俺はもう戻れない」

「戻って……」

「サタンの言うとおりだ。じゃねえと、過去のお仲間もろとも保護
してくれた人間も大変なことになるぜ」

敵意を向けているビートの言葉に偽りは無かった

真っ先に煉が思い浮かべたのは……サタンの兄弟達

そして記憶の片隅に残っている仁の友人達

もちろん、危機感を感じた

「関係無いやつらにまで手を出すのかよ。イタリアでエリックと会
ったときから何もかもおかしいって思ったよ」

「ああ、マルクからあの男がトップの座についたんだ。すき放題し
ているさ。別に俺ら怪物どもには害ねえけどな」

「許されるか……そんなことが！」

「許す許さないを決めるのはお前じゃない。そしてマルクでも無いさ」

ビートが体から出た棘を掴んだ

自身からその棘を引き抜き、長い蔓が現れる

毒々しく、そして鋭く光った

その武器をビートが振り下ろす

鞭と言うような攻撃だ

その一振りで煉の後ろにいたゼウスが吹き飛ばされた
なぎ捨てる者

その名の通りだ

「大丈夫か！」

金色の剣はサタンの足元まで飛ばされ、ゼウスはコンクリートの床
上でうずくまった

煉が抱きかかえ、彼女の傷を見る

大量に流れ出る血と無数の傷跡

瞬間で大量のダメージを広範囲に与える

ビートの能力は前線向けだ

今、真正面で戦おうとすれば負けるのは確実だった

「クソ……」

「デュアル・イーグルは人間と共存するための組織じゃない。人間
を支配するための組織だ。今までは次長された思念だが、もうその
思念も縛られない」

マルクと対立していた思念をビートが叫んだ

煉はビートの主張を強く否定する

「俺らの力がどんなのはわかってるだろ……非力な人類を滅ぼす
気かよ」

「煉………忘れるなよ」

1歩1歩ビートが地の上を歩いていく

その1歩がどんなに凶悪で強いものか
ゆれているように感じた

「俺らも人間だ。今は怪物だけど元は人間だ。お前がやってきたのは正義でも何でも無いんだぜ？」

「何だよ……」

「差別だよ。ユダヤ人虐殺とかそれとおんなじだよ！生きていやつを容赦無く殺していく！どうなんだよ！それが正義か？お前の友人が望んだ正義か？俺らも同じ人間だろうが！」

「……」

ビートの言葉が胸に突き刺さった

初めて聞いた人間じゃない者の叫び

悲しい叫びは煉の心を痛めつけた

「ビート……」

「悲しいぜ！俺らは仲間だ！『仲間』だ！その仲間に対しても怪物として……傷つくぜ」

「それと黒騎士の友人らに何の関係があるんだ」

「いや、ぶっちゃけ関係無いよ。だけど、素直に気持ちを伝えたくっただけだ」

……聞くだけ無駄だ

煉が鋭くにらみつけると同時にビートがしばらくして微笑んだ

「俺らみたいな怪物でも心はあるんだぜ。今みたいに自分の気持ちを伝えることだって……な」

その一言がさらに煉を動きにくくする

悲しくつぶやかれたその一言は純粹なものがあつた

「俺が今まで殺したのはなんだつたんだろうな」

「……個人的にそれが伝えたくてサタン達に同行したわけだが、本来の目的は忘れやしねえ」

構えたビート

対する煉はただ立ち尽くすだけだった

戦意の無い彼を相手にビートも構えを解いてしまった

「抵抗しないのかよ？」

「何も出来ない。俺には何も……」

今まで殺してきた人間達の断末魔が聞こえてきた

そうだ、彼らの叫び声を聞いて初めて正義を感じられる

その正義のために関係無い人間まで死んでしまった

「俺の正義は無様なものだな」

笑ってしまった

自分のおろかさに対して……

そして自分の行動を悔やんだ

「俺は……」

「煉……悪い、時間が無い」

「なに？……ウツ」

こみ上げてくる吐き気

意識が一瞬にして消えた

口から血の泡を吹いて煉が崩れ落ちた

意識を失った天寧が体の傷を抑えて起き上がる

彼女の目に入ったのは煉が倒れている場面

サタンやビート達の攻撃が始まったと悟る

「この能力は……ビートじゃないね」

「もちろんだ。だが、サタンの能力でもないぜ。な？」

サタンの方へと天寧は見た

彼女が唇から出したのは毒々しい紫色の液体

血でも無いその特殊な液体はコンクリートの上へと垂れていく

毒性の強いものだとすぐにわかった

「絶対、絶命だな。ゼウスさんよ？」

煉へと近づいたビートが笑って天寧へと言葉をかけた

「お前さんにギリシヤで殺されかけてからは本当に苦労したよ。マ

ルクさんのおかげで助かったけど……今じゃ、その恩人とも争うことになった。残念だよ」

「次は殺す……仲間もろともな……」

「やってみるよ？」

ビートが煉を抱えては天寧へと背中を向けた

一仕事終えたと欠伸をしてはサタンとゼウスを置いて去っていった
残された二人が向かい合う

ゼウスが戦う意思を見せていたとしてもサタンにそんな意思は一切
無かった

怪我で血が垂れているためにもう戦う気力が無かった

無言で翼を広げては去ろうとする

「待て……」

飛び上がったサタンの手から舞い落ちる紙の端切れ

端切れを見た天寧がそれを宙で掴んだ

そこに文字が書かれていた

それも場所の名称

書かれていたのは天寧もよく知っている場所だ

「創世大学屋上……」

45 フリークス（後書き）

ごめんね、正直哲学的な文章構成とか俺には無理だわ……

バイトのクビ宣告でやる気出ないわぁ……

就職するならぜひ、面接で会おうとは言われたけど怖いわぁぁぁ

じゃあねノシ

46 見えてきた箇所、見落としていた心（前書き）

夏も終わりだ

みんな、楽しんでくれよ

訂正：アスモダイ どころから沸いて出たw

4 6 見えてきた箇所、見落としていた心

陽達にすべてを話したサタンの兄弟達はそのまま病院で様子を見ることに……

天寧から煉の話を聞いた陽達は判断に迷った

日時がわからないただ、場所だけが書かれた紙でサタンが何をしたいのか

どうやらリヴァイアサン達に聞いてもわからないようだ

「あの姉貴が何を望んでいるかって、知るかよ。よくわからん不思議ちゃんだから、ぶっちゃけどうでもいいわ」

「リヴァイアサン、ここでポテチ食うな」

「ベルゴーはチョコ食うなよ」

姉が謎の行動を起こしているにも関わらずその兄弟は呑気にお菓子を口にしていた

陽は迷惑そうな顔で3人を見るが……

「陽さんもそんな顔していいと思っっているんですか」

天寧が陽の手の中にあるビーフジャーキーを見ては言う

悪びれた様子も無く陽は自身の力で手元のお菓子を能力で焼いた

「この院長は私の友人だから大丈夫よ。学者の父を持つと変人と友達になることが多いからね」

「変態なのはどこも同じだぜ。お姉さん」

リヴァイアサンの一言で陽の手が止まった

自分も変態扱いされると思うと、耐えられなかった

「ずいぶんと大きな口たたけるわね」

「煉が言っていたさ。俺ら人間じゃないやつってのは過ちだけしか犯せない悪魔だつてな……」

「彼がそんなことを……人間を溺愛しすぎているわね」

ビーフジャーキー片手に陽は笑いながら言った

彼女も1年前までは人間だった

人間側からしたら嬉しいことだ

心強い味方だ

「溺愛してない」

「……」

「能力を持っていようが、もっていまいが関係無しに『怪物』ってだけで人間を殺してきた男だ。良い迷惑だ。あいつが悪い人間じゃないのはわかるさ。だけど、やっていることは怖いぜ」

「怖いねえ」

リヴァイアサンの言葉に陽達は何も言わなかった

強くて優しくて正義感の強い……と言う男の存在が能力を持った者からしらす脅威であると感じてしまったためか
黙って口を閉ざしてしまった

『見えてきた箇所、見落としていた心』

わずかに聞こえてくる会話

籠ったような音だが、サタンとビートが話しているのが聞こえてくる

「わかっていたさ。お前には煉を殺せないぜ」

「黙ってなさい。あいつを殺したところで何も変わらない。マルクとセツトで消えた時点で組織は終わるわよ」

「その言葉、あの方の前では絶対言うなよ？」

「許さない。デイグニティやほかの連中まで皆殺しなんて……」

サタンの泣きそうな言葉で煉が心の中で驚いた

倒れているふりだけをすればばれずに済んでいる

このまま話を聞いておこうと目を閉じる

「仲間同士で殺させるなんて……こんな望まない」

「暗殺部隊とあんたら兄弟よりも強いのがデイグニティだ。殺しあつて数を減らすつもりだったんだろ？……。そいや、栄都に向かったブラッドのメンバーの中で今のところ、ハーデスしか戻っていない。ほかの二人は何に臆して残っているんだろ？な」

「組織が崩壊しかけているのよ。古くからある組織を突然、新しく作り変えようとして、マルクさんが信頼する人達を潰して……」

「馬鹿言え。むしろ、てめえら新米どもが前線部隊の存在意義を無くしたんだろうが。そのせいで前線部隊の1部が単独行動を起こし始めたんだ！」

サタンも倒れる振りをしていた煉も驚きを隠せなかった

煉に関しては声を抑えたが目が見開いた

幸い、サタンとビートが背中を向けていたから助かった

ビートの言葉が信じられ無かった

前線部隊だけで数百人と神、悪魔の力を持った者がいる

その連中が多数で攻めてくるとなると周囲にどんな危害が及ぶかわからなかった

『「隠された者」『慈悲深い神獣』の2部隊のほかに『赤ずきん』まで動いたんだからよ』

「赤ずきん……」

部隊名ともう一人の怪物の名前を聞いてサタンが顔を青ざめた
独断で来たにしては戦闘能力の高い部隊ばかりだ

そして赤ずきんは……凶悪な悪魔だ

「あの子まで来るなんて、うそ……」

「だから、時間が無い。そいつらを鎮めるためにはあいつらがもう1度組織に戻って言いなりになるか、殺すしかないんだよ。惜しいけどよ。煉の仲間やあいつを信頼するやつはみんな……」

「そこまで動いていたのか」

別の声がした

そう、今まで倒れていた煉の声だ

彼は起き上がっては深いため息をついた

「一時的な神経系の毒だな。ヴェノムが懐かしい」

「煉……」

「サタンがどうやって毒を盛ったのか教えちゃろうか？」

「やめ！」

ビートの口を嚙んでは彼をしゃべらせまいとサタンが叩き続けた

「言わないで！私だって、本当は……」

「照れんなよ！初キッスが本当に大切な男で……」

「ぶっ殺す！絶対にぶっ殺してやる！」

「大体わかつている。サタンが俺に盛つたのは口付けによって発動する魔法の毒。口から口に伝って微弱だけど毒を出すことが出来る。エンバがこう名づけたな『キス・オブ・デス』ってな」

「……」

煉が丁寧に説明していく

そう説明していき、サタンがどんな気持ちになっていくか
見ている方は楽しかった

案の定、顔を真っ赤にして俯いている

その姿を見ていて、ああ人間と同じ心を持っているんだと彼は感じるようになった

怪物だったサタンの姿が変わった

元の人間のまま

初めて見た人間の姿

助けたときから見ることの出来なかった人としての姿

その姿に魅入ってしまった

「サタン、そんな面をしていたんだ」

「……煉」

サタンから見えた人間性

それが見えたと同時に彼女の真の姿が見えるようになった

……もしかしたら

驚いたビートが煉に近づいた

「まさか、見えるのかよ。俺の姿も……」

「……ふむ、マリア様や黒騎士なくても良かったのかな。なんとなく仲間達が人間に見えた理由がわかる気がする」

「俺は？俺はイケメンだろ？いいおじさんだろ？な！？」

目の前で笑顔を向けているビート
煉は不意に彼の言葉を思い出した
自分を信頼している者を殺す……
それも組織総勢で……

危険を悟った

「ビート！」

彼の名を叫んだ時には既に遅かった

赤い鋼の装甲を纏った怪物がビートの真後ろまで迫っていた

当然、その後どんな悲惨なことが起きるのか煉とサタンにはすぐに
わかった

赤い装甲の怪物と別に黒い毛並みの獣人

磁力を纏った紺色の装甲の怪物が同時に姿を現した

「……」

「ビートお！」

赤い鋼の怪物赤い剣がビートの首を突き刺した

後ろを振り向くことなく彼は命を絶ったのかもしれない

「ビート……」

サタンが彼の名を叫ぼうとした

だが、それよりも先に黒い獣人が口をふさいでは彼女を押し倒した
コンクリートでつくられた壁際へと彼女の頭を叩きつけては気絶さ
せた

残る煉は磁力を纏った怪物の猛攻を寸前のところで回避する

近くにアルミで作られたパイプがあつて良かった

そのパイプから彼が姿を現した

「サタン……うそだろ」

怪物達は追い詰めたディグニティをにらみつけている

暗殺部隊が見せるような殺意よりもそれは強かった

本気で殺しに掛かってきていると……

サタンの身の危険も感じられた

彼女を救わないと……

無意識のうちに煉は黒い鎧を纏った怪物になっていた

創世大学の屋上

煉達が戦っているのがドア越しからわかった

天寧が握っていたのはロザリオ

先代の黒騎士の肉片が入っているロザリオには魔力が漂っていた
鬼神が扱う『地獄の祭壇』

そしてこの中にも同等の力を持つ『何かがあった』

牙から言われた事がひとつ……天寧は不意に思い出した

(君の正義は復讐だけなんだろう？別に悪くは無い)

(良い。悪いの問題じゃないです。私は私の力で……)

(悪くは無いけど、復讐だけが目的だと、絶対俺巻き込まれるわ)

(私の戦いです！)

(1歩間違えたら、その行動が親しい人を傷つけることになるんだ
ぜ？)

牙の言葉はいつも相手の短所ばかりをついてくる

優しく言っているのはわかるが、改善策までは言っていないために
改善しようが無かった

……自分で見つけると言いたいののはわかる

(まあ、これからどうやって自分を変えるか。その人次第だ。じゃ
あな)

そうやって彼は帰っていった

最後に見たのはマリアに殺される瞬間の姿

誘拐犯からマリアを助けようとして激昂した彼が犯人もるとも止め
に入った仲間までを殺してしまった

危険であるう進化を防ぐために……

「……冗談よね」

進化という言葉が頭に浮かんでよぎった不安
今このロザリオの中にあるものが能力の進化を促進させるものでは
無いかと思った

ドアの隙間から状況を見ようと覗き込んだ
煉やサタンは地の上で倒れこんでいる

ビートは無様に首を貫かれ死んでいた

悪魔にしては無様な姿だと……天寧が笑った

そして、手元のロザリオを見た

……不意に煉が行き着く先を見てみたくなった

過去の自分と同じであろう彼をそのまま正義の道に歩ませればどう
なるか

その好奇心が彼女にロザリオを投げさせた

銀色に光るものが煉の目の前に来た

……ロザリオ

ゼウス 天寧が持っていたものだ気づいた瞬間拾い上げた

「気休め程度か？」

近くでゼウスが支援してくれるものだと思っていた

ロザリオを手に黒い巨体が動いた

何の力になるのかわからなかった

期待していなかった分、突然効果が発動したときは驚きが隠せな
かった

手元で突然光ったロザリオ

銀色の光が突然、デイグニティの体を包み込んだ

「うそだろ！？は？」

視界が光で見えなくなつた

今、敵の目にはどう映っているのかわからなかった

「……みえねえ」

光の中でデイグニティはもがき続けた

自分自身に何が起きようとしているのか
予想することすら出来なかった

病院からもその光は見えていた
創世大学から遠い病院であるはずが、緊迫した雰囲気ですぐそこま
でに迫っているようにも感じられる

「煉、姉貴……」

かつての仲間達が不安を隠しきれなかった
そこには傷だらけのサタンがいるのだ

煉と共に無事だろうかと兄弟の心配を2人はした
光に気づいたベルフェゴールが声をかけてくる

「リヴァイアサン……」

「動けねえ。ヘリオスらは簡単に逃がしてくれなさそうだ」
ドアに2、3重にもかけてある南京錠が病室からの脱出を困難にし
ていた

「出せ！煉と姉貴が危ない！」

リヴァイアサン達がどんなに声を張り上げても誰も答えなかった
ただただ、光が強く増してくるのが見えているだけ
その光の範囲が大きくなるたびに3人が焦ってきた
「出すんだ！ヘリオス！」

46 見えてきた箇所、見落としていた心（後書き）

え？俺？

毎日バイトだけど、何か？

47 進化したデイグニティ

煉の視界に入ったのは大切な人達が傷つけられていく様
晋と美保ほかの友人達が傷つけられる光景
過去の自分が凶行を犯す場面がそこにあつた
無論、無意識に自分自身を止めようとする

「やめる！」

「お前らが憎い！お前らが憎い！」

大斧振り回す過去の煉が叫んだ

そう、無意識のうちに言い放つたために過去どんなことを吐いたの
か覚えていなかった

それをまた聞くことになるなど……

「やめるんだ！」

「怪物の面してそんな態度……てめえら……」

黒い怪物が教室の中をにらみ付けた

その目は人に向けるものでは無かつた

敵に向ける

そんな目だつた

「黙って手を出さなきゃいい気になりやがって！」

そして黒い大斧は教室を血に染め上げた

「……………」

今度は墓場だつた

サタン達を救つた時の光景だ

彼女らは名前の無いある組織から逃げてきたところだと言つ
どこの組織かはいまだわからない

たった一人のアメリカ人にやられたと言つ

傷ついたサタン達を助けた

だが、彼女らは怪物

煉の目に映ったのは醜い怪物だった
その怪物達に『気まぐれ』で手を差し伸べてしまった
その時に涙を流したこともあったが、なんで流してしまったのかわ
からなかった

そして、最後に戦地で体のほとんどが吹き飛ばされた男と出会った
光景だ

彼も怪物に見えたのに手を下さなかった
無残な姿の怪物を哀れんでしまった

その時自分が何を感じていたのだろうか……今思い出そうにも思
い出せなかった

『お前さん、その能力のデメリットが幻覚だと思っていたのか？』
誰かわからないが男が話しかけてきたのはわかった

初めて会う男だ、名前も素性も知らない
ただ、わかるのは仁と同じものが感じられること

『違う。警告だよ』

「……警告」

『お前さん、勝手な解釈で人間性も何もかも醜いやつだっと思って
ただろ？ノンノン違うさ』

「……何なんですか」

誰か名前を聞く力など無かった
ただ、その男の話に合わせるだけ

「俺は何を見ているんですか」

『死を間近に迫る予兆だよ？』

男の言葉で煉が驚いた

表情には出なかったものの、心臓の鼓動が少しずつ早くなるところ
から自分が動揺しているんだと理解した

「そんな……」

『マリア達が見えてきたのはなぜだと思っ？』

「わからない……」

『ビートが怪物のままだった？何でだと思っ？』

「わからねえよ！」

『死の運命を回避させたからだよ。奇跡的に死から逃れられた結果、人間の姿に戻ったんだよ。お前の視界の中だけだけどな』

男の言葉がすぐに信じられなかった

煉は首を横に振り、ただ否定する様子を見せた

『……まあ、信じられないだろ？』

「ええ……」

『自分で探り入れてみな、この力を加えたからにはもう困ることは無い。天寧ちゃんも気まぐれでもしろいことをしたな』

天寧の知り合いと聞いて、たった一人だが男の姿が脳裏によぎった
「……黒騎士？」

『進化したデイグニティ』

白い光に包まれたデイグニティの鎧の構築が変わって行く

禍々しい黒い鎧の所々に丸く白い石が埋め込まれていた

そして蛇のような下半身が消えていく

変わりに光が集まってデイグニティの下半身を形成していった

黒い鎧を纏い、新しく出来た足にも白い石が埋め込まれている

その白い石が何を指し示すのかは過去仲間である獣人や鎧を纏った者には理解できなかった

怪物とは思えないマンガやアニメに出てきそうなロボットを思わせる頭部

天寧が進化した彼の姿に魅入られた

「これが進化したデイグニティ……」

光が消えて進化したデイグニティの姿がはっきりと見えてきた
背中に生えた黒い翼に加えて六つの触手

その先にあったのは3本の爪

爪の先からも白い光が見えていた

2本足で立っていることがわかった

人間のときと同じですぐに慣れた

だが、力の感覚が取り戻せない

あの時のような能力がまだ残っているか不安だったが

その不安を感じる隙を敵が与えるわけが無かった

赤い鋼の怪物が仕掛けた攻撃をまともに食らってしまった

とつさに腕で体をかばうようにした姿をとる

赤い剣が振り下ろされ、その攻撃が当たるもの

デイグニティ自体にダメージは無かった

本人も痛くも無いと不思議そうな顔をした

「え……」

「クソオ！」

悲鳴をあげたのは赤い鋼の怪物だった

両腕から血が噴出している

デイグニティが攻撃をしたわけでも無く、ただ何かに切り裂かれた

跡があった

「何をしゃがった！デイグニティ！」

「チツ……」

磁力を纏った怪物が手を突き出した

どこかで拾った電信柱を数本浮き上がらせ、自在に動かしていく

1本、2本とデイグニティの体へとたたきつけていく

3本目を振り下ろそうとした瞬間

磁力の怪物が吹き飛ばされた

彼は創世大学の屋上から落ちていき、地の上へと叩き落される

生きているかどうか残った獣人が屋上から見下ろした

「うそでしょ……」

煉が自分の能力を把握できずに困惑している

獣人は今のうちだと、赤い鋼の怪物を抱えては空高く飛んでいった

危機から逃れることが出来、それだけが獣人を安心させた

「痛い……クソッ……」

意識が朦朧としながらもサタンが起き上がった

デイグニティの姿を見た時には驚愕で視界が元に戻った

「……え？」

二人ともいまだ把握できなかった

互いに顔を見合わせて困惑する二人の間を天寧が静かに入っていた
煉にとつてはこの姿になったであろう原因の人物

「ゼウス！」

「すごいね。驚いてるよ」

「表情がそんなじゃねえな。冷静すぎる……こうなることはわかってたのか」

煉の言葉に天寧は答えなかった

「何だよこれ……昔を見せ付けられて、正直気分がよくない」

「貴方に渡したものが何か知ってる？」

「……これ？」

手元にあったロザリオを見た煉が「知るか」と言い放つ

「……先代の黒騎士が人間だった頃の肉片が入ってたの」

微笑んだ天寧の口から出た言葉

その言葉を聞いた時、なぜか顔を青ざめてしまった

「まじかよ。何だよこれ」

「私たち白銀の騎士団がいつも持っている『お守り』。武器にもなってる」

黒騎士の力がこめられていると聞いた時、煉が思い出したのは中国にいる『凶虎』

呪われた能力に今も縛られている彼女の姿が脳裏に浮かんだ

「この力のせいで……あの人は……」

煉が何を思っているのか天寧にはわからなかった

無論、何を思っているようが関係無いこともあり、話を変えた

「そのお守りには進化の力が入ってたんでしょね。それこそ黒騎士特有の力だから……」

「今まで使わなかったのはなんでだよ」

ビート達にやられながらも黒騎士の力に頼ろうとしなかった天寧の心境が気になった

煉はロザリオを投げ渡そうと振りかぶったりするが……

「黒騎士の力は忌々しいから、もっていたくない。私には恐ろしくて使いこなせないのよ」

そう言っただけで止められた

「あげる。どの道、黒騎士の進化の能力は永遠に貴方の体に染み付いたから、何をしてでも消えない」

「……組織の物だろ。いいのか」

「神が決めた運命。私はそうだと思ってる」

「いやな。運命だな。生まれつきの能力に加えこんな呪われたもの……」

煉がため息をついた

黒騎士から聞いた自分の真の能力

真相を知った後でもいまだ納得が出来なかった

人の死を予知する能力だと、予想の斜め上を超えている

「今まで殺してきたやつらは醜いからじゃないんだ」

黒騎士の言葉を思い出すたびに後悔してしまった

サタンを抱えて病院へと……

リヴァイアサン達がいる部屋の前まで3人はたどり着いた

「ここだったね」

天寧が部屋の番号を確認した

さっき来たから覚えていたが、入る気がしなかった

ここにいるのは元々敵だった奴だ

本当なら殺しあっているはずだ

だが、煉と彼らを見て奇妙なものが感じられた

よくよく考えたら仁からすべてが始まったんだと……

「……」

「ゼウス、物思いに深けてどうした？」

「……アルテミス」

病院の廊下を歩いてきたシエリーが声を掛けてくる

彼女は……そうだ

元々、敵になるかもしれない相手だった

今では仁との仲介でいる

親しみまでは無いが……

「煉が悩んでいたものが解決した。その後からいろいろ苦勞はあったけどね」

「デュアル・イーグルとの接触はあったみたいね」

「全員、デイグニティ一人で終わった」

シエリーが無言で驚いた表情をする

過去仲間だから連中の弱点をわかっていたのだろうかと思っていたが……

「進化したんだ」

デイグニティの更なる進化が戦況を極めたとわかった時は驚きよりも恐怖を感じた

天寧の意識が見えてきた

彼女が見ていたのは攻撃をすべて跳ね返しているデイグニティの戦い
どいう構造になっているのかそこまで見ることが出来なかった

いつも感じるのは恐怖だけ……

能力を一層進化させる黒騎士の力にはいつも驚かされるものだとい

つも思う

「恐ろしいね」

「入っていいですか？アルテミス」

煉が声を掛けてきた

彼とは初めて会話を交わした

今までは生きているかどうかわからない状態だったのが、今では一人で立ち話している

「……仁君みたい」

「彼からもどこか親近感がわくって言われましたよ。それで入っていいですか？」

「どぞどぞ」

シエリーに促されて煉は入った

一人少女を抱えていたのが目に見えたが

それがサタンだとシエリーはすぐに気づいた

リヴァイアサンもベルフェゴールもベッドの上で押さえつけられていた

あまりにも暴れるためにシエリーの能力を使って鎖を巻いていた

「煉！サタン！」

煉に抱えられている兄妹を見て二人が叫んだ

どこかへ消えていった兄妹の体にはさらに傷が増えているためか、心配でならない

「大丈夫かよ！？」

「大丈夫。煉に助けられた……いつもみたいにね」

サタンの言葉はリヴァイアサンとベルフェゴールの二人が安堵の表情を浮かべた

組織じゃいつも煉が助けてくれた

今も組織にいた頃と同じ

見慣れた光景がそこにあっただ

「煉……」

「……良かった」

不意につぶやかれた煉の一言

それがどういう意味なのかリヴァイアサンもベルフェゴールも理解することが出来なかった

サタンを空いているベッドの上においては別れ際の挨拶を交わすこ

とも無く去っていった

リヴァイアサンは海辺に住んでそんな怪物に見えていた
ベルフェゴールに関してはただの灰色の獣に見えていた
彼らが人間に見えてきた

見た目はいかついヤンキーみたいな連中だが、サタンを見たときの
安堵した表情を見てなぜか人間らしさを感じた
傷つけてしまった者は皆、人間だ

そして……彼らが怪物に見えたのは自分に殺される運命だったから
……

「最悪だ。俺はそうやって……これからもまた……」
今の力をどうやって使えばいいのか

能力がどんな風に進化していったのかわからない
何も説明も無しだといつ暴走しただすのか

制御できるのか……
不安が多々あった

47 進化したディグニティ（後書き）

あまりにもこの章はまとまっていなかったから個人的につらいわ
最後まで読めるかわからん……

48 永遠の後悔と道を歩むこと

聞こえてきたのは煉のため息だった

病室の窓によりすがっては空をぼんやりと見ている

ベッドの上で横になっていたサタンがもちろん、不安そうな表情を

向けた

「煉？」

「……なんでもないさ」

「いや、まだ何も……」

サタンの言葉も耳に入らなかった

今思うことは今まで殺してきた人間のこと

何をしてきたんだろうなといまさらになって後悔していた

「……」

「煉、大丈夫か？」

リヴァイアサンが肩に手を乗せて言葉をかけてきた

かつての仲間の言葉でも煉の不安な表情は消えない

「すまない。少し離れる」

そう言つて病室から去つていった

残されたサタン達姉妹は彼の薄幸の雰囲気がただよつた背中を見送るだけ

『永遠の後悔と道を歩むこと』

「あなた、これからどうするの」

大学の窓際のため息ついた煉へと陽が笑いながら聞いてきた

その答えに彼は何も答えることも無く二度目のため息……

「幸せが2回……あなたから消えたわね」

「やめてください。危機を回避するための代償が暗い事実を押し付けられたんだ。俺は怪物だよ」

「人を殺してきたことね」

煉は無言でうなづいた

昨日から黒騎士の力で進化した

その結果どうなったのか、天寧からは大体聞いていたが……

「ひどい落ち込みよう……」

「落ち込みます。今まで偽りの正義を振りかざして人を殺してきた。俺は恨まれるべきだ」

「……仁君と同じ。彼も何人が殺してきた。貴方みたいにね」

「そうでしょうね。俺らは呪われているんでしょうね。なんか変なのにとりつかれてる」

誰の怨念かわからないが……

能力のおかげで幸せになれないことはわかっていた

幸せになる、ならないなどどうだっていい

ただ、報われない人がいることに……

煉は陽に背を向けて歩き出した

彼がどこに向かおうとするのか

なぜか足が動き、煉と同じ方向へと歩いていった

煉と陽が着いたのは殺人現場

彼がこの町で始めて人を殺してしまった場

サラリーマンっぽい男を助けようとしてヤンキーのグループを全員殺したことも後悔していた

「そこは別にいいじゃない。凶器を持ってたんだから正当防衛よ」

「そうかばってくれるだけでもうれしいですよ」

現場を眺めていた

うつろな目は事件当日の光景を思い出しながら見ているようだった

「……煉君」

「ああ、君だったな」

何も無関係な誰かが話しかけてきた

煉も陽も男の方へと向いた

だんだんと思い出してきた

昨日、助けた男だ

今、この現場で……

陽もその男を知っていた

社会的なところで世話になっているためか、礼儀正しく頭を下げていた

「お世話になっていきます！龍元社長！」

「こちらこそ、零がお世話になってます」

「零？」

聞きなれぬ名と親しそうに話している二人を見て煉は首を傾ける
しばらくして、零が誰なのか思い出すことが出来た

「……あのお嬢様か」

「君も零の知り合いだったか、うれしい偶然だね」

「なんと言いますか……あまりいい出会いじゃないっすね」

「いいさ。昨日のことはむしろ感謝している」

人を殺した相手に感謝なんて……

嫌気をさしたのか煉が二人から目をそらした

そしてため息……

昨日よりも暗くなっていたことに龍元は不安に駆られた

「どうしたの？彼？なんか……」

「実は……」

陽はある程度、話をした

今までの経緯をすべて聞いたとき、なんと声をかければいいのか龍元が言葉を搜すが

「何と言えればいいのか」

「かける言葉が見つからないのは私も同じです」

「ふむ……」

ずっと現場で立っている煉を二人が見つめた

今まで見たことの無い光景だった
一人の若い男がただ陰鬱な雰囲気を漂わせる
これほど絵になるものがあるかと……

煉の目覚めを聞いて二人がすぐに駆けつけた

かつての友人である美保と晋が創世大学の近くまできている
大学の窓からマルクが覗き込んだ

ああ、懐かしい顔ぶれだと……

「シエリーさん、友人達を迎えにいつてくるよ」

教室でのんびりとしているシエリーを置いて彼はその場から離れた

玄関まで二人は来ていた

まだデイグニティにやられた傷跡が残っているのがわかる

かつての親しい友人にやられた傷だ

腕を折られていても、足を折られていても二人は友人の罪を許して
いた

彼の事情を誰よりも把握していたからだ

「マルクさん、何週間ぶりでしょうか」

「美保さん、晋君。久しぶりだ」

挨拶と同時にマルクはやさしい笑みを向けた

「エマとイーサンをありがとう。煉君も安心していたさ」

「よかった。でも、なんで響さんって人を……」

「彼は有名な人間だね。私と煉が組織にいた頃にうわさになってい
たさ」

「そんなに……」

「煉君も知っているみたいだ。直接彼に聞いてみてもいいかもな」

そう言ったマルクがどこか別の方向を見た

彼らの元へと歩いてくる一人の男

美保と晋もその男の方へと向いては表情が変わった

「……煉君」

最高級の笑顔と心配の言葉

二人を見ていて煉は心を痛めた

「ごめん……俺は……罪だ」

「泣くなよ。俺らはいいさ。このとおりピンピンさ」

「腕一本どうだっていいよ。どうせ治るしね」

「学校も皆も……」

「いいんだよ。元気になったところ見れて良かった」

「うれしいよ、アタシも……」

そこから煉を慰めた

美保に晋

マルクに煉と一緒にだった陽達

笑顔を絶やすことなかった

3人の友人の再会は輝かしいものではなく、悲しいものだった
とくに煉にとっては……事実を知った後のこの再会は辛いもの
いつか「俺は人を醜い怪物と間違えて虐殺の限りをつくってしまった」
と人に言葉するだろう

近くそんな遠い未来では無いのかもしれない

ただ、過ちにわれを忘れることだけはしてほしくない

それだけがマルクにとっての願いだった

マルクからの手紙はそういう内容だった

手紙に目を通していた内容を見てヘルファイアとサファイアは安心
した

また煉に会えることを楽しみに……

仁も同じだった

マリアを助けてくれたことに感謝できる日が来ることが待ち遠しく

……

彼と会う前にやるべきことを終わらせようとヘルファイア達のいる

部屋を後にした

「……………今日も自動車学校か？」

部屋の出入り口にいたガイアの問いに仁は笑いながら頷いた

「ええ、煉さんのところも平和になってきたみたいだし、あとは相手の出方がわかるまでは、やるべきことをやっところかなって……………」

「がんばってこいよ。後々、いろんなところに飛ばされることになるみたいだしな」

「神子さんもマリアさんも……………人使い荒いつすね」

そう言っつて仁は苦笑いした

騎士団からしたら確かに迷惑をかけているとはわかっている

まだ彼は慣れていないはずだ

突然、マリア達や皇室から「急を用する」ってことでいろいろこき使われ出した

黒騎士でなければできない調査が増え続けてきていると……………押し付けられた仁は快く受け入れた

……………その対価のひとつが自動車学校の教習料なのが、哀れんでしまっうが

「車楽しいつすね。本当なら今年の冬じゃないととれなかったんですから」

純粹な笑顔を見ているともう哀れむことも出来なくなった

「行ってきますよ。もうちょいで仮免ですから」

そして、彼は歩いていった

煉とは違う後悔している様子など無く、楽しそうに……………

「煉と仁が似ているけどさ。正反対だよな」

ドアから顔を出したヘルファイアの言葉にガイアが意味深な表情をする

「なんで？」

「後悔しながら生きていく煉と比べて彼は楽しそうに生きているだもんね」

「……それっぽいな」

ヘルファイアの言葉通りかもしれない

今の仁を見ていてガイアも納得した

目覚めた次の日から彼は今まで寝てしまった分、休暇を楽しむようになった

その影響だろうかと思っていた

「楽しそうなのは表情だけかもしれないな」

ハンナの顔には表情が無かった

彼女の切断されていた腕は元に戻っていた

傷跡も消えてはイタリアでの疲れも取れていた

「腕は大丈夫か？ハンナ」

「大丈夫。仁のおかげでな……それよりも仁のやつは無理をしている」

「能力を乱用したせいだろ」

サファイアも切断されていた腕が戻っていた

それもハンナ同様、黒騎士の力で治ったものだが

「躁状態だよ。ありや……内心、辛いはずだ」

手に持っていた資料をサファイアがガイアに手渡した

「黒騎士レポートつてやつだ。煉をかくまっている創世大学の『ヘ

リオス』が書いてるやつ」

「知ってるさ。参考にならないと思ってたらなっただしな」

過去の黒騎士 牙との関わりがあるハンナもそのレポートには賞賛した

仁の今までを知ることが出来、彼がどういった経緯で黒騎士になっ

たのかもわかりやすく書いてあるためか常に重宝していた

「聖經会との戦いで学校の友人を多く失っている。残酷だ」

レポートに書いてあるとおり、彼は友人を多く失っている

時として友人に刃を向けたこともあったと言う

まだ黒騎士の力に慣れていない彼がそこまで重たい経験をしていながら、今の状態を保てることが不思議でならなかった

「よく心壊れないよな、あいつ……それともすでに壊れてるのか？」
笑いながら言ったヘルファイアの言葉に誰も釣られることなく、無
言を保つ

一人、空気読めなかったかと彼は口をつぐんでは黙り込むだけとな
った

48 永遠の後悔と道歩むこと（後書き）

テストも終わりが近づいてきたので投稿

もうちょっとまじめに小説書けばよかったな……まあ、いいや

49 仁と響 く奇妙な絆

あれから襲撃は何一つなかった

デュアル・イーグルも夏休み状態だろうと、ヘルファイアは笑って言うが

「俺も夏休みほしいね」

「お前に夏休みって……どうせ、毎日休みだろうが」

後ろで教習者の運転席を蹴ってきたのは口から片耳まで傷が入った男

「ほら、黒騎士。ここから自主経路だ。地獄までの道筋頼むぜ。ヒヤハハ」

「響君、俺はまだ地獄にいかないよっと……」

助手席の教員が頭を乗り出してきた響の頭を叩いた

おとなしく、引き下がって後部座席へと戻った彼を確認し、教員は指示を出した

「この地図で経路を決めてくれ。まあ、仁君なら上手くいくだろ」

「あ、はい」

震える手で道を示した

右折一回、左折一回を忘れることなく今まで習ったとおりのことを思い出していく

車といえば、便利だが使い方を間違えると人を殺しかねない

黒騎士の能力と一緒にだと言ったら笑われるだろうが、間違いは無かった

「じじ、じじで……」

「はい、では運転どうぞ。合図忘れずにね」

「は、は……はい」

合図を出し、ハンドルを切った

こうやって道路に出るたびに神経を使ってしまう

横の窓に張り付いたうすい幽霊がこちらを見ているためか

事故だけは起こすことが無いようにと車を動かした

『仁と響　〜奇妙な絆〜』

自動車学校からの帰り

響と仁が肩を並べている

もともと殺しあつた仲間であるはずが今こうして歩いていることが不思議でならなかった

電柱から見ていたマリアがずっとインサニティをにらみ続けては何かを唱え続けていた

「怪物が怪物が怪物が怪物が怪物が怪物が怪物が……」

「マリア様……」

同行していた雪奈とビビは殺意の波動をたら流ししているマリアをなだめている

「インサニティが本気で殺しにかかることはめつたにないから、安心してください」

「信じません」

「わかってます。あの時は本当に申し訳ないと思つてます」

「マリアちゃんにひどいことをしたのは謝ります。組織全員で土下座でもなんでも……」

雪奈とビビの言葉をマリアは信じようとしなかった

殺しにくるような目で見ては……

「焼き土下座で済ませてやりましょうか？」

聖女の威厳を保ちながらそう言い放った

女神の殺意は米国の強大な組織につく二人を臆させた

インサニティの気まぐれの襲撃からそんなに日にちはたっていないあんな襲撃をしておきながら響は何も気兼ね無く、仁の元へ訪れることが多かった

目的は……

「エマちゃああああああん！！お菓子！お菓子もってきたよお

「おおおおお！！！」

6歳の無垢な少女 エマへとお菓子を持っていく
たったそれだけ

それにつき込む時間は5分

そのあとは騎士団やデュアル・イーグル達に「じゃあな」と言っ
て去っていくだけ

こんなまともじゃない男を信頼できるものか

マリアは疑惑と恨みの目を向けて彼を見ていた

「おいおい、どこに行くんだよ」

「ついてくるなよ、俺はあんたが嫌いだ」

仁はマリアの予想通り嫌っていた

仲間を傷つけた相手だ

もちろん、敵視するはずだった

響が遠くへと指を指した

「あそこの店、スイーツ30パーオフだぜ」

「まじで？！いこうぜ」

さりげなく仲よさげにしてくる響とそれに乗せられる仁を見ていて

敵対が無いことを悟った

絶望的な表情でひざをついたマリアが涙目で遠くなる二人を見る

「……………仁さん」

敵対するべきだとマリアから言われてもどこか憎めない相手だった

共通する趣味があり

話も合う

語り合ってて楽しい相手だった

周りから見たら変な光景ではある

机の上で一人4、5品のスイーツを並べているのだ

話を餌に目の前の華やかなものを食べているのだ

「ありえねえな、本当に……………仁、フルーツが無いなんて……………」

「チョコとチーズ、モンブランにティラミス……これ以外何も必要が無いさ」

「ストロベリーパフェをなめてるのか。ビタミンCなめんよ」
笑いながらそう言い合う様はさながら仲の良い友人同士
周りが見ていて決して敵対することの無いものだ

「こんなんで仲良くなっちまうなんて、信じられねえぜ」

「いいじゃねえか。あんたもいい趣味してるぜ、仁。今度親友に紹介してやるからな」

「こわいな。そんなやつと関わるなんて……」

帰り途中も一緒だった

響が仁をいつもの学園に送ろうとしているところ

「きゃあああああ」

少女の悲鳴が聞こえてきた

とっさに二人が動き出した

仁がフランベルジェを取り出し、黒い鎧を纏った

響が六つの腕と異形の姿を現した

二人の怪物は即座、叫び声の元へと向かった

たった一人の少女の叫びは仁にとってはトラウマの再発

リーナが死んだ時の光景が脳裏に浮かぶ

近くにいる子が同じ運命をたどらないように

そのために彼は動いた

「インサニティ！殺しはするな！女の子を助けるだけだ！」

「わかってるさ。幼女は任せろよ」

白と黒の翼が羽ばたかれ、路地裏の奥へと……

黒騎士は影の中へと入り込み、静かに現場へと近づいていく

男達は少女の服をつかんで路地裏の奥へと連れて行った

何をするのか、男の盛り上がった股間を見ていると誰だっかわかる

ものだ

相手は制服姿の幼さの残る少女相手に暴行を加えかけていた

「待てよ」

その一言が男達の動きを止める

少女と男達の間に入ってきたのは6本の腕を持つ化け物

男達が呆気をとられた

「まだ幼い少女だ。この子が高校生だったらスルーしてるけどさ」

怪物が何を言っついていようが、何も考えられなかった

異常な化け物が目の前にいるのだ

殺されるかもしれないと恐怖心があつた

そして、後ろを振り向く

「ぎゃあああああああああ」

少女の変わりに今度は男達が悲鳴をあげた

振り向いたと同時にそこにいたのは黒い騎士

それも黒い長髪で血まみれとなった女性を複数人引き連れているこ

とにさらに恐怖心が湧き上がった

「俺はその子が何者であっても助けていたがな」

目の前にいる黒騎士も今、少女を守ろうとしている怪物も敵意を向

けている

見たことの無い化け物相手に人間がどう戦えるのか

無論、無いに等しかった

「ごめんなさい……許してください」

男達はひざをつき、許しを請うだけ

その姿を見た時、おびえていた少女の顔からも恐怖の色が消え、イ

ンサニティも黒騎士もそれ以上攻める必要が無いだろうと互いが笑

った

彼らの行動を見ていたマリアや雪奈達が心配そうに見てきた

どこへ飛んだのかと思ったら路地裏だ

それも二人で一緒に助けている

奇妙な光景がそこにあつた

怪物達が一人の少女の元を集っていた

ただ危険な状況下にいる少女を助けただけ

おもしろい光景だった

「……………すごいですねえ」

奇妙な絆だった

それが仁も響も互いに気づくことなく築かれつつある

二人がそれに気づくにはいつになるか

マリア達ですら予想出来なかった

49 仁と響 く奇妙な絆く (後書き)

新章 ちよつと休憩なお話

50 亜里沙と少女

亜里沙は寝る時間も惜しんでいた

闇武者の力は必要無くなった

だが、さらに強大にしていくべきだと彼女は生活の時間をほとんど研究につき込む

むしろ、研究される立場ではあるが彼女は喜んで実験台となった

「黒騎士の血があるんだから、能力の増幅は出来るはずです」

「本人が納得しないだろうな」

闇武者の力の増大には足りないものが多い

人を多く犠牲にしなければならぬ

戦うことで力をつけなければならぬ

そして黒騎士の血があれば本来の闇武者に近づける

人を犠牲にするほどの価値は無い

戦うと言っても騎士団の連中もPPの連中（インサニティ以外）は全員潰した

それでも能力が増えなかった

死者を扱う……それだけじゃ、足りない

まだ力がほしかった

まだ……

『亜里沙と少女』

闇武者の力を受け持った後の亜里沙はいたって平常だった

今は亡きマッドドクターの話によれば武は何日も何週間も苦痛で呻いていたと言う

大の男では耐えられないものをまだ14、5の少女が耐えている
不思議でならなかった

「精神的な障害は無い。彼女は強すぎる」

研究者達もマリアも驚きを隠せなかった

病室で検査を受けている亜里沙を見ていて好奇心と不安が渦巻いてくる

彼らの後ろには仁がいた

自分もそこで眠っていたのを覚えているためか地下に行くたびに自然と足が向く

闇武者の存在を最初聞いたときは笑いが止まらなかった

施設の機能を1度停止させようとも思っていた

それが出来ない

亜里沙の意思が強かったからだ

(私もほしいんです。あなたの力が……)

力に魅入られた者がまた一人

彼女が願いを果たした

殺してやるうかと思っただが、その必要も無い

これが最後の検査だからだ

「亜里沙！」

最初、仁が亜里沙を殴ったところから始まった

容赦ない一撃だった

歯が2、3本折れて倒れこんだ彼女へと仁が向けたのはフランベル
ジエ

姿も禍々しい黒騎士となっていた

「馬鹿をするとどうなるかわかってるだろ。あと何十回か楽に殺してやる」

「待て！」

仁をとめたのはマッドドクターだった

恍惚と狂気の表情で近づいてくる彼に仁は嫌悪感を向ける
当然、仁の怒りは収まらなかった

その後のことは騎士団、PPP（インサニティはお菓子食べながら見学）、デュアル・イーグルからの亡命者総出で彼を止めた
インサニティ程では無いが、被害が多かったのは事実

闇武者の研究をやめることになったのは大半彼が資料や研究を潰したため

何より痛手だったのはマッドドクターが黒騎士の手で殺されたためだった

それが原因で亜里沙を対象にした闇武者の研究は終わりを告げた

亜里沙は納得していなかった

まだ力が出ていない

もっともほしい力が出ていないため

それでも納得せざる終えなかった

仁が目覚めればどうなるかはわかっていた

激情して研究施設そのものを潰しかねないだろう

妥協し、力の増大を諦めた

もう強まることの無いだろうこの力を一生抱えていくことも覚悟した

「亜里沙ちゃんの状態は……」

「わかっている。問題無い」

「くそビッチ！俺が仁に話さないとこの女はずっとモルモットだったろうな」

郷が笑って女科学者の髪を引っつかんだ

データ処理の途中にもかかわらず、パソコンの画面へと頭を叩きつける

血のぬれた画面から女を引き剥がした

「データ処理なら俺に任せちまえ！てめえはくそやろう相手に腰振つてろ！」

「やめろ！郷！」

仁が女科学者の傷を治し、郷を止めた

「あんたは関わるなよ。これは俺の問題だ」
女性へと続きを促した

その後、パソコンを任せた仁が郷の首を引つつかむ

「もう少しで終わるんだ。頼む、静かにしてくれないか」

「……わかった」

郷は後ずさった

今の仁が何を考えているのか

きつと知ってはならないことなのだろうとそれ以上関わる事が出来なかった

処理は終わったと同時に仁がパソコンを投げ捨てた

そして二人は女性のいる部屋を後にした

亜里沙は何も憎まなかった

研究を潰した仁も彼に潰しを促した郷も……

ただ後悔だけが残った

青い瞳が向く先には白い病院

窓から顔を出した少女を見ていた

「……」

「お友達だったね」

近くにあった木陰から彼女が顔を出してきた

亜里沙と同じ金髪の髪が同じように風で揺れている

「マリア様……」

マリアだけじゃない

黄龍、ハンナも彼女の後ろにいる

彼らは闇武者の研究を捨てた

いや、捨てざる終えなかったのだ

亜里沙はマリア達を攻めなかった

致し方ないことだと……

まだ仁が眠っていた時

世話になるところが無い時に神子が勧めたのは保育園

神子が過去世話になった保育園で亜里沙は寝泊りしていた

黒騎士の目覚めを待つだけの日々の繰り返しを過ごす

そんな中……

「お姉ちゃん、目きれいだね」

少女が一人話しかけてきた

感情や興味が薄れいく中で亜里沙が関心を向けていたのは一人の少女だった

名は奈々

純粹無垢な彼女には心臓に重い病気を持っていた

助かるかどうかすらわからない肉体を救う方法があれば……と思っていた時に……

黒騎士の力がヒントになった

傷を治す

その能力に目をつけた

黒騎士に対する興味はその力から始まったのに……

今になって人のためになろうと思ってしまった

そして数週間もしないうちに研究は終わった

望む力を手にいられないまま、闇武者として生きていく

悪く無いが、やはり助けられないのが残念だった

「奈々ちゃん」

「仁さんがそのこと知ったら殴ったことを後悔するな」

「黄龍さん。このことは何も言わないでください」

「……わかった」

亜里沙の頼みを3人が聞き入れた

「内密にしよう。彼自身も後悔するかもしれないしな」

「お願いします」

病院へと背を向けて亜里沙は立ち去る

心残りがあったが傷、病気を治癒する能力が無いのなら何も出来なかった

悔いが残っているだろうが、彼女は表情に出さなかった

「寿命があとわずかな少女……だと？」

ジェイソンから少女の話聞いた響が啞然とした

心臓に重たい病気を患っていると聞いて彼は強いショックを受けた
「助けてやるっきゃないだろ！俺らにはやるべきことがある！」

「まずは免許をとることから考えよ、響」

「馬鹿言え、幼女の命と免許どっちを選ぶかはわかってるだろ？おい？」

10センチほど背の高いジェイソンの髪を手で掻き乱し、響はその怪しい笑みを絶やさなかった

「いいのか？そう簡単に人の命を救おうとして……苦痛を伴う生と楽になる死どちらがいいかと言うと……」

「ヒュプノス……黒騎士が与えるのは苦痛を伴う生じゃねえよ。何もかも治しちまうんだからよ」

「……そうなのかよ」

ジェイソンが椅子で考え込む仁を見た

彼の視線に気づいた仁は小さくうなづくだけ

「まじかよ」

「過去の黒騎士は癌や認知症に脳梗塞、その他感染症まですべてを治してきたってな」

「おいおい、医療が（笑）になるじゃねえか」

仁からの話で響もジェイソンも驚きを隠せず、不意に笑ってしまった
不治の病すら無にする

次元が違う能力だった

「黒騎士ねえ」

響が自身の力と比べた

死ぬことができない黒騎士と死と生すらを狂わせるインサニティ

どちらが良いのかと言えば……生きることを強制されない自分の力がいいと響は思った

「ふむ……」

「ちよつと出かけてくる」

仁が席を立ち上がった

ジェイソンと響を残しては彼はふらりと部屋を出る

今の彼を見て何をしようとしているのか

響はすぐに理解したのか

「ついていくか？ジェイソン」

「……はい？」

ジェイソンのフードを引つつかんで引つ張り始めた嫌がる彼の言葉も耳に入らず、仁の後を追いかけるばれてはいるのか、時々無表情で彼が振り向くだが響達を拒否する様子が見られなかった

学園の入り口

たっていたのは神子とヘルファイアとサファイア

3人は誰かを待っているかのような様子だった

「ヨーロレヒホ」

調子付いた響の歌声に入り口の3人が気づいた

忌々しい声だとヘルファイアとサファイアは睨み付ける

「なんだよ」

「イケメン二人、こいつのケツ穴にせーえきぶっかけるか？チ

ぶっこむとしまりがよくて気持ちいいぜ？」

「やめろ、神子様の前だ」

仁に止められた響がふと神子の顔を見た

何を言っているのかわからない……と言わんばかりの表情で遠くを見ている

まだ処女膜をぶちぬけられていないかと狂った笑みが神子に向けられた

「チ コほしいところだぜ。ヒヤハハ……」

そう言つて仁とジェイソンをつれて去つていく

神子が気になつたのは仁だった

「仁さん！手紙忘れてませんか？」

「……あ、しまった」

すっかり忘れていたと仁が苦笑いした

「また今度読むよ」

そう言つて先に行つた響とジェイソンの後についていく

目覚めたと言つても病みあがりのはずだ

いつ何が起きてもおかしくは無いとマリアからも言われたためか

神子は彼から目を離すことができなかった

保育園に行くときと亜里沙やマリアの元へと子供達が集まってくる

その中に亜里沙の知っている子はいない

いや、意識していないというべきだった

「……奈々ちゃん」

「何して遊びましょうか、皆さん」

「鬼ごっこ！」

「隠れん坊！」

「ごっこりさん！」

「はいはい、3番目の変な遊びは無しにして他の遊びを考えましょうね」

「……はい」

元気に返事をする子供達を見ていて母性愛が目覚めてくる

「高いたか〜い」

マリアは和やかな笑みは周りの人間の心を安らかにした

ほんわかした雰囲気の中で一人亜里沙だけは笑顔を浮かべることが出来なかった

奈々の存在が彼女にとってどれだけ救いだったか

今はただ寂しさだけが残る

50 亜里沙と少女（後書き）

自動車学校と就職試験が近いから遅れるかもね

……ハア

51 黒騎士の気まぐれ

夜の保育園

静まり返った中で亜里沙は眠りにつこうとしていた
だが、頭の中に浮かんでくる奈々の笑顔がそれを妨げてくる
彼女を思い浮かぶたびに考えるのは『無事なのかどうか』
今危険な状態じゃないだろうか
不安でならなかった

「奈々ちゃん……」

いつも栄都を案内してくれたのは奈々だった
楽しいところなどたくさん、教えてくれて、彼女のおかげで慣れる
ことができた

その奈々に何も礼ができないのがつらい
命を救うことができれば……いつでも会えるのに……
無念でならない

「奈々ちゃん……」

悲しみだけが亜里沙の心に染み付いてきた

夕方

仁と響は寝ている奈々の横でたっていた
心臓病で今にも死ぬかもしれない少女
その子に仁は何も考えず、何も思うことなく
ただ、彼女の額に触れた

『黒騎士の気まぐれ』

朝日がまぶしかった

結局眠れぬまま朝を迎えることになったが、眠気は無かった

闇武者になつてからはもう眠気も空腹も人間だった時のように感じられなくなつた

「奈々ちゃん」

ただし、感情だけは消えない

憧れ、嫉妬、怠惰に幸福感……

闇武者になつてもそれだけは消えることが無かつた

「行こう……」

いつものように見舞いに行こうと亜里沙は起き上がった

病室に向かえばいつものように奈々が窓の外を見ていた

また、いつ外に出られるだろうかと期待した目で覗き込んでいるのが痛々しかつた

「……奈々ちゃん」

「おお、お姉ちゃん」

ベッドの上で立っていた奈々が飛び降りた

心臓病で体がまともに動けなかつたはずの彼女の動きは亜里沙を驚かせた

「奈々ちゃん……どうしたの？」

不思議そうに尋ねる亜里沙

そんな彼女を見て奈々も不思議そうな顔をしてはすぐに笑顔になる

「体が楽になつちやつた」

「……うそでしょ」

不意に亜里沙がしゃがみこんで奈々の額に触れた

「……そうか」

触れて初めて何が起きたのか理解する

微かに感じる禍々しいオーラの名残り

黒騎士が触れた後だとすぐにわかつた

「彼が……」

朝、仁はまだ寝ていた

静かな寝息を立てている彼の頭元に本やゲーム機器が散らばっていた
その部屋へと入ってきたのはマリアだった
朝食を載せたお盆を手に足を使ってドアを開く姿は聖女に似つかわ
しくない

見られていないだろうかと周りを見回す
見られていないとわかった時、安堵した

(だめだ、美しい君がそんなことをするなんて)
誰かが話しかけた

そう、憎たらしいあの男の声だ

小さな鏡に映った男は昔と変わらない笑顔を浮かべていた

「闇武者……」

(朝食はそこにおいていけばいい)

武に言われ、朝食をテーブルに置いた

その後は何も言わずに部屋を出ようと踵を返す

(マリア……)

呼んだ武の言葉でその足は止まった

呼び止められるのは初めてで珍しい

あまり話しかけられたくは無かったが……

「何か？」

(彼は次にどこをいくんだ？どこに飛ばされる？)

「……」

(黙っていてもわかるさ。彼に免許を早めに取らせようとしたのも
彼がどこかに向かわせるからだろ？)

武の言葉で彼の方を見た

「あたりだろ？」と言わんばかりの余裕な笑みは相変わらずイラッ
かせる

「……ええ」

(ほらな？場所も当てようか……そうだな、鬼鉄神社だろ)
「……なんで」

正解だ

場所も、仁のこれからのことも……

「で知る必要無いことをなぜ貴方が知ってるのですか」

（知る必要が無い？馬鹿なことを言わないでくださいよ、聖女様）
微笑を浮かべた武が鏡から姿を消そうとしていた
薄れていく彼が最後に一言……

（私も彼の1部だ。そして彼自身だ）

そう言つて消えた

何を意味しているのか

立ち尽くしていたマリアはその意味を考えていた

「サードに」

「はい」

「よく周りを見て」

「はい」

「いい調子だな」

「はい」

車のハンドルをひとたび握ると仁は緊張してしまう

この日は卒業試験

卒業試験前の彼の目は周りが引くぐらい恐ろしいものだった

教習所に戻った時、仁は駐車措置を行いドアを開けて出た

「……はあ」

「おつかれ、合格だろ」

笑いながら近づいてきた響が肩をたたいてきた

仁も力が抜け、やっと微笑む

「ああ」

「俺も余裕だったからなあ、ハハハ」

響もちょうど終わったところ

余裕だと言葉を放った響を見て仁ががついつい笑った

あの狂った化け物も緊張のせいか足が震えていた

「震えてる」

「震えてねえよ」

笑いながら行われたやり取り

見ていた教員が二人の頭を撫で回しては笑った

「卒業式だ。野郎ども、行ってこい」

「わかりました」

「了解です」

今までの苦労を思い出しながら響は歩き出し、仁は立ち上がった

数週間前に初めて車に触った

そして、無事試験を通りここで本免許試験を受けるための許可書だ

の何だのを受け取ることができる

期待で胸が躍る

「……………いくか」

仁の行動を不快に感じた

自分が行おうとしたことを彼がやってしまったのだ

気まぐれかそれとも哀れみでか……………

どちらにしる、不愉快であった

だが、心のどこかで安心したところもあった

奈々が救われたのだ

素直に喜ぶべきだろう

それでも複雑な気持ちが消えることが無かった

闇武者にできないことを仁がやり遂げたのだ

あれだけ、闇武者の力を否定して……………

そして自分自身の力に触れることを酷く怒っていた癖して……………

……………自分だけその力を堪能している

亜里沙自身の内に静かな怒りを湧き上がった

「……………」

「どうしたの？」

偶然通りすがってきたマリアが震えている亜里沙に声を掛けた
周囲から見たら少女が異様なオーラを漂わせているのだ

知り合いであるマリアですら声を掛けるかどうか迷ったところだ。

「亜里沙ちゃん」

「……マリア様」

振り返った亜里沙の目を見て、震えてしまった

恐怖かどうか彼女自身わからなかった

血の涙を流した亜里沙の表情は……

怒りだけしかなかった

仁と響が近くのファミレスで屯っている

目の前にあるデザートは彼らの趣味を露骨に晒されていた

大の男二人が食べるような内容じゃない

「お疲れ」

「なんで、俺とあんた仲良くやってるんだろうな」

数週間の自動車学校の教習を終えたことを挨拶する響に突然、青ざ

めた表情で硬くなっている仁が呟いた

「何があつたんだ、俺……」

「ハハハ、最初は喧嘩しあつてたな。マリア様がどうかで……本

当に何でだろうな」

「幼女……からだ」

仁が答えを言った時、目の前で狂気 of 笑みを浮かべた男が大笑いした

「あの子助かったよな。ずいぶんと感謝されたものだ」

「ああ」

「かわいくて、クッキーもおいしくて」

「……ああ」

「なんで、反応薄いんだよ」

響の言葉に対して一言しか返事をしなかった仁が口を閉ざした

小さなため息をつくところも……しばしば見られる

「どうした？」

「いや、その……ついこの前まで喧嘩……」

「ああ、まあそうだけだな」

「奇妙だよなっと思って……」

そう一言言ってコーヒを一口飲む

静まり返った店内

最初に口を開いたのは仁だった

「インサニティは俺をどう思う？」

「……ウホッ」

「いや、ちげえよ。そういう意味じゃねえよ。そんな趣味ねえから」

「俺も無い。ロリコンだからな」

「しらねえよ、あんたの性癖なんて知らんがな」

「わかつてるよ」

くだらない冗談を言った後に響がスプーンでチョコパフェをつつきながら話した

ケラケラとふざけて笑いながら、その笑みは保ったままだった

「性格よく変わるな。気弱になったり、冷酷になったり、時には熱くなったり……」

「……」

「本当に仁かよって思うのが時々……な」

率直な感想だった

響が思っているとおり、仁自身も時々自分の性格が統一されていないことがわかる

多重人格なわけでも無い

演じているわけでも無い

黒騎士になっただけからこの状態だ

なるまえは何に対しても無関心な18歳だったのが……今は性格を使い分けている

自分の意思と関係無く、自動的に……

「あの幼女を助けるときにあんたは熱かった。やさしさがあったり、いい男だと思ったよ」

「……そうか」

響の一言でどこか安心したのか

仁の表情に自然と笑みが浮かんだ

自然と食欲もわいてくる

せっかく頼んだものだ、仁は喜び目の前の食事へと手をつけ始めた

51 黒騎士の気まぐれ（後書き）

実習からただいま

本面落ちた

実習も落ちる

・・・つらい

52 黒い怪物達

心壊れた神

「苦しんでまで手に入れた力ですよ、これ……それを超える力を仁さんが簡単に使うなんて……使うなんて……」

そう言い放つ亜里沙の目は黒く染まっていた
闇武者の力が強まっているのがわかる

マリアが恐れては1歩下がった

「亜里沙ちゃん……」

「私は黒騎士になりたかった……」

「あの子のために……」

「その目的も彼に奪われた。悔しいよ……」
黒い目が俯いた

ただ悔しさだけが亜里沙の胸を締め付ける

「生きがいを奪われた気分」

「気分が不安定だろうな」

後ろから男の声がする

マリアと亜里沙が同時にその男の方へと見た

「先生……」

「黒騎士になると感情に操作されやすくなる。特に闇武者はコントロールしづらいだろうな。見なさい」

亜里沙の後ろへと指をさした

その指を追って、マリアの目に入ったのは……黒く禍々しい悪霊達
それも無数にいた

「何ですか、これ……」

「……」

亜里沙を目を見開いて自分にとりついている化け物達を見た
感情の揺れを表現しているかのように悪霊達が睨みつけている

誰も笑うこともなく、怒りだけが露になっている

「……みんな、私についているの？」

「心を許してはいけないな。彼らは悪霊だ。気をつけるべきだ」

「亜里沙ちゃん、心を落ち着かせて……」

初めて見た悪霊達に震える亜里沙へとマリアが冷静に宥めた

パニックになり、さらに悪霊達を刺激しないようにと続ける

「悪霊達をコントロールするのは闇武者の方が困難です。もし極めれば……黒騎士と同等になることだって……」

「……」

深呼吸をして、亜里沙は心を落ち着かせようと肩の力を抜いた

黒いオーラも黒い目も元に戻っていく

落ち着きつつある……マリアも黄龍も安堵した

『黒い怪物達』

黒騎士とインサニティの噂は他の組織へと広がる

創世大学にいる煉の耳にもその噂が入る

PPの介入だけで驚いているが、更にインサニティの存在で啞然と
してしまった

「……」

「怖いな」

サタンも青ざめてはそう言った

「……マルクさん」

「確かに怖いけど、むしろ好都合じゃないか？」

煉とは正反対の意見を言うマルク

彼は余裕の表情をしていた

「俺の相方はインサニティが大の嫌いだ。部下を彼の元に出陣させることは無いだろうな」

「仁君のそばに置くななんて……敵対した身のくせにあの化け物は……」

インサニティの話はデュアル・イーグルのみながよく知っていた
米国1の精神異常者で虐殺者と名が広がっている
誰もが言う

「絶対にかかわりたくない相手だ」と……

PPだけだと思っていた

これ以上強大な組織が関わることが無いと……

携帯電話のメールを見た綾牙が思いつめた表情で俯いた

「嘘だろ……あいつら……」

光っている画面の文章を綾牙はずっと見ている

『森羅金剛会から』

その件名を見てからは彼はずっとかたまっていた

栄都へと向かう新幹線に揺らされ、きれいな顔立ちの男は外の景色
を見ていた

隣に座っている女はずっと携帯電話の画面をずっと見ている

黒騎士の正体を知った時は驚いた

彼をよく知っている

高校の頃に一緒だった

誰よりも悲しく、悲惨な男の子だったことも……

「彼がそうなってたなんて……」

「驚きか？」

「今から彼と会うんだ。2年ぶりだなあ」

彼女は2年前のことを思い出していた

最後に彼の口から放たれた言葉……

その言葉を今でも覚えている

(……あいつらを許せない。怪物、怪物と罵るんなら……いつその
こと……怪物らしく……)

その言葉通りに仁は……黒騎士になった

森羅金剛会の今回の目的はそれこそ黒騎士が絡んでくることだった
女自身に対して『黒騎士との接触』

そして、綾牙に変わって仲間として迎え入れること

上からの命令であつても無理だろうなと彼女は諦めていた

「神谷？」

「……なによ」

「綾牙と仁どっちに会いたい」

「仁君ね」

男からの問いに女 神谷は迷うことなく答えた

「秀治しゅうじ。あんたが仁君と会つと絶対、ケツ掘る！」

「……ばればれか」

「あなたの顔はいつ見てもやらしいわよ。女をおっかけないだけマシだけど」

「俺は男以外興味無いね」

容姿端麗なその姿から想像できない言葉を秀治はためらうことなく
言い放つ

もちろん、神谷は白い目で秀治を睨んだ

残念美人がどういう者かと聞かれたら、すかさず「この人です」と
指したくなつたのはいつものことだった

夏になつたロシアは日本よりも過ごしやすかつた

冬になると極寒の地になるため、エリックは嫌っていた

「やつぱ、僕はこのぐらゐの氣候がいいね」

「ずいぶんとまあ……日本菓子買い込んでよ」

目の前にいる男へとエリックは無邪気な笑みを向けた

「へへ、おいしいんだよ。生八橋」

「いいな。おいしそうじゃないか」

「食べる？マルクの弟さん」

「ありがとう」

エリックの前にいたのはマルクとよく似た男

違うところといえば髪の色とその雰囲気

ひ弱で優しい男だったマルクとは正反対の雰囲気がその男にあった

「顔が怖いと言われない？」

「変えることができない。俺は兄貴とは育ちが違うからな」

マルクの弟がため息をついた

彼が思い出すのはいつも昔のこと

思い出すたびにため息をつくようになった

「……………」

目の前の黒い怪物は楽しそうに和菓子を頬張っている

処刑者と呼ばれた子供は……今まで残酷な殺しをしてきた子だ

その怪物を統率しているマルクの弟でさえ震えてしまった

自動車免許に向けて響が勉強している姿はシユールなものだった

「89点……だと……」

何度も何度も練習問題をしても合格点である90点を超えられない

ことに嘆いていた

それは隣にいる仁も同様だった

「89点……やばい……」

ここまでで10回目の練習問題

二人が危機感を感じ始めた

「やばいやばいやばいやばいやばい」

「……………」

響は本格的にあせり始めて、仁は放心状態で絶望的な表情をしていた
ただ危機感だけが彼らの中に走った

日本へと奇怪な怪物達が迫ってくる

それに気づいたブラッドとエンバが暗い海を見ていた

2箇所

マルクの弟から入った情報からは3箇所と指名があった

一つは創世大学

いまだディグニティとサタン達の裏切りを許さない者らが怒りを露に渡航してくる

そしてもう一つは小さな田舎

そこへと何人かが向かうとの話もあった

「ハーデスは来ないってな」

「来たらどうなるか目に見えてるからでしょ」

「ああ」

ブラッドはハーデスが気になっていた

そばにいるエンバは彼とは違う心配があった

「……煉ともう一つの田舎地方のことが気になる」

煉の方は目的がわかるが、もう一つがわからなかった

わざわざ名も無い田舎地方の方へ赴く理由がわからない

煉が裏切つてから暗殺部隊に対して冷たくなってきた

詳しい事情も目的も話してくれないことで困惑してくる

「やばいわね。私達も……」

「何、あいつらが俺らを殺せるかよ。行こう、エンバ」

「……」

前向きなブラッドといまだ不安を隠せないエンバは二人肩を並べ海に背を向けた

彼らが歩いていく先には栄都から出るための車が用意されていた

「ありがとな。ヘルファイア、サファイア」

車に乗っている男二人へとブラッドは表情を出すことなく頭を下げた

二人は笑いながら手を振っているだけ

かつての仲間の見送りがブラッドにとって心安らく光景だった

「煉を頼むぜ」

「わかつている。あんたらも無理すんな」

「ああ」

互いを気遣う言葉を最後に仲間達は別れた

名残惜しい様子も見せず、また会えると信じて……

52 黒い怪物達(後書き)

ちよつと生存報告

53 奇妙な再開（前書き）

同じような題名でごめんね^^;

そして、活動報告に書いたとおり黒騎士の画像を貼ります

> i 3 4 5 5 4 — 4 3 6 9 <

描いていただいた学校のご友人にこの場をお借りして感謝申し上げます > <

53 奇妙な再開

89点でビクビクしてきた二人は無事合格した
ちなみに本免許試験の合格点数は90点だが二人の点数はギリギリ
90点

点数を聞いた時二人の表情には喜びでは無く、蒼白になっていた
初めて自動車に乗れるという人生のイベント間近にギリギリの合格
戦場で戦ってきた時よりも緊張感があった

その緊張感に解かれた二人は合格してからボーっとするようになる

「おめでとう、響」

「おめでとう、仁」

神子の通う学園に戻ってからはずっとその調子だった

本免許試験の合格は喜ばしいことだ

だが、この調子でいいのかとマリア達が不安になる

休む暇は無い……今から向かうべき場所があるというのに……

「仁さん」

呆れたマリアがそろそろだと、一枚の紙を仁に手渡した

「次の任務。続けて行っていただきたいと思えます」

「はい？ああ、なるほどね」

手渡されたのは神社の案内

『鬼鉄神社』と書かれたその資料には古い歴史とその神社を守っている村のことが書かれている

「闘武者からは聞いた。だけど、理由がわからない」

「PPと初めての任務だつてさ。あつちに俺達の知り合いが一人来ている」

「内容がわからないといくら響の言葉でも信じられないな」

「ハハ、俺だから信じられないのか」

「……マリア様」

笑っている響に仁はそれ以上何も言おうとはしなかった
早く本題へと……手でそう示してはマリアに促した

『奇妙な再開』

マリア、皇室からの命を受け新たな地へと赴く前に……

仁は家族へと電話をした

目覚めた時に電話を1度したが家に帰ることが出来ないという連絡
を入れようとしたが

『んでさ、中学の頃のお友達の親御さんらと集まってねえ……』

「……そうっすか」

長話で1時間

だが、無駄な1時間では無かった

「だけど、信じられない。専門学校の友人の生き残りがいたなんて
……聖經会が全員殺したって言うってたんだ。それで、誰が生き残っ
てるって？」

『まだ、影次郎さんが調べてるところよ。でも、特定が出来ないか
もしれないって……』

「……わかった。ごめんね、こんなの巻き込んでしまっ……」

『特に不自由はしてないわよ。まだバシてないんだから……ご近所
には遠い親戚のところにいるって伝えてるから』

「わかった。何かあったら、影次郎さんや宮内庁に連絡するとすぐ
に駆けつけるって……ここ最近は愉快的な仲間が増えてきたから……」

『そりゃ、よかったわね。仕事行って来る』

「長話になった。また、今度……」

そして電話を切った

結局、伝えていないがそれよりも気になったことに仁は考え込む

「……生き残るか」

専門学校で聖經会に殺された者達の身元調査をしたところ唯一、特

定が困難とされている人物

もしかしたら体の1部だけが損傷しただけで実際にはどこかで生きている可能性がある」と影次郎から報告があったと言う

誰かはわからない

今、特定しても……と思つてしまった

なんて声をかければいいのかすらわからない

苦い過去を思い出したせいか彼はため息をついてしまった

「終わりですね。黄龍さんが送つてくれるんですか？」

「いや、大統領が送るんだとよ……」

「よろしくな、仁君」

「あ、はい……。お二方、ありがとうございます。俺なんかのために……」

荷物の手伝いをした黄龍へと、送り向かいをしてくれるウィルソン大統領へと頭を下げた

暑い日ざしの中に自分のためにきてくれた人達への感謝を忘れなかった

荷物もすべてトランクに積み込んで、やるべきことはやった

出発を明日にしたのは急を用するからかもしれないと割り切った

明日で8月に入る

夏らしい思い出も何も無いし、これから出来るのだろうかとも不安があった

「仁君！」

その不安も……学園の入り口に立つ一人の女性の存在で消えた

「……神谷先輩」

（いつも悲しんでいる顔だね。佐々木先生が消えてから……）

その一言で彼女に何をしたのか記憶として鮮明に残っていた

（あなたには関係無いだろ！くそビッチ！）

あの時、佐々木先生がいなくなつてからは何もかも信じられなか

った

怒りと悲しみだけで胸が苦しみ、近づいてくる者皆に牙を向けるようになった

何もかも信じられないとすべてを敵に回すようなことをためらうことなく行つ

(冷静になつてよ、仁君)

(……)

(佐々木先生なら戻ってくる。何年になるかわからないけど、必ず君の元に戻ってくる)

そう予言した時の彼女は不思議な雰囲気を漂わせていた

くそビッチなどと呼んだ自分が恥ずかしく思える

その日1日、仁は悔やみ部屋に閉じこもっていた

「先輩……」

「久しぶり、仁君」

なんて挨拶をすればいいのかわからなかった

ただ、啞然として神谷が近づいてくるのを見ているだけ

「あれから変わったね。穏やかなになつて……」

「……ええ」

「知り合いか？仁君」

黄龍が聞いてくる

さつきまで穏やかな表情をしていた男が変わった

本物の『黄龍』となつた時と同じ目で神谷を見ている

「知り合いであつてもあの女と近づくことは許されない」

「黄龍さん……」

「そりゃ、キリスト教は他の宗教嫌つてるつてのはわかつてるよ。

神道と仏教のハイブリッド組織じゃあな、世界は嫌つさ」

『神道と仏教のハイブリット』と奇妙な言葉と聞いた時は驚いてしまった

仁の脳裏にふとよぎったのは綾牙のことだった
彼が所属している組織の特徴として神道と仏教の二つが混合していること

神谷の話聞いて彼女もそうなんだと納得した

「森羅金剛会なんですか」

仁の言葉で神谷は頷いた

「あのゲイ野郎が世話になったね。ありがとう」

「あ、こちらこそ……」

不意に黄龍の方へと仁が見る

変わらず、神谷を睨み付けていた

この場をどうにかしようと思えない空気を感じた仁が黄龍に話しかける

「黄龍さん、ちょっと離れます。先輩、こっちに……」

そう一言断って仁は神谷の手を引いてはその場から離れていった

「突然、引張ってどうしたの？」

「見てのとおり、知り合いが怪しい雰囲気でしたから……」

話しながら二人がたどり着いたのは喫茶店の前

その中へと彼らは入っていた

適当な席へと座っては店員へと簡単に注文する

それから本題に入った

「また、組織に勧誘ですか？」

「上からはそう言われてるけどねえ。来ないってのはもうわかってるから」

「目的がわからないし、正直驚いてますよ。先輩が昔から森羅の人だったなんて」

「……驚いた？」

「……」

仁は答え無かった

不安な表情をかつての先輩に向けていた

「何を考えてるか当ててあげるよ。敵か味方かって思ってるでしょ」

「ええ」

森羅金剛会がデュアル・イーグルと敵対しているかしていないかで黒騎士の対応が変わってくる

そう思ったのか、それか元々そのつもりだったのだろうか神谷は笑っては敵でないことを示した

「その変態的な笑顔じゃあ、敵じゃないですね」

仁も安心したか、自然と微笑んだ

出された冷水を一口飲んでいいる彼を神谷は楽しそうに見ている

「……先輩。振られたわけですけどこれからどうするんですか」

「別にどうもしない。ちよつと栄都の観光をするだけ」

「任務すら無視していいんですか？」

「別に〜私は強いから、弾かれることなんてないよ。もう一つ任務があるから首は大丈夫」

今度はなんだろうかと疑問はあつた

だが、これ以上は関係の無いことだとして仁は話した

これからのことも……

「ごめんなさい。俺明日から遠い田舎の方に行くことになりました。

案内できればいいのですが」

「いいさ、いいさ。そんな忙しい貴方におみやげ持ってきたから」

「そりゃ、感謝します」

神谷から手渡されたのはチェーンのついた鍵

なんらかのお守りだろうかと受け取ることに……

「大事にしてね」

「あ、はい……」

ウインクしてくる神谷へと仁も笑顔で返した

あの時の彼女の予言は真実となった

佐々木が戻ってきた時のことを思い出し、なぜ神谷が特殊なように見えたのか

今になって理解できた

ああ、神だからか

最初にあつた神がアルテミスかと思っていた
それよりも前に神と出会っている

奇妙な出会いだったなと今更になつて感じた

53 奇妙な再開（後書き）

ごめんね、くそ展開 まじゴメン

ええと……そろそろ進展すると思います
日常編最期にします

54 旅たちへ

朝が来た

そう、出発の朝

身支度を整えた仁が学園の屋上から朝日を眺めていた

次の場所は鬼鉄神社のある『日町県』

優雅な町並みから一転して田舎の町へと向かうわけだが、勿論疑問もあった

「マリア様、なんで日町県に？」

ドアを開けてきたマリアへと朝の挨拶なしに質問をした

入ってくることがばれたことにマリアは驚きを隠せずにいる

「なんでわかつたんですか」

「なんとなく……適当に言ってみただけ」

マリアの表情が変わる

任務前、戦闘前の真剣な表情だが、仁がそれを見ることは無かった

「鬼鉄神社にデュアル・イーグルがいるんすか？」

「いるというわけではありません。狙われているんですよ」

「……何が？」

「人です。それも幼い少女を……」

仁は自分の耳を疑った

1組織がたつた一人の、しかも幼い少女を狙うなどと……

目的が見え無かった

だが、自分が何をすべきかが見えてくる

「その子の護衛かな」

「PPPの人達との合同護衛になります。町を守るという名目で実際はその子の護衛です」

「響さんのお仲間も大変だな」

「一国の巨大組織が動き出したんです。大変なのは彼らだけでは無いです」

強い口調で言うマリアの気持ちを悟ったか仁は「ごめん」とつぶやく
自分の立場を理解していないと虚しくため息をついた

学園の前には騎士団に元デュアル・イーグル
そしてPPの組織のメンバーが揃った
彼らが最後に行おうとしているのは一時の別れ
最後の挨拶であった

『旅たちへ』

「本当なら食べにいけないのにな」

笑いながらそう言ったのは赤城

仲間達、また騎士団や他の組織達へと愛想よく振舞った

「それもゆつくり落ち着いたらかな。まだ、響に土下座させてない
しな」

「馬鹿いうんじゃないよ」

小さく笑う響

彼は否定するように、左中指を立てては赤城に向けた

「悪いことはしていないがな」

「開き直りかよ。マリア様、半殺しにしていぜ」

「また、今度にしときますよ」

マリアと赤城の珍しい冗談の言い合い

そのすぐ近くでは……

「なるほどねえ。細胞も精神年齢も進化か。おもしろいな」

「生命の進化つてもよくわからないんですけども……」

「なら、老化を防ぐとかも……出来るのか？」

「ええ、余裕です」

黄龍とビビが進化について談話している

そのまた別のところでは……

「雪奈ちゃん、暇な時にお茶でもどうかな？この前開いた店行って

見たいんだけど……」

「ごめんなさいね。貴方みたいな人受け付けないの」

「やめたほうがいいですぜい。ヘルファイアさん、抱こうとした男は大抵ミンチになってへぶえ！」

ヘルファイアの難破を軽く受け流す雪奈の姿と冗談を言おうとして彼女に殴られるジェイソンと珍しい組み合わせが見られた
それぞれが仁が来るまでの暇つぶしとして過ごしている

主役が学園の扉を開いて降りてきた時、語り合っていた皆々が静まり返った

「おはようございます」

軽く挨拶してきた仁へと全員が笑顔を浮かべた

「うっす」

「おはようございます」

「おはよう」

それぞれが挨拶していく

だが、仁が真顔のままにしていることに不信感を抱く者もいた

「どうした、仁」

「……いえ」

響の言葉に仁は何も答えようとはしなかった

不安はあったものの、告げることじゃない

首を横に振り、深呼吸をする

「……響さん」

「どうした？」

「またいつ会える？」

「……そうだなあ」

突然の質問に考え込む響

いつ再開するか

今後の予定がわからず、悩んでしまった

「もしかしたら国内かもしれないし、国外かもしれないな」

「そつつか」

「次会える時、もしかしたらあんたを覚えていないかもしれないしな」

響の能力を考えたらその可能性もあるかと仁の表情が変わった

暗さと不安が混じっているようにも見える

「いいさ。思い出す方法はいくらでもある。また会う時までには死ぬなよ」

「……」

「……」

仁と響が黙り込んだ

それから二人が突然笑ったのは数秒後のこと

「死ねないさ」

「ああ、そうだったな」

死ねない悲しい男

笑う狂った男

二人が同じようにうれしそうな表情をするのはいつものことだった仁にとって名残惜しくなる場面ではあったが、このひと時を忘れまいと心の中で誓う

「また、会おうぜ。黒騎士」

「……今度は少しおとなしい状態だな」

「ハハハ、尽力がする」

それが二人の別れだった

また会う時まで……二人が忘れまいと記憶に刻む

仁が次に向かったのはヘルファイアとサファイアの元

彼らに告げられたことがあった

「煉さんが病んでるって聞きました」

「ああ、そうだな。心配か」

「正直……心配です」

あれから煉が安静にしているとは聞いているが、デュアル・イーグ

ルの襲撃でどうなるか不安があつた

陽達、大学側にも危害があるかもしれない

これから大学側がどうするのだからかと仁は思う

「大丈夫だ、気にすることは無い。あいつは勝てるさ」

ヘルファイアのその一言は信じられるものだった

サファイアも有無も言わず、微笑むばかり

彼らは煉を信じていた

そして、煉を助けた陽達も顔は知らないもの信じることが出来た

仁はそう悟る

「……わかりました。お二人とも気をつけてください」

ヘルファイアとサファイアへの挨拶が終わり、次は騎士団へと

マリアの前に彼は立った

「……あの」

仁が躊躇いがちに話を切り出した

そして取り出したのは山日県にいた頃に渡された封筒

その封筒を見てマリア達は何をしようとしているのかと疑問を抱く

「中国からの手紙……読みました」

「それって……」

「ええ、黄龍さんの教え子の方々です。俺に対して助けを求める内容でしたけど、あなた方にも関わってくると思って……」

マリアに手紙を手渡した

仁は目的の車の前まで歩いていく

手紙を読み終えたマリアが顔を青ざめては仁の方へと振り向く

「仁さん……行くのですか!？」

「え、そのつもりです」

今からの任務が終わった後、すぐに中国に飛ぼうと仁は考えていた

誰からの命令でも無い

自分自身の意思で……

「なんで……」

「その手紙の送り主である『劉備』って人は煉さんとは別のデュアル・イーグルの襲撃を受けたって聞いたからです。正直、状況がやばいかと……」

独断で……と答えているようにも思えた

「一人で？」

「勿論、もしかしたら黒騎士が密接に関わってくるかと……」

仁の言葉でマリアも迷い始めた

中国に黒騎士を向かわせることでどうなるか

ましてや革命軍『無双』にいる凶虎と会わせたら……

間違いなく、醜い現実で彼を苦しめるかもしれないと未来を予想できたため

止めようとした

だが……

「……なら、俺らが早めに中国で待ってるよ」

ガイアがそう言い出した

「一応、俺らはあっちとの面識があるからな。案内や仲介ぐらいならな」

「なら、俺も行くのか」

ガイアの後に名乗り出たのはヘルファイア

彼も中国の無双との面識はあった

「ここでやることは無いから、別にいいだろ」

ヘルファイアもガイアも行く気満々だったのか

マリアも安心してしまった

彼らが仁をサポートすれば……

「仁さん、お願いします」

決断をしたマリアの言葉で仁も心を決める

「了解です。まずは鬼鉄神社で……」

「……無事で、仁さん」

「……うっす」

その言葉で二人の会話は終わった

何も無い、静かになった雰囲気の中

仁は「いってきますよ」と笑い、車に乗り込んだ

切ないものだった

車で遠い地方へと赴く彼の姿は……

そんな状況に陥れたのは自分だとマリアは後悔する
皆が皆、手を振る

ただ、仁の無事を祈って……

54 旅たちへ(後書き)

次に行きたいがために日常編、こんな終わり方

まあ、休憩章だもんねえ

明日から本気だす

キャラ紹介 デュアル・イーグル 煉、大罪を抱きし者+

陽「……………」

天寧「……………」

シエリー「……………」

亜里沙「……………」

……

陽「作者までダンマリ決め込んだから、最悪な出落ちよね」

亜里沙「このコーナーは何？作者が就職決まった祝いに？」

いえ、今回はこの方々のご紹介にしたいと思ひまして

サタン「ども」

煉「……就職おめ」

あざーす

『デュアル・イーグル 煉、大罪を抱きし者+』

響「前戯は省略だ。さあ、はじめてくれ」

亜里沙「ところで、この馬鹿タレはいつ死ぬの？とつとと死ねよ。

ケツ穴掘られて死んでしまえよ」

響「俺に惚れた女はいつもそう言うさ」

サタン「この妖怪みたいな人といつ会える？」

俺に聞くなよ

響「地獄で会おうぜ、またな」

黒椿 煉

能力『ディグニティ 2nd』

イラスト付

> i 3 4 5 5 3 — 4 3 6 9 <

姿は今までのディグニティの体が少し人間らしくなったところ

黒い鎧はこの世界のどこにもない鎧でロボットのような形である
背中にある6つの触手はまだ使用していないために本人ですらどん
な能力なのか知らない

鏡を使った技であることに変わりはないが、彼自身が敵を写す鏡に
なっている（目に見えず、また周囲の敵の視界にも影響が無いため、
ほとんど無条件）

そのため相手が攻撃してディグニティにダメージを与えようとも、
攻撃した相手にダメージが返ってくる

また、醜い人間性を持った者が怪物に見えてきたが、作中の牙の言
うとおり誤り

死を間近にした者が醜く見えるだけ

結果、彼が殺してきた者の中には罪の無い人間が含まれている

デュアル・イーグル 前線部隊

大罪を抱きし者

キリスト教でもっとも忌み嫌われる7つの感情

それを具現化し、戦いの武器とするのがサタン達兄妹

ちなみに、元々血が繋がっていないため生まれた順番も上下関係
なし

サタン

年齢：18

身長：162

体重：44

デュアル・イーグル 前線部隊の一人

煉に義理があるため彼を慕っていたが、煉及びヘルファイア達の裏
切りを知って信じる事が出来ず、直接煉に会いに日本に訪れる
煉を連れていくことをデュアル・イーグルの現ボスに言われたが、

日本でしばらく留まることにする（前線部隊の仲間達が殺されるのを見過ごしたことで後に煉と同じ標的になる）

能力：『サタン（憤怒）』

様々な場面で悪霊の手を出すことが出来る

その手すべてが殺傷能力を持ち、サタン自身がよく使うのは足元からの攻撃

怒りが有る無いなどで威力が変わるわけでは無く、コントロールがとりづらくなる

冷静であれば操るのも容易いが、興奮状態であれば周囲にあるものすべてを巻き込む

ベルフェゴール

年齢：19

身長：170

体重：53

サタンと同じく前線部隊の一人

冷静で容姿端麗

普段動くことを好き好まないが煉が関わると途端にやる気を出すような性格

作中、チョコレートを食べていたが無類のチョコ好き

能力：『ベルフェゴール（怠惰）』

ヤギのような足に上半身は裸体（t k bは髪で隠れてるよ！）

彼女の放つ灰色の灰は『ヒュプノス神』のようなものではない

死というよりは麻酔のような煙を放つ

殺しのための能力で無いが誘拐のときはよく使う

リヴァイアサン

年齢：20

身長：175

体重：58

サタンと同じく前線部隊の一人

仲間が認めるイケメン（仁、煉、響以外はイケメンでこの三人は順番にシヨタ、若頭っぽい、狂気面）

女好きであるのその後、『日本人限定』

煉とは兄妹の誰よりも仲が良い

能力：『リヴァイアサン（嫉妬……これ、あんま関係無いわ）』

魚類のような怪物

イケメンな人間の状態と比べたら醜いが煉からしたら「ウルト マンの怪獣みたいでかっこいいわあ」と感想が出ている（角いいよね

by煉）

水を使った能力（ブラッ エンジエルの水 と言ったやつ、ちょっと表でろ）

水があれば何でも出来る！わけでは無く、人間から出る体液はまったく扱えない

唯一の強みは水を柔軟に使えること

盾になることも刃になることも出来るため、兄妹の中ではルシファアに次ぎ、サタンと同等の力を持っている

その他

マルク（デュアル・イーグル前ボス）

ひ弱なロシア人のように見えるが前ボスという威厳がまだ残っているとところも見られる

部下を大切にすること

そして人間を守ることを第1と考えている

能力：『?????』

特殊な能力であるが、デュアル・イーグルの前ボスと二人で一つの力のため発動する機会が少ない

発動すればその分、強大な力であることは確かだが……

ビート

年齢：30

身長：180

体重：70

煉を信頼していた一人

ゴーレムとの旧友であったために、煉と再開するまではゴーレムの死を誰よりも嘆いていた

サタンと同様に煉を連れて帰ることを目的としていたが組織の手で殺される

能力：『ビート』

銀色の茨を鞭のように扱うパワー型

人間に放とうとすれば体が粉々になるほどの力が出せる

また、その力を使うためには人間一人を犠牲にしていかなければ発動しない

戦場では第1前線で戦場を駆け巡っていた

煉「お疲れつす。若頭っぽいつて何だよ」

サタン「後4人、兄妹がいたねえ」

次章から登場いたします

仁との戦いを描くのが楽しみでならないです

それまでに人生明るかったらねえ

煉「……作者？」

報告

ONYのウォークマンZシリーズ発売しそうだねえ
欲しいねえ

グッバイ^^ノシ

キャラ紹介 デュアル・イーグル 煉、大罪を抱きし者+ (後書き)

デイグニティ2nd 描いていただいたリア友に心から感謝申し上げます。

この方の描く絵がイメージしてたもの以上の出来で毎回「すげえ！すげえっす！」と叫んだりしてます。

禍々しさ満載で邪気股間がいつも以上にたぎっております

黒騎士のデザインもすごい好きです。

55 新たなる地（前書き）

修正後

55 新たなる地

煉が裏切り、サタンも裏切った。

そのために今のボスから言われたのは最悪の知らせだった。

（サタン、リヴァイアサン、ベルフェゴールと裏切った他の者全員は前線部隊を送って抹殺する。赤ずきん、デストロイヤー、赤武者の3人でなら県一つは抹消できる）

この3人で県一つとは言ったが、赤ずきんと赤武者の二人なら国一つ滅ぼせるような戦力だ。

その戦力がサタン達を潰そうとするからには容赦しないだろう。仲間達の死を覚悟していた。

「ルシファー？」

マモンの言葉でルシファーの意識は現実に戻った。

「ごめん」

「しっかりしてよ。煉もサタンももう戻らないんだから……」

いつもの仲間が暗くなっているのを見ていてマモンは苛立った。任務に集中できない。

過去ばかりに囚われて、まともに動くことの出来ないリーダーを正したい。

そう思っていたところで彼女の手を誰かが引いた。

「マモたん……」

幼い男の子が袖を引っ張っては不安な表情で話しかけてきた。

「ビュー？」

「ルシファーたん、可愛いそう」

「……」

ベルゼビューの言葉で今まで苛立っていたマモンの表情が柔らかくなった。

「ごめん」と頭を撫でては二人の前から去った。

一人俯くルシフアーと不安な表情のままにいるベルゼビューは何も言われることなく取り残されたまま……

この町は静かだった。

田舎だからかもしれない。

ただの田舎であれば住みたいなと思っていただろう。

だが、ここは聖經会の人間ばかりの町。

そう、今の仁の敵だった彼の故郷であった。

『新たなる地』

これから誰と出会うのか。

どんな敵が待ち構えているのか。

期待だけが心を躍らせる。

日が沈んだ頃に鬼鉄神社のある村に仁とウィルソンはたどり着いた。

「ここだな。悪いね、日が沈んだ頃に来てしまった……」

「いえ、大丈夫です。それよりも……デュアル・イーグルがここを

狙う理由聞いてませんでしたね」

「彼らがここを狙う理由か。まあ、そうだなあ」

たばこを吸おうとするウィルソンを見ては仁は答えを待つ。

「……なんて言えばいいか。彼らが狙っているのは君がかつて戦っ

ていた『鉄男』と関係がある」

「あの鉄の塊か」

ヘリオスに倒された男のことだとすぐにわかった。

完全な武装をして、それこそ懐かしさが感じられる。

「なんで今更……」

「今更と言つても、3ヶ月前とまだまだ日が浅い。聖經会が鉄男やパペットマスターなど戦闘技術を見せたのは君との戦いが初めてだろう。知ってるか？最初に黒騎士の技術を応用して現代兵器にしたのは聖經会だつて」

「……まじですか」

「まじですよ。そりゃ、驚いたね。PP最強のインサニティや騎士団のマリア様ほど強くは無い。だけど、やっていることは現代の常識を覆すほどのことだ」

「そんな……」

驚きを隠せなかった。

黒騎士の力を手にしたあの日、初めてつぶそうとした相手は世界の常識を壊すほどのことをした組織。その組織を潰したのだ。

「君は生きる伝説だな。その重みを君はわかっていないだろうが」「理解しないといけないのですか」

「いや、たぶん必要無いだろう。ただ一般の人間として生きること、はもう無理だ」

「……そうですか」

まるで人間やめろと言われたようだった。複雑な気持ちで仁は俯く。

デュアル・イーグルとの戦いが終わった後のことが考えられなくなった。

「話変わりますが、それで彼らイーグルが狙っているものってのは少女ですか？」

「そういうことになるね」

「それを守るのですか？」

「ああ、そうだ」

簡単な任務だと思った。

その程度なら自分には必要ないだろうと思っていた。

「俺が呼ばれたのは聖經会が関わっているから？」

「いや……君の能力を最大限に活かそうと思ってな。もう少し移動しよう」

「んじゃ、ここで降りなくても……」

車へと親指をさしてはウィルソンは先に車に乗り込む。

まだこの先へ向かうのかと渋々、後部座席へと座った。
「響からも言われているよ。無駄なことが多いってな」
後部座席から見えるミラーには微笑しているウィルソンがこちらを見ている。
響とよく似た微笑はやはり危険なオーラしか感じられなかった。

部屋の窓から外を覗き込んだ少女が深くため息をついた。
今彼女の頭の中によぎっているのは仲間である響のこと。
迷惑で傍若無人な彼が何も問題を起こしていないだろうかと不安があった。

「キャサリン、そろそろ黒騎士と大統領が見えてくる」

「わかった」

「がんばろーぜ」

長い薄青色の髪が揺れた。

ドアの近くまで来た時に少女　キャサリンと赤髪の青年がハイタッチ。

次に金色の短髪の米国人の男とのタッチをする。

「アメリカに栄光あれ」

「アメリカに……」

「アメリカに栄光あれ！」

大統領と仁が車から出た。

それがわかったのか車のトランクから出た長く黒い刀が車を切断する。

隙間から覗き込んだのは青い瞳。

頭が出てきた時、地方独自の静かで涼しい風が長い金髪を揺らす。
出てきたのは亜里沙だった。

「あなたの故郷がこんなところですか。武さん」

その声は目に見えない、禍々しい彼に向けられていた。

（ああ、ここだ。闇武者が生まれた地だ）

「ここで……」

（ああ、行ってこい）

武の故郷へと足を踏み入れた。

かつての闇武者の意思を背負い、黒騎士の力を受け継いだ少女が地を1歩1歩踏みしめる。

ただ、一つ……。

自分自身の力のために。

55 新たなる地（後書き）

おひさ

免許受かりました。

もう、思い残すことは……

明日テストじゃねえかあああああ！！！！

56 憤怒の斬馬刀

「はじめまして、明神 仁です」

初めて出会った相手は黒騎士のはずだ。

ここまでか弱そうな様子を見せられると黒騎士だとは思えなかった。

（最高のキャラだ。暗黒でドス黒い奴。覚悟しとけよ）

響からそう言われたから、響以上に恐ろしいものだと思っていた。

「響の嘘つき……」

今、目の前にいる響の仲間である3人がいつかの3人（騎士団達のことであるが）と似ているなと仁が笑った。

同じような表情をされたことがあったこそ、不意に思い出したからだ。

初めて騎士団に来た時と同じ光景。

思うのはなんでいつも驚いた表情をするのだろうか。

（黒騎士のイメージと貴方のイメージが合わないからでしょ）

懐かしい声だった。

銀髪の長い髪の少女

今は亡きリーナがその声を掛けてきた。

それで納得した。

（それか。あの時の鬼神さんやハンナさん達があんな顔をしたのは）

（……貴方が黒騎士だなんて今でも信じられない）

誰もが言う。

（君が……）

（お前が……）

（貴方が……）

（（黒騎士だなんて信じられない））

望んでそうなったわけじゃないが……。

仕方ないと仁は小さくため息をついた。

『憤怒の斬馬刀』

「紹介しよう、黒騎士。この青髪の子はキャサリンだ」
青髪の少女を撫でながらウイリアムが紹介する。

キャサリンは黙り込んだまま仁を見ていた。
見た感じから中学生くらいの子に見える。

こんな子がアメリカ組織の一員だと思えなかった。

「彼女は優秀なメカニックだ」

「メカニック……」

「君が愛用しているウォークマンやゲーム機が壊れたら彼女に言う
と良い。新品同然に戻るさ」

「……」

仁の目の色がすぐに変わった。

音楽プレイヤーのイヤホンが壊れることがしょっちゅうあるために、
金銭的な面で悩まされてきた。

そして気に入っていた音楽プレイヤーが壊れることもある。

どんな能力なのか楽しみでならなかった。

「彼はカーン。組織に来る前はスラム街で一人だった」

赤髪の青年へと次を紹介される。

逆立っている赤髪に獣のような鋭い牙。

スラム街じゃない奥深い森林の中でも生き残れそうだと思わされる
ぐらい獰猛さがあった。

「いらぬ話ですよ、大統領。よろしくな、黒騎士」

「仁でいいです」

いざ、話すと人の良さそうな青年だ。

カーンも「よろしくな、仁」と言い直しては笑顔で挨拶した。

もう一人の金髪の男性を見た。
美しい顔つきはどこか中性的なものを感じる。
女だといわれたら女だと間違えるかもしれないが体つきから男だとわかる。

仁が呆然とその男性を見ていた。

「彼は私の息子だ」

「まじっすか？」

「驚いただろ？」

ウイルソンの言葉で仁は驚きを隠せなかった。

言われればウイルソンとその男性がどこか似ているように思える。

大統領の息子が響と同じく前線にいることにも驚いた。

「ケネスだ。それ以上に言葉はいらないだろう」

そう言つてケネスは背中を向けた。

「基本的に君と関わるつもりは無い」

冷たい態度だった。

それを見かねたウイルソンが去ろうとするケネスを呼び止めた。

「ケネス。響がいないからつてはぶてて……」

「俺は恩人の帰還を待っていた。響の代わりが黒騎士などと……」

歓迎されていないとわかった仁は何も話そうとしなかった。

相手を不愉快にするだけ……。

「仁君、すまないな。息子は自分の妻と子供と響以外には笑顔を向けなくて……」

「余計なことは良い。俺は先に任務に戻る」

静まり返った部屋の中でケネスは歩き去る。

残ったウイルソンが苦笑いしては仁に謝った。

「悪い、許してやってくれ。本来、響がこの任務につく予定だったんだが、彼が野暮用でな」

「それで不機嫌に……」

「すまない」

響以外に……そう聞いてあの響がどれだけ信頼されているのか。

その偉大さを悟ることが出来た。

武の導きによって鬼鉄神社の前に亜里沙は辿り着いた。
悪魔の囁きは自然と彼女を虜にしては歩かせる。
神社の前まで……。

そうやって目的の地に辿り着いたが、見えて普通の神社となんら変わりが無かった。

「ここが……」

（闇武者の誕生。誰にも見つけられなかった場所だ）

「知らなかった。科学的に作られたものだと思ったけど、そうじゃないんだ」

（科学と非科学……。両方同じだ。人の心を虜にするという点では互いに似たものがある）

亜里沙が1歩、踏み出した。

神社の真正面にある門。

その門の奥から感じられるのはどこか近寄りがたいものだった。

「Hello、女の子」

女性の声がした。

無駄に英語の上手いババ臭い声だと亜里沙は振り向く。

長い白と黒の髪の毛の海外の女性が妖しく笑い近づいてきた。

「この地元の人間じゃないわね。ここに来たということは当然……」

「聖経会だろうね」

綺麗な容姿が変わった。

紫色の甲殻が体中から現れ、両手が粘液の入った触手となる。

突然の変身で亜里沙もとっさに黒い斬馬刀を空中で召還した。

「おらあ！！！」

手に取るうとした瞬間、女性の触手による打撃が腹部に入った。

数メートルも吹き飛ばされ、地の上で転がった亜里沙。

体に残るダメージで苦悶の表情を浮かべる。

「くそお……」

「火遊びしすぎるとどうなるか、痛い目見ないとね。これも社会勉強よ」

「……殺しておけば」

亜里沙が立ち上がった。

苦悶が怒りに変わり、手元にある黒い斬馬刀には怨霊が集う。

「殺しておけばカウントが減っていたのに……」

青い瞳が黒く染まった。

紫色の光が亜里沙の体を包み込み、作り出したのは黒い武者鎧。

禍々しい姿となった彼女は斬馬刀の刃先を触手の怪物に向ける。

「もう、貴方、勝てませんよ」

「ほう」

触手の怪物も初めて見るタイプの敵を前に攻撃をやめようとしなかった。

能力を発揮させる前に殺すだけ……。

2本の触手が鞭のように宙を切り迫ってくる。

対する闇武者は斬馬刀を振るった。

闇夜の中、聞こえてくるのは何かと何かがつづかる音。

衝撃波が地を削り、木を破壊していく様も見られた。

そんな中で遠くから幼い瞳が戦いを見ていた。

「……なにこれ」

そう言つて、一人の少女はその場で立ち尽くしていた

56 憤怒の斬馬刀（後書き）

闇武者と亜里沙なんだけど……

こんな設定、考えるつもりなかったのに……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3467q/>

心壊れた神

2011年12月9日02時03分発行